福島県文化財調査報告書第263集

東北横断自動車道遺跡調査報告13

和　泉　遺　跡
横　沼　西　遺　跡

１９９１年12月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化センター
日本道路公団

東北横断自動車道遺跡調査報告13

和泉（いずみ）遺跡

横沼西（よこぬまにし）遺跡

序　　文

東北横断自動車道いわき～新潟線は，太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ，総延長212㎞に及ぶもので，そのうち152㎞は福島県の路線であります。

この道路は，いわき市西部に広がる台地，郡山盆地，猪苗代湖岸の丘陵地，会津盆地及びそれらの周辺地区をほぼ東西に横断する計画であり，その路線のなかには多くの埋蔵文化財包含地が存在しております。そこで福島県教育委員会では昭和53年と昭和57年に，整備計画路線となった郡山～猪苗代間，猪苗代～会津坂下間につきまして路線予定地内の表面調査による遺跡分布調査を実施しました。その結果，両区間の横断自動車道路線内に22か所の遺跡を確認しております。

これらの遺跡のうち昭和63年度に着工されました猪苗代～会津坂下間の15遺跡につきましては，発掘調査を行い記録保存することになり，平成２年度は調査３年次として３遺跡の発掘調査を，財団法人福島県文化センターに委託して実施してまいりました。

今回報告いたします会津若松市横沼西遺跡は，平安時代初頭の竪穴住居跡から掘立柱建物跡へ移行する時代の資料として，会津盆地内の集落の特性を知るうえで貴重な資料を得ることができ，また北会津村和泉遺跡では弥生時代後期の土器が良好な状態で出土し今後の基礎資料となることと思います。

これらの貴重な資料をまとめました本報告書が，広く県民の方々に文化財についての認識を深めるため役立てていただくとともに，研究資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後に，この遺跡の調査から報告書の作成にあたり，ご協力いただいた関係機関，関係者各位に対し感謝の意を表すものであります。

平成３年12月

福島県教育委員会

教育長　渡　辺　忠　男

あ　い　さ　つ

東北横断自動車道いわき～新潟線は，平成７年度の全線開通を目指して，建設工事が急ピッチで進められています。平成２年10月に郡山～磐梯熱海間が開通したのに続き，本年８月には磐梯熱海～猪苗代間も供用開始となり，本県の交通網は着々と整備されつつあります。しかし，このような開発にともなって先人の残した貴重な文化遺産が消滅することも否めません。

東北横断自動車道用地内には，数多くの遺跡が確認されており，用地内に所在する埋蔵文化財については，関係機関の協議に基づいて，当センターが記録保存のため発掘調査を進めているところであります。平成２年度は，工事の進行に相まって，これまでに進めてきた会津地方の関係遺跡のほかに，郡山～いわき区間の遺跡の発掘調査も開始いたしました。

本報告書は，平成元年度と平成２年度に発掘調査を行った北会津村和泉遺跡と会津若松市横沼西遺跡の結果をまとめたものであります。和泉遺跡では，弥生時代の土器のほか，古墳時代前期の住居跡群が発見されました。横沼西遺跡では，平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡群が発見されました。前者は会津盆地における古墳文化の成立を考えるうえで，後者は会津盆地の平安時代集落を考えるうえで，ともに重要な資料になるものと考えています。本報告書が，歴史を解明するための基礎資料として，また郷土を理解するための資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，調査にあたってご協力をいただいた日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所・福島県関係各課・関係市町村及び教育委員会・工事関係者・地元の皆様方に，厚く御礼申し上げます。

平成３年12月

財団法人　福島県文化センター
館長　佐　藤　昌　志

例　　言

1．本書は，東北横断道いわき・新潟線のうち猪苗代～会津坂下間に係わる埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2．本書には，平成元年度・２年度の２か年にわたって実施した北会津村和泉遺跡と，会津若松市横沼西遺跡の２遺跡の調査成果を収録した。

3．当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて行ったものである。

4．福島県教育委員会は，発掘調査の実施を財団法人福島県文化センターに委託した。

5．財団法人福島県文化センターでは，事業第２部遺跡調査課の次の職員を配し調査にあたった。

和泉遺跡

平成元年度	専門文化財主査　高木　政光	文化財主事　本間　　宏
平成２年度	専門文化財主査　木本　元治	文化財主査　中野　康雄

横沼西遺跡

平成元年度	文化財主査　佐原　崇彦	文化財主事　只野　幸廣
	文化財主事　西山眞理子	
平成２年度	文化財主事　小熊　博治	文化財主事　伊藤　勝彦

なお，臨時的に次の職員の協力を得た。

和泉遺跡	文化財主事　西山　眞理子　（平成元年度）	
横沼西遺跡	専門文化財主査　木本　元治	文化財主査　中野　康雄　（平成２年度）

6．本報告書は，担当調査員が分担して執筆し，文責を文末に示した。

7．横沼西遺跡出土土器の胎土分析は，奈良教育大学教育学部三辻利一氏に依頼し，合わせて原稿を執筆して頂いた。

8．第１編第１図・第２編第１図に掲載した地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行　２万５千分の１・５万分の１の地形図を複製したものである。（承認番号　平３東複第30号）

9．本書に収録した発掘記録及び出土品は，福島県文化センターで保管の予定である。

10．出土した石器の石質鑑定は，文化財主事香内修が行った。

11．発掘調査及び報告書作成にあたり，次の方々と機関の助言と協力を得た（敬称略）。

田中　敏　　次山　淳　　吉田博行　　古川利意

会津若松市教育委員会・北会津村教育委員会・新鶴村教育委員会・福島県立博物館

凡　　例

1．本書の遺構図の用例は，次のとおりである。

(1) 方　位　　図中の方位記号は真北を示す。また，図中に方位記号がないものは，すべて真北を上としている。

(2) ケ　バ　　遺構内の傾斜部は ⅢⅠ で表現したが，緩傾斜の部分は ⅂ で表現した。

(3) 焼　土　　焼土の範囲はアミ点で表示した。

(4) 床　面　　貼床面部分及び床面硬化部分の範囲は一点鎖線で表示した。

(5) 柱　痕　　柱穴内の柱痕はアミ点で示した。

(6) 土　層　　遺跡の基本土層はローマ数字で，遺構内の堆積土は算用数字で示した。
建物跡抜き穴の堆積土は算用数字に□で示した。
（例；基本土層の第２層…ＬⅡ，遺構内堆積土の第２層…ℓ２）

2．遺物の実測図は次の用例による。

(1) 土器断面　須恵器の断面図はベタ黒で表示した。粘土の積み上げ痕は一点鎖線で表示した。

(2) 朱彩土器　朱彩部分は朱色のアミ点で表示した。

(3) 墨書土器　墨書部分については，底部はそのまま，体部は平面に投影した形で採録した。

(4) 使 用 痕　砥石・石器の使用痕は，一部アミ点で示した。

(5) 遺物番号　各遺構ごとに遺構の略称と通し番号を組み合わせて登録番号とした。
（例；１号住居跡の１番…１住１）

3．本文中で使用した略号は次の通りである。

北会津村……ＫＡ	会津若松市……ＡＷ
和泉遺跡……ＩＺＭ	横沼西遺跡……ＹＮ
竪穴住居跡……ＳＩ	掘立柱建物跡……ＳＢ
土　坑……ＳＫ	溝跡……ＳＤ
土器埋設遺構……ＳＭ	焼　土……ＳＧ
ピット（小穴）……Ｐ	柱　列……ＳＡ
遺物包合層……ＳＨ	

目　　次

序　　章……1

第１節　東北横断自動車道関連遺跡調査の経緯……1

第２節　平成２年度の発掘調査……3

第１編　和泉遺跡……5

第１章　遺跡の環境と調査経過……7

第１節　調査にいたる経過……7

第２節　地理的環境……8

第３節　歴史的環境……9

第４節　調査経過……11

１．平成元年度の調査……11

２．平成２年度の調査……13

第５節　調査の方法……14

第２章　遺構と遺物……15

第１節　基本層序と遺構・遺物の分布……15

１．基本層序……15

２．遺構の分布……16

３．遺物の分布……16

第２節　竪穴住居跡……17

第３節　掘立柱建物跡……57

第４節　土　　坑……59

第５節　土器埋設遺構……65

第６節　溝　　跡……69

第７節　遺物包含層……87

第８節　遺構外出土遺物……98

第３章　考　　察……102

第１節　遺物について……102

１．弥生土器について……102

２．土師器について……105

第２節　遺構について……107
第３節　ま　と　め……109

第２編　横沼西遺跡……111
第１章　遺跡の環境と調査経過……113
第１節　地理的環境……113
第２節　歴史的環境……116
第３節　調査経過……119
１．平成元年度の調査……119
２．平成２年度の調査……119
第４節　調査方法……120
第２章　遺構と遺物……121
第１節　基本層序と遺構の分布……121
１．基本層序……121
２．遺構の分布状況……121
第２節　竪穴住居跡……123
第３節　掘立柱建物跡……133
第４節　土　　坑……158
第５節　溝　　跡……177
第６節　その他の遺構と遺物……180
焼土遺構……180
柱　　列……181
遺構外出土遺物……182
第３章　考　　察……187
第１節　遺物について……187
１．土師器・須恵器について……187
２．１号住居跡出土の刈り鎌について……189
第２節　遺構について……190
１．竪穴住居跡……190
２．掘立柱建物跡……191
３．土坑・溝跡……193
第３節　ま　と　め……195
付　章　横沼西遺跡出土土器の蛍光Ｘ線分析　　三辻　利一……197

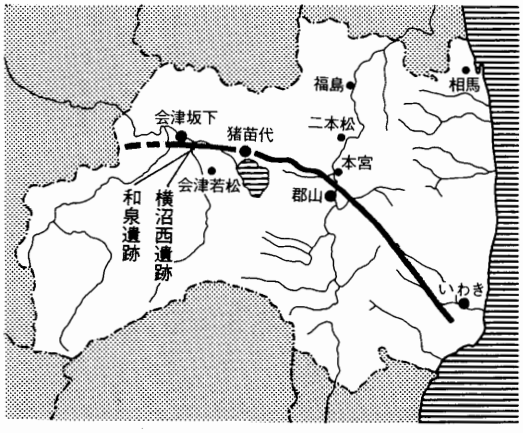
序　　章

第１節　東北横断自動車道関連遺跡調査の経緯

東北横断自動車道いわき・新潟線(磐越自動車道)は，福島県いわき市を起点とし，郡山市・会津若松市を経て新潟県新潟市にいたる212㎞に及ぶ高速自動車国道である。そのうち福島県内の総延長は152㎞である。この自動車道建設の経緯は，昭和48年に郡山～会津坂下区間，昭和53年にいわき～郡山区間および会津坂下～新潟県津川区間の基本計画が設定されたことに始まる。昭和57年に郡山～猪苗代区間の実施計画が打ち出され，昭和60年には猪苗代・会津坂下区間の実施計画が決定した。続いて，いわき～郡山区間，会津坂下～津川区間も昭和61年に実施計画が出され，福島県内については全線が実現する運びとなった。郡山～猪苗代区間については昭和60年度から工事が開始され，昭和63年度には猪苗代～会津坂下区間も着工した。平成元年度には路線の名称が「磐越自動車道」と決定し，翌平成２年にはいわき～郡山区間も工事が開始され，郡山～磐梯熱海の９㎞については開通を迎えた。また，磐梯熱海から猪苗代までの区間も平成３年８月７日に開通し，平成７年度の全線開通を目標に工事が進められている。

福島県教育委員会は，路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため，昭和56・57年度に，郡山～猪苗代区間，猪苗代～会津坂下区間の表面調査を実施した。調査は財団法人福島県文化センターに委託し，関係市町村の協力を得て行われた。表面調査で確認された遺跡のうち，道路建設に直接関係する遺跡は郡山・猪苗代区間で５遺跡，猪苗代～会津坂下間で13遺跡存在することがわかった。路線内に所在する遺跡の取り扱いについては，福島県教育委員会・福島県企画調整部総合交通課・日本道路公団の間で保存協議を行い，保存困難な遺跡については記録保存のための発掘調査を実施することとした。福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託し，郡山～猪苗代区間の遺跡から調査に着手することとなった。

発掘調査は，昭和60年度の細草遺跡の調査を皮切りに，工事計画上緊急を要する遺跡から優先して実施し，調査規模を年々拡大していった。郡山～猪苗代区間は，調査中新たに２ヵ所の遺跡(菖蒲根遺跡・北向遺跡)が発見されたが，平成元年度には全



第１図　東北横断道(いわき～会津坂下間)位置図

第1表　東北横断自動車道第9次区間発掘調査一覧表

遺跡名	所在地	調査面積	調査年度	報告書名
天光遺跡	磐梯町大字更科字天光	2,000㎡	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告5
駒板新田横穴遺跡	河東町大字金田字大作堰上	5,300	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告6
大作堰上遺跡	河東町大字金田字大作堰上	1,780	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告6
角間遺跡	磐梯町大字更科字角間	6,100	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告8
高森平A遺跡	磐梯町大字更科字高森平	5,300	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告8
船ヶ森西遺跡	会津若松市一箕町鶴賀字船ヶ森西	8,750	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告9
上吉田遺跡	会津若松市柳川字吉田	6,100	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告9
能登遺跡	会津坂下町大字勝大字能登	5,500	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
南原B遺跡	会津坂下町大字牛川字南原	500	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
村西遺跡	会津坂下町大字勝大字村西	1,150	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
大村古墳群	会津坂下町大字勝大字大村	400	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
法正尻遺跡	磐梯町大字更科字法正尻	21,000	1988・1989	東北横断自動車道遺跡調査報告11
屋敷遺跡	会津若松市町北町大字始字屋敷	23,800	1989・1990	東北横断自動車道遺跡調査報告12
和泉遺跡	北会津村大字和泉字下和泉	6,150	1989・1990	東北横断自動車道遺跡調査報告13
横沼西遺跡	会津若松市神指町北四合字横沼西	4,800	1989・1990	東北横断自動車道遺跡調査報告13

遺跡の調査を終了した。

猪苗代・会津坂下区間の遺跡については，昭和63年度から調査を開始した。発掘調査の対象面積は，表面調査で確認できた範囲に基づいて計画された。しかし，調査の進捗とともに遺跡範囲が当初面積を大きく上回るケースが続出し，工事計画の緊急性とも絡んで，幾度も保存協議が重ねられた。また，予定された路線内の13遺跡とは別に，工事用道路建設に関連する磐梯町天光遺跡・会津坂下町大村古墳群についても発掘調査を実施した。この猪苗代・会津坂下区間の調査では，縄文時代の遺跡(法正尻・角間・天光)，弥生時代の遺跡(能登・屋敷・和泉)，古墳時代の遺跡(大村古墳群・和泉・屋敷・駒板新田横穴墓群)，奈良～平安時代の遺跡(船ヶ森西・上吉田・屋敷・横沼西)など，各時代にわたる貴重な調査成果をあげ，平成2年度には区間内の全遺跡について発掘調査を完了した。本書は，この区間における発掘調査の最終報告書である。

いわき～郡山区間，会津坂下～津川(福島県分は西会津まで)区間に所在する遺跡については，昭和62年度に表面調査を実施した。福島県教育委員会は，路線予定地を中心とする幅400m，面積3,720haにわたる範囲の表面調査を財団法人福島県文化センターに委託した。この結果，いわき～郡山間で169遺跡，会津坂下～西会津間で7遺跡が発見または確認された。保存協議の結果，工事計画上保存困難な遺跡については記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査の実施にあたっては，郡山～猪苗代区間・猪苗代～会津坂下区間における反省に基づき，遺跡範囲確認のための試掘調査を実施し，調査面積が確定したのちに発掘に着手する手続きを踏むこと

となった。地権者の承諾等，試掘調査のための条件整備は福島県企画調整部総合交通課が担当し，調査は財団法人福島県文化センターに委託された。試掘調査は平成元年度に着手され，平成２年度からは両区間における発掘調査も開始された。　（本　間）

第２節　平成２年度の発掘調査

平成２年度はこれまで継続してきた９次区間に加え，10次区間のいわき～郡山の郡山市内・会津坂下～津川の西会津町の発掘調査および，いわき～郡山間の分布（試掘）調査が始まった。そのため今回の調査は会津地区と郡山～いわき間にわかれて行うこととなった。

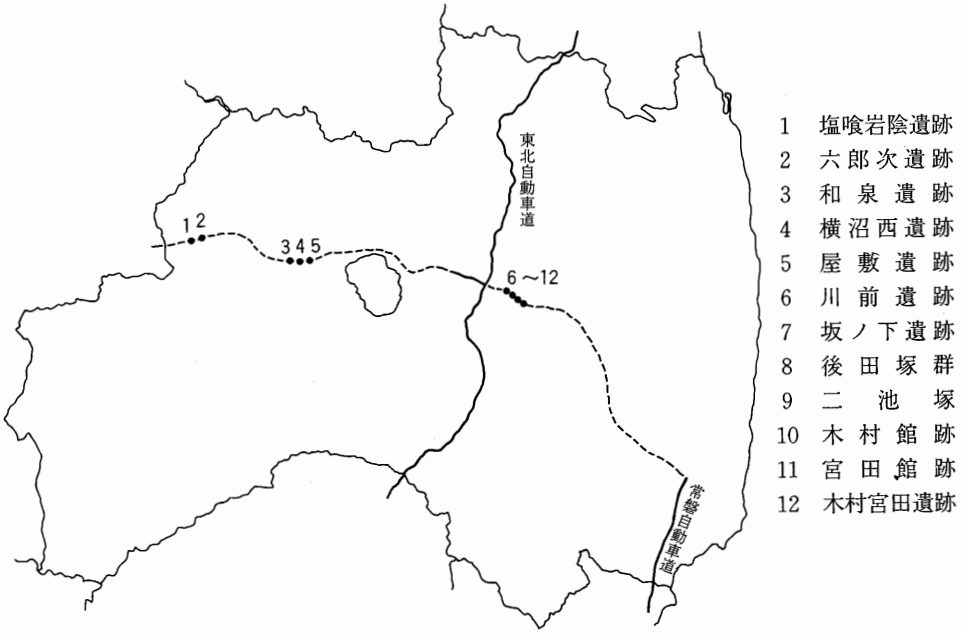
９次区間は会津若松市の屋敷遺跡・横沼西遺跡と北会津郡北会津村の和泉遺跡であり，これらはともに平成元年度からの継続調査である。これら３遺跡はすべて会津盆地床東半分中央の大川およびその支流に沿った自然堤防上に営まれた遺跡であり，大きな意味での地形的条件はほぼ同じである。

屋敷遺跡の平成２年度の調査は４月16日に開始され，11月22日に完了した。この遺跡は会津若松インターチェンジ用地にかかった大規模な遺跡で，平成２年度分だけで調査面積は14,800㎡となる。この遺跡は昭和30年頃に圃場整備事業が行われ上部は削平されていたが，弥生時代中期後半から後期の竪穴住居跡・井戸跡など，弥生時代末～古墳時代初めの方形周溝墓群，平安時代前半期の多数の掘立柱建物跡群・井戸跡・溝跡などが検出されている。弥生時代中期後半から後期は集落，弥生時代末～古墳時代初めは墓域，平安時代前半期は大きな居宅地として利用されていたものと考えられる。

横沼西遺跡の平成２年度の調査は，４月24日から開始され５月30日に完了した。会津盆地中央を南から北に流れる大川の東に接する自然堤防上に立地する遺跡で，平成２年度分の調査面積は1,800㎡である。平安時代前半の竪穴住居跡群・掘立柱建物跡群などが検出され，平安時代前半期における集落跡であると考えられる。

和泉遺跡の平成２年度の調査は，４月25日から調査が開始され，６月18日に完了した。北会津村の北側で会津坂下町との境界近くの沖積段丘上に立地する遺跡で調査面積は6,150㎡である。弥生時代後期の土坑・遺物包含層などが確認された。前年度の調査では古墳時代前期の竪穴住居跡群が発見されている。

10次区間・西会津町の六郎次遺跡は西会津町南部にあり，５月11日から６月15日に調査を行った。縄文時代早・前期を中心とした集落跡であり，面積は1,000㎡である。塩喰岩陰遺跡は西会津町南部の安座川の西岸にある縄文時代草創期～弥生時代中期の遺物を出土する岩陰遺跡である。６月18日に調査を開始したが，一部の条件整備が遅れており，予定地区の調査を完了するこ



第2図　平成2年度東北横断関連発掘調査遺跡

とはできなかった。残りの部分については平成3年度以降，条件整備が完了してから調査することとなった。

10次区間・郡山地区は阿武隈川東岸の川前遺跡・坂の下遺跡・木村館跡・宮田館跡・木村宮田遺跡と，平成2年度新発見の後田塚群の調査を行った。これらのうち，木村館跡の一部が平成3年度に継続調査となった。また，二池遺跡も発見されたが，調査は平成3年度送りとなった。

分布調査は10次区間・いわき～郡山間の田村郡三春町・船引町・小野町にかかる遺跡のうち，堀ノ内遺跡，台ノ前A・B遺跡など17遺跡，48,650m²について試掘調査を実施した。また，この調査中に田村郡船引町大字春山の予定路線内から飛平塚が発見された。

その他に，平成元年度に調査を終了した法正尻遺跡(磐梯町・猪苗代町)，高森平A遺跡・角間遺跡(磐梯町)，船ケ森西遺跡・上吉田遺跡(会津若松市)，能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群(会津坂下町)の各遺跡について，『東北横断自動車道遺跡調査報告』8～11にその成果をまとめ，報告を行った。

また，平成元年度・2年度の継続調査となった屋敷遺跡・横沼西遺跡・和泉遺跡についても遺物整理・報告書の編集を行い，『東北横断自動車道遺跡調査報告』12・13としてまとめた。そのうち，本書には和泉遺跡・横沼西遺跡が収録されている。　(木　本)

第1編　和泉（いずみ）遺跡

遺跡記号	ＫＡ－ＩＺＭ
所在地	北会津郡北会津村大字和泉字原山
時代・種類	弥生時代－遺物包含層・墓域
	古墳時代－集落跡
調査期間	1989年　７月20日～11月17日（第１次調査）
	1990年　４月24日～６月18日（第２次調査）
調査員	高木　政光　　木本　元治　　中野　康雄
	本間　　宏　　西山眞理子
協力機関	北会津村教育委員会

挿 図・表 目 次

［挿　図］

第１図　周辺遺跡分布図……10
第２図　年次別調査区設定図……12
第３図　和泉遺跡周辺工事計画図・グリット設定図（折込み）
第４図　基本土層柱状図……15
第５図　和泉遺跡遺構配置図……（折込み）
第６図　１号住居跡……18
第７図　１号住居跡出土遺物……19
第８図　２号住居跡・炉……20
第９図　２号住居跡出土遺物……21
第10図　３号住居跡……23
第11図　３号住居跡出土遺物……24
第12図　４号住居跡・炉……26
第13図　４号住居跡出土遺物……28
第14図　５号住居跡（１）……30
第15図　５号住居跡（２）……31
第16図　５号住居跡出土遺物……31
第17図　６号住居跡・炉……33
第18図　６号住居跡出土遺物（１）……35
第19図　６号住居跡出土遺物（２）……36
第20図　６号住居跡出土遺物（３）……36
第21図　７号住居跡……38
第22図　７号住居跡出土遺物（１）……39
第23図　７号住居跡出土遺物（２）……40
第24図　８号住居跡……42
第25図　８号住居跡炉……43
第26図　８号住居跡出土遺物（１）……44
第27図　８号住居跡出土遺物（２）……45
第28図　８号住居跡出土遺物（３）……46
第29図　８号住居跡出土遺物（４）……47
第30図　10号住居跡・出土遺物……48
第31図　11号住居跡……50
第32図　11号住居跡出土遺物……51
第33図　12号住居跡・出土遺物……52
第34図　13号住居跡・出土遺物……54
第35図　14号住居跡・出土遺物……56
第36図　１号建物跡・出土遺物……58
第37図　２・５・６・７号土坑……60
第38図　４・12・16・17号土坑……61
第39図　土坑内出土遺物……63
第40図　１・２号土器埋設遺構……66
第41図　１号土器埋設遺構の土器……67
第42図　２号土器埋設遺構の土器……68
第43図　１号溝跡（１）……70
第44図　１号溝跡（２）……71
第45図　１号溝跡出土遺物（１）……74
第46図　１号溝跡出土遺物（２）……75
第47図　１号溝跡出土遺物（３）……76
第48図　１号溝跡出土遺物（４）……77
第49図　１号溝跡出土遺物（５）……78
第50図　１号溝跡出土遺物（６）……79
第51図　１号溝跡出土遺物（７）……80
第52図　１号溝跡出土石器……81
第53図　２号溝跡出土遺物（１）……83
第54図　２号溝跡出土遺物（２）……84
第55図　３号溝跡……85
第56図　６号溝跡・出土遺物……86
第57図　文様施文法……87
第58図　第１遺物包含層出土遺物……88
第59図　第２遺物包含層断面……89
第60図　第２遺物包含層出土遺物（１）……90
第61図　第２遺物包含層出土遺物（２）……91
第62図　第３遺物包含層（１）……92
第63図　第３遺物包含層（２）……93
第64図　第３遺物包含層出土遺物（１）……95
第65図　第３遺物包含層出土遺物（２）……96
第66図　第３遺物包含層出土遺物（３）……97
第67図　遺構外出土遺物（１）……99
第68図　遺構外出土遺物（２）……100
第69図　遺構外出土石器……101
第70図　交互刺突文様式図……103
第71図　土器文様模式図……103
第72図　住居跡出土土師器……106

［　表　］

第１表　周辺遺跡地名表……9

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査にいたる経過

北会津村北半から会津坂下町の南部にかけては，弥生・古墳時代の遺跡が数多く分布し，会津地方の古墳文化出現期の研究上，注目されている地域である。

この和泉遺跡は，昭和62年度の東北横断自動車道補足分布調査で確認されたものである。しかし，昭和52年にも和泉遺跡の一部が調査されている。(1) それは，大字和泉字下分617の県道西側で諏訪神社北方の水田である。ただし，この地点は昭和46年の分布調査では下和泉遺跡の一部とされている。下和泉遺跡は大正時代にすでに井関敬嗣により確認されている。その後昭和36年の分布調査では下和泉遺跡は字下部(和泉遺跡の南に接する集落の字名)とされおり，(2) 昭和46年の名称はそれを引き継いだものであろう。しかし，昭和58年の分布調査では和泉遺跡の南の県道東の智徳寺周辺の字中分を下和泉遺跡としており，地点と名称に混乱が見られる。ただ字中分の智徳寺周辺からも土師器片が採集されており，智徳寺周辺から県道西の諏訪神社の北側まで遺跡が広がることは確実である。ただし，地元の話では，かつて圃場整備事業の時に和泉遺跡南側の下和泉の集落周辺からも遺物が出土したとのことである。とすれば，和泉遺跡か下和泉遺跡の一部がその付近まで広がっていると考えられ，両遺跡はほとんど接しているような状態であったとも推定できる。ただ，今となってはこれら大規模な１遺跡の一部なのか，２遺跡なのかは判断できないので和泉遺跡と下和泉遺跡の名称を用いておきたい。

両遺跡の中央を南北に県道坂下～本郷線が走っている。これは昭和52年に既存の農道を一部拡幅・一部新設により作られたもので，拡幅の部分は両側に側溝を掘り旧道の上に盛土をして県道としている。したがって，このような部分は県道下でも遺跡は保存される事となった。和泉遺跡の県道下の部分がそれである。

以上のような条件を踏まえ協議を行った結果，平成元年度は県道の両側5,000㎡の発掘調査と東西の範囲の確認，平成２年度には調査終了地区に県道の迂回路を作り，県道下を含む残りの部分を調査することとした。平成２年度の調査面積は6,150㎡である。　　（木　本）

(1) 小滝利意　1978　『北会津村北部地区埋蔵文化財調査概報』　北会津村教育委員会

(2) 福島県教育委員会　1961　『福島県遺跡地名表』　には「897　弥生散布地　下和泉遺跡　北会津郡北会津村大字和泉字下部」の記載がある。

第２節　地理的環境

和泉遺跡は北会津村大字和泉字原山に所在する。この地域は北会津村の北西端に位置し，会津坂下町と接し，新鶴村との境界線である宮川までは約400ｍの距離である。北会津村役場から北北西方向に約4.0㎞，ＪＲの最も近い駅である只見線若宮駅から東南東方向に2.25㎞の位置にある。また会津地方最大の都市会津若松市の中心部からは，北西方向に約7.8㎞の位置にある。会津盆地全体の中で本遺跡の位置を見てみると，南北に長い楕円形の会津盆地の中央部やや南東よりに位置している。

会津盆地の中を流れる河川は，最終的には全て日本海に注ぐことになる。南会津郡の山間部に水源をもつ大川は，会津盆地の南東部から盆地床に入り，盆地中央部やや北よりの地点から流れの向きを変え，盆地の西縁の山々の間を通って西流する。その間，北流する宮川，西流する日橋川，南流する大塩川，姥堂川，濁川などの支流を合流させ，阿賀川として会津盆地とその周辺部の山々を一つの水系に統一している。会津盆地の平野部は，この阿賀川とその支流の堆積作用によって形成された。当然，阿賀川が盆地から流れ出る地点の標高が最も低く，盆地の底面はその地域に向かって傾斜している。過去において，会津盆地を縁どる山地は隆起する傾向をみせ，反対に盆地内の地域は沈降する傾向にあった。奥羽山脈側の火山活動は盆地内の東側を噴出物で覆うこともあり，しだいに東高西低な会津盆地が形成されてきたのである。

和泉遺跡が所在する北会津村は，会津盆地中央部南東よりに拡がる平坦な地域である。南北に細長い北会津村の東の境界線は大川であり，西の境界線は宮川とその支流氷玉川の流れとなっている。したがって，この地域の地形は，北流する川の流れにそうように，南から北に向かって緩やかに傾斜している。同村の南端と北端(和泉遺跡)の比高は約40ｍである。和泉遺跡は同村では最も標高の低い地帯にあるが，遺跡はかって自然堤防であったと思われる微高地上に立地していた。この緩やかな傾斜は会津坂下町の前述の阿賀川(大川)が会津盆地から流れ出る地点まで続いている。現在，和泉遺跡周辺は圃場整備が進み，整然と区画された水田地帯の中を，直線道路が格子状に巡らされている。

会津盆地南西部は，大川と宮川の氾濫によって形成された。和泉地区周辺は大川と宮川に挟まれ，両河川の距離はこのあたりで2.5㎞しかなく，しかも和泉遺跡から宮川までの距離は僅か400ｍである。両河川はこの地区から3.0㎞下流で合流する。したがって，この地域は，弥生時代の人々が稲作を行うには水の便は良かったが，それと同時に，水害に苦しめられてきたであろうことは想像に難くない。実際，歴史時代になっても，再三にわたり洪水と流路の変更があったことが記録されている。

(中　野)

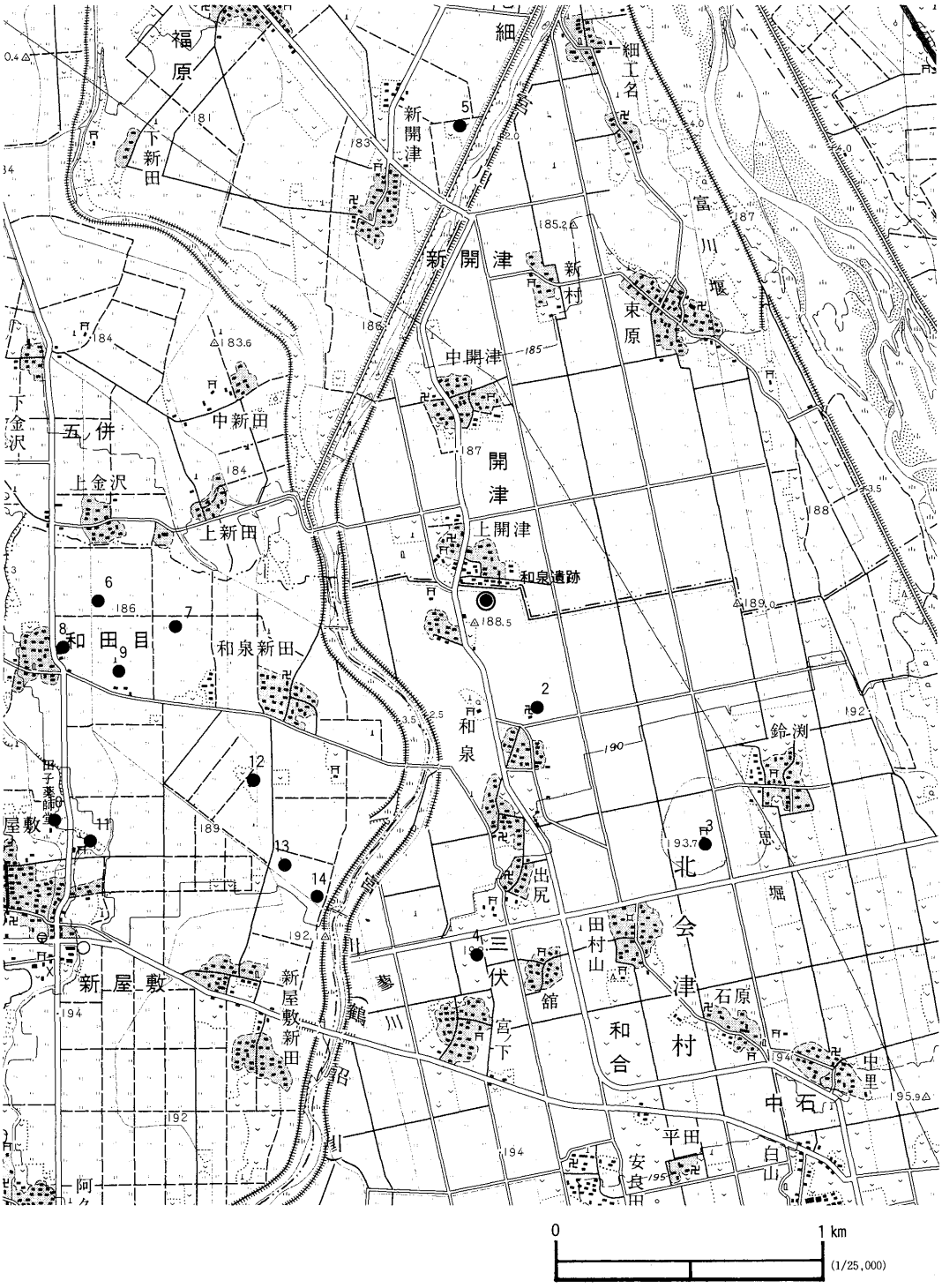
第3節　歴史的環境

和泉遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であり，会津盆地の盆地床を流れる大川(阿賀川)や宮川が形成した自然堤防上に立地している。一般に，縄文時代の遺跡が，食糧となる動植物を狩猟採集するのに便利な丘陵地帯に集中するのに対して，稲作が開始された弥生時代の遺跡は水の便の良い平野部に移る傾向がある。全村が平坦地となっている北会津村では，弥生時代以後の遺跡が微高地上に10ヵ所ほど知られている。村のほぼ中央部に位置する西麻生遺跡では弥生前期の土器が，今和泉遺跡からは弥生中期初頭の土器がそれぞれ出土している。これらの遺跡の存在は，肥沃で広大な会津盆地に，早くから水稲耕作が伝わったことを暗示するものと考えられる。和泉遺跡に近接する会津坂下町開津地区の中開津台畑遺跡では，畿内第Ⅳ様式に対比される土器の出土も報じられている。また，和泉遺跡から宮川を挟んで北西に広がる段丘上には，会津坂下町細田遺跡・館ノ越遺跡・能登遺跡など，天王山式土器を多く出土する遺跡も確認されており，この時期の遺跡の密集度には目を見張るものがある。

この地域では，古墳文化の影響も極めて早い時期に認められる。特に，会津坂下町に所在する男壇遺跡・宮東遺跡などの大規模な周溝墓群や，古墳時代前期の前方後円墳と考えられる杵ケ森古墳などの存在は，この地域の先進性を如実に示すものであろう。宮東遺跡では北陸系の月影式土器も出土している。これらの古墳と対峙するように，会津若松市一箕町周辺の丘陵上にも，堂

第1表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	住所	種別	時期	出土遺物
1	和泉遺跡	北会津村大字和泉字原山	集落跡	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器
2	下和泉遺跡	〃　〃　字中分	散布地	奈良・平安	土師器
3	田村山古墳	〃　大字和合甲字塚越	古墳	古墳	土師器・内行花文鏡・剣
4	三伏遺跡	〃　大字三伏乙字町畑	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
5	金山B遺跡	会津坂下町大字新開津字金山	散布地	平安	土師器・須恵器・木製品
6	小沢田宝篋印塔	新鶴村大字和田目字八合田	石造物	中世	宝篋印塔
7	八合田塚群	〃　〃　字八合田	塚		
8	沢田宝篋印塔	〃　〃　字沢田	石造物	中世	
9	八合田宝篋印塔	〃　〃　字八合田	石造物		
10	田子畑遺跡	〃　〃　字田子畑	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
11	山王塚古墳	〃　大字新屋敷字山王塚	古墳	古墳	
12	薬子堂跡	〃　大字和田目字中島	社寺跡		
13	天王塚	〃　大字新屋敷字天王塚	塚		
14	宮前塚	〃　〃　字宮前	塚		


福原
下新田
新開津
細
細工名
富川堰
新開津
新村
東原
中開津
中新田
五併
上金沢
上新田
開津
上開津
和泉遺跡
和田目
和泉新田
和泉
鈴渕
田子薬師堂
屋敷
出尻
北
会津村
田村山
三伏
館
石原
新屋敷
新屋敷新田
鶴川
宮下
和合
中石
中里
平田
白山
安良田
0
1 km
(1/25,000)

第1図　周辺遺跡分布図

ケ作山古墳・会津大塚山古墳などの大規模な前期古墳が形成されている。会津大塚山古墳では，三角縁神獣鏡や三葉環頭大刀・銅鏃などをはじめとする多種多様な副葬品が出土している。その内容は，畿内の前期古墳の内容と酷似する部分が多く，とりわけ三角縁神獣鏡は岡山県の備前丸山古墳出土鏡と同笵の二神二獣鏡であり,中央政権との密接な関わりを知ることができる。『古事記』では，崇神天皇によって派遣された北陸道将軍の大毗古命と，東海道将軍の建沼河別命の父子が出会った場所が「相津(あいづ)」であると伝えている。この記述は，会津盆地の東西に立地する前期古墳の性格や，この地の古墳文化の開幕を考える上で非常に示唆的である。考古学的な検証作業を十分に重ねるべきであろう。

北会津村における古墳時代の代表的な遺跡は田村山古墳である。昭和3年に発掘されたが，銅鏡2面，小玉・管玉・直刀，土師器破片が出土した。この古墳の墳丘は現在よりも大きく，帆立貝式の前方後円墳であったと見られている。従来は，会津若松市の大塚山古墳や，会津坂下町の亀ケ森古墳のような巨大古墳に後続する中期古墳とされてきたが，出土している土器の中には古墳時代前期に遡るものがあり，和泉遺跡との関連を考える上で興味深いものがある。

律令制の進展にともない，8世紀初めまでには会津郡が設置されている。平安期になると，会津若松市南部の大戸古窯跡群において大規模な窯業生産も行われるようになる。出土須恵器の胎土分析によると，大戸古窯跡群の製品は会津地方に広範に行き渡り，東は中通り地方の本宮町まで流通していることが現在までに知られている。平成2年度に報告した会津若松市上吉田遺跡の大量の須恵器も，分析結果によれば，その大半が大戸産である可能性が高いと判断されている。和泉遺跡に近接する奈良・平安時代の遺跡としては，平安初期の浄瓶が出土した間宮地区の真渡遺跡や，墨書銘土器と井戸枠が多量に出土した会津坂下町新開津の金山遺跡などがある。今回の調査区の南側に隣接する下和泉遺跡も，奈良・平安時代の遺物を出土する。

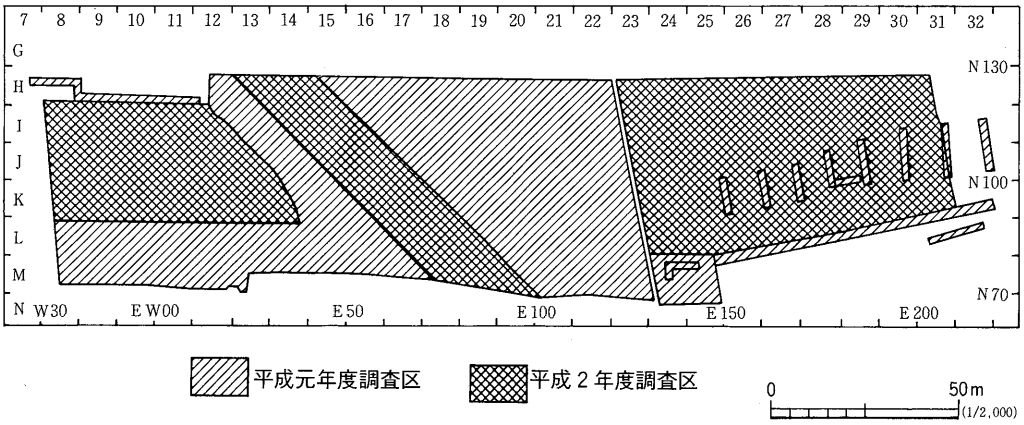
和泉地区は，その地名が示すように，良質の水に恵まれてはいたが，同時に水害には悩まされた。特に応永26年(1419)の大洪水で阿賀川の流路が変り，その後，天文5年(1536)の洪水で再び旧河道にもどって現在に至っている。

(中野・本間)

第4節　調査経過

1．平成元年度の調査(第1次調査)

和泉遺跡は，北会津郡北会津村大字和泉字原山に位置する。今回の調査区からさらに南側の部分では，北会津村教育委員会が圃場整備事業にともなう試掘調査を昭和52年に行っており，古墳時代前期の土器の出土が報告されている。その後，昭和62年度に，福島県教育委員会・(財)福島県文化センターが，東北横断自動車道建設に係わる埋蔵文化財確認のための補足踏査を行い，予



第２図　年次別調査区設定図

定された路線内にも遺物が分布していることが確認された。踏査の結果推定された必要調査面積は，11,500㎡であった。

東北横断自動車道建設に関わる発掘調査は，平成元年度からは会津盆地内の遺跡を対象とし，工事計画上緊急を要する地区から開始することとなった。和泉遺跡の調査期間は２ヵ年の予定で計画された。１年目の平成元年度は，県道会津坂下・本郷線と交差するボックスカルバート建設部分と工事用道路部分，および県道の工事中付け替え道路設置部分を中心とした5,500㎡を対象として調査を行うこととなった。

調査は，東北横断道第８次区間に関わる郡山市北向遺跡の調査終了後，同遺跡の調査員２名をあて，７月下旬から11月下旬までの予定で実施することとなった。７月20日に現地に入り，発掘作業員募集の依頼や発掘器材の搬入を行い，７月25日からは重機を導入して表土剝ぎを開始した。７月27日からは発掘作業員を入れての調査を開始したが，作業員の集まりが極端に悪く，各方面への協力依頼を頻繁に行った。しかしその効果もなく，調査員２名と作業員３～５名による低能率の作業が約１ヵ月間続いた。

少人数による調査に加え，遺構が検出される基本層序ＬⅣが粘性の強い土質であったため，猛暑の中では乾燥のために極めて堅く変化してしまい，作業能率を著しく損ねる一因となった。また，雨天になると雨水がＬⅣを浸透しないために水はけが悪く，調査区が水浸しとなり，その都度復旧作業に手間どるという状態であった。

９月上旬になって作業員が10名を超え，中旬には20名まで増加して，ようやく調査が本格化した。９月21日，工事担当業者が来跡し，工事優先箇所の調査に関する打診があった。この際，日本道路公団が提示していた優先箇所と，担当業者の計画していた工事優先順位との間に食い違いがあることが判明した。業者の希望は，調査区の北側に流れる水路の付け替えを最優先としたいので，関係する調査区西半の北辺部分400㎡を早く調査してほしいというものであった。関係者

協議の結果，この部分の調査を当初の契約予算の枠内で行うことに決定し，9月27日に重機を導入し，設定したトレンチ内の表土剝ぎを行った。精査の結果，調査区西半の北辺部分は，耕地整理によって基本層序のＬⅥ・ＬⅦまですでに削平されていることが判明した。

遺構の調査は9月中旬以降は順調に進んだが，10月に入ると再三のように雨天に見舞われ，排水作業のため作業能率が再び低下した。しかし，10月末には遺構群のほぼ全容が把握できるようになり，福島県内でも数少ない塩釜式期の集落跡が姿を現した。これらの遺構精査と並行して，次年度の調査予定区域に10本のトレンチを設定し，遺構・遺物の分布範囲と層序に関するデータ収集を行った。11月15日にはバルーンによる空中写真撮影を行った。補足調査と発掘器材の撤収を終えて，第1次調査の全行程を完了したのは11月17日であった。　（本　間）

2．平成2年度の調査（第2次調査）

平成2年度の和泉遺跡の調査は，東北横断自動車道の工事にかかる6,150㎡について行われることになった。調査は4月24日に開始され，6月18日に終了した。今年度調査を行った地域は昭和50年代の圃場整備を行った際に削平を受け，遺存状態は良好ではなかった。とくに調査区西端部と東北部は完全に削平を受け，遺構は皆無であった。しかし，県道の付替工事のため，予定より約半月遅れて調査は終了した。調査の進行状況は次の通りである。

4月24日（火）　発掘器材を現場に搬入し，発掘調査を開始する。午後，雨のため作業を中止し，北会津村教育委員会・公民館・工事業者と打ち合わせをする。

4月25日（水）　県道西側の表土剝ぎを重機で行う。土坑1基を検出する。完形の小型壺が出土する。

4月26日（木）　前日検出した土坑の調査を完了する。県道西側は昨年の調査区以外は，表土の下は直接，砂層・砂利層となり，遺構・遺物はないことがわかる。午後，県道東側の表土剝ぎを開始する。

4月27日（金）　前年度竪穴住居跡を検出した県道西側地区から弥生土器片が出土する。遺物包含層であることが判明する（第2遺物包含層）。

5月8日（月）　西地区の弥生土器包含層（第2遺物包含層）の灰褐色シルト層を掘り込む。

5月10日（水）　第2遺物包含層の調査終了する。東地区で遺物包含層を検出する。

5月21日（月）　西地区の盛土を除去する。

5月24日（木）　東地区遺物包含層（第3遺物包含層）の上面を精査する。

5月25日（金）　第3遺物包含層を南半分と北半分に分け，掘り込みを開始する。弥生土器片が出土する。

5月29日（火）　西地区の盛土除去を完了する。

5月31日（木）　第3遺物包含層南側最下層より弥生土器完形品（小型壺）が出土する。

６月６日(水)　第３遺物包含層南側の掘り上げを終了する。

６月７日(木)　第３遺物包含層北側から完形品２点を含む弥生土器群が出土する。

６月12日(火)　第３遺物包含層北側の調査を終了する。

６月13日(水)　県道部分の調査を開始する。溝１条と遺物包含層を検出する。

６月18日(月)　県道部分の調査を終了する。発掘器材を撤収し，和泉遺跡の発掘調査のすべてを終了する。　(中　野)

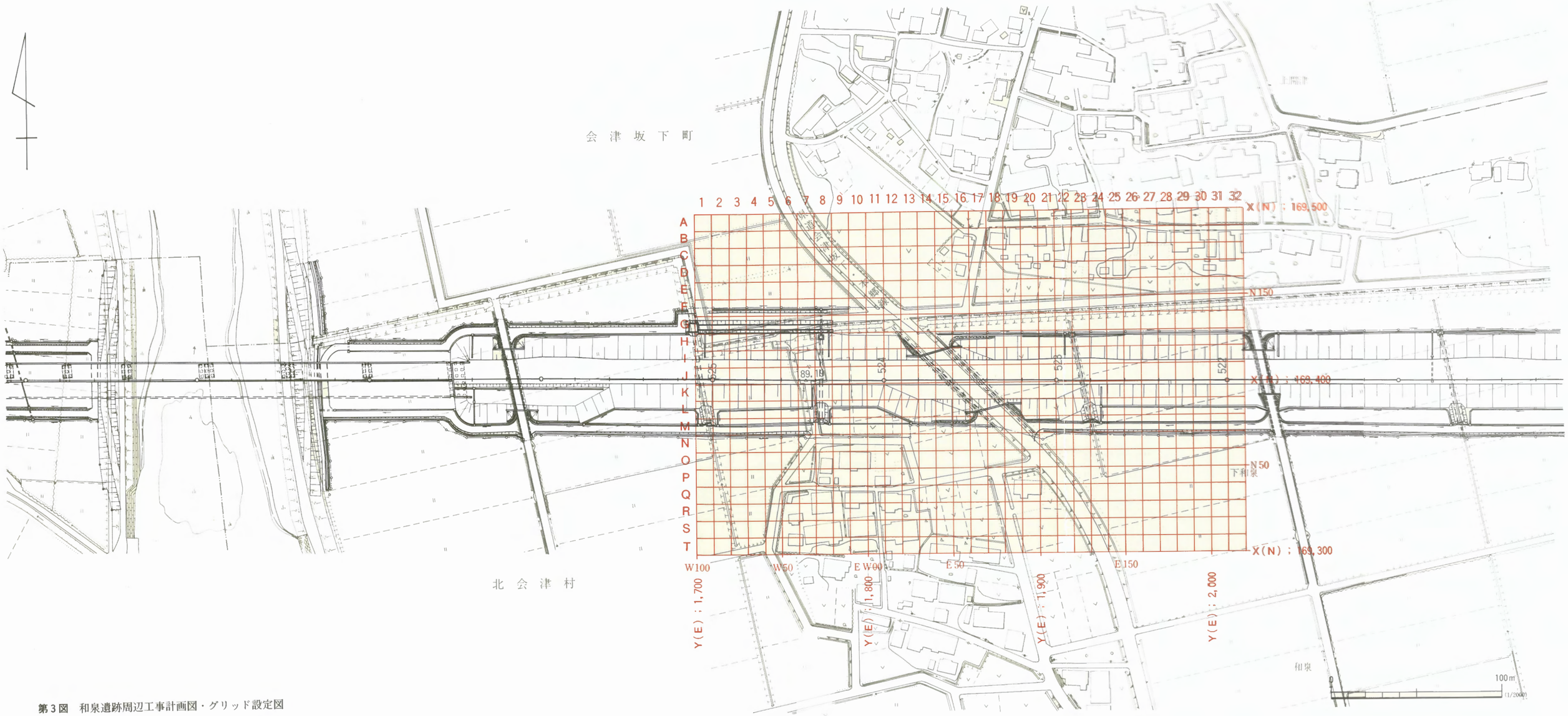
第５節　調査の方法

昭和62年度以降，東北横断自動車道建設に伴う遺跡発掘調査では，国家座標を利用した区域設定を行い，調査区や遺構の絶対位置を客観的に示すよう配慮している。本遺跡でも，グリッド設定にあたっては従来の方法を踏襲した。

調査区外南西側にあたる国家座標Ⅸ系，Ｘ；169,300・Ｙ；1,800の地点に，便宜上ＮＳ00・ＥＷ00という略号の測量原点を設けた。この原点から真北へ120ｍ，真東へ50ｍの地点に所在する地点の場合は，国家座標の上でＸ；169,420・Ｙ；1,850となるが，これをＮ120・Ｅ50と標記することにしたわけである。また，グリッドの設定にあたっては，南北軸上のＸ；169,500～169,300(Ｎ200～ＮＳ00)の200ｍを10ｍ幅で20等分し，各々について北から南へＡ・Ｂ・Ｃ……Ｔの記号を与え，東西軸上のＹ；1,700～2,020の320ｍについても同様に10ｍ幅で32等分し，西から東に１・２・３……32の記号を与えた。そして，10ｍ四方のそれぞれの区画に対しては，これを組み合わせてＡ１・Ａ２……などと呼称することとした。和泉遺跡の調査区の位置は，座標上はＮ67～Ｎ128・Ｗ20～Ｅ211の範囲内にあり，該当するグリッドは，南北がＨ～Ｎ，東西が８～32である。

遺構等の掘り込みにあたっては，遺構内の下部の堆積土が遺構底面や掘形などと峻別しにくい土質であったため，床や柱穴などについて随時サブトレンチを設け，最終的にはことごとく断ち割りを行って，掘り足りない部分がないように留意した。

遺構の記録に際しては，平面図・断面図を1／10または1／20の縮尺で図化し，写真は35ミリカラーリバーサルおよびモノクロームと６×4.5の大判を併用した。　(本　間)



第3図　和泉遺跡周辺工事計画図・グリッド設定図

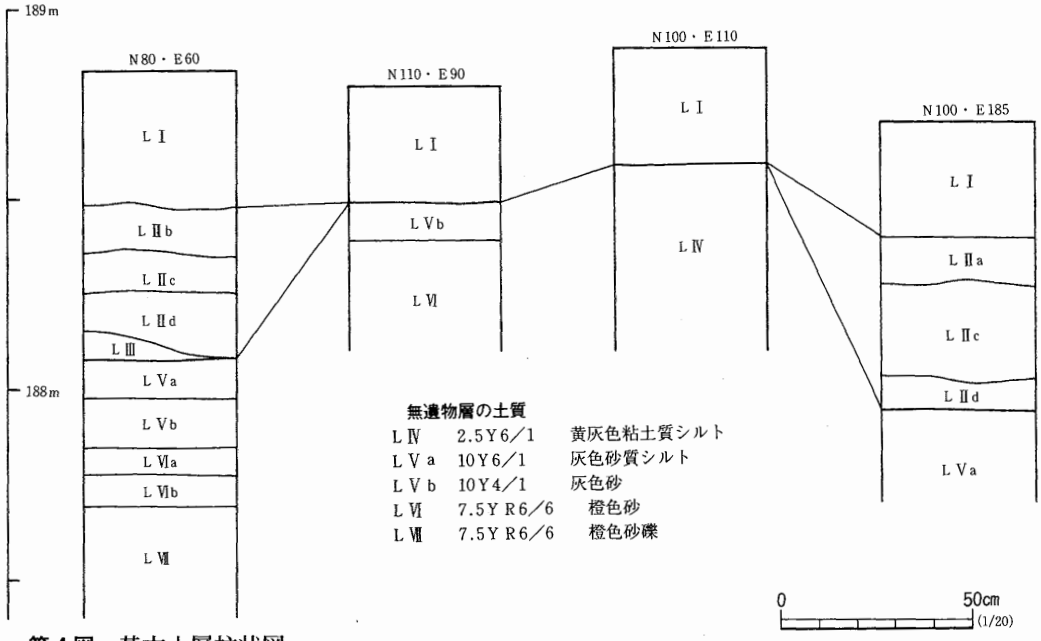
第２章　遺構と遺物

第１節　基本層序と遺構・遺物の分布

１．基本層序

本遺跡の基本土層は，昭和50年代に実施された圃場整備事業の影響により，大規模な削平を受けている。遺構が構築された時代の生活面はほぼ失われており，遺物包含層も部分的に残存するのみであった。

基本土層第Ⅰ層(以下，ＬⅠとする)は表土層で，大半は圃場整備時の盛土である。ＬⅠ'は盛土以前の攪乱層である。ＬⅡは，黒色を呈するシルトで，部分的に残存するのみであった。弥生時代～古墳時代の遺物包含層となっている(第１～３遺物包含層)。ＬⅡは，さらに３層に区分され，第１次調査では上から順にＬⅡa・ＬⅡb・ＬⅡcとした。しかし，第２次調査において，第３遺物包含層などで，ＬⅡの上部に堆積する暗灰褐色シルトが確認されたため，新たにこの層をＬⅡaとし，第１次調査の際のＬⅡa・ＬⅡb・ＬⅡcを，それぞれＬⅡb・ＬⅡc・ＬⅡdと変更した。本章第６節では，変更後の出土層位名を用いて記述している。ＬⅡが遺存する地区では，ＬⅣとの漸移層としてＬⅢが分布している。ＬⅢはくすんだ褐色シルトで，弥生時代の遺物が微量含ま



第４図　基本土層柱状図

れている。ＬⅣは，主に調査区の東半に分布する黄褐色粘土質シルトである。遺物は含まれない。ＬⅤは灰白色を呈する砂質シルトであるが，調査区西半ではやや粘性を帯びる。遺構は，調査区東半ではＬⅣ，西半ではＬⅤで検出している。ＬⅤは，下層になると，色調はあまり変化しないものの，砂質土を主体とするようになる。このことから，ＬⅤをさらに細分し，上層をＬⅤa，下層をＬⅤbとした。ＬⅤaは，調査区東半においては希薄である。ＬⅥは橙色に酸化した砂質土層で，ＬⅦは灰橙色の砂礫層である。調査区西端では，このＬⅦまで削平が及んでいる。ＬⅦに見られる大量の礫は，かつてこの地域が氾濫原であったことを示唆し，ＬⅣ～ＬⅥの堆積状況は，自然堤防の形成過程を示すものと考えられる。

２．遺構の分布

調査区内から発見された遺構は，住居跡13軒，建物跡１棟，土坑８基，土器棺墓２基，溝跡６条，焼土遺構１基，遺物包含層３地点である。

住居跡の年代は，古墳時代塩釜式期を中心とする。その分布は，調査区のほぼ中央に集中している。ただ，調査区の北東部と西端部は大きく削平されているため，集落の本来の範囲がどのあたりまで広がっていたかは把握できない。調査区西端付近は，宮川(鶴沼川)右岸の段丘崖に接する地域であり，聞き取り調査によれば，圃場整備の際に多量の遺物が出土したという。住居跡と他の遺構とは，必ずしも年代・分布が一致するわけではない。土器棺墓は弥生時代天王山式期のものである。調査区中央の南東部に存在し，住居跡群の分布域とは離れている。遺物包含層は３地点で認められるが，第１と第２は本来は連続する包含層であった可能性が高い。第３遺物包合層は，住居跡の分布域から離れ，調査区東端付近に存在する。

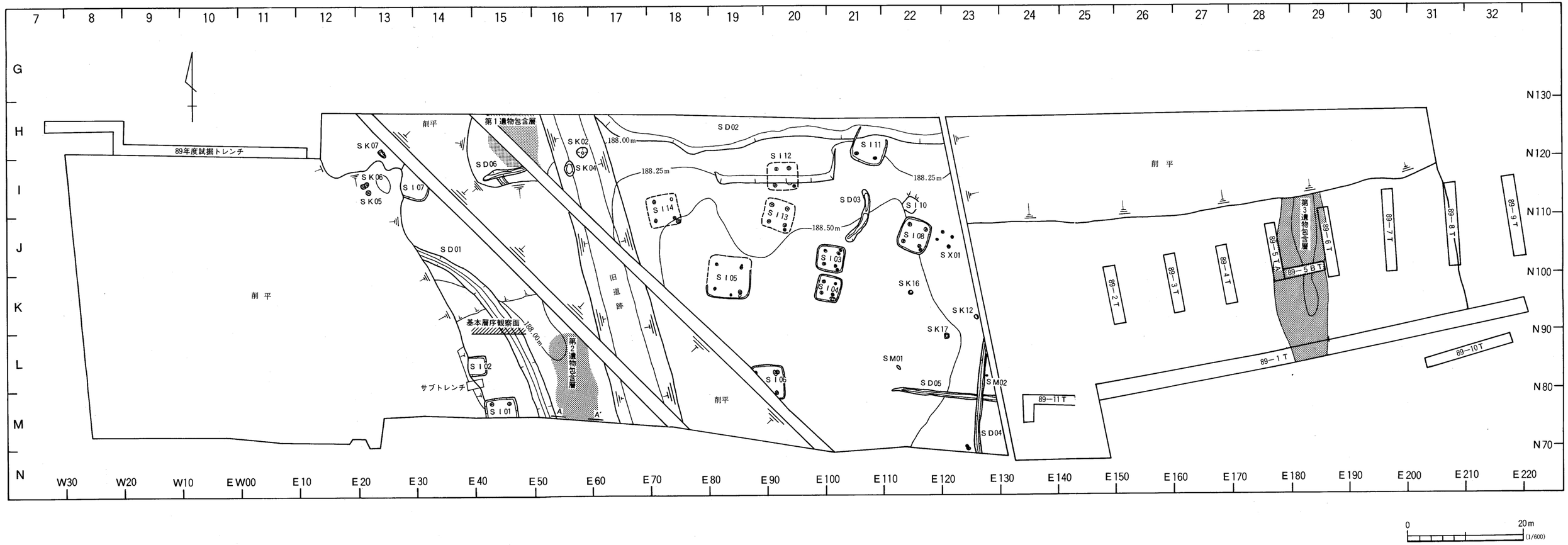
３．遺物の分布

本遺跡から出土した遺物は，破片数にして弥生土器2,525点，土師器12,379点，須恵器11点，石器・剥片・残核類74点である。

弥生土器は，天王山式期のものを主体とし，壺・広口壺・浅鉢・小型深鉢・蓋・注口などの器種で構成されている。甕は明瞭でない。第１～３遺物包含層に多いが，住居跡堆積土内からも少量出土している。第３遺物包含層では，小型土器を主体とする特異なまとまりを見せている。

土師器は，塩釜式期のものを主体とし，壺・坩・高坏・甕・器台などで構成されている。壺・甕にはハケメ調整が加えられる場合が多く，坩・高坏はミガキ調整が加えられるのが普通であるため，本書では，住居跡内から出土した土師器について，調整手法別に出土点数を集計している。土師器は，１・３～８・11号住居跡，１号建物跡，１号溝跡から多く出土し，特に６号住居跡・８号住居跡・１号溝跡堆積土ℓ２で良好なまとまりを持って出土している。

須恵器は，表土出土のものが多い。圃場整備の際に，下和泉遺跡の遺物がこの地に運ばれた公算が高い。石器は，不定形の剥片の縁辺を使用したものが主体をなす。　　（本　間）


89年度試掘トレンチ
削平
第1遺物包含層
SK07
SK06
SK05
SI07
SD06
SK02
SK04
188.00m
188.25m
SD02
SI12
SI11
SI14
SI13
188.50m
SD03
SI10
SI08
SX01
SI05
SI03
SI04
SK16
SK12
SK17
SM01
SD05
SM02
SD04
SI06
SD01
基本層序観察面
188.00m
SI02
サブトレンチ
SI01
A
A'
第2遺物包含層
旧道路
第3遺物包含層
89-1T
89-2T
89-3T
89-4T
89-5TA
89-5BT
89-6T
89-7T
89-8T
89-9T
89-10T
89-11T
G
H
I
J
K
L
M
N
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
N130
N120
N110
N100
N90
N80
N70
W30
W20
W10
EW00
E10
E20
E30
E40
E50
E60
E70
E80
E90
E100
E110
E120
E130
E140
E150
E160
E170
E180
E190
E200
E210
E220
0
20m
(1/600)

第２節　竪穴住居跡

平成元年度の調査によって，調査区内から13軒の住居跡が確認された。すべて竪穴住居跡と考えられるが，後世の開田に伴う削平により，周壁がまったく失われてしまった住居跡も存在する。住居の構造は，主柱と特殊ピットの配置状況などにおいて類似する部分が多い。住居跡内から出土する遺物の年代は，おおむね弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものである。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（第６図，図版２）

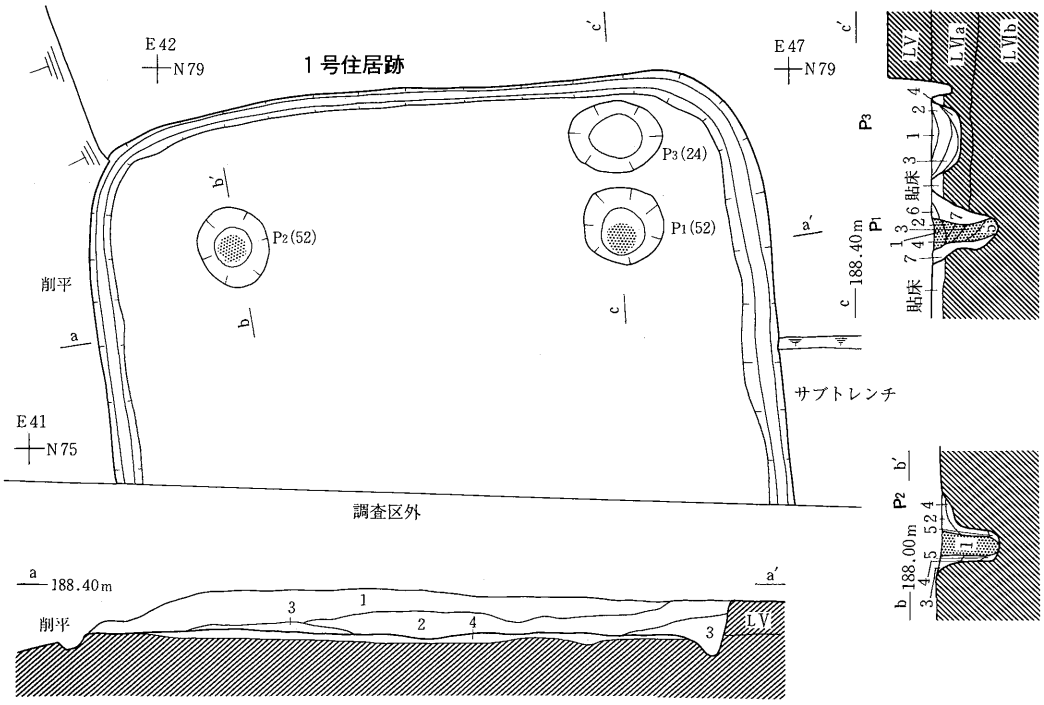
調査区の西方，Ｍ－15グリッドＬＶ上面において検出した。遺構の西壁は，後世の削平によって失われており，南半部は調査区外にのびるため未調査である。また，東壁の一部は，調査開始時に設定した基本土層観察用トレンチによって失われている。

遺構の存在は，灰白色を呈するＬＶ内に黄灰色の粘土質シルトが堆積していたため，明瞭に確認できた。遺構内堆積土は，周囲のＬⅡ～ＬⅣの流入・崩落に伴う自然堆積土と思われ，その混合の度合によって，大きく３層に区分される。いずれの層も粘性が高く，非常にしまりの強い土質であった。また，夏期に調査を行ったため，乾燥によって土が堅くなり，移植ゴテが土に刺さりにくいため，掘り込みは困難を極めた。

平面形は，ほぼ隅丸方形を呈し，北辺の長さ約4.90ｍ，東西の最大幅は5.34ｍを測る。他の住居跡の形態をもとに本遺構の平面プランを推定すると，中軸方位をＮ－６°－Ｗにとる軸長約5.4ｍの隅丸正方形の竪穴住居跡と想定される。

周壁は，北辺と東辺において良好に遺存しており，床面に対してほぼ100°の角度で立ち上がる。周壁残存高は，北辺で36～47㎝，東辺で30～36㎝を測る。周壁沿いには幅10～24㎝の壁溝が存在する。床面から壁溝底面までの深さは７～15㎝である。

床面はほぼ平坦に作り出されている。掘形がＬⅥaまで掘り込まれ，その上に灰白色粘土を貼って床を形成している。遺構内堆積土が非常に堅かったため，床面硬化部分の識別はできなかった。炉は検出されていない。床面からは３個のピットが確認されている。このうち，P_1とP_2が柱穴と考えられる。P_1は，上端径62㎝，深さ52㎝の円形の掘形内に，径15～25㎝の柱根痕跡を持つ。P_2は，上端径55×64㎝，深さ50㎝の楕円形の掘形内に，径20㎝の柱根痕跡を有する。この２個の柱穴の間隔は3.10ｍを測る。P_3は，上端径73×58㎝，下端径43×35㎝，深さ24㎝の楕円形のピットである。P_1・P_2とは異なり，自然堆積土と考えられる土がレンズ状に堆積する。貯蔵穴と判断した。



1号住居跡堆積土

1　(2.5Y4／1) 黄灰色粘土質シルト
(黒褐色と黄灰色の混土)
2　(2.5Y5／1) 黄灰色粘土質シルト
(明黒褐色シルトを少量混土)
3　(5Y3／1) 黒褐色シルト
(全体にやや灰色味が強い)
4　灰白色粘土
(人為的貼床層。上面は酸化している)

P1堆積土

1　(2.5YR5／1) 黄灰色粘土質シルト
2　(2.5YR4／1) 黄灰色粘土質シルト
3　(10YR4／1) 灰褐色粘土質シルト
4　(2.5Y3／3) 暗オリーブ褐色砂質シルト
5　(10YR3／1) 暗灰黄色砂質シルト
6　(10YR3／1) 黒褐色粘土質シルト
7　(2.5Y6／1) 黄灰色粘土質シルト

P2堆積土

1　(2.5Y4／2) 暗灰黄色砂質シルト
2　(2.5Y5／1) 黄灰色粘土質シルト
3　(2.5Y3／2) 黒褐色砂質シルト
4　(2.5Y3／1) 黒褐色砂質シルト
5　(2.5Y6／2) 灰黄色砂質シルト

P3堆積土

1　(2.5Y5／2) 暗灰黄色粘土質シルト
2　(2.5Y4／1) 黄灰色粘土質シルト
3　(2.5Y5／1) 黄灰色砂質シルト
4　(10YR4／2) 灰黄褐色砂質シルト

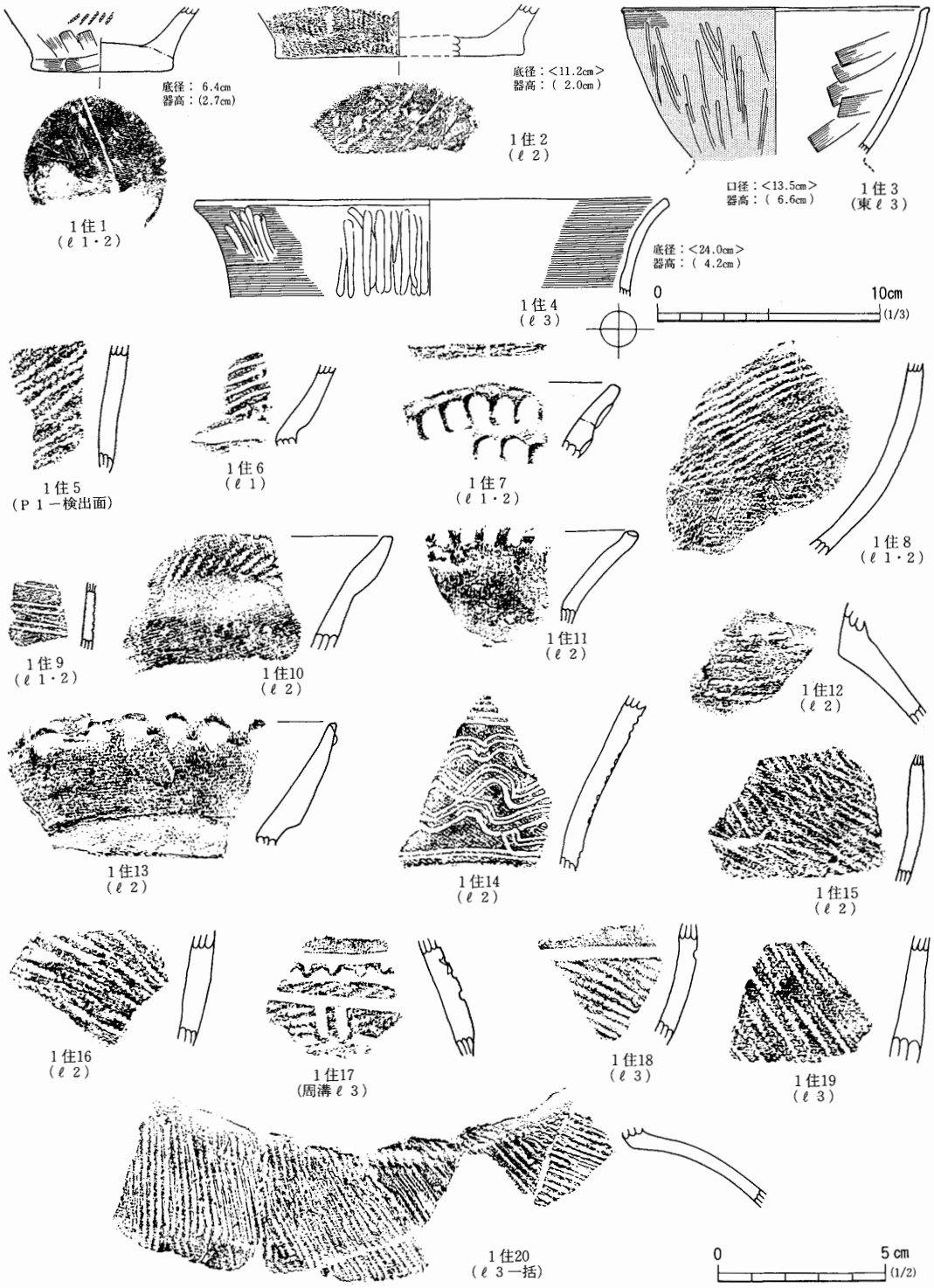
0　2m (1/60)

第6図　1号住居跡

遺　　物　(第7図)

本遺構から出土した遺物は，土師器片517点，弥生土器片33点である。すべて堆積土中から出土しており，遺構に確実に伴う遺物はない。土師器片の内訳は，ハケメ調整を有するものが137片，ミガキ調整を有するものが29片で，他は細片のため調整不明である。

土師器　(1住3・4・20)　図示可能なものは少なかった。1住3は坩，1住4は口縁部にヨコナデを加えた後に縦方向のミガキを施す甕，1住20は縦方向にハケメ調整を加えた壺である。1住20については同一個体片が他にも多く出土している。1住4と1住20は調査区南縁付近のℓ3において近接して出土している。



第７図　１号住居跡出土遺物

弥生土器　（１住２・５～19）　１住６・７・10・13は，広口壺形土器の口縁部片と思われる。口端が幅狭く平坦に整えられているものが目立つ。１住７の場合は縄文を口端に施している。意識的に素地土を盛り上げる爪形刺突が加えられている。１住13は，口端外角に押圧を加えて，その下方に素地土を盛り上げている。１住９・１住14は，線間の狭い２本同時施文の平行沈線による文様を持つ。１住17は横位平行沈線の線間に鋭い工具による交互刺突を加えている。

ま　と　め

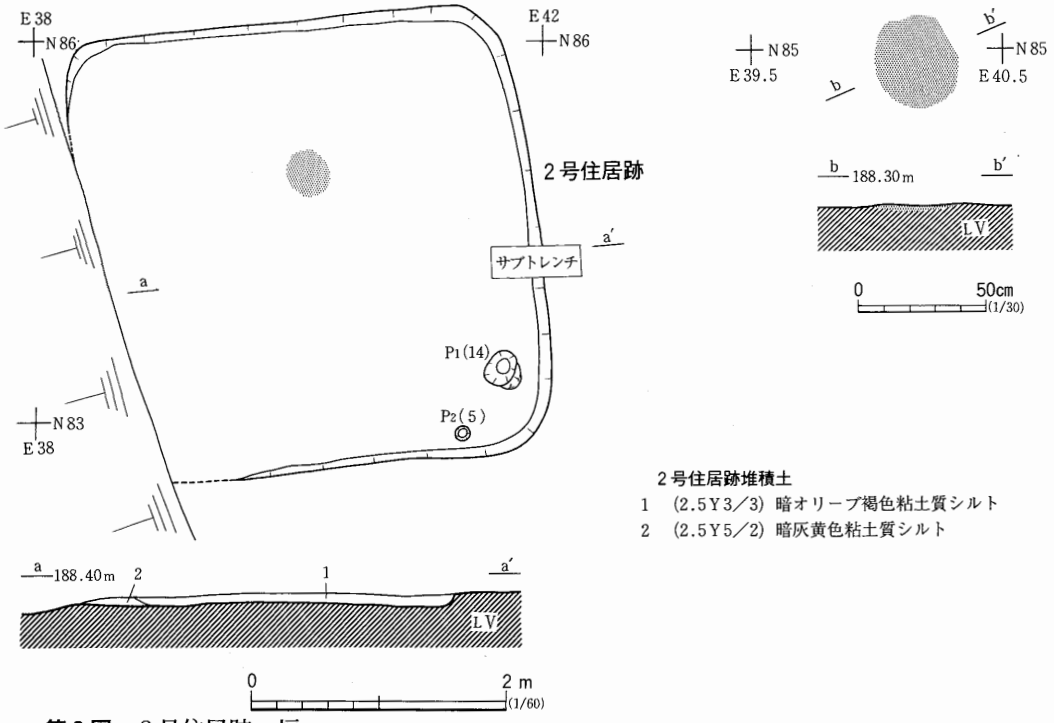
本遺構については，その全体を調査したわけではないが，他の住居跡と同様，４個の主柱穴と，柱穴付近に付随する貯蔵穴を有する隅丸正方形の竪穴住居跡と考えられる。ℓ３内に土師器が廃棄されており，柱が抜き取られないまま廃絶されている点を考え併せると，ほぼ古墳時代前期の住居跡と見て差し支えないであろう。　（本　間）

２号住居跡　ＳＩ02

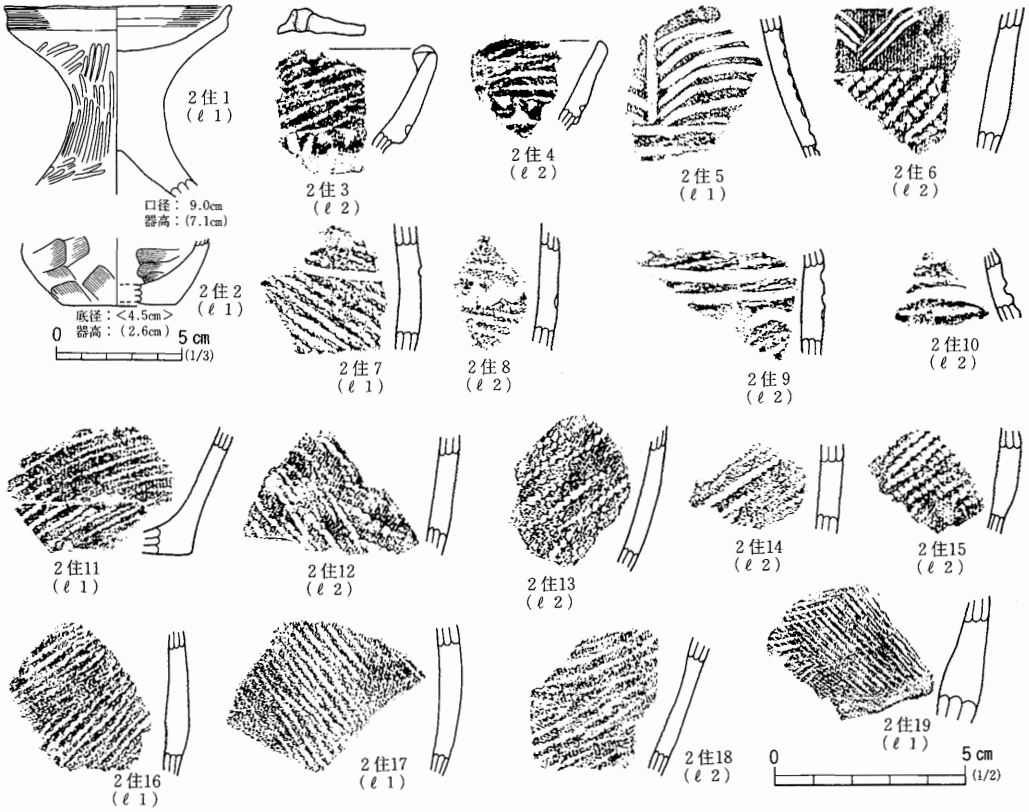
遺　　構（第８図，図版３）

調査区西部のＬ－14・15グリッドで発見された竪穴住居跡である。検出層位はＬＶ上面である。遺構内堆積土は２層からなり，いずれもＬⅡ～ＬⅣに相当する土の流入堆積土と判断される。

遺構の平面形は隅丸正方形で，南北3.52ｍ×東西推定3.55ｍの規模である。周壁は東壁で最も



第８図　２号住居跡・炉



第９図　２号住居跡出土遺物

良く遺存し，残存高は最大20cmを測る。北壁・南壁の残存高は６～15cmで，西側は削平のためため失われている。床面はほぼ平坦であるが，特に踏み締まりは認められない。ＬＶ中位をそのまま床としている部分が多いが，部分的に貼床が認められる。貼床下の掘形内埋土には黒褐色または黄灰色のシルトが存在する。床面中央のやや北寄りには地床炉が設けられている。南北38cm×東西33cm，厚さ３cmにわたって赤褐色に酸化している。ピットは，２基検出したが，P_1・P_2ともに小規模なもので，柱穴とは認定しがたい。

遺　　物（第９図，図版29）

本遺構から出土した遺物は，土師器片107点，弥生土器片40点である。すべて堆積土内からの出土であり，遺構に確実に伴う遺物はない。出土した土器片の内訳は，ハケメ調整を有するものが８点，ミガキ調整を有するものが18点，ヘラナデ調整を有するものが３点，文様または縄文を有するものが40点で，他は調整不明である。

弥生土器　（２住３～19）　２住３と２住４は同一個体である。波状口縁の広口壺であろう。口縁部が肥厚し，段の部分に交互刺突を加え，波頂部口端には刺突を加えて素地土を内面側に盛り上げている。２住５・７～10は，太めの沈線で文様を描くもので，２住６は，線間が狭く３本同

時施文の細い平行沈線で文様を構成している。

土師器　（２住１・２）　２住１は逆「Ｖ」字状に開脚する脚部を持つ器台である。口縁部がわずかにつまみ出されて外反している。２住２は内外面ヘラナデ調整の小型土器である。

ま　と　め

明瞭な柱穴を持たない小型の竪穴住居跡である。遺構の中央からやや周壁寄りに炉が偏在する点や，柱穴がない点，規模が小さい点などにおいて，調査区中央で確認された10号住居跡の構造と共通する。遺構に伴う遺物がないため正確な年代は不明であるが，古墳時代前期の他の住居跡とは相違点が多く，弥生時代後期の所産と考えておきたい。　（本　間）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（第10図，図版４）

Ｊ－20・21グリッドより検出された竪穴住居跡である。遺構検出面は黄褐色粘土質シルトのＬⅣ上面であり，この層は下層のＬＶａ・Ｖｂが砂質土層，ＬⅥは小砂利混じりの砂層と粒子が粗くなっていくので，水成堆積と考えられる。

本住居跡の周辺には，南１ｍに４号住居跡が，西南西12ｍに５号住居跡，東北東10ｍに13号住居跡，北東２ｍに３号溝跡があるが，切り合い関係は無かった。

平面プランは東西4.90ｍ×南北4.65ｍの隅丸方形であり，南北軸でＮ－７°－Ｅを指す。

周壁残存高は，床面から東で17㎝・西で８㎝・南で10㎝・北で15㎝の高さを測り，床面との角度は90°～115°で，ほぼ直立に近い。壁と床面の間には上幅20～30㎝・底幅10～20㎝の周溝が四周に回っている。

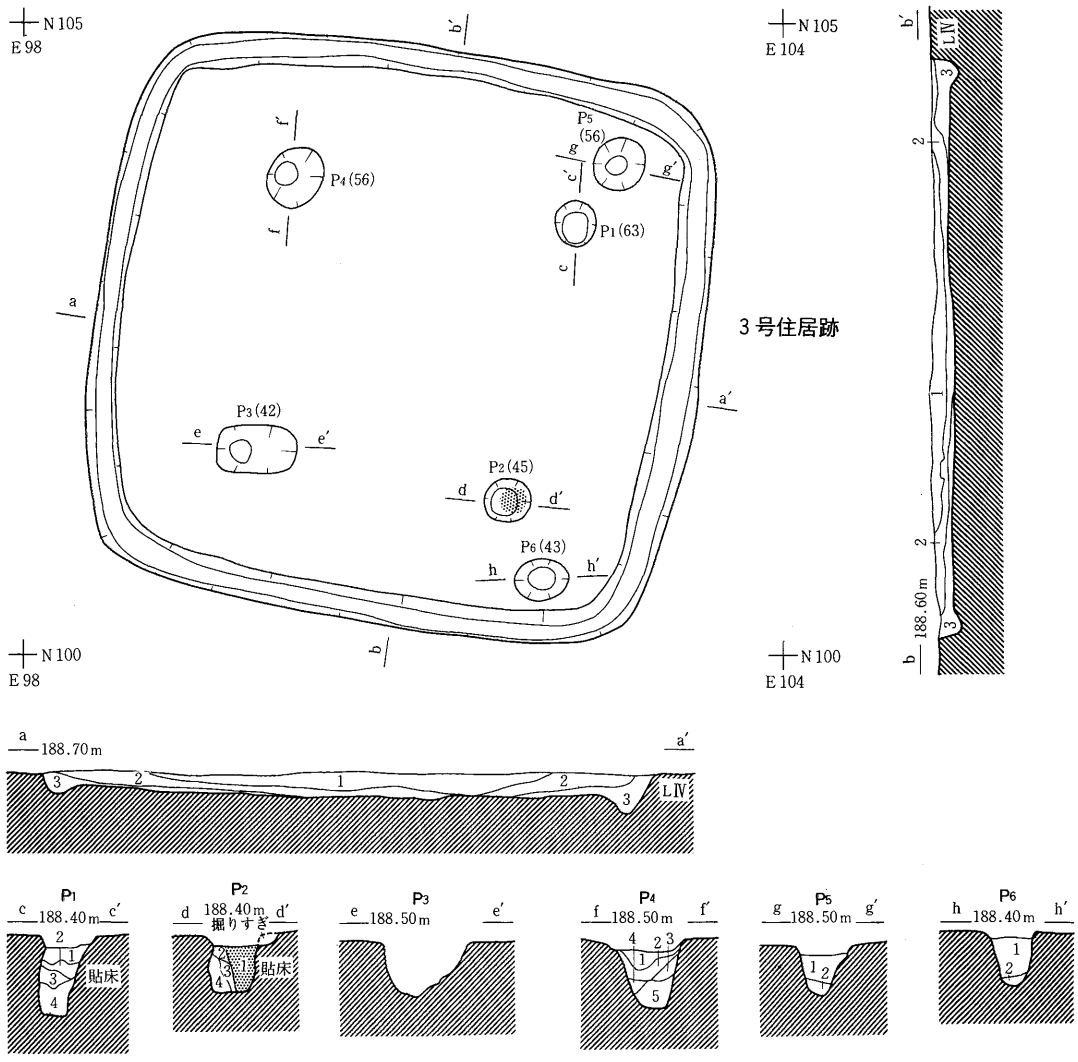
堆積土は黒色粘土質シルト・黄灰褐色シルト質粘土で，粘性がある硬質のレンズ状堆積を示しており，自然に埋没したものと考えられる。

床はＬⅣを掘り込んだもので，所々緩く波打つがほぼ平坦である。床面には柱穴と考えられる４個のピット（P_1～P_4）と，北東コーナー（P_5）・南東コーナー（P_6）のピットがあるが，炉跡は検出されなかった。周溝に囲まれた部分の床面積は16.5㎡である。

ピットのうち，P_1～P_4は住居跡コーナーの対角線上で，壁からピットの中心まで1.2ｍのところにあり，ピット・柱痕の中心は床面中央の東西2.3ｍ・南北2.2ｍの長方形の角に位置している。この配置とP_2に柱痕があることからして，この４個は柱穴と考えられる。柱穴に囲まれた部分の面積は5.06㎡で，床面積の約1／3にあたる。P_5・P_6は，柱穴P_1・P_2とコーナーの間にあるピットで，性格は不明である。

遺　　物（第11図，図版５・29）

本遺構から出土した遺物は，弥生土器片38点，土師器片479点，管玉１点である。土師器のうち，



3 号住居跡堆積土

1　黒色シルト
（やや粘性を有し，少量の土器片を含む）
2　褐灰色粘土質シルト
（微量の炭化物を含む）
3　灰黄褐色粘土質シルト
（黄褐色シルト質粘土を含む）

P1堆積土

1　灰褐色シルト
2　褐色シルト
3　暗褐色シルト
4　黒褐色シルト

P2堆積土

1　褐色シルト
2　褐色シルト
3　にぶい褐色シルト
4　褐色シルト

P4堆積土

1　暗褐色シルト
2　暗褐色シルト
3　褐色シルト
4　褐色シルト
5　暗褐色シルト

P5堆積土

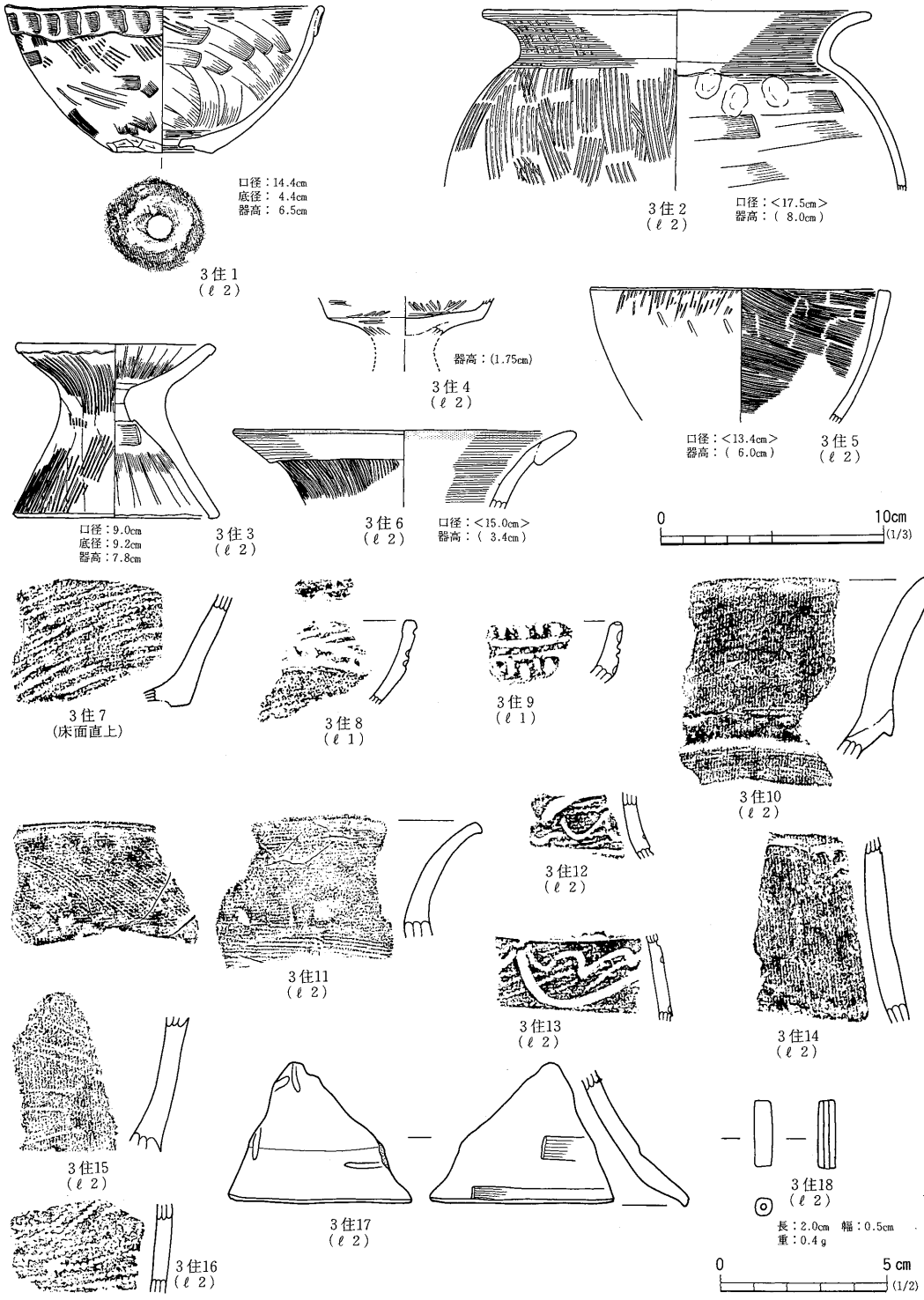
1　暗褐色シルト
2　褐色シルト

P6堆積土

1　暗褐色シルト
2　黒褐色シルト

0　2 m
(1/60)

第10図　３号住居跡



第11図　３号住居跡出土遺物

図示した遺物を除く破片の内訳は，ハケメ調整を加えたものが150点，ミガキ調整を加えたものが109点，ヨコナデを加えた口縁部片が３点，細片のため調整不明のものが208点である。遺構に確実に伴う遺物はない。床面直上層では，弥生土器片１点（３住７）のほか，図示していないがハケメ調整を加えた破片１点とミガキ調整を加えた破片２点が出土している。このほか，P_1・P_2・P_4・P_6の堆積土内から，土師器の小片が出土しているが，P_2以外の柱穴では柱が抜き取られているため，遺構に伴う土器とは言えず，P_2出土の土器は，細片のため調整が判別できない。他の土器は，すべて堆積土ℓ１・ℓ２から出土している。

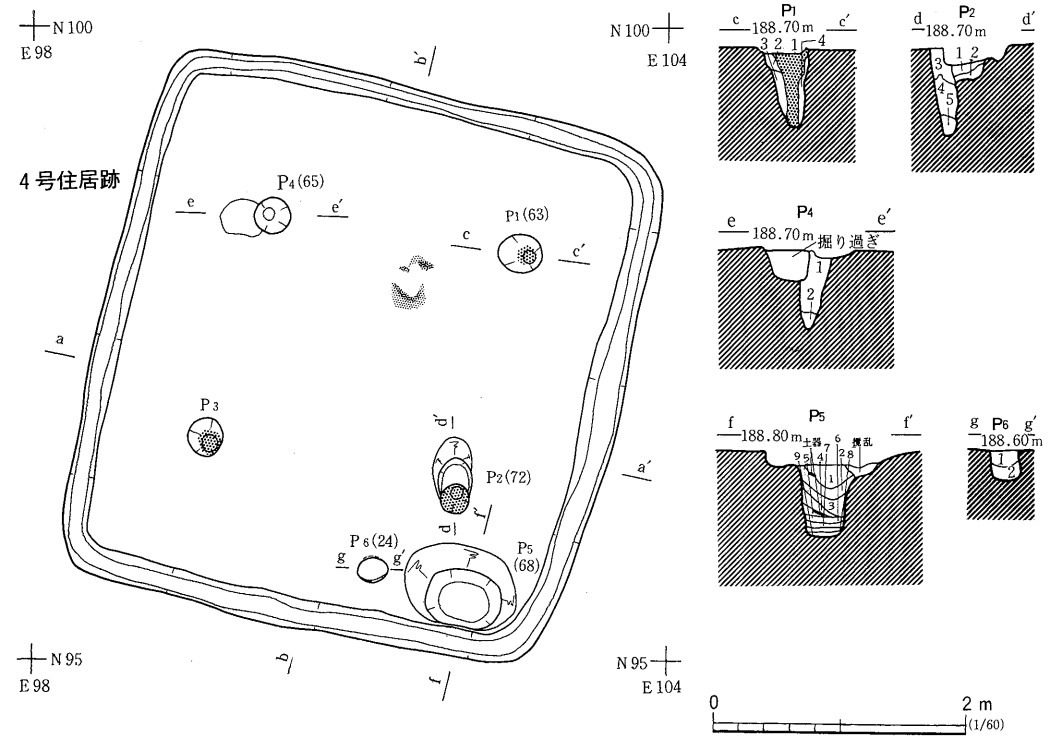
土師器　完形に近い３住１と３住３の２点は，第一次堆積土であるℓ３の上面において，周壁付近から流れ込んだような状態で出土している。３住１は単孔式甑である。これは複合口縁を有する鉢形のもので，外面は口縁に連続した短く強いナデ・体部はハケメの上にナデ・下端部にはケズリが加えられている。内部は丁寧なナデにより仕上げられている。３住３は器台で，「ハ」形に開く台と脚部を有しており，外面は粗削りの上にハケメ・台内面はナデ・脚部内面は絞り込み痕の上にナデが加えられている。３住４は高坏で，底部から「く」形に外反する小型の坏部を有するもので，口縁・脚部は欠損して不明である。３住17は裾の開く脚であるが高坏か器台かは不明である。３住５は坩形土器の口縁部である。内外面ともナデにより丁寧な調整が加えられているが，外面下部はやや荒れている。３住６・10は壺の口縁部である。６はやや丸みを持った複合口縁のもので，口縁部と内面にはヨコナデ・頸部外面にはハケメが施されている。10は内外面ともミガキによるもので，口縁部は外反し，外面下端は尖るように下に突き出る。３住１・11は甕で，口縁部外面はハケメの上にヨコナデ・内面もヨコナデ，体部外面はハケメ・内面はナデ調整によるものである。

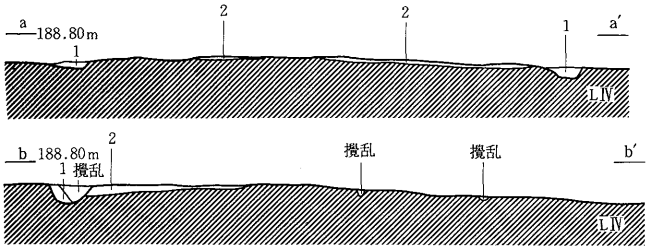
弥生土器　３住８の文様は，上端から５㎜～１㎝にかけて２本組みの平行沈線を引き，その間に交互刺突を加え口縁との間は斜沈線で埋めている。３住９は，口唇直下に縄文の上から２本組みの平行沈線を引き，その上下に縦長の交互刺突を加えた文様を持つ。３住12・13は縄文の上から沈線文を施したもの，３住16はＲＬ縄文のみのものである。３住14は高坏または器台の脚で，内外ともミガキがかけられ，上部に波状沈線の一部が見られる。

管玉　３住18は，北東コーナー付近のℓ２内から出土した。長さ2.0㎝，径約４㎜で，内径約1.5㎜の孔が穿たれている。

ま　と　め

本遺構は，柱穴と周壁の間に別のピットを有する特徴を持つ竪穴住居跡である。これは，４号住居跡・８号住居跡などにも共通する形態的特徴である。本遺構も，これらの他の住居跡と同様，古墳時代前期の所産と考えられる。（高　木）





P4埋土
1　褐色シルト
2　暗褐色シルト

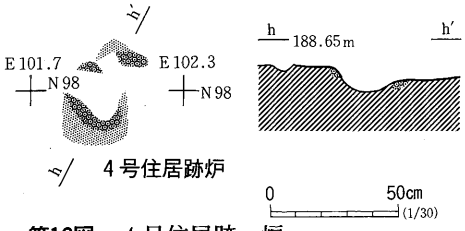
P5堆積土
1　暗赤褐色粘土質シルト
2　極暗赤褐色粘土質シルト
3　暗赤褐色シルト質粘土
4　暗褐色粘土質シルト
5　褐色粘土質シルト
6　暗褐色粘土質シルト
7　灰褐色砂質シルト
8　暗褐色粘土質シルト
9　灰褐色砂質シルト

P6堆積土
1　黒褐色シルト
2　暗褐色シルト

4 号住居跡堆積土
1　暗褐色シルト
（粘性を有す。しまりあり）
2　褐色シルト
（人為的貼床層。しまりあり）

P1埋土
1　暗褐色シルト
2　暗褐色シルト
3　褐色シルト
4　にぶい黄褐色シルト

P2埋土
1　暗褐色シルト
2　暗褐色シルト
3　にぶい褐色シルト
4　暗褐色シルト
5　黒褐色シルト



第12図　4 号住居跡・炉

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（第12図，図版６）

Ｋ－20・21グリッドより検出された竪穴住居跡である。遺構検出面は黄褐色粘土質シルトのＬⅣ上面であり，遺構上部はかなり削平を受けており，確認できたのは床面とそれに伴う遺構，および周溝のみであった。

この住居跡の北１ｍには３号住居跡が，西11ｍには５号住居跡が，北東12ｍには８号住居跡，南西12ｍには６号住居跡が位置するが，重複等は認められなかった。

平面プランは東西4.20ｍ・南北4.45ｍの隅丸方形であり，方位は南北軸でＮ－13°－Ｅを指す。堆積土は周溝に残るのみで，他ではまったく検出されなかった。周溝は，幅23～30㎝・深さ５～15㎝で四周に回っている。周溝内堆積土は暗褐色シルトで締まりのあるものであり，遺物の出土はなかった。

床は住居跡掘形に埋めた硬質の土が残っているが，上部は削平を受けている可能性もある。全体は浅く広い凹凸がある。床面からは，炉跡のほか，柱穴と考えられるピット（P_1～P_4），性格不明のピット（P_5・P_6）が検出されている。

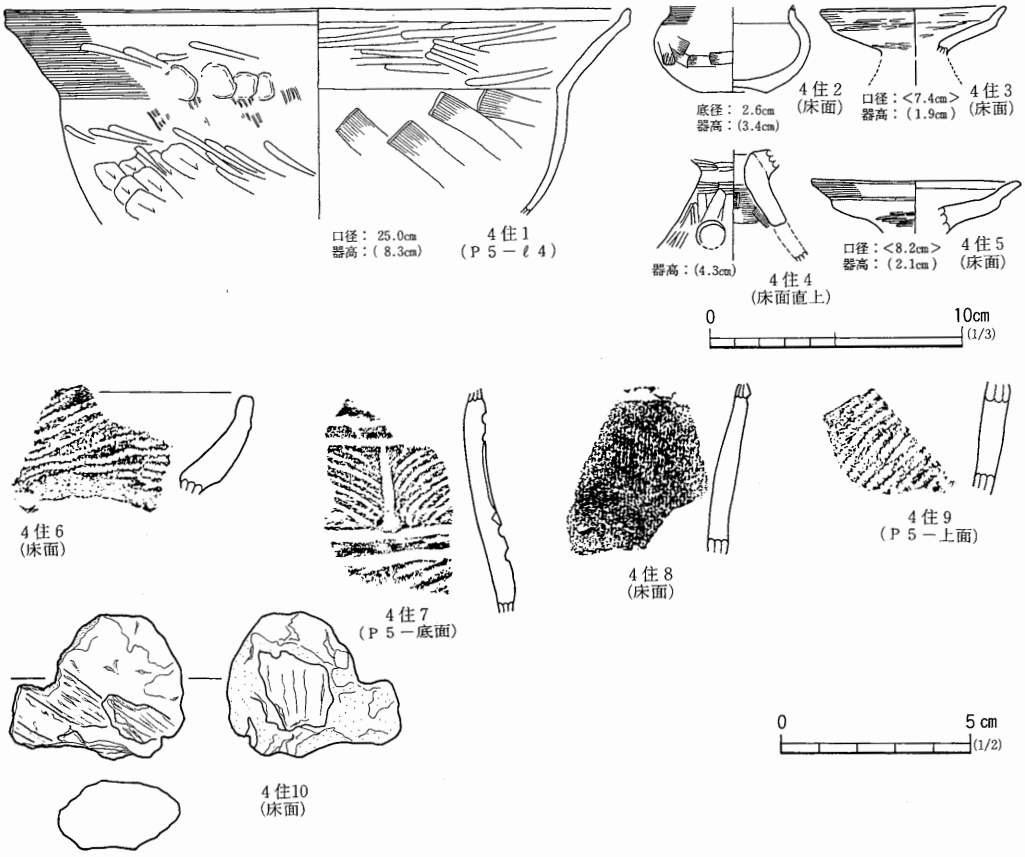
炉跡は床中央部のやや北東寄り，P_1とP_4の間のやや内側から検出された。東西30㎝・南北45㎝の不整形の焼土面であり，中央部は耕作により攪乱を受けているがその断面では深さが約３㎝まで焼けており，より強く焼けが見られる。

柱穴は径が25～35㎝・深さが60～70㎝の円形または楕円形のピットで，住居プランのほぼ対角線上にあり，壁面位置からピット中央まで70～80㎝に位置している。このピットの中央を結ぶ線は1.9ｍ×２ｍのほぼ正方形を呈し，床面積のほぼ1／4を占めている。柱痕はP_1～P_3の３個で確認されており，断面観察により，太さ15～20㎝の細い柱であったことが判明している。

P_5は南東コーナー床面から検出された楕円形のピットである。上部10㎝程度は崩れたらしく90×65㎝の浅い部分があり，その下に上面60×45㎝・底面40×30㎝の深い部分がある。深さは全体で75㎝を測り，底部付近の15㎝は人工的に埋められているが，その上は自然堆積である。このℓ４（自然堆積）中より土師器の鉢（４住１）が出土している。ピットの性格は不明である。P_6は，P_5の西側に近接して存在し，補助的に機能した柱穴と考えられる。

遺　　物（第13図，図版７・29）

本遺構から出土した遺物は，土師器191点，弥生土器６点，炉壁材１点である。土師器のうち，図示したものを除く破片の内訳は，ハケメ調整を加えたものが49点，ミガキ調整を加えたものが32点，ヨコナデ調整を加えた口縁部片が３点，細片のために調整不明のものが106点である。遺構内堆積土がすでに削平されているため，遺物の多くは床面出土のものであるが，P_1～P_6の柱



第13図　４号住居跡出土遺物

穴内からも43点の破片が出土している。

土師器　４住１はＰ$_5$のℓ４から出土した土師器鉢である。薄手の丁寧な作りである。口唇は摘み上げたように立ち上がり，直線的に開く口縁と丸みのある体部を有する。口縁の外面はナデの上に若干のミガキ，体部外面はハケメの上にケズリとナデが加えられている。内面は口縁にミガキ，体部にナデが施されている。４住２は小型甕，３・４は器台，５は高坏で，いずれも床面から出土している。４住２の底部は上げ底で表面はナデによるものである。４住３は口縁が「く」字形になる台部で，外面の口縁はヨコナデ，体部はミガキである。４住４の脚部は「ハ」形に開くもので，窓の数は不明である。内面はナデ，外面はナデの上にミガキが加えられている。４住５は中間に段のあるもので，破片が小さいため高坏か器台かは不明である。

弥生土器　４住６・８が床面，４住７・９がＰ$_5$から出土している。４住６は壺の口縁部破片で外面に縄文がある。４住７はＰ$_5$底面から出土した体部破片で，縄文の上から上下に２本の横沈線を描き，その間に１本の縦沈線と刺突を加え斜めの併行沈線で埋めたものである。４住８はミガキ面に沈線，４住９は外面に縄文のあるものである。

炉壁材　４住10は，床面から出土した性格不明の土製品であるが，スサ入り粘土を用いたものであることから，筒形の壁体を有する炉に用いられた炉壁材と判断している。本遺構で検出した炉に伴うものかどうかは不明である。

ま　と　め

本住居跡では，床面に地床炉が設けられ，炉壁材と考えられる土製品が出土している。これは，本遺構内において，鍛練鍛冶に関わる作業が行われた可能性を示唆するものかもしれない。北側に３号住居跡が隣接しているが，上屋の状態を考慮すれば２軒が同時存在した可能性は低く，両者の構築年代には差があるものと思われる。本遺構の年代は，床面出土土器から見て，古墳時代前期と考えられる。　（高木）

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構　（第14・15図，図版８・９）

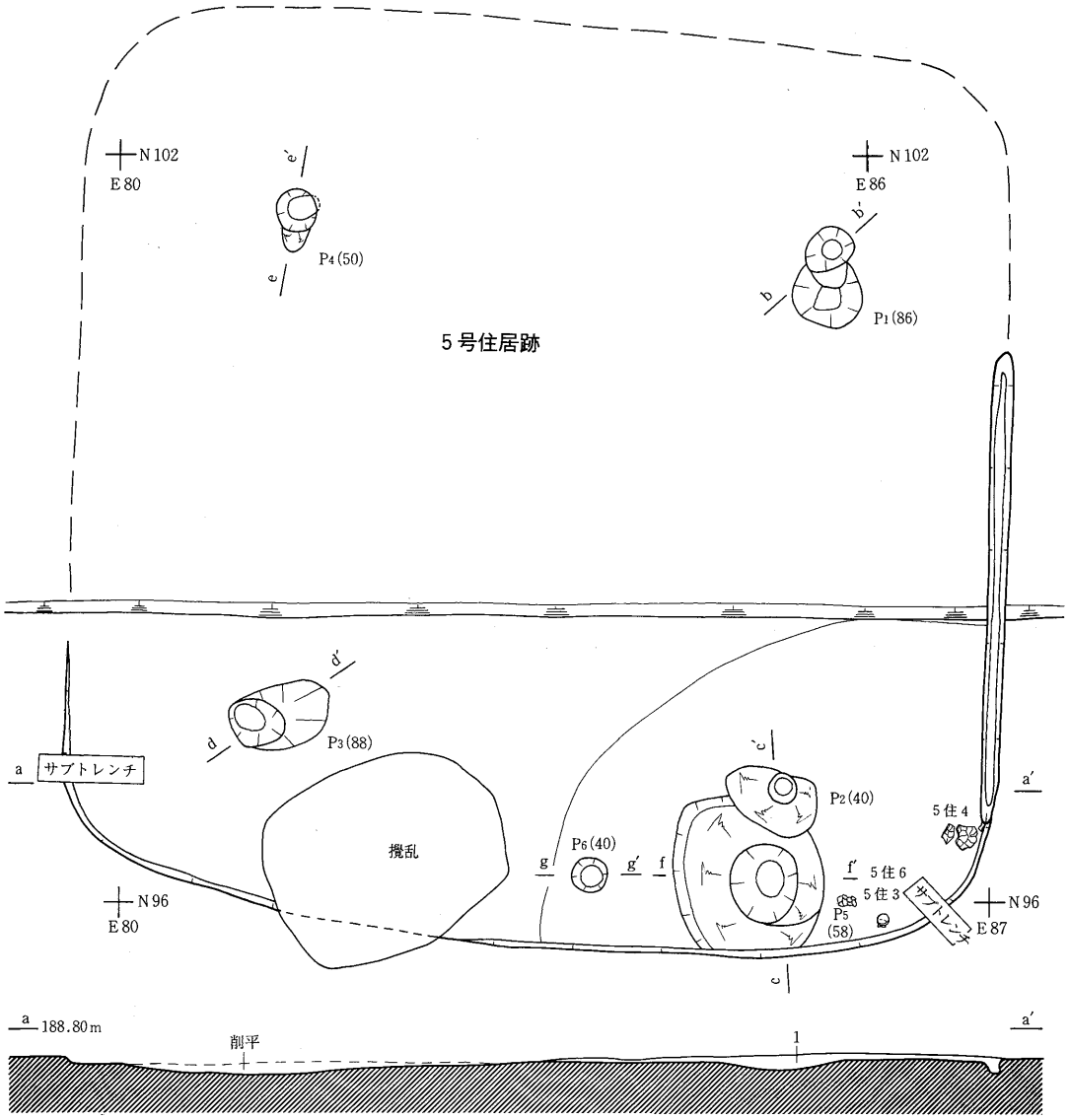
調査区のほぼ中央Ｊ・Ｋ－19グリッドで発見された竪穴住居跡である。検出層位はＬⅣである。この一帯は，開田の際にかなり削平されており，本遺構もその北半の床面を失っていた。遺構南半部の堆積土は，暗褐色・褐色・黒褐色のシルトの混土からなり，炭化物や小礫も多く含まれることから，人為的な埋め戻しがなされている可能性が高い。

遺構は，北半部がＬⅥaまで削平されているため，正確な規模・平面形が不明である。ただ，南半の状態と柱穴の配置状況から推測して，東西7.54ｍ×南北推定約7.4ｍの規模を持つ，ほぼ隅丸正方形の竪穴住居跡と思われる。東辺が示す住居跡の軸方位は，Ｎ－２°－Ｅである。周壁は，南辺と東西両辺の一部で確認されている。壁残存高は最大で９㎝である。東辺には壁溝が設けられている。幅14～18㎝で，床面からの深さは５～６㎝を測る。床面は，遺構南東隅部分において良く遺存し，堅緻な踏み締まりも認められる。床面硬化範囲を図中に一点鎖線で示した。

ピットは，合計６個確認された。このうち，P_1～P_4の４個が主柱穴と考えられる。柱穴は50～88㎝の深さを有するが，柱痕は確認できず，レンズ状に埋没した堆積土が認められるため，柱はすべて抜き取られたものと考えられる。小規模ながら，P_6も補助的な柱穴と考えられるものである。流入土と思われるＬⅣの混じった堆積土を有するので，他と同様，柱が抜き取られたものと判断される。これらと性格を異にすると思われるピットがP_5である。堆積土はℓ１～ℓ６に分層され，すべて人為的堆積土である。このうち，ℓ１～ℓ３はP_2上部の堆積土と共通するもので，P_2とP_5が同時に埋め戻されたことを示している。

遺　　物　（第16図，図版９・29）

本遺構から出土した遺物は，土師器片448点，弥生土器片18点である。遺構堆積土から出土したものが386点，床面直上から出土したものが45点（多くは接合している），ピット内から出土し



5号住居跡堆積土

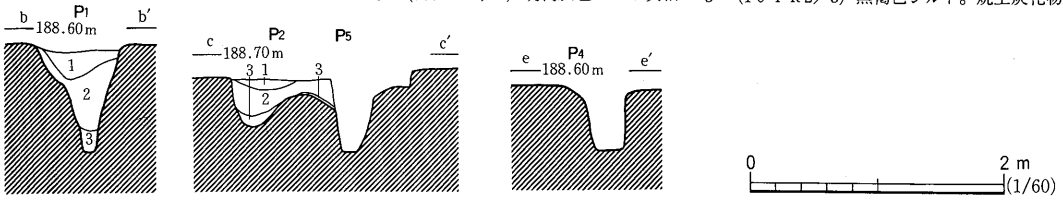
1　(10ＹＲ4／3) にぶい黄褐色粘土質シルト

P1堆積土

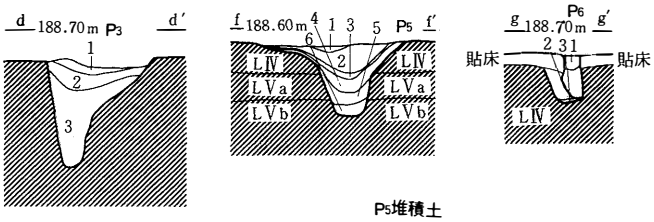
1　(10ＹＲ4／4) 褐色粘土質シルト
2　(10ＹＲ3／2) 黒褐色粘土質シルト
3　(7.5Ｙ Ｒ7／1) 明褐灰色シルト質粘土

P2堆積土

1　(10ＹＲ3／2) 黒褐色シルト
2　(10ＹＲ4／3) にぶい黄褐色シルト
3　(10ＹＲ2／3) 黒褐色シルト。焼土炭化物多量



第14図　５号住居跡（１）



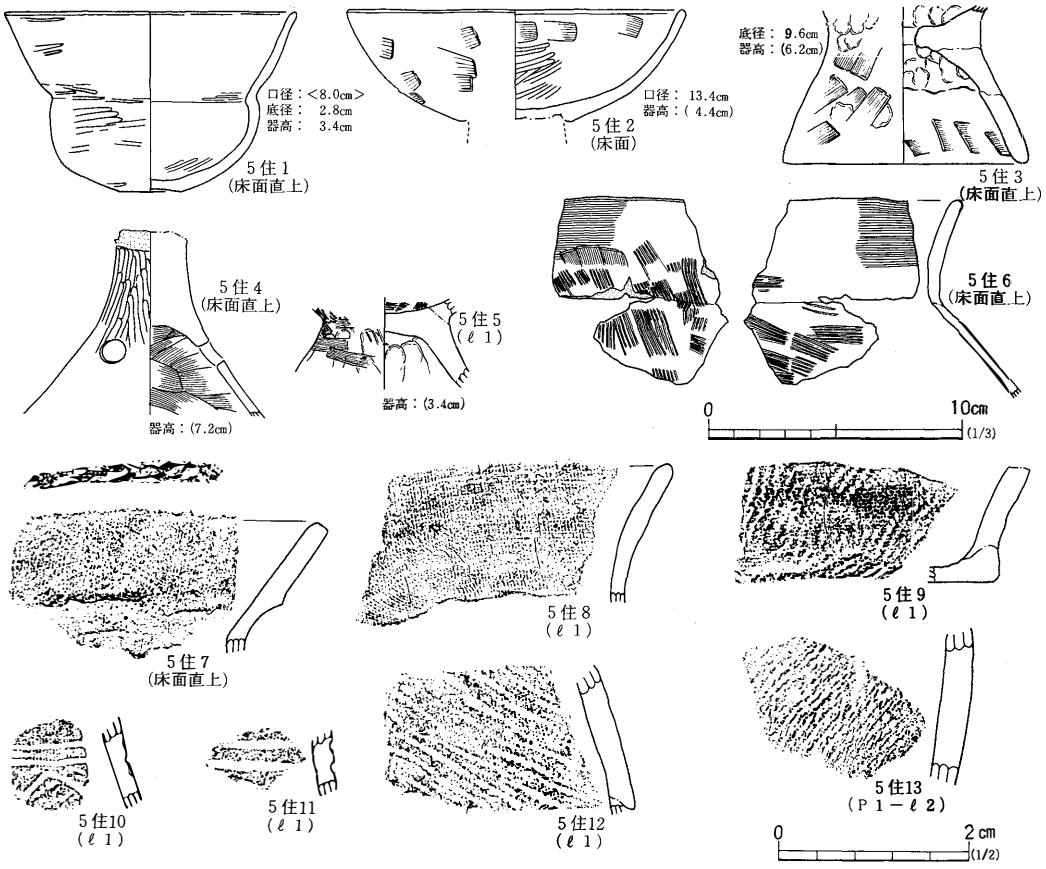
P6堆積土
1　(2.5Y3／3) 暗オリーブ褐色シルト
2　(2.5Y4／4) オリーブ褐色粘土質シルト
3　(10YR3／4) 暗褐色粘土質シルト
4　(2.5Y6／3) にぶい黄色粘土質シルト

P5堆積土
1　(10YR3／2) 黒褐色シルト
2　(10YR4／3) にぶい黄褐色シルト
3　(10YR2／3) 黒褐色シルト
(焼土炭化物多量)
4　(10YR6／4) にぶい黄褐色粘土
5　(10YR4／3) にぶい黄褐色シルト
6　(10YR6／2) 灰黄褐色粘土質シルト

P3堆積土
1　(10YR4／4) 褐色粘土質シルト
2　(10YR3／3) 暗褐色粘土質シルト
3　(10YR3／3) 暗オリーブ褐色シルト

0　2 m (1/60)

第15図　５号住居跡（２）



第16図　５号住居跡出土遺物

たものが35点である。このうち，床面直上から出土した５住１～４は，遺構内に遺棄されたものとは断定できないが，遺構南東隅でまとまって出土しており，遺構廃絶時の年代を示す遺物である可能性が高い。特に５住２と５住４は近接して出土している。５住５・５住６も床面直上から出土しているが，破片であるため遺構の年代を直接示すものとは考えがたい。

土師器　（５住１～６・８）　５住１は坩形土器である。器面が磨滅しているが，横方向のミガキ調整を加えた痕跡が認められる。５住２は体部が椀状の器形を呈する高坏である。５住３は頸部の幅が広い有孔の器台である。５住４は大きく開脚する高坏の脚部で，円形の窓が設けられている。５住５は台付甕の脚部と思われる。５住６・５住８は同一個体の可能性がある甕の口縁部で，細密な条線を持つハケメを浅く施している。

弥生土器　（５住７・９～13）　有文の土器は少ない。５住７は有段口縁で，平坦な口端に縄文を施している。５住10・５住11は横位平行沈線で文様帯を区画し，５住10は鋸歯状沈線文を持つ。

ま　と　め

本遺構は，遺存状態が良くないが，調査区内では最大の規模を有する竪穴住居跡である。柱が抜き取られていることから，本遺構よりも新しい遺構の存在を推定することができる。年代は，南東隅の床面直上から出土した土器から見て，古墳時代前期の所産と考えたい。　（本　間）

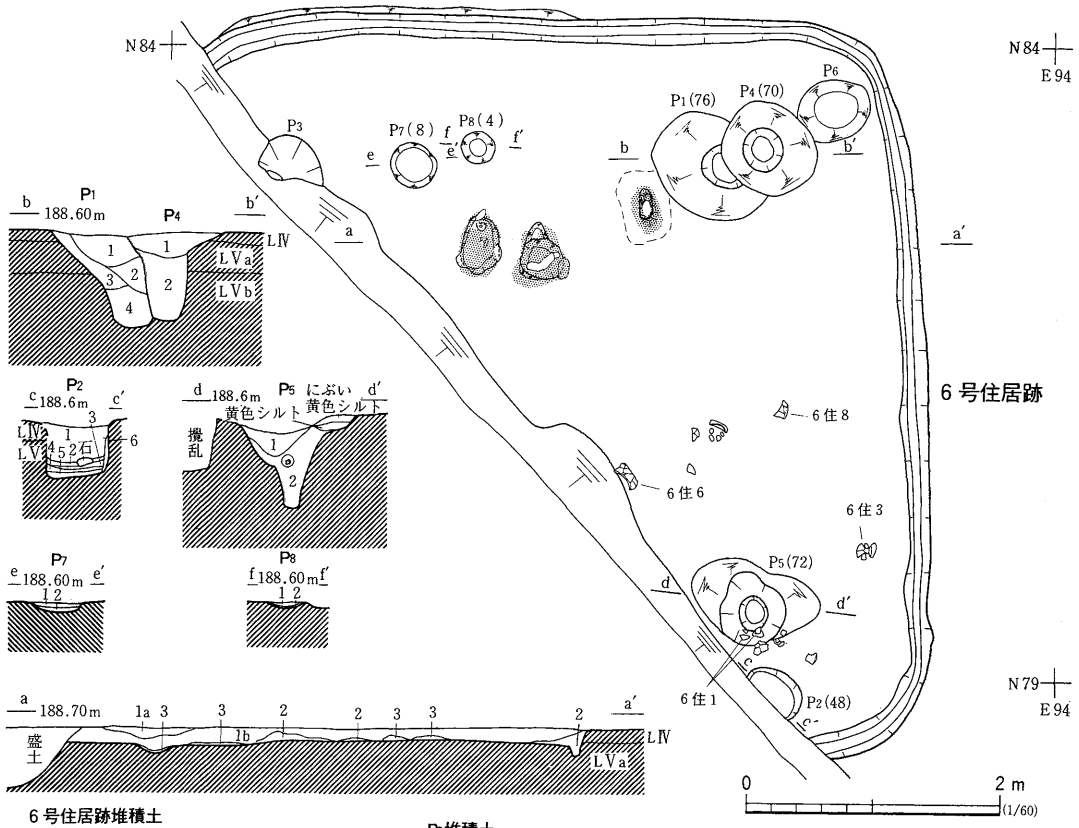
６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構　（第17図，図版10・12・13）

調査区中央の南側，Ｌ・Ｍ－19・20グリッドで発見された竪穴住居跡である。検出層位はＬⅣである。遺構の西南半は道路建設の際に破壊されており，全体の1／2が遺存するのみである。遺構内堆積土は，粘性のある褐色系のシルトを主体とし，おおむねＬⅢ～Ⅳの流入堆積土と考えられる。また，床面上には炭化物を多く含む黒色系シルトが薄く堆積しているが，住居の上屋材に由来する堆積物と判断される。

遺構は，南西部が失われているため，正確な規模・平面形を把握できないが，北東半の状態と柱穴の配置状況から推測して，東西推定約5.9ｍ×南北推定約5.9ｍの規模を持つ，ほぼ隅丸正方形の竪穴住居跡と思われる。北辺と東辺から推定される住居跡の軸方位は，Ｎ－２°－Ｗである。周壁は，北辺と東辺で比較的良く遺存し，床面から９～13㎝の残存高を測るが，南東隅部分では，削平のため３～５㎝を測るのみである。周壁に沿って，幅17～22㎝，床面からの深さ４～16㎝の壁溝が設けられている。壁溝には人為的な埋め戻しの痕跡は認められなかった。床面は，ほぼ平坦に作り出されているが，特に堅緻な踏み締まり部分は認められなかった。

ピットは，合計８個確認された。このうち，P_1・P_3・P_4・P_5の４個が主柱穴と考えられる。このうち，P_1とP_4は重複しており，P_4の方が新しいことが判明している。これは柱の付け替えがあったことを示しているが，住居全体が建て替えられたかどうかは断定できない。上記した柱穴は，70～97㎝の深さを有する大規模なものであるが，柱痕は確認できない。側溝によって大部分が破壊されているP_3については詳細は不明だが，他の柱穴の断面を見ると上部が大きく広がる漏斗状を呈しており，内部にレンズ状に埋没した堆積土が認められる。このことから，柱は



６号住居跡堆積土

1 a　(2.5Y3／3) 暗オリーブ褐色粘土質シルト
1 b　(2.5Y4／4) オリーブ褐色粘土質シルト
2　(2.5Y6／4) にぶい黄色粘土質シルト
3　(5Y3／2) オリーブ黒色シルト

P1堆積土

1　(2.5Y4／3) オリーブ褐色粘土質シルト
2　(2.5Y4／6) オリーブ褐色粘土質シルト
3　(2.5Y4／4) オリーブ褐色粘土質シルト
4　(2.5Y5／4) 黄褐色シルト

P4堆積土

1　(2.5Y5／4) 黄褐色粘土質シルト
2　(2.5Y4／4) オリーブ褐色粘土質シルト

P2堆積土

1　(2.5Y3／3) 暗オリーブ褐色粘土質シルト
2　(2.5Y4／1) 黄灰色粘土質シルト
3　(2.5Y6／4) にぶい黄色シルト
4　(2.5Y3／1) 黒褐色粘土質シルト
5　(2.5Y4／1) 黄灰色粘土質シルト
6　(2.5Y3／3) 暗オリーブ褐色砂質シルト

P5堆積土

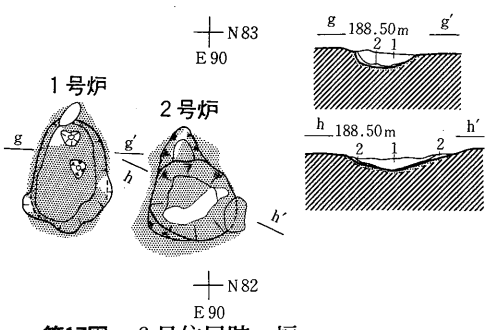
1　(10YR3／4) 暗褐色シルト
2　(2.5Y6／4) にぶい黄色粘土質シルト

P7堆積土

1　(2.5Y3／2) 黒褐色シルト
2　(N1.5／) 黒色シルト
（炭化物層）

P8堆積土

1　(2.5Y5／3)
黄褐色粘土質シルトの貼土
2　(2.5Y2／3)
黒色シルト（炭化物を含む）

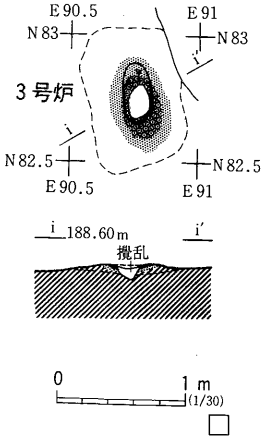


1号炉堆積土

1　(2.5Y4／4)
オリーブ褐色粘土質シルト
2　(2.5Y2／1)
黒色シルト（炭化物層）

2号炉堆積土

1　(2.5Y6／4)
にぶい黄色粘土質シルトの貼土
2　(2.5Y2／1)
黒色シルト（炭化物を含む）



第17図　６号住居跡・炉

すべて抜き取られたものと考えられる。以上の柱穴とは性格を異にすると思われるピットとしてＰ$_2$・Ｐ$_6$・Ｐ$_7$・Ｐ$_8$がある。Ｐ$_2$は，周壁崩壊土であるℓ６以外の堆積土がすべて人為的に埋め戻されたと考えられる状況を示している。特に，ℓ２～ℓ５までの層は，水平に堆積する薄層で，土質・土色の異なる層が交互に堆積する特徴を示している。Ｐ$_6$は，住居跡内堆積土ℓ１ｂに近似した土が堆積しており，床面からの深さが８～10㎝の浅い皿状のピットである。住居の掘形であった可能性もあるが，その性格は判断できなかった。Ｐ$_7$・Ｐ$_8$は，深さ５～８㎝の断面皿状の浅いピットである。いずれも底面上に炭化物が堆積しているが，Ｐ$_7$は開口したまま廃絶されているのに対し，Ｐ$_8$は炭化物層の上に貼土がなされ，床として用いられている。このことからＰ$_8$→Ｐ$_7$という新旧関係を知ることができる。

床面上からは３基の炉が発見された(１号炉～３号炉)。１号炉は，南北46㎝×東西30㎝の楕円形の窪みを燃焼部としたものであるが，赤褐色に酸化した範囲は南北52㎝×東西31㎝に及んでいる。長軸方位は，Ｎ－１°－Ｅを示す。燃焼部の周囲は30°～80°の角度で立ち上がる。特に西縁の立ち上がりが急峻である。燃焼面の状態はさほど堅緻ではなく，還元面等は認められない。断面では２㎝の厚さまで酸化が及んでいるが，特に強い焼け方とは言えない。燃焼面の直上には炭化物が薄く堆積し，その上部には住居跡内堆積土ℓ１bが堆積する。

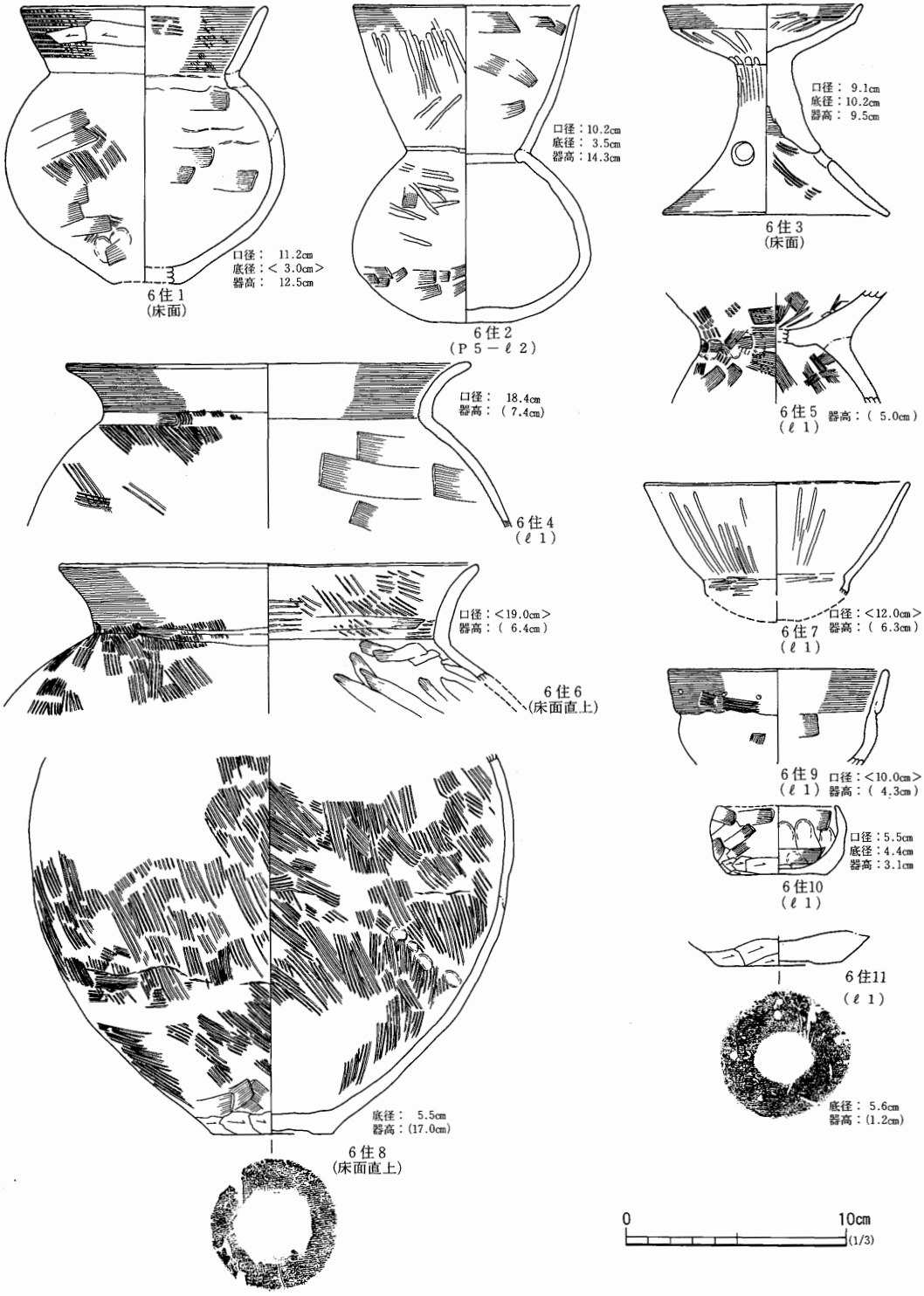
２号炉は，南北46㎝×東西34㎝の不整形の窪みを燃焼部としたものであるが，赤褐色に酸化した範囲は，南北52㎝×東西44㎝に及んでいる。長軸方位は，Ｎ－３°－Ｗを示す。燃焼部の周囲は，10°～20°の角度で緩く立ち上がる。燃焼面の状態は，１号炉と同様にさほど堅緻ではない。断面では２㎝の厚さまで酸化が及んでいるが，弱い焼け方である。燃焼面の直上には，焼土粒を混入した炭化物層が薄く堆積しているが，その上部には人為的に土が敷設され，床として用いられている。２号炉→１号炉という新旧関係を知ることができる。

３号炉は，床面をそのまま燃焼面とした地床炉である。南北38㎝×東西23㎝の範囲が赤褐色に酸化しており，その周囲の南北57㎝×東西37㎝の範囲が黄白色に熱変化を遂げている。燃焼面の上面は極めて堅緻になっている。攪乱のため確実ではないが，断面にして約７㎝の厚さまで熱変化が及んでいる。

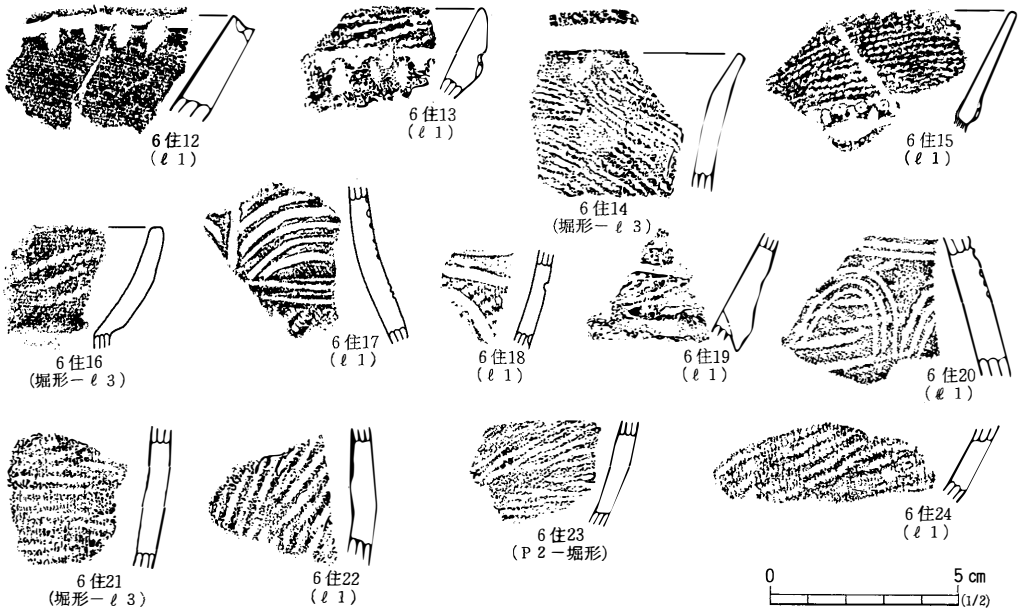
遺　　物　(第18～20図，図版11・13・29・30)

本遺構から出土した遺物は，土師器片345点，弥生土器片28点，砥石１点である。土師器の内訳は，ハケメ調整を持つものが139点，ミガキ調整を持つものが22点，口縁部にヨコナデを加えているものが18点で，他は細片のため調整不明とした。出土遺物のうち，遺構に伴うと見られるのは，床面から出土した６住１・６住３，Ｐ$_2$から出土した６住25の砥石である。

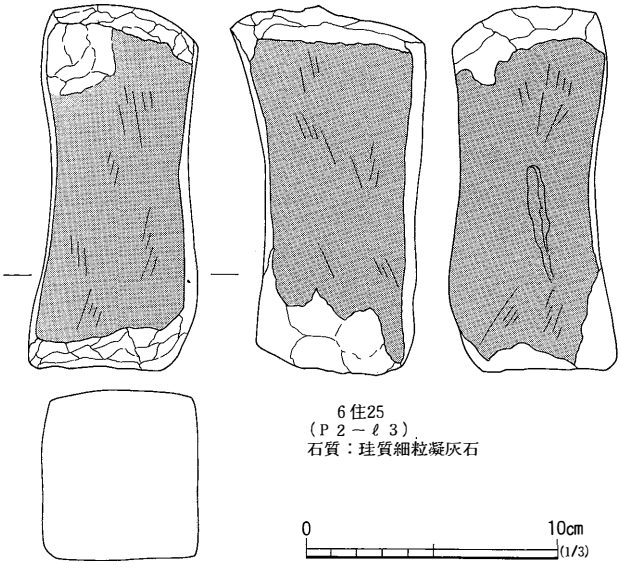
土師器　(６住１～11)　６住１は小型甕である。外面にハケメ調整を施したのちに丁寧なナデが加えられている。６住２は坩で，Ｐ$_5$堆積土内から完形の状態で出土したものである。柱が抜



第18図　６号住居跡出土遺物（１）



第19図　６号住居跡出土遺物（２）



第20図　６号住居跡出土遺物（３）

き取られた後に入りこんだものと思われ，原位置を保った出土状態ではないため多少問題はあるが，住居廃絶時の年代をおおむね示す遺物である可能性があると言えよう。６住３は，遺構東壁付近の床面で横倒しになった状態で出土した器台である。口縁部がつまみ出され，その上端がわずかに外反する。脚部には３個の円形の窓が設けられている。６住４・６住６・６住８・６住11は甕と考えられる。底部にドーナツ状の粘土帯を貼り付けて上げ底を形成している。６住５は台付甕の底部と思われる。６住７は坩形土器で，内外面ともに丁寧なミガキ調整が施されている。６住９は小型の鉢で，有段となる口縁部の外面に，浅い刺突が加えられている。６住10は手捏ねの小型土器で，内面にはユビオサエの痕跡を残している。

弥生土器　（６住12～24）　６住12は，口端に横走する１条の沈線を持ち，沈線から口端外角に加

えている。6住13・15は，口縁部の縄文帯下端を画する横位沈線上とその下方に交互刺突を加えたものである。6住20は，縄文を地文とし，その上に3本同時施文の平行沈線を連弧状に施している。

砥石　（6住25）　貯蔵穴と考えられるP_2内の人為的堆積土から出土したものである。砥石としては極めて大型のものである。側面のほぼ全面が使用されている。磨滅の度合から見て，使用頻度が高かったものと思われる。本遺構内における鉄製品加工の事実を裏づける遺物と言える。

ま　と　め

本遺構は，床面に3基の炉を有する住居跡である。2号炉→1号炉という変遷が明らかとなっており，炭化物を有するP_8・P_7は，これらの炉にそれぞれ付随して機能したものと考えられる。3号炉が床面上で直接火を使用したものであるのに対し，1号炉と2号炉は床面を掘り窪めて燃焼部を作り出しており，機能の違いがあるものと考えられる。P_2から大型の砥石が出土している点から見て，鉄製品の鍛造ないしは修繕が行われた可能性が高い遺構である。この点を考慮し，床面の土を採取して水洗選別と磁力反応による鍛造剝片の有無の検討を行ったが，期待された剝片は検出できなかった。なお，柱穴であるP_1とP_4は重複しており，外側のP_4の方が新しいことから，住居は一度拡張された可能性が高い。2号炉→1号炉，P_8→P_7という屋内施設の移動は，この拡張に伴うものとも考えられる。本遺構の年代は，床面出土土器等から古墳時代前期と判断される。

（本　間）

7号住居跡　S I 07

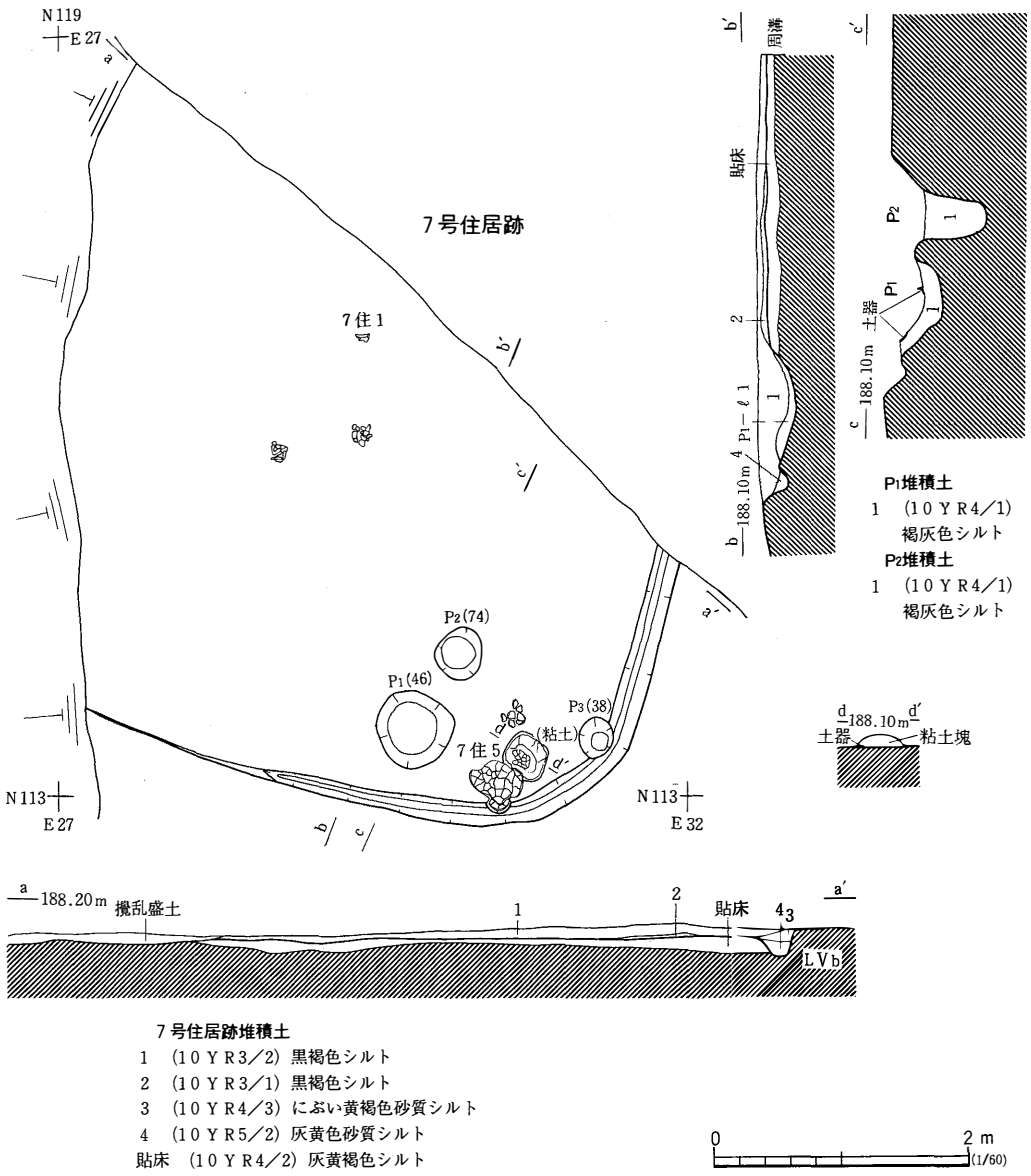
遺　　構　（第21図，図版14・15）

調査区西部のI－13・14グリッドにおいて発見された竪穴住居跡である。検出面はLⅥである。この一帯は，かつての圃場整備の影響により，基本土層のLⅥ・LⅦまで削平が及んでおり，本遺構も，その床面と周壁の一部がかろうじて残存していたに過ぎない。

遺構内堆積土は4層に細別される。遺構の残存部分全体を覆うℓ1は，LⅣ・LⅤが流入堆積したものと考えられる暗灰褐色シルト層である。ℓ2は，床面を直接覆う有機質黒褐色シルトの薄層で，遺構機能時に堆積したものか，あるいは上屋の崩落に由来するものと思われる。ℓ3・ℓ4は，周壁の崩落土と考えられる。

既に破壊された部分が大きいため，遺構の正確な規模は把握できない。しかし，遺存している南東コーナー部の状態から見て隅丸方形プランの住居跡であることは疑いない。また，床面から検出された柱穴はP_2の1個のみであるが，P_2と対になる柱穴が既破壊部分に存在していたと考えれば，少なくとも軸長が6.5mを超える規模の住居跡であったと言える。東辺の状態から推定される住居跡の軸方位は，N－15°－Eである。

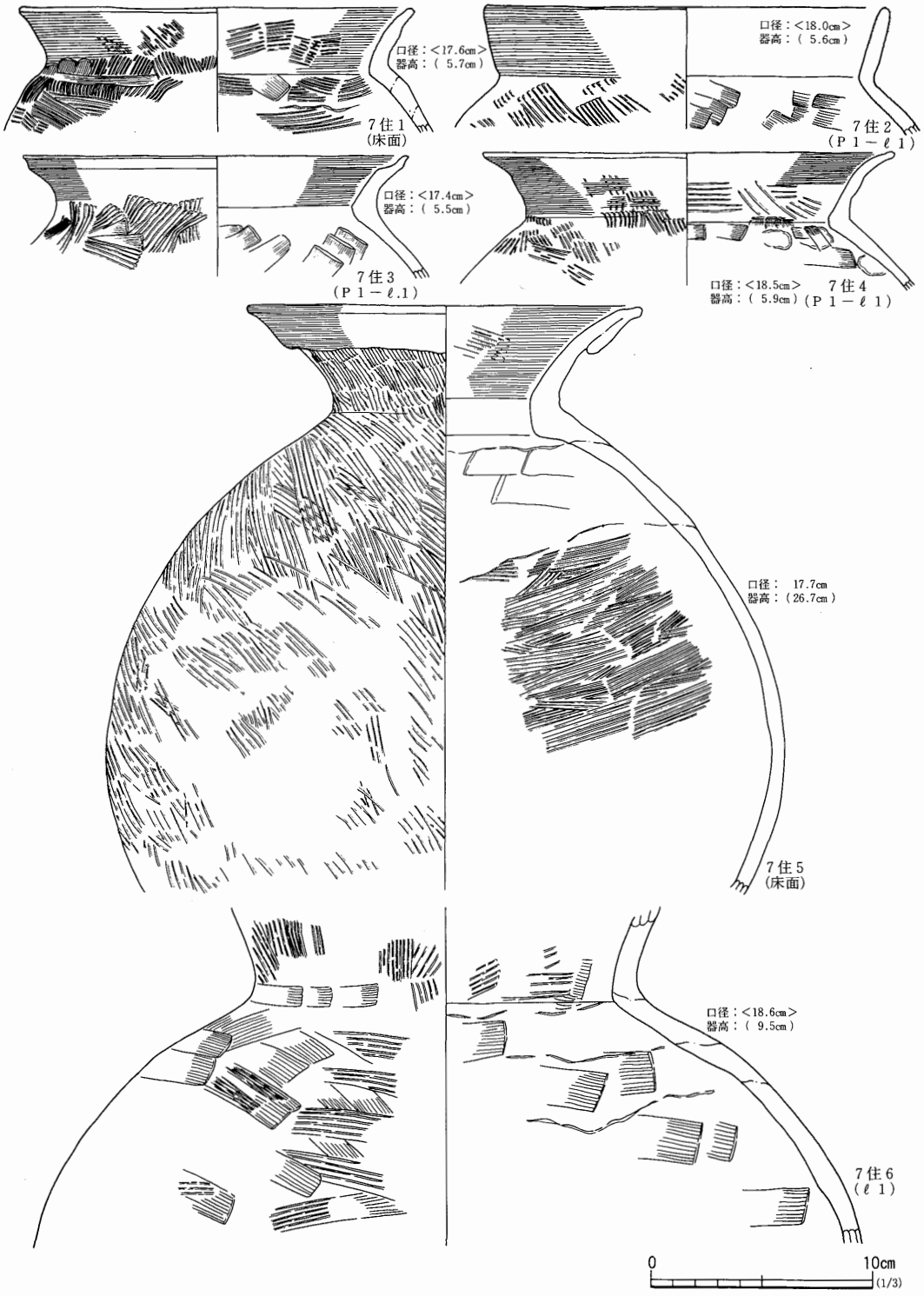
比較的良く遺存している東辺から南東コーナーにかけての周壁の残存高は8～12cmを測る。こ



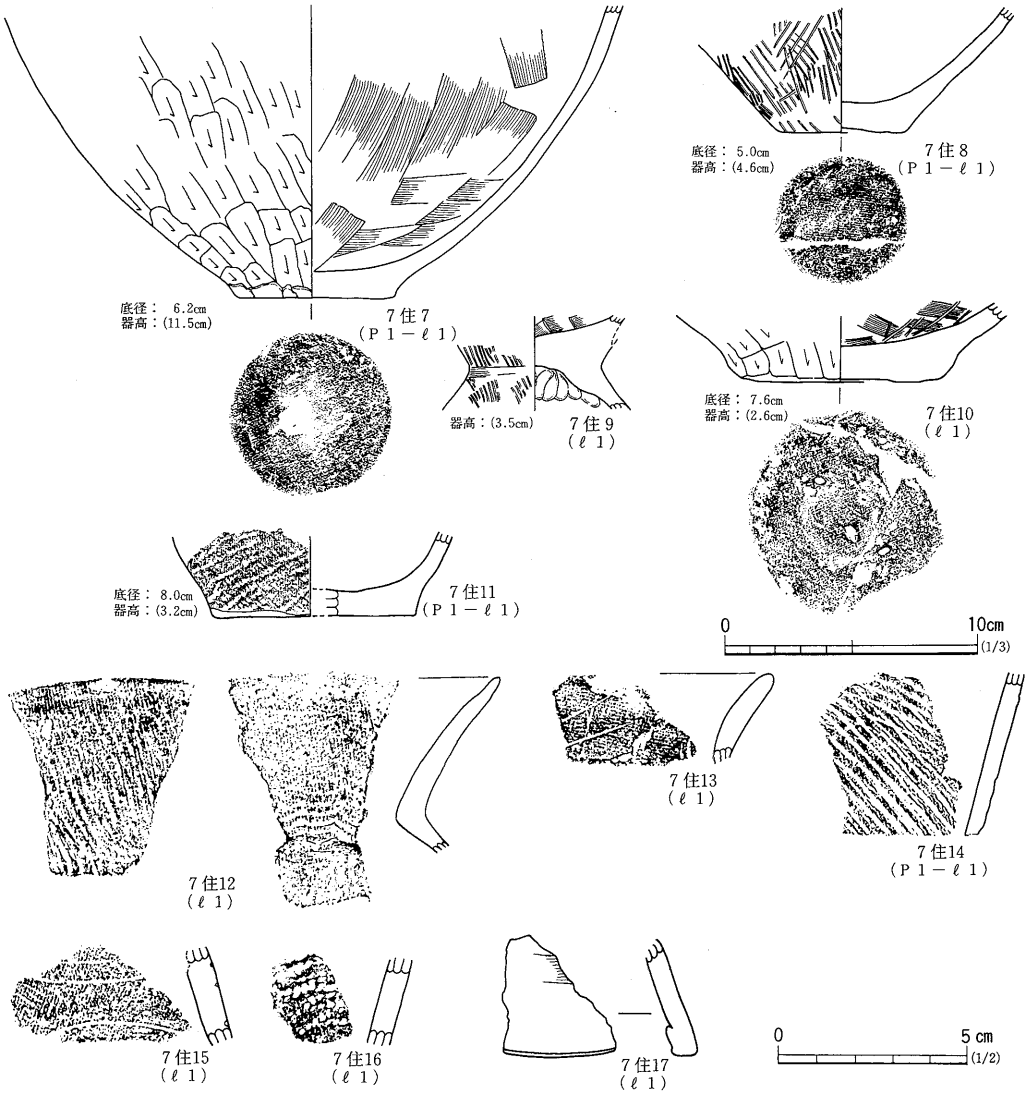
第21図　７号住居跡

の部分には幅18～23cmの壁溝が設けられている。床面から壁溝底面までの深さは11～13cmである。床面は，掘形を埋めて平坦に整地しているが，特に顕著な踏み締まり部分は認められない。

床面上からピットが２個検出されている。P_1は，長径62cm×短径55cmのほぼ円形の平面形で，断面形が擂鉢状を呈するピットである。床面からP_1底面までの深さは最大46cmを測る。開口した状態のまま廃絶されていることが堆積土断面から明らかである。P_2は，床面で長径42cm×短径36cmの楕円形を呈するピットで，上部が崩落しているため漏斗状の断面形をなす。床面からピ



第22図　７号住居跡出土遺物（１）



第23図　７号住居跡出土遺物（２）

ット底面までの深さは74cmで，規模から考えて柱穴と判断される。柱根痕跡は認められない。

南東コーナーの壁溝に近接して，長径42cm×短径36cm×厚さ９cmの粘土塊が床面上に安置されていた。極めて粘性に富む，精選された粘土である。土器製作等の目的のため住居内に備えられたものかと思われる。

遺　　物（第22・23図，図版42）

本遺構から出土した遺物は，土師器片667点，弥生土器片８点である。土師器のうち，図示していない破片の内訳は，ハケメ調整を加えたものが564点，ミガキ調整を加えたものが９点，ヨコナデを施した口縁部片が７点，細片のため調整が不明なものが10点である。遺物の大半は，堆

積土ℓ１もしくはＰ₁のℓ１から出土している。遺構に遺棄された遺物と考えられるものは７住５の１点のみである。７住１も床面出土土器であるが，遺構中央付近からの出土であるため，遺棄されたものとは断定できない。

土師器　（７住１～10・12・14・17）　７住１～４・12は，甕の口縁部である。口縁部形態を観察すると，やや開き気味に外反するもの（７住１・４），直立気味に外傾するもの（７住２），口縁部上端をつまみ出し気味にして稜を形成するもの（７住３・12）の各種が存在する。７住３の器形は在地のものとは考えがたい。このほか，甕の体部下半と思われるものとして７住８がある。７住９は台付甕の底部と思われる。７住７は壺と甕のいずれなのか判断しがたい。

７住５・６は壺で，７住10も壺の底部と思われる。７住５は，遺構南東コーナーの床面上で潰れた状態で出土したものである。体部は前述の粘土塊の表面を直接覆っていた。この土器が粘土塊の脇に安置（倒置？）されていた可能性も考慮しうる出土状態であった。口端が丸みを帯び，丁寧なヨコナデが加えられた複合口縁を持ち，頸部以下の全面にハケメが施された大型の壺である。７住６は頸部の径がやや広い器形である。７住10の底部はドーナツ状の上げ底を呈し，外面には２ヵ所に籾痕が認められる。

弥生土器　（７住11・13・15・16）　７住11は，体部下端まで密に縄文を横位施文している。施文原体は直前段多条ＬＲである。７住13・15は，シャープな工具で間隔の広い平行沈線を施文したものである。

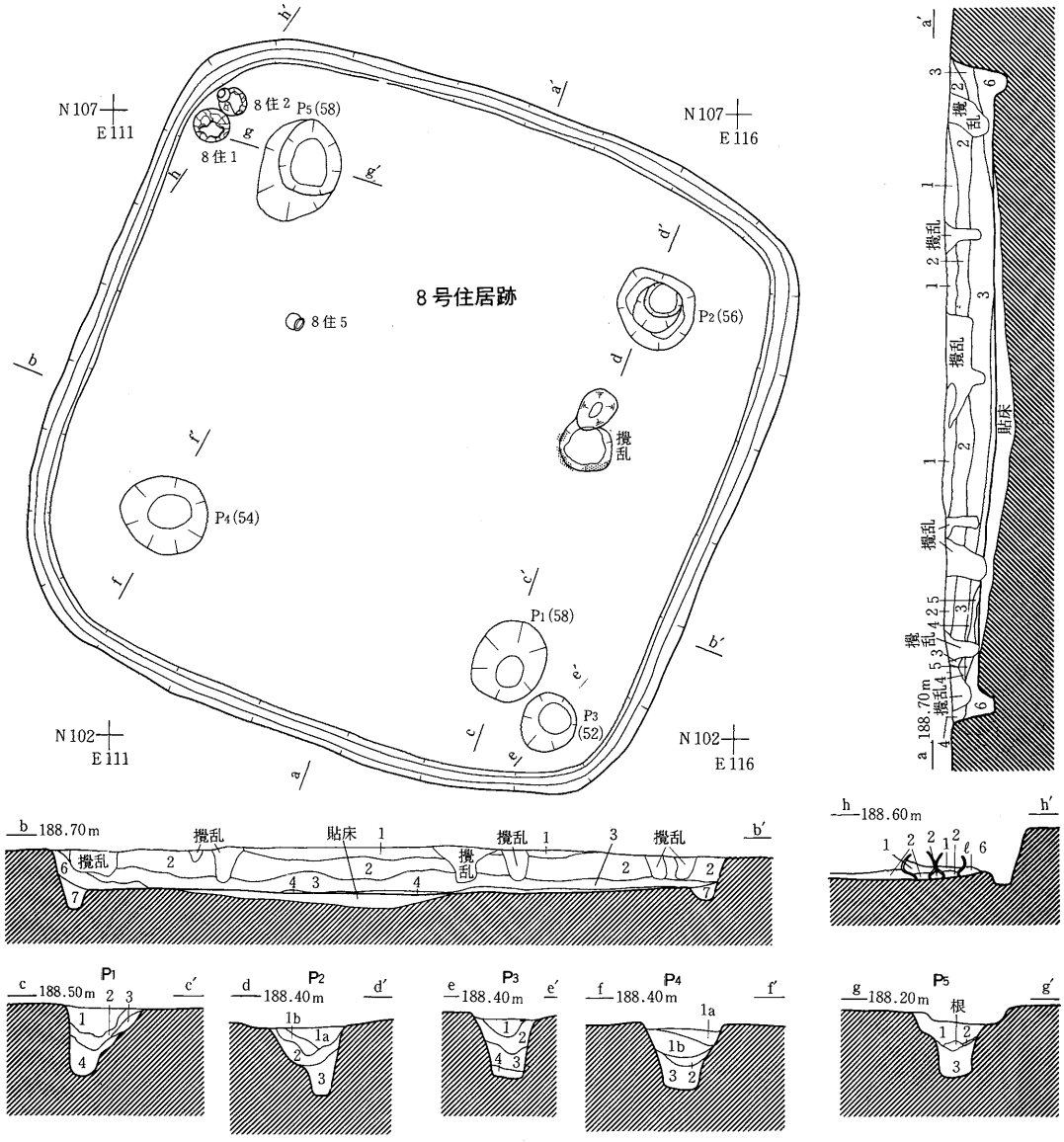
ま　と　め

遺構の遺存部分から推定して，軸長6.5ｍを超える隅丸方形の竪穴住居跡であったと思われ，床面出土土器から見て，古墳時代前期の年代が与えられる。　（本　間）

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構　（第24図，図版16・18）

調査区のほぼ中央，Ｊ－22グリッドＬⅣにおいて検出された竪穴住居跡である。調査区内においては最も遺存状態の良好な住居跡であった。遺構内堆積土は７層に細別され，レンズ状に漸次堆積していった状況が明らかである。ℓ１とℓ２は，おおむねＬⅡの流入土と考えられる。ℓ３は，酸化した灰黄色粘土質シルトを主体として黄褐色粘土質シルトのブロックを含み，人為的堆積土の疑いを有するものである。ℓ４は暗褐色の軟質のシルトで，薄く堆積しており，遺構中央では床面を覆っている。ℓ５は遺構の南側に部分的に存在する薄層で，にぶい黄色粘土質シルトにオリーブ褐色シルトのブロックを混入している。ℓ３と同様，人為的堆積土の可能性を有する。ℓ６・ℓ７は，住居跡の周壁際に断面三角形状に堆積するものである。周壁付近の崩落等に伴う自然堆積土と考えられよう。



8号住居跡堆積土

1　(10YR1.7/1) 黒色シルト
2　(10YR3/2) 黒褐色シルト
3　(2.5Y5/4) 黄褐色シルト
4　(10YR3/3) 暗褐色シルト
5　(2.5Y6/3) にぶい黄色粘土質シルト
6　(10YR2/2) 黒褐色シルト
7　(10YR3/4) 暗褐色シルト
貼床　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

P5堆積土

1　(2.5Y5/3) 黒褐色粘土質シルト
2　(2.5Y3/2) 黒褐色粘土質シルト
3　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

P1堆積土

1　(2.5Y5/3) 黒褐色粘土質シルト
2　(2.5Y5/4) 黄褐色粘土質シルト
3　(2.5Y3/2) 黒褐色粘土質シルト
4　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

P2堆積土

1a　(2.5Y5/4) 黄褐色粘土質シルト
1b　(2.5Y5/3) 黒褐色粘土質シルト
2　(2.5Y3/2) 黒褐色粘土質シルト
3　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

h－h′断面

1　(10YR3/1) 黒褐色粘土質シルト
2　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

P3堆積土

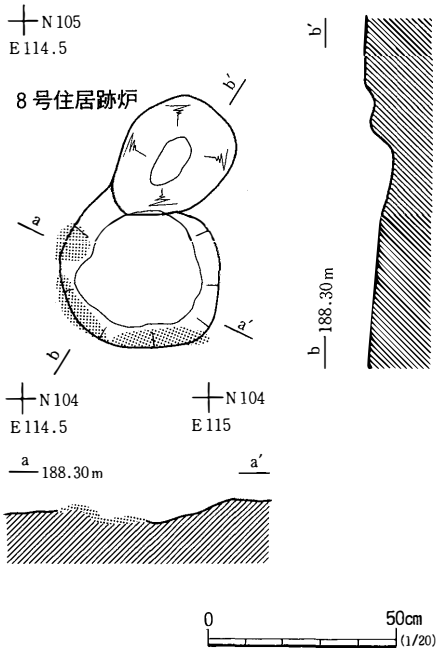
1　(2.5Y5/3) 黒褐色粘土質シルト
2　(2.5Y3/2) 黒褐色粘土質シルト
3　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト
4　(10YR2/1) 黒色粘土質シルト

P4堆積土

1a　(2.5Y5/4) 黄褐色粘土質シルト
1b　(2.5Y5/3) 黒褐色粘土質シルト
2　(2.5Y3/2) 黒褐色粘土質シルト
3　(10YR4/4) 褐色粘土質シルト

0　2m (1/60)

第24図　8号住居跡



第25図　８号住居跡炉

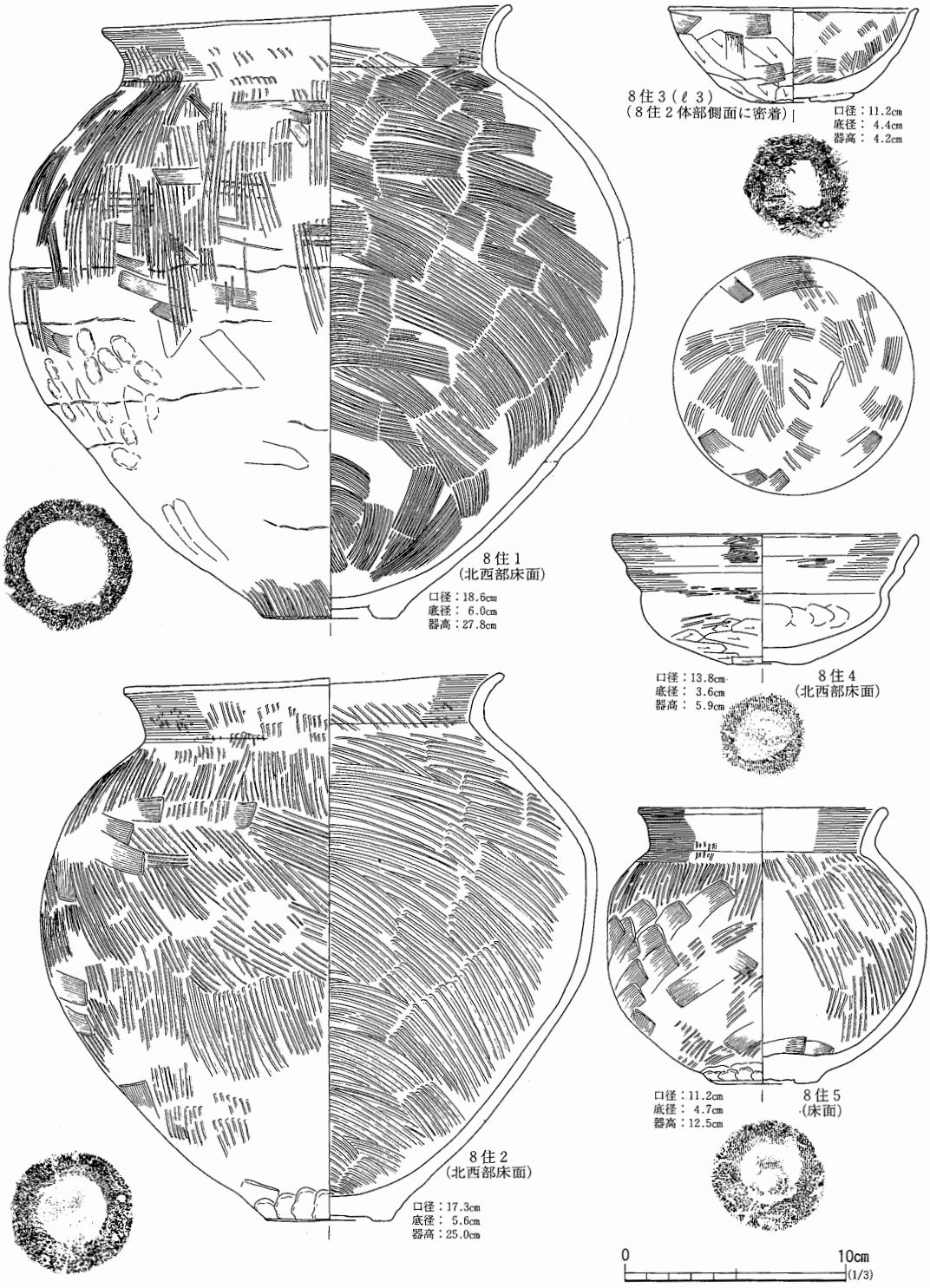
遺構は，軸方位をＮ－20°－Ｅにとり，南北軸長5.40ｍ，東西軸長5.40ｍの隅丸正方形の住居跡である。周壁は，床面に対して100°～105°の角度で急峻に立ち上がり，全周に壁溝を巡らしている。遺構検出面から床面までの深さは，周壁付近において24～35㎝である。壁溝は幅16～28㎝，床面からの深さ10～16㎝を測る。壁溝においては人為的な埋め戻しの痕跡は認められなかった。床面は，遺構中央付近にやや深めの掘形を掘削し，ここに暗褐色粘土質シルトによる貼床を敷設して整地している。床面の状態はほぼ平坦であるが，壁溝周辺に比して中央付近がやや窪んでおり，検出面から40㎝の深さを測る。特に堅緻な踏み締まり部分は認められなかった。

ピットは，５個確認された。このうち，P_1・P_2・P_4・P_5の４個が主柱穴と考えられる。いずれもピット上部が広がる断面形を呈し，堆積土がレンズ状に落ち込み，柱根痕跡も存在しないことから，柱が抜き取られたものと考えてほぼ間違いない。各柱穴の中心点間を結ぶ距離は，P_1－P_2が3.22ｍ，P_2－P_5が3.06ｍ，P_5－P_4が3.05ｍ，P_4－P_1が3.05ｍである。P_3は，底面が平坦で，開口した状態で廃絶されている可能性が高いことから，貯蔵穴的な機能を持ったピットと考えられる。P_2とP_1を結ぶ線上に炉が存在する。長径44㎝×短径39㎝，深さ４～５㎝の円形の窪みを設け，その内部で火を使用したものである。木根による攪乱が，炉の北側から炉底面の一部にまで及んでおり，遺存状態は良くない。炉南半の底面から窪みの周縁にかけて焼土範囲を認めることができる。厚さにして２㎝ほど焼土化しているが，特に強く焼けているという状態ではない。

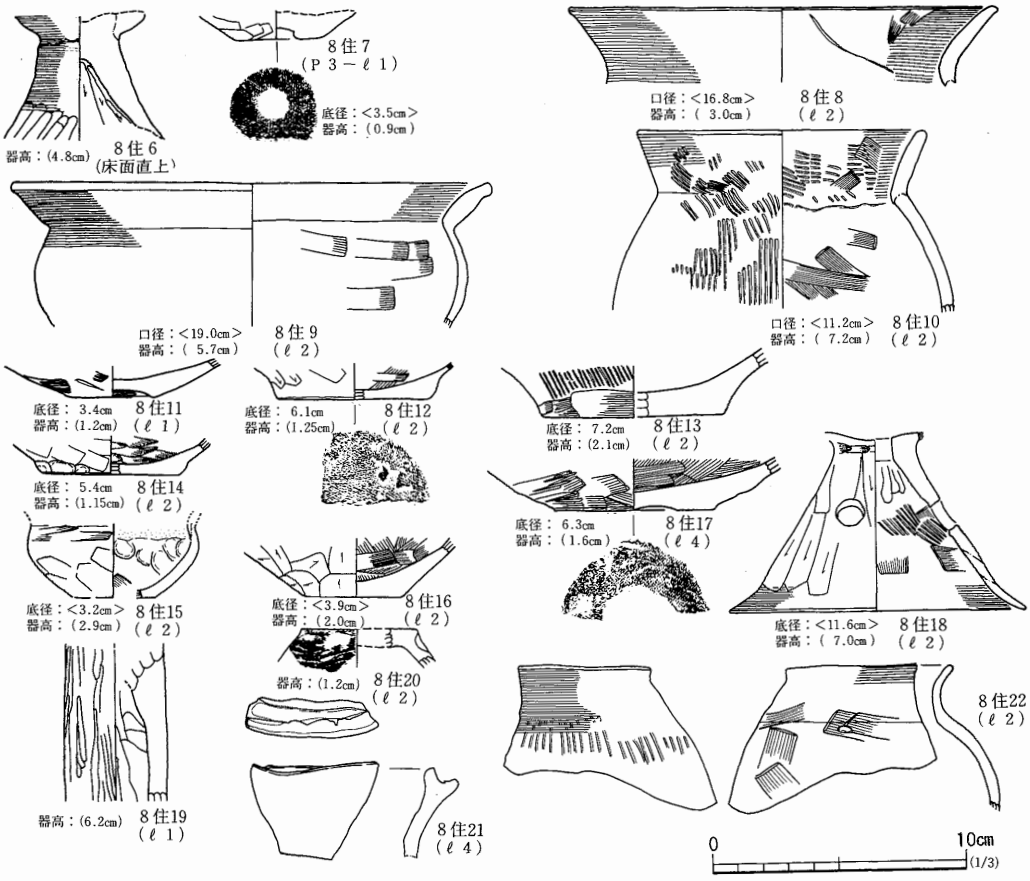
遺　　物　（第26～29図・図版17・18・30）

本遺構から出土した遺物は，土師器片868点，弥生土器片38点，土製品１点，砥石１点である。図示した遺物以外の破片の内訳は，ハケメ調整を有するものが133点，ミガキ調整を有するものが18点，口縁部にヨコナデ調整を有するものが14点，縄文を有するものが８点，調整不明242点である。土器片の多くは，ℓ１またはℓ２から出土しているが，床面からも良好な土器個体が４点出土している（８住１・２・４・５）。８住23の土製品も床面から出土したものである。これらの床面出土遺物は，遺構に遺棄された性格のものと思われる。

土師器　（８住１～19，21・22・26・29）　８住１・２は，内外面にハケメ調整を加え，底部を上げ底としたうりふたつの器形を呈する甕である。この２個体は，住居跡北西隅床面において倒

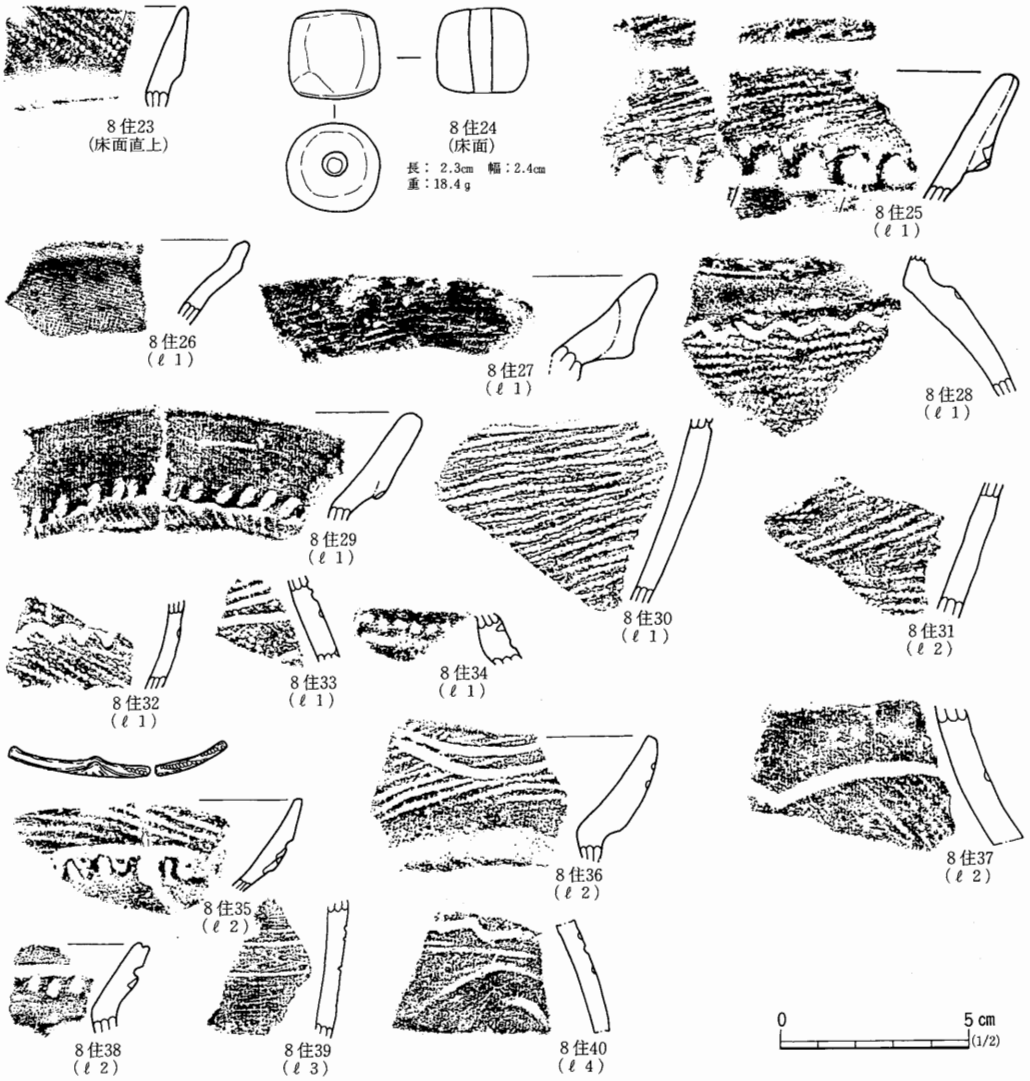


第26図　８号住居跡出土遺物（１）



第27図　８号住居跡出土遺物（２）

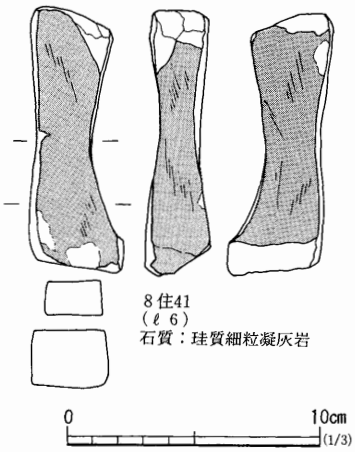
立状態で並列していた(図版18－ｂ参照)。いずれも内部にわずかに土が堆積していたが，体部の大部分は空洞状態となっていた。床面に伏せたまま遺棄されたものと思われる。内部の土は，底部が抜け落ちた際に流入したものと考えるのが妥当であろう(※図版18－ｂにおいて甕の体部に詰まっている土は，写真撮影に際して土器片が崩れ落ちるのを防ぐために調査員が入れたものである)。８住３は，その口縁部が８住２の体部側面に吸いつくように密着して出土した坏である。ただ，土器内には土が圧縮されたように充満していたので，住居跡廃絶後に流入して８住２に密着したものと判断した。８住４は，住居跡北西隅において，８住２の北側の床面から出土した坏形土器である。体部が坩形土器に近い形態を呈するが，口縁部が短く２段の稜を有する。８住５は，住居跡中央からやや西寄りの床面において横転状態で出土した小型甕である。以上の５点は，いずれも底部外面がドーナツ状の上げ底となっている共通点を持つ。このほか，甕(８住８・22・26)，小型甕(８住10)，鉢(８住９)，壺(８住29)，坩(８住15)，器台(８住６・18)，高坏(８住19)などが出土している。このうち，８住22の内面には籾痕が認められる。また，８住29は，頸



第28図　8号住居跡出土遺物（3）

部にハケメを加える壺形土器であるが，口端が丸みを持ち，ヨコナデを加えた口縁部の下端には刷毛目工具による刻み目が施されている。

弥生土器　（8住20・23・25・27・28・30～40）　すべて堆積土内からの出土である。8住23・25・27・35・36・38は口縁部破片であるが，8住38以外は口縁部が肥厚する特徴を持つ。口縁部装飾には，縄文のみを施すもの（8住23・27），縄文部の下端に交互刺突文を加えるもの（8住25・35），縄文を地文としてその上に平行する弧線文を加えるもの（8住36）などの各種がある。交互刺突を有するものは，上方の刺突が円形の細竹管によるものであるのに対し，下方の刺突は幅広のヘラ状工具によっているという共通点がある。8住38は平坦な口端部に沈線を有する。体部



第29図　８号住居跡出土遺物（４）

破片には弧線文が目立つ（８住28・32・37・40）。８住39は，細くシャープな沈線によって文様を描いており，他の弥生土器よりも先行する年代のものと考えられる。

土製品　（８住24）　住居跡北西部床面から出土した。遺構に遺棄されたものであろう。

砥石　（８住41）　堆積土ℓ６から出土したものである。端部以外の全面を使用している。磨滅の度合から見て，かなり使用頻度の高かったものと見られる。

ま　と　め

本遺構は，隅丸正方形で４個の主柱穴と地床炉を有する竪穴住居跡である。壁溝を持ち，主柱穴の脇には貯蔵穴と思われるピットが付随する。柱穴のすべてから柱が抜き取られていることや，堆積土の中に人為的な埋め戻しと思われる土が存在する点を考慮すると，本遺構よりも新しい住居跡の存在を推測することができる。床面から４個体の土器と土玉が出土しているが，出土状態から見て，遺棄された遺物と考えて良いものと思われる。特に，８住１と８住２の出土状態は，底部が小さく不安定な甕が，日常は倒立状態で安置されていた可能性を窺わせる。遺棄された土器群は，底部をドーナツ状の上げ底にする共通性を有しており，塩釜式期の良好なセットと言えよう。本遺構の年代は，床面出土土器から古墳時代前期と判断できる。遺構・遺物ともに，調査区内では，最も遺存状態の良好な住居跡である。

（本　間）

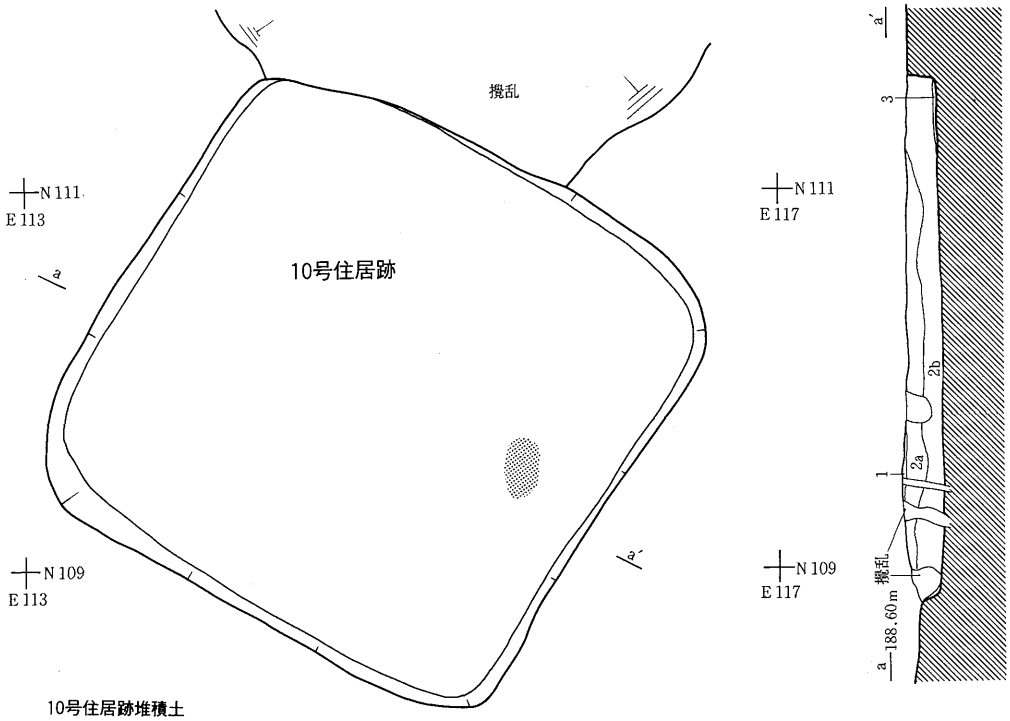
10号住居跡　ＳＩ10

遺　　構　（第30図，図版19）

調査区のほぼ中央，Ｉ・Ｊ－22グリッドＬⅣにおいて検出された竪穴住居跡である。遺構内堆積土は３層に細別される。ℓ１は上部に薄く堆積するもので，おおむねＬⅡの流入土と考えられる。ℓ２は，黄褐色粘土質シルトの混入状態の多寡によってさらに２層に細別できるが，竪穴掘削土の流入したものと考えられる。ℓ３は床面上に薄く堆積する黒褐色シルトで，若干の炭化物を含んでいる。遺構内の炉に伴う人為的な土層と見られるものである。

遺構は，軸方位をＮ－30°－Ｅにとり，南北軸長2.80ｍ，東西軸長2.80ｍの隅丸正方形の住居跡である。周囲は，床面に対して95°～105°の角度で急峻に立ち上がる。周壁残存高は12～22㎝を測る。床面はほぼ平坦であるが，特に堅緻な踏み締まり部分は認められなかった。

床面にはピット・壁溝などの施設は一切存在せず，遺構南東辺付近の床面で地床炉が発見されたのみである。焼土の範囲は長径33㎝×短径20㎝で，やや南北に細長い状態を呈している。床面



10号住居跡堆積土

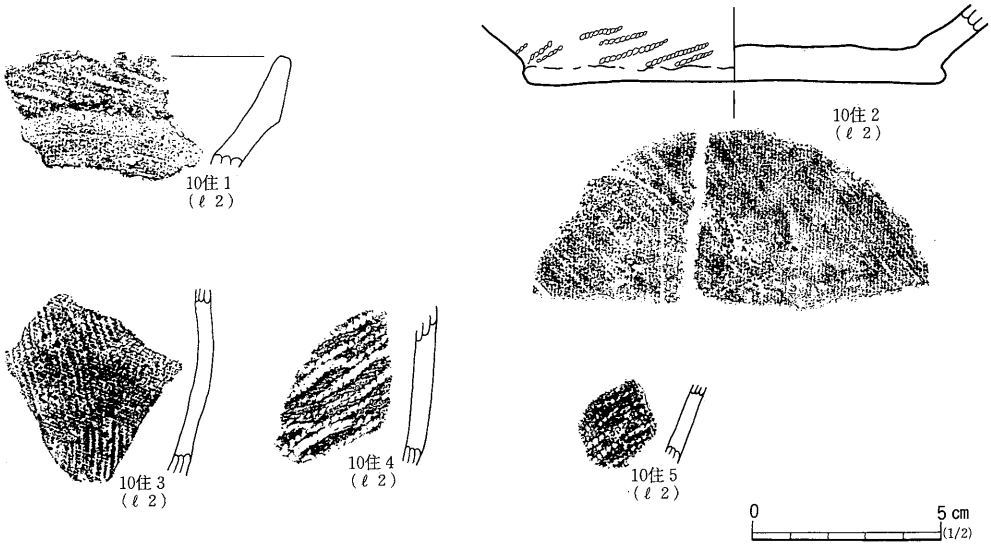
1．(10YR2/1) 黒色シルト

2a.(2.5Y4/2) 暗灰黄色シルト

2b.(2.5Y3/3) 暗オリーブ褐色シルト

3．(2.5Y3/2) 黒褐色シルト。炭化物を含む。

0　1 m (1/40)



第30図　10号住居跡・出土遺物

上で直接火を使用したものであり，掘形は存在しない。厚さにして２cmほど焼土化しているが，特に強く焼けているという状態ではない。

遺　　物（第30図）

本遺構から出土した遺物は，弥生土器片12点である。土器片は，すべてℓ２から出土したものであり，遺構に確実に伴う遺物はない。

弥生土器（10住１～５）　10住１は口縁部が肥厚し，頸部が無文となるものである。他の破片と同様，直前段多条原体による縄文を施文している。10住２の底部外面には，木葉痕と布状繊維製品の擦痕と思われる痕跡が残っている。他は縄文のみの体部破片である。

ま と め

本遺構は，隅丸正方形の平面形を呈する小型の竪穴住居跡である。柱穴・壁溝を持たず，周壁側に片寄った位置に地床炉を有する点や，規模の点において，２号住居跡に良く類似している。遺構の時期を確実に示す遺物はないが，土師器の出土が認められない点や，古墳時代前期の他の住居跡とは形態的特徴を異にする点などを考慮し，弥生時代後期の所産と考えたい。　（本　間）

11号住居跡　ＳＩ11

遺　　構（第31図，図版20）

調査区中央部北側のＨ・Ｉ－21・22グリッドより検出された竪穴住居跡で，南壁の大部分・床中央部・北壁の全部が攪乱を受けている。

遺構検出面は黄褐色粘土質シルトのＬⅣであるが，攪乱を受け深く削られている部分はＬⅤが出ている所もある。

周辺の遺構は，南東10ｍに10号住居跡，南南西13ｍに３号住居跡，西南西８ｍに12号住居跡があるが，直接重複関係にある遺構は認められなかった。

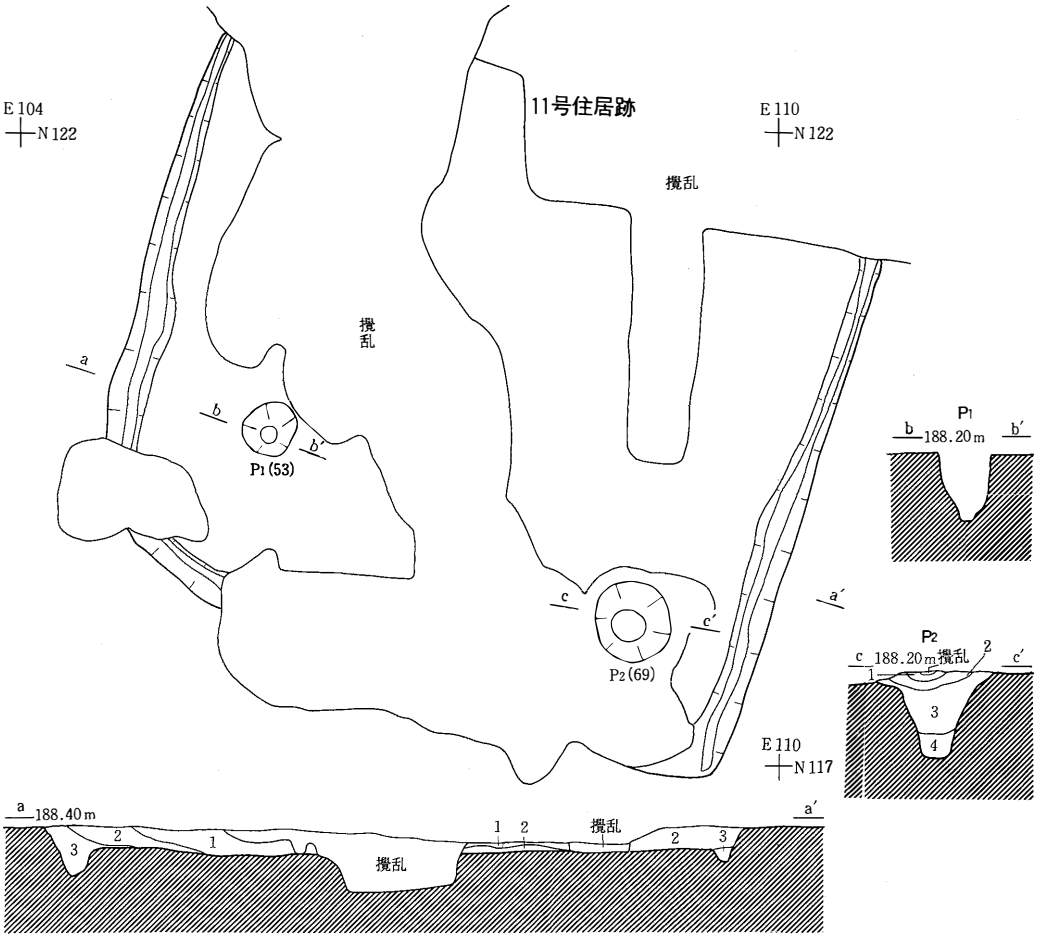
平面プランは，東西5.65ｍ・南北4.5ｍ以上のやや平行四辺形気味になると思われるが，全体の規模は不明である。

検出面から床面までの深さは，東西両壁沿の攪乱のない部分で18cmを測り，覆土はレンズ状の堆積を示しており自然堆積と考えられる。

周溝は幅15cm～35cm・深さ10cm～25cmで各壁沿に検出されているが，攪乱を受けた部分が多く全体の様相は不明である。

床面はＬⅣを掘り込んだもので，緩く波打つがほぼ平坦である。かなりの部分が攪乱を受けているため炉跡は確認出来なかった。

ピットは南西コーナーの西壁から1.1ｍ・南壁から1.2ｍからＰ$_1$が，南東コーナーの東壁から80cm・南壁から70cmよりＰ$_2$が検出されている。直径45cm・60cmのほぼ円形で，深さは60cm・70cm



11号住居跡堆積土

1　黒色シルト
（炭化物を含む）
2　褐色シルト
3　褐色シルト
（ＬⅡブロックを含む）

P2堆積土

1　（10ＹＲ5／4）にぶい黄褐色シルト
2　（10ＹＲ3／3）暗褐色シルト
3　（7.5ＹＲ4／2）灰褐色シルト
4　（7.5ＹＲ4／1）褐灰色粘土質シルト

0　2 m
(1/60)

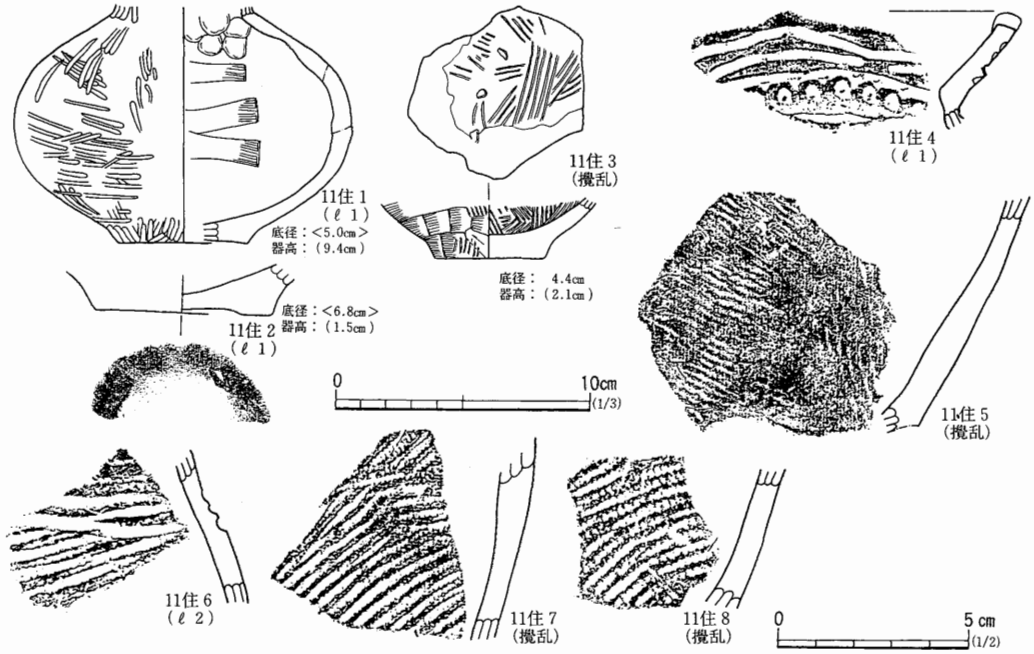
第31図　11号住居跡

を測り，位置からして柱穴と考えられる。

遺　　物（第32図）

本遺構からは，土師器片が257点，弥生土器片が40点出土している。このうち撹乱から出土したものが129点を占め，他はℓ１もしくはℓ２から出土している。

土師器　（11住１～３）　11住１は土師器の小型壺の約1／3の破片で口縁と底部の一部を欠く。丸く胴の張る器形で，外面はミガキ，内面頸部はユビオシ・体部はナデ調整による。11住２は底部破片で中央がやや上げ底状となる。11住３は底部破片で，外面は削り，内面はハケメ調整である。



第32図　11号住居跡出土遺物

内面の２ヵ所に籾痕が認められる。

弥生土器　（11住４～８）　11住４は口縁部破片である。小さな突起を持つ波状口縁であり，外面は沈線と連続する円形刺突文からなる文様が描かれている。11住６は外面の縄文の上に沈線文が描かれている。

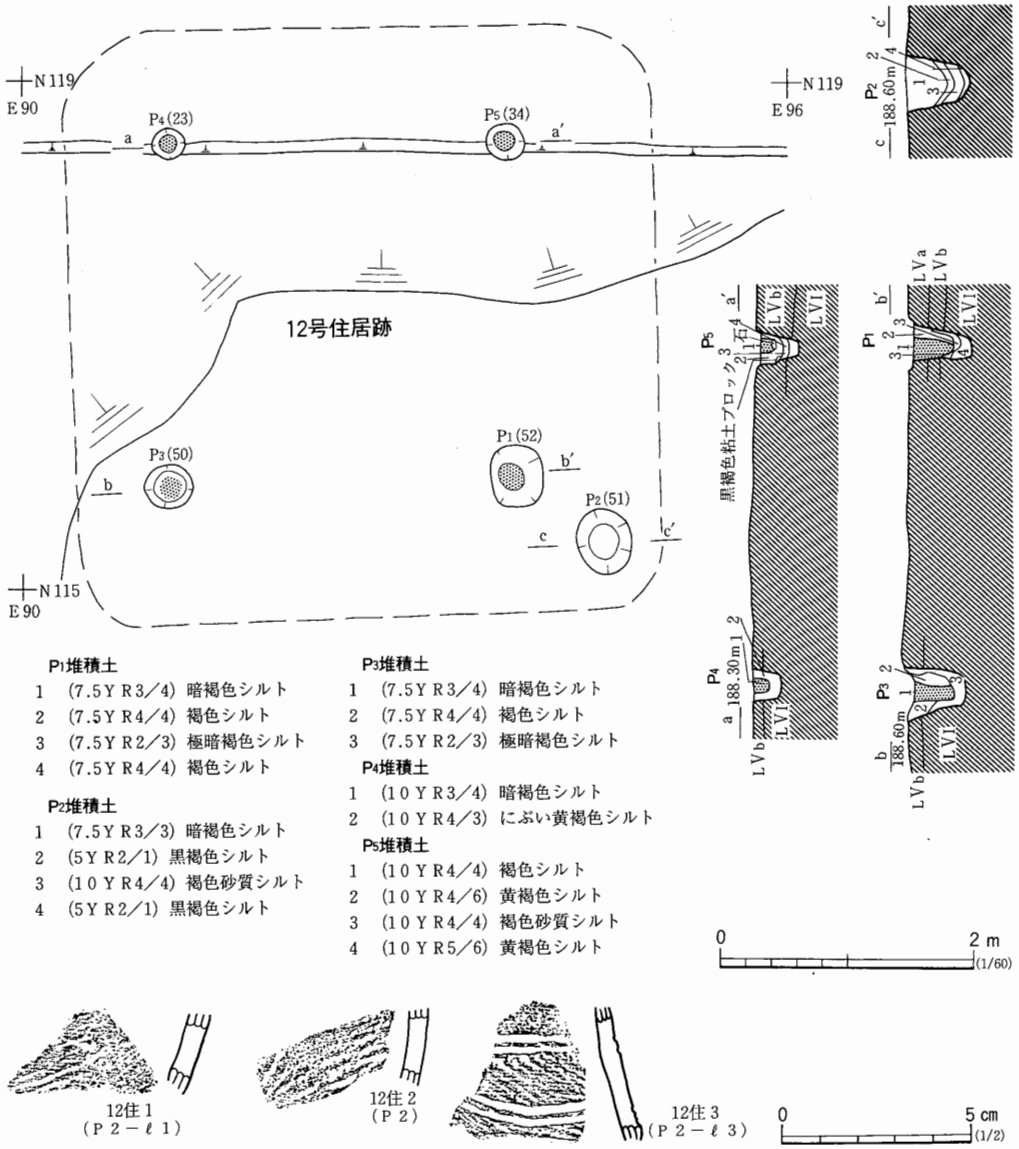
ま　と　め

本遺構は，圃場整備以前の用水路と思われる不整形の溝により，原形が著しく損なわれている。遺構に確実に伴う出土遺物はないが，周溝を持ち，隅丸方形の形態をなす点から推定して，古墳時代前期のものと考えておきたい。　（高　木）

12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構　（第33図，図版21）

調査区中央部北側のＩ－20グリッドにおいて検出された住居跡である。付近一帯は削平が著しい。遺構検出面は，南半分が白褐色砂質シルトのＬⅤ下部，水田造成時の段を挟んで北側の低い部分が薄褐色砂層のＬⅥであった。実際に検出できたのは５ヵ所のピットと若干の土器片のみである。柱痕の残る４個の柱穴がほぼ正方形状に配置されており，そのうちの１個（P_1）に付随して，異なる堆積土を有するピット（P_2）が存在することから，掘立柱建物跡ではなく，１・３～８号住居跡と同様の構造をなす竪穴住居跡と推定した。これらの住居跡は，いずれもＬⅣもしくはＬ



第33図　12号住居跡・出土遺物

Ⅴ上面で検出されているが，本遺構の周辺ではこれらの土層がすでに存在しない。本遺構が周壁と床面を持たないのは，この付近の地形が周囲よりも幾分高かったため，圃場整備の際に平坦に削られたことによるものと判断した。13号住居跡と14号住居跡についても，同様の理由で竪穴住居跡と認定している。

周壁が遺存していないため遺構全体の規模は不明であるが，柱穴の配置状況から推測して，軸長4.5～５m程度の隅丸方形の住居跡であったと考えられる。

検出されたピットのうち，Ｐ$_1$・Ｐ$_3$～Ｐ$_5$は柱痕を有するので柱穴と判断される。柱痕の中心点を線で結ぶと，ほぼ一辺2.7ｍの正方形をなす。この正方形プランにおける南北中軸線の方位は，ほぼ真北を指している。個々の柱穴について見てみると，Ｐ$_1$は南北にやや長い49㎝×40㎝の隅丸長方形を呈しているが，Ｐ$_3$～Ｐ$_5$の３個は円形の平面形で，規模も径40㎝以下である。柱穴の深さは，Ｐ$_1$・Ｐ$_3$が約50㎝，Ｐ$_4$・Ｐ$_5$が22～35㎝である。ただし，Ｐ$_4$とＰ$_5$は，水田造成による段差のために上部が大きく削り取られている。柱穴底面の水準高を測定すると，本来はＰ$_5$が65㎝以上の深さを有していたと考えられ，Ｐ$_4$はＰ$_1$・Ｐ$_3$と同程度の深さであったと理解される。柱痕の太さは，Ｐ$_1$が18㎝で，他は13～15㎝である。柱痕の観察にあたっては，柱穴を断ち割り，その断面を少しずつスライスしながら，最も幅が太い部分と最も深くなる部分を把握するよう心掛けた。本遺構においては，柱痕が掘形の底面まで至っている柱穴は存在しなかったが，Ｐ$_5$においては，柱痕下端に根固め石と思われる石が設置されていた。

Ｐ$_1$の南東に隣接して，Ｐ$_2$が存在する。長径52㎝×短径43㎝・深さ50㎝の楕円形のピットである。堆積土は自然埋没と考えられる状況を示し，開口したまま廃絶されたものと考えられる。ピットの性格を示すような遺物は出土していないが，貯蔵穴の可能性が高いと思われる。

遺　　物（第33図）

Ｐ$_2$内のℓ１から８点，ℓ３から48点，ℓ４から２点の土器片が出土している。他のピットからは遺物が出土していない。土器片の内訳は，土師器片が53点，弥生土器片が５点である。図示可能なものが少ないため，第33図中には３点の弥生土器片のみを掲載した。12住３は壺形土器の頸部から体部にかけての破片と思われる。頸部を無文とし，体部文様帯上端を横位の平行沈線で区画し，同一工具による平行沈線によって弧状の体部文様を描いている。

ま　と　め

本遺構は，周壁・床面が削平によって失われ，ピットのみが確認された竪穴住居跡である。遺構に確実に伴う遺物はなく，正確な年代は不明であるが，弥生時代後期～古墳時代前期の時間幅の中でとらえられよう。

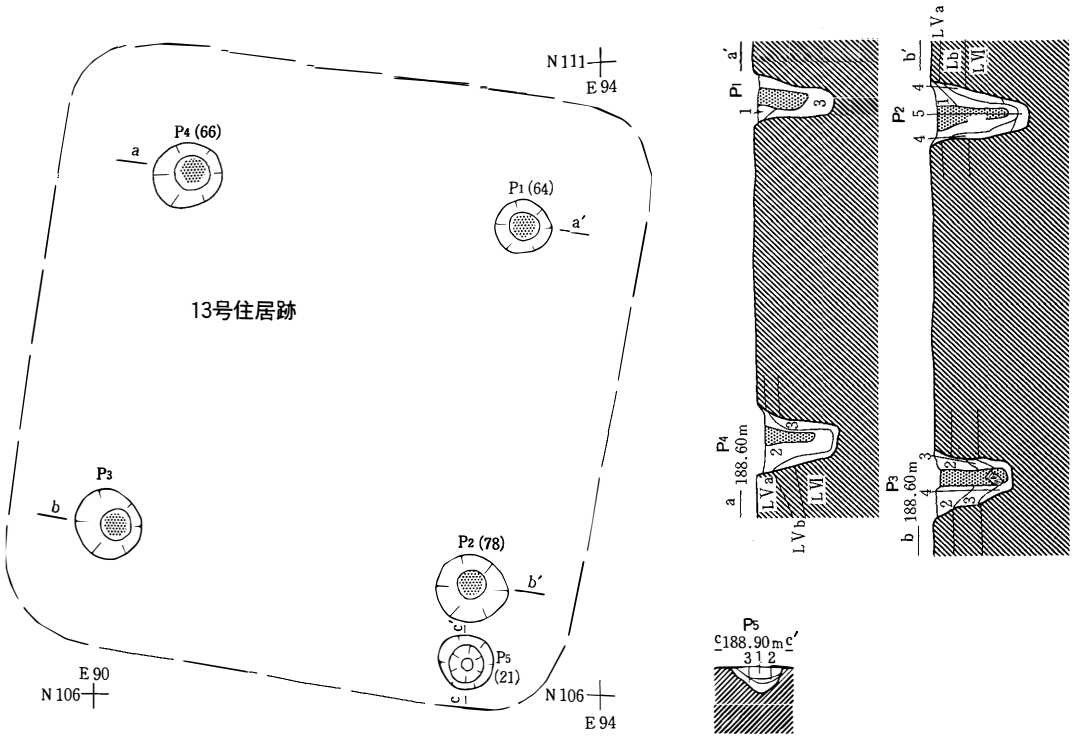
（高木・本間）

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（第34図，図版22）

調査区中央部北側のＩ・Ｊ－19・20グリッドで検出された住居跡である。北側に２ｍほど離れて12号住居跡が位置している。この付近は削平が著しく，実際に検出したのは５ヵ所のピットのみであったが，前記した12号住居跡と同様の理由で竪穴住居跡と推定した。

遺構検出面は白褐色砂質シルトのＬⅤである。南東に近接する３号住居跡がＬⅣに掘り込まれていることを考慮すれば，本遺構周辺の旧地形は３号住居跡などが存在する部分よりも標高が高



P1堆積土

1　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
2　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
3　(10ＹＲ4／4) 褐色砂質シルト

P2堆積土

1　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
2　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
3　(10ＹＲ4／4) 褐色シルト
4　(10ＹＲ3／4) 暗褐色砂質シルト
5　(10ＹＲ4／3) にぶい黄褐色砂質シルト

P3堆積土

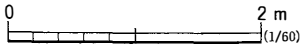
1　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
2　(10ＹＲ4／4) 褐色シルト
3　(10ＹＲ2／3) 黒褐色シルト
4　(10ＹＲ3／4) 暗褐色砂質シルト

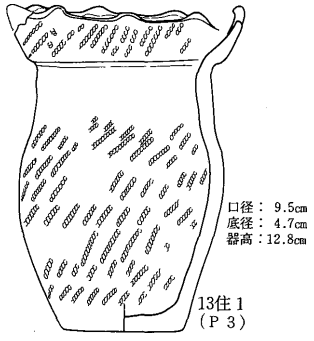
P4堆積土

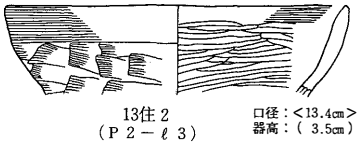
1　(10ＹＲ3／4) 暗褐色シルト
2　(10ＹＲ4／4) 褐色シルト
3　(10ＹＲ3／4) 暗褐色砂質シルト

P5堆積土

1　(7.5ＹＲ4／3) 褐色粘土質シルト
2　(7.5ＹＲ4／1) 褐灰色粘土質シルト
3　(10ＹＲ4／3) にぶい黄褐色粘土質シルト







第34図　13号住居跡・出土遺物

かったものと思われ，圃場整備の際に削平されたものと理解される。

周壁が遺存していないため遺構全体の規模は不明であるが，柱穴の配置状況から推測して，軸長５ｍ前後の隅丸方形の住居跡であったと考えられる。

検出されたピットのうち，Ｐ$_1$～Ｐ$_4$は，いずれも柱痕を有するので柱穴と考えられる。柱痕の中心点を結んだ距離は，Ｐ$_4$－Ｐ$_1$が2.66ｍで，他の３辺はいずれも2.85ｍである。北辺をなすＰ$_4$－Ｐ$_1$の中心点と，南辺をなすＰ$_3$－Ｐ$_2$の中心点とを結んだ南北の軸方位は，Ｎ－11°－Ｅを指す。

柱穴は，径45～58㎝，深さ60～80㎝の大きめの掘形となっているが，柱痕の太さは10～14㎝にとどまっている。柱痕の下端は掘形底面まで届いていない。

Ｐ$_2$の南側に近接して，Ｐ$_2$が存在する。直径25㎝，深さ20㎝の円形のピットで，底には平坦面がなく，壁面は45°～60°の角度ですり鉢状に立ち上がる。堆積土は自然堆積によるものと考えられ，開口した状態で廃絶されたものと判断される。ピットの性格を示すような遺物は出土していないが，貯蔵穴の可能性が高いと思われる。

遺　　物（第34図，図版31）

本遺構から出土した遺物は，弥生土器１点，土師器１点である。

弥生土器　13住１は，Ｐ$_3$の掘形内埋土下部から出土した（Ｐ$_3$断面図における土器の出土位置は，出土レベルを土層観察面に投影して図化したものであり，柱痕内から出土したことを意味するものではない）。外傾する口縁部の上端に，内弯する９単位の山形突起が付けられている。頸部は直立気味で，体部上半が緩く膨らむ器形をなす。口縁部と体部には直前段多条ＬＲ縄文が横位回転施文され，頸部にはナデが加えられている。

土師器　13住２は，小型壺の口縁部破片と思われる。Ｐ$_2$の掘形内埋土から出土した。やや内弯気味に開く器形を呈し，外面にはナデ，内面にはミガキが施されている。

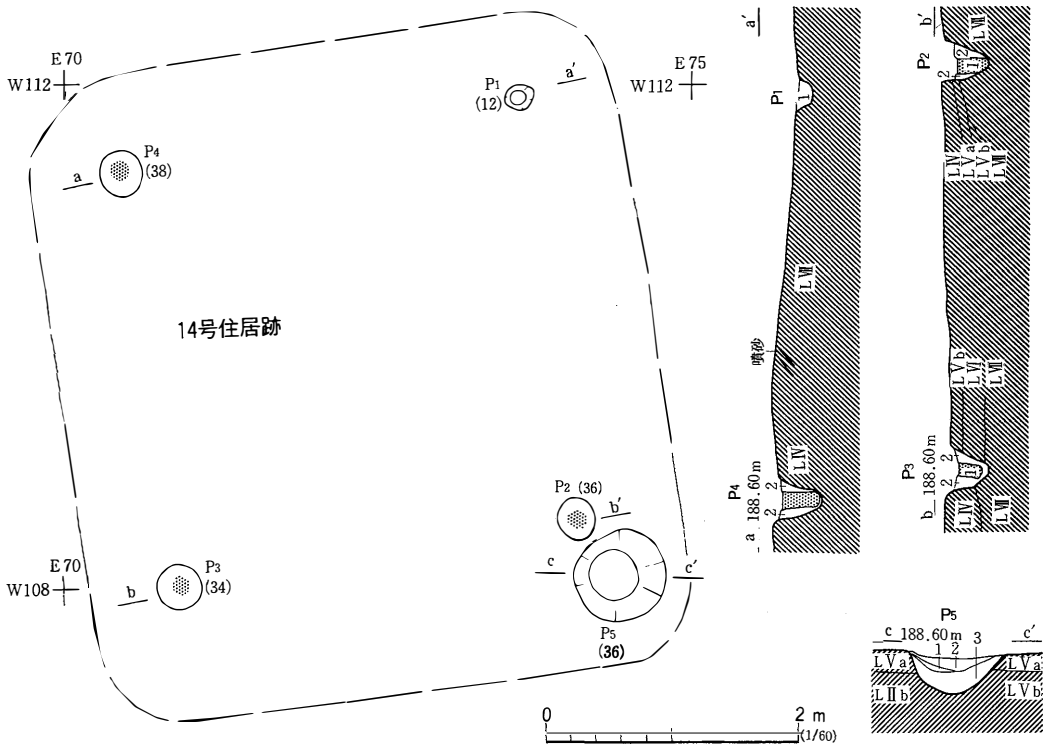
ま　と　め

周壁・床面が削平によって失われ，ピットのみが確認された竪穴住居跡である。柱穴内の埋土から弥生土器と土師器が出土しているが，柱穴が人為的に埋められており，柱を抜き取った痕跡がない点を考慮すると，遺構の年代は柱穴内出土土器と同時期か，それよりも新しいと考えられる。したがって，本遺構の年代は，古墳時代前期またはそれ以降と判断される。　（高木・本間）

14号住居跡　ＳＩ14

遺　　構（第35図，図版23）

調査区中央部北西のＩ・Ｊ－18グリッドで検出した住居跡である。この付近は削平が著しく，実際に検出したのは５ヵ所のピットのみであったが，前記した12・13号住居跡と同様の理由で竪穴住居跡と判断した。



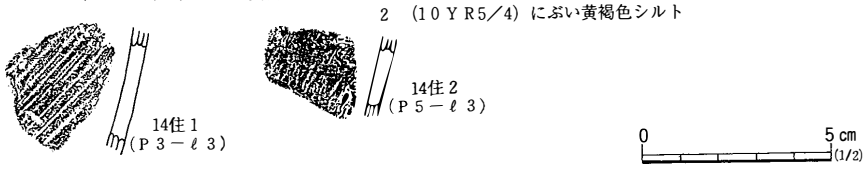
P1堆積土
1　(10YR3/2) 黒褐色シルト

P2堆積土
1　(10YR3/3) 暗褐色シルト
2　(10YR5/4) にぶい黄褐色シルト

P3堆積土
1　(10YR3/3) 暗褐色シルト
2　(10YR5/4) にぶい黄褐色シルト

P4堆積土
1　(10YR3/3) 暗褐色シルト
2　(10YR5/4) にぶい黄褐色シルト

P5堆積土
1　(7.5YR4/3) 褐色粘土質シルト
2　(2.5YR6/2) 灰黄色砂礫層
3　(10YR3/3) 暗褐色粘土質シルト



第35図　14号住居跡・出土遺物

遺構検出面はＬⅥおよびＬⅦである。この付近の旧地形は，相対的にやや標高が高かったものと思われ，圃場整備の際に周辺と同じレベルにまで削平を受けたためにＬⅥ・ＬⅦが露出したものと考えられる。

周壁・床面が遺存していないため遺構全体の規模は不明であるが，柱穴の配置状況から推測して，軸長5.5m前後の隅丸方形の住居跡であったと考えられる。

検出したピットのうち，P_1～P_4の４個が柱穴と考えられる。削平が著しいP_1以外の３個では柱痕も確認された。柱痕または柱穴の中心点を結ぶ距離は，P_1-P_2が3.38m，P_2-P_3が3.22m，P_3-P_4が3.32m，P_4-P_1が3.25mで，ほぼ正方形状に配置されている。この正方形の北辺をなすP_4-P_1の中心点と，南辺をなすP_3-P_2の中心点とを結んだ南北の軸方位は，N

－9°－Ｗを指す。

柱穴は，遺存度の良くないＰ$_1$以外は，径30～36㎝，深さ35～38㎝の規模で，いずれも円形である。柱痕の太さは10～13㎝で，柱痕の下端が掘形底面に届いているのはＰ$_2$のみである。Ｐ$_2$の南東側に近接して，Ｐ$_2$が存在する。直径72㎝，深さ34㎝で，すり鉢状の断面形を呈する円形のピットである。堆積土はレンズ状の堆積状態を示し，開口した状態で廃絶されて自然埋没したものと考えられる。ピットの性格は不明だが，貯蔵穴の可能性が高いと思われる。

遺　　物（第35図）

Ｐ$_5$内堆積土ℓ３から22点の土師器片が出土した。他のピットからは遺物が出土していない。14住１・２は，外面にハケメ調整を加えた薄手の体部破片である。

ま と め

周壁・床面が削平によって失われ，ピットのみが確認された竪穴住居跡である。遺構の確実な年代を示すような遺物は出土していないが，柱穴の脇に貯蔵穴と考えられるピットを有する構造から推測して，同様の構造を示す他の住居跡と同年代のものである可能性が高い。古墳時代前期の所産と考えておきたい。（本　間）

第３節　掘立柱建物跡

１号建物跡　ＳＢ01

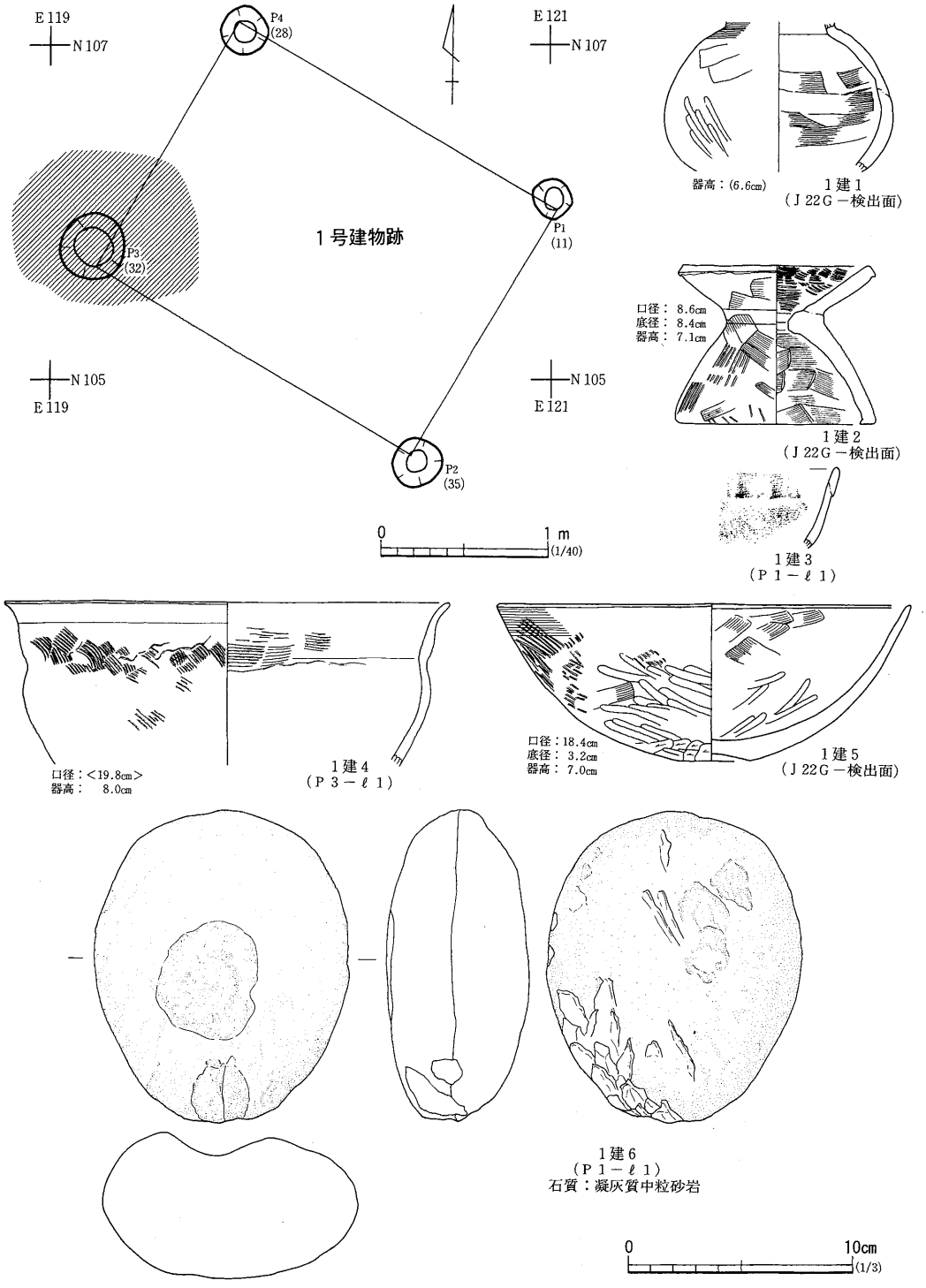
遺　　構（第36図）

調査区内において，唯一発見された建物跡である。発見当初は，１号性格不明遺構（ＳＸ01）と命名していた。調査区のほぼ中央，Ｉ・Ｊ－22・23グリッドのＬⅣ上面で検出した。

遺構は，Ｐ$_1$～Ｐ$_4$の４個の柱穴によって構成される１間×１間の建物跡である。長軸方位はＮ－61°－Ｗで，やや東西に細長い長方形プランを呈している。柱穴は，径が24～36㎝で，深さはＰ$_1$のみが11㎝と浅く，他は28～35㎝を測る。柱穴内堆積土は軟質の黒褐色シルトで，柱根痕跡は発見されなかった。Ｐ$_3$の周囲がわずかに窪んでおり，ここに柱穴と同質の黒褐色シルトが堆積していた（図中にその範囲をアミ点で示した）。第36図に示した遺物は，この範囲にまとまって存在していたものである。柱穴の中心点を結んだ距離は，Ｐ$_1$－Ｐ$_2$が1.78ｍ，Ｐ$_2$－Ｐ$_3$が2.36ｍ，Ｐ$_3$－Ｐ$_4$が1.64ｍ，Ｐ$_4$－Ｐ$_1$が2.12ｍである。

遺　　物（第36図，図版33）

１建１～１建４は，すべてＰ$_3$周囲の黒褐色土の範囲から出土した土師器である。１建１は小型壺で，朱彩が施されている。１建２は器台で，正立の状態で出土した。１建３は椀形土器で，緩くＳ字状に屈曲する口頸部を有する。１建４は，体部に丸みのある大型坏である。底部が上げ



第36図　１号建物跡・出土遺物

底となっている。

1建5は凹石である。窪んだ部分は，敲打によって形成されたものと思われる。1建1～1建4の土師器と同様，P_3周囲の黒褐色土内から出土した。

ま　と　め

P_3周囲における遺物の遺存状態から見て，平地上に細い柱を立てて利用した，掘立小屋的な建物と推測される。遺構の年代は，出土遺物から古墳時代前期と判断されよう。　　（本　間）

第4節　土　　坑

土坑は，総計8基発見された。発見当初は土坑と認定しながらも，調査の結果攪乱と判明したものが多く，これらは欠番扱いとした。1・3・8～11・13～15号が欠番である。

2号土坑　ＳＫ02　（第37・39図，図版24）

Ｈ－16グリッドのＬＶにおいて検出した。旧道の跡から発見されたため，上部はかなり削平されているものと考えられる。

遺構は，検出面において径1.82×1.98ｍの円形を呈する。検出面から底面最深部までの深さは83㎝を測る。深さ28～36㎝の部分に平坦面があり，その中央に径70～74㎝，深さ約52㎝の円形の掘り込みがなされた特殊な形態の土坑である。二段に掘り窪められているため，断面形は漏斗状を呈している。遺構内堆積土は5層からなり，レンズ状に漸次堆積した形跡が明らかである。いずれの土層も締まりが強く，ℓ2・ℓ3などは粒子も均一であることから，水性堆積による自然流入土と考えて良いものと思われる。

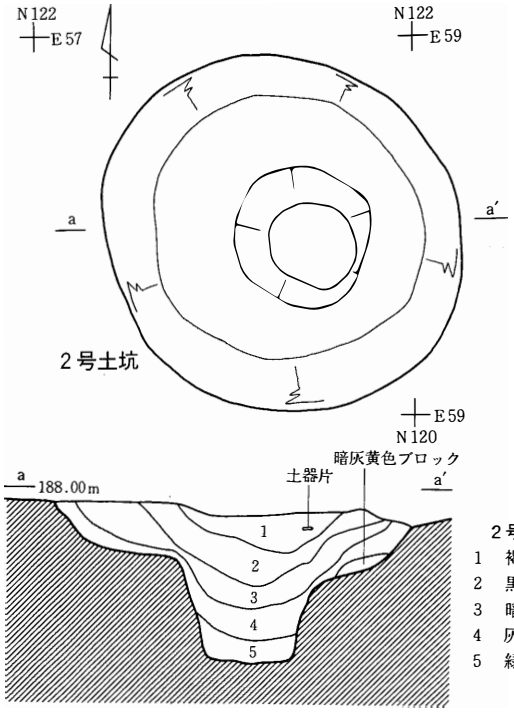
遺物は，ℓ1からℓ4にかけてまんべんなく出土している。遺物の内訳は，土師器が129片，弥生土器と思われるものが3片である。このうちの112点がℓ1からの出土である。2坑1は，土師器の器台である。体部との接合部をソケット状に整形している。脚部中央には円形の窓が設けられている。2坑2～6はハケメ調整を施した土師器甕で，2坑7・8は条間のあいた縄文を施文した弥生土器である。

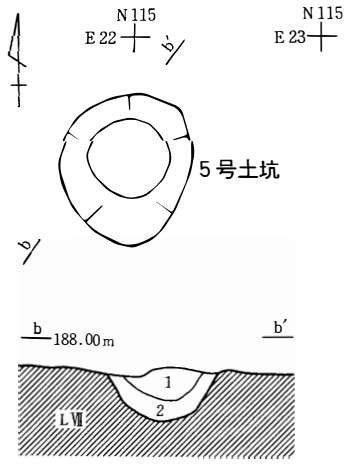
本遺構の年代・性格を推定しうるような調査所見は得られなかった。　　（高木・本間）

4号土坑　ＳＫ04　（第38・39図，図版24）

Ｉ－16グリッドのＬＶにおいて検出した。旧道の跡から発見されたため，上部はかなり削平されているものと考えられる。

遺構は，長径2.85ｍ×短径1.92ｍの，南北に細長い楕円形を呈する。長軸方位はＮ－14°－Ｗ



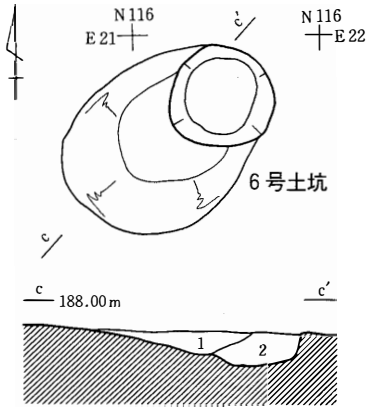


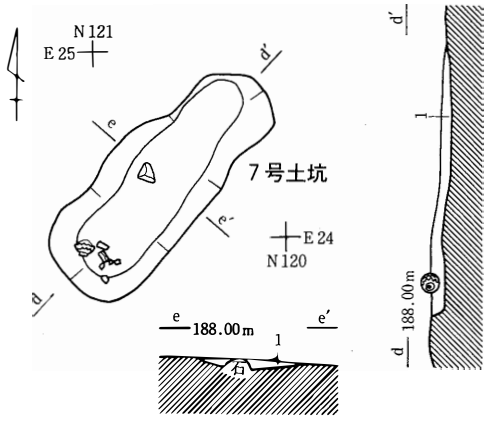
2 号土坑堆積土

1　褐灰色シルト
2　黒褐色シルト
3　暗灰黄色粘土質シルト
4　灰褐色粘土質シルト
5　緑灰色粘土質シルト

5 号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色シルト
（砂・小礫を混入）
2　黒褐色シルト
（砂・小礫を多く混入）





6 号土坑堆積土

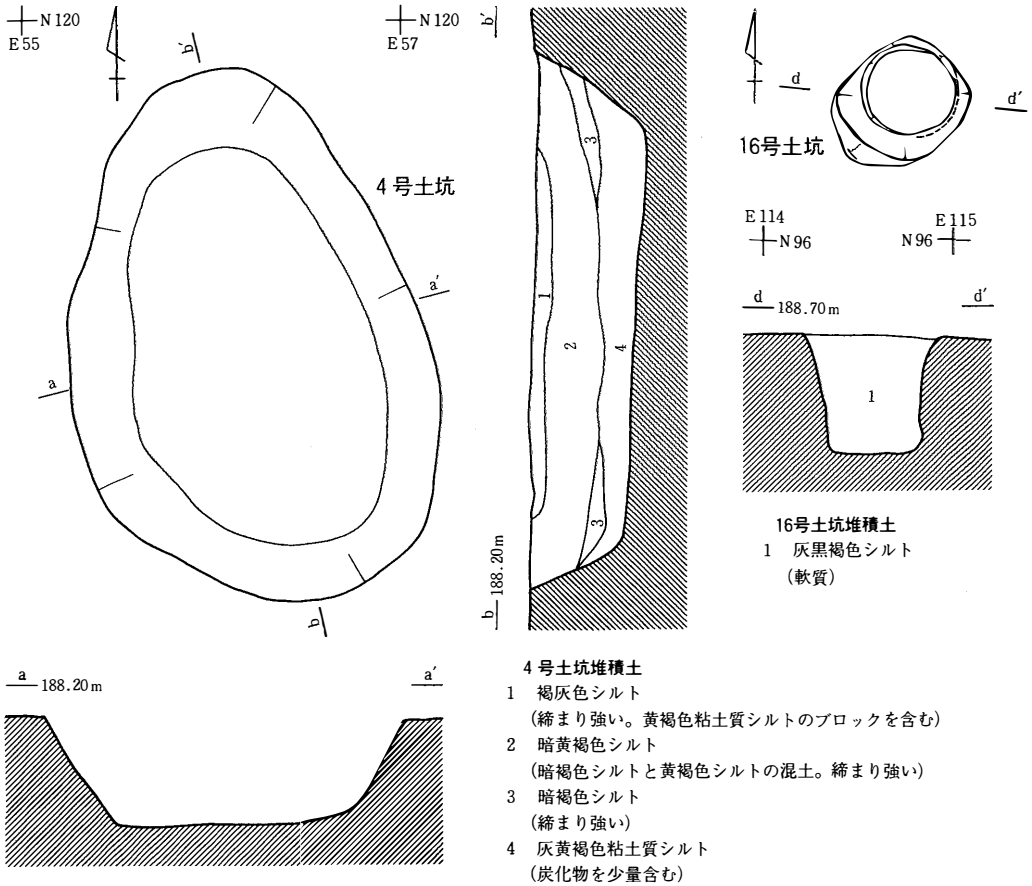
1　黒褐色シルト
（砂・小礫を混入）
2　灰黄褐色シルト
（砂・小礫を混入）

7 号土坑堆積土

1　青灰色砂質シルト
（軟質。酸化鉄の赤褐色粒子を含む）

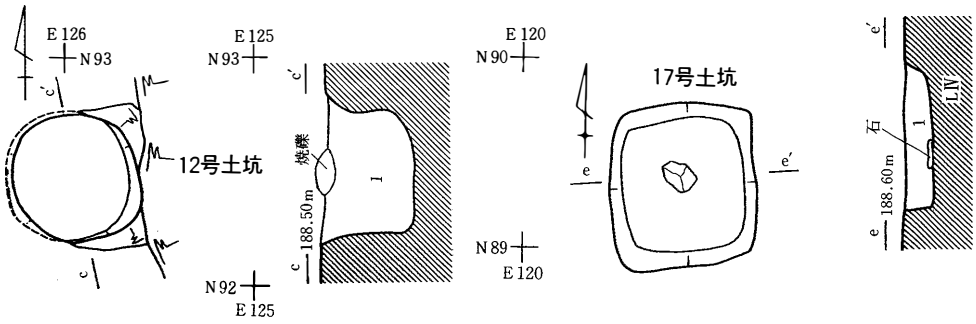
0　1 m
(1/40)

第37図　２・５・６・７号土坑



16号土坑堆積土
1　灰黒褐色シルト
（軟質）

4号土坑堆積土
1　褐灰色シルト
（締まり強い。黄褐色粘土質シルトのブロックを含む）
2　暗黄褐色シルト
（暗褐色シルトと黄褐色シルトの混土。締まり強い）
3　暗褐色シルト
（締まり強い）
4　灰黄褐色粘土質シルト
（炭化物を少量含む）



12号土坑堆積土
1　灰黒色シルト
（明黄褐色粘土質シルトのブロックを含む）

17号土坑堆積土
1　灰黒褐色シルト
（軟質）

0　1 m
(1/40)

第38図　4・12・16・17号土坑

である。周壁は50°～60°の角度で立ち上がり，底面は極めて平坦である。検出面から底面最深部までの深さは56㎝を測る。遺構内堆積土は大別２層からなる。いずれの土層も非常に締まりが強い。ℓ１は暗褐色系のシルトで，粒子の混合の度合からさらに３層に細別できる。ℓ２は灰黄褐色の粘性を帯びたシルトで，炭化物を含んでいる。レンズ状に漸次堆積した形跡が明らかであり，いずれも自然流入土と考えて良いものと思われる。

遺物は，堆積土内からまんべんなく出土している。内訳は，土師器が150片，弥生土器が４片で，このうちの121点がℓ１からの出土である。４坑１・３・４は縄文を施文する弥生土器片，４坑２・５・６は土師器片である。４坑２・５は外面にハケメ調整を加える甕形土器と思われ，５の内面には鋭利な工具によるケズリが施されている。４坑６は壺の頸部片で，外面にミガキ，内面にハケメが加えられている。

本遺構の年代・性格を推定しうるような調査所見は得られなかった。　（高木・本間）

５号土坑　ＳＫ05　（第37・39図，図版24・31）

Ｉ－13グリッドのＬⅥにおいて検出した。この一帯から西側は，かつての圃場整備事業の際にＬⅥ・ＬⅦまで削平されており，本遺構も旧状をとどめてはいない。

遺構は，検出面において，長径0.79ｍ×短径0.70ｍの楕円形を呈する。断面形は，底面が丸みをもち，周壁が約50°の角度で立ち上がる擂鉢状の形態を呈する。検出面から底面最深部までの深さは29㎝を測る。遺構内堆積土は２層からなる。ℓ１はにぶい黄褐色シルトで，遺物を包含する。ℓ２は周壁から崩落した砂を多く含む黒褐色シルトである。堆積状態からみて，いずれも自然流入土と考えて良いものと思われる。

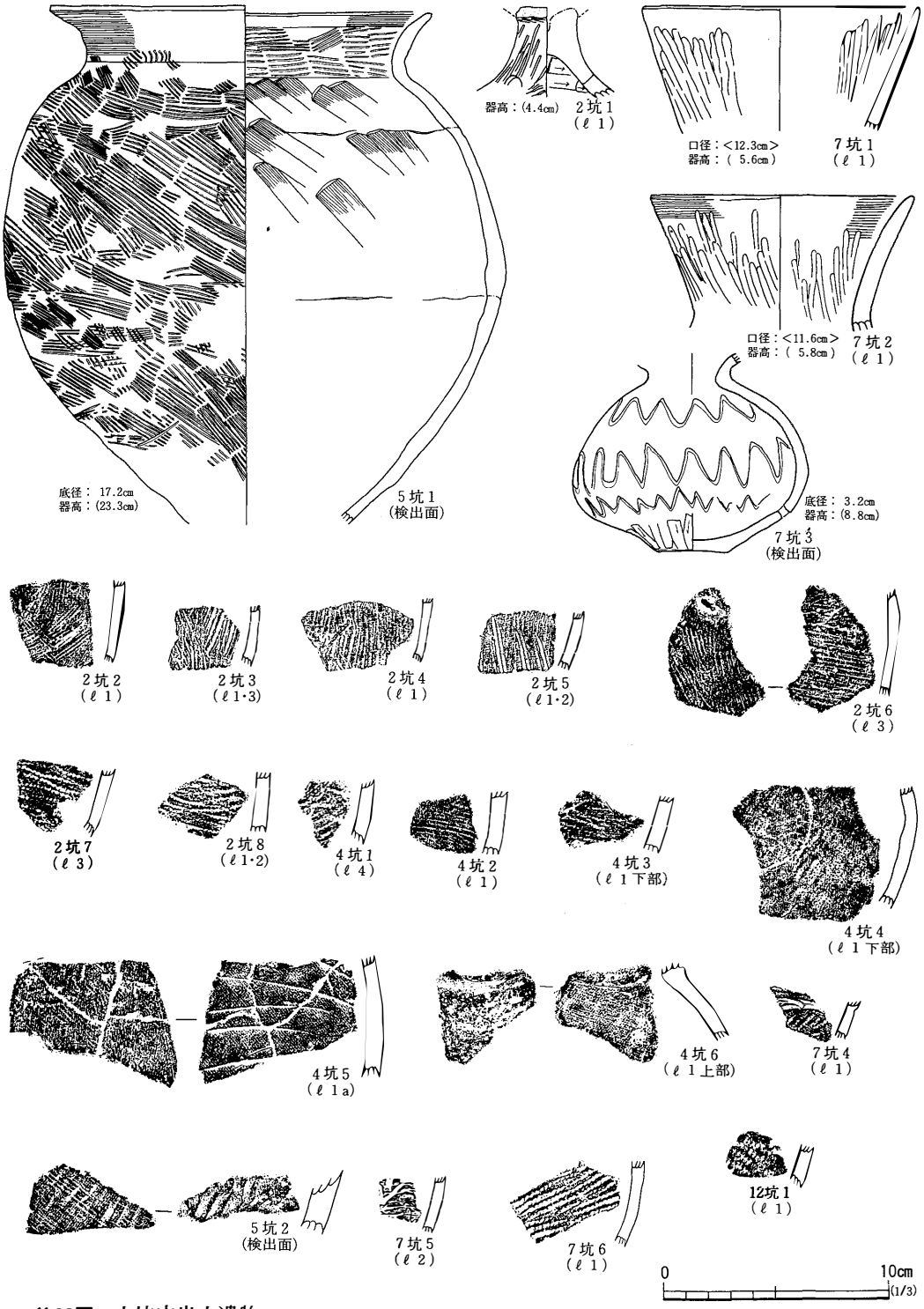
遺物は，５坑１のほか，10点の土師器片がℓ１から出土している。５坑１は，口縁部が強く外反する土師器甕で，口縁部にヨコナデ，体部外面にハケメ調整が加えられている。５坑２は，内面と外面とに別種の工具によるハケメを加えた土器である。外面にはハケメ工具の押し引きがなされている。

本遺構の年代は，出土土器から見て古墳時代前期に属する可能性が高い。遺構の性格は不明だが，遺構掘り込み面がすでに破壊されていることや，規模が類似する６号土坑が近接して存在する点を考え併せると，本来は住居跡内の施設であった可能性もあると言えよう。　（本　間）

６号土坑　ＳＫ06　（第37図）

Ｉ－13グリッドのＬⅥにおいて検出した。付近は，かつての圃場整備事業の際にＬⅥ・ＬⅦまで削平されており，５号土坑と同様，本遺構も旧状をとどめてはいない。

遺構は，検出面において，長径1.20ｍ×短径0.87ｍの楕円形を呈する。遺構の南西側は緩く立



第39図　土坑内出土遺物

ち上がるが，北東側はやや深く円形に落ち込んでいる。北東側の落ち込み部分の径は約54㎝で，検出面から底面最深部までの深さは18㎝を測る。遺構内堆積土は２層からなる。ℓ１は黒褐色シルトで，遺物を包含する。ℓ２は周壁から崩落した砂を多く含む灰黄褐色シルトである。堆積状態から見て，いずれも自然流入土と考えて良いものと思われる。

ℓ１から土師器片２点が出土しているが，図化可能なものはなく，年代の判別も困難である。

本遺構の年代は，出土土器が細片であるため不明である。遺構の性格も不明だが，５号土坑に近接して存在している点を考慮すると，２基の土坑は関連する遺構である可能性が高く，本来は住居跡内の施設であった可能性もあると言えよう。（本　間）

７号土坑　ＳＫ07（第37・39図，図版24・31）

調査区西側県道沿いのＨ・Ｉ－13グリッドのＬⅥにおいて検出した。付近は著しい削平を受けており，ＬⅤ以上の土層はすでに失われている。本遺構の検出面はＬⅥであるが，掘り込み面はさらに上層にあったものと見られる。

遺構は，長さ1.43ｍ，幅0.55ｍの長楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは，最も深いところで８㎝を測り，壁面はなだらかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが，わずかな起伏が認められる。堆積土は，青灰色砂質土の単層で，酸化鉄の赤褐色粒を含む。

堆積土内からは，破片数にして55点の土器が出土した。７坑３は弥生土器の小型壺である。内外面に朱彩を施し，体部はナデの上に棒状工具で波状文を描いている。体部下端にはナデの上にケズリが施され，底部近くに小さな穴が穿たれている。７坑１・２は土坑の検出面上で出土したものである。いずれも土師器の坩に類似した丸底壺の口縁部と思われる。本土坑が埋没した年代は，出土土器から見て，弥生時代後期以後であろう。（中　野）

12号土坑　ＳＫ12（第38・39図，図版24）

Ｋ－23グリッドのＬⅣ上面で検出した。東側の一部が用水路によって破壊されている。

遺構は，検出面における径が約0.67ｍ，遺構底面の径が0.68ｍ×0.64ｍを測る円形の土坑である。断面の形状は，底部付近がやや膨らむビーカー状をなし，遺構西半の周壁は，わずかにオーバーハングしている。底面は平坦で，検出面から底面最深部までの深さは52㎝を測る。遺構内堆積土は，明黄褐色シルトのブロックを多く包含する灰黒色シルトである。人為的に埋め戻された可能性が高い。また，遺構検出面には，加熱を受けて赤変した礫が３個認められた。

遺物は，堆積土内から土師器・弥生土器の細片が７点出土しているが，図化できるものは少ない。12坑１は出土した弥生土器片である。

遺構に確実に伴う遺物がないため，本遺構の年代については不明とせざるを得ない。遺構の性

格も不明だが，人為的に埋め戻されている点や，上面に焼礫が認められていた点から見て，墓坑の可能性があると言えよう。（本　間）

16号土坑　ＳＫ16（第38図，図版24）

Ｋ－22グリッドのＬⅣ上面で検出した。径約50㎝のほぼ円形の平面形を呈する遺構であるが，検出面においては，上部崩落のため，長径0.74ｍ×短径0.60ｍの規模を呈する。断面の形状は，ビーカー状をなし，遺構東半の周壁は，わずかにオーバーハングしている。底面は平坦で，検出面から底面最深部までの深さは62㎝を測る。遺構内堆積土は，軟質の灰黒褐色シルト１層からなり，年代的にはかなり新しい堆積土という印象が強い。

遺物は，堆積土内から土師器の細片が５点出土しているが，図化できるものはなく，年代を判別しうるような特徴を持つものも存在しない。

遺構に確実に伴う遺物はなく，年代や性格は不明とせざるを得ない。（本　間）

17号土坑　ＳＫ17（第38図，図版24）

Ｌ－23グリッドのＬⅣ上面で検出した。南北85㎝×東西77㎝の隅丸方形の平面形を呈する。断面の形状は鍋底状をなし，周壁は60°～80°の角度で立ち上がる。底面は平坦で，検出面から底面最深部までの深さは14㎝を測る。遺構内堆積土は，軟質の黒褐色シルト１層からなる。底面上に扁平な礫が１点存在する。出土遺物はなく，年代や性格は不明とせざるを得ない。（本　間）

第５節　土器埋設遺構

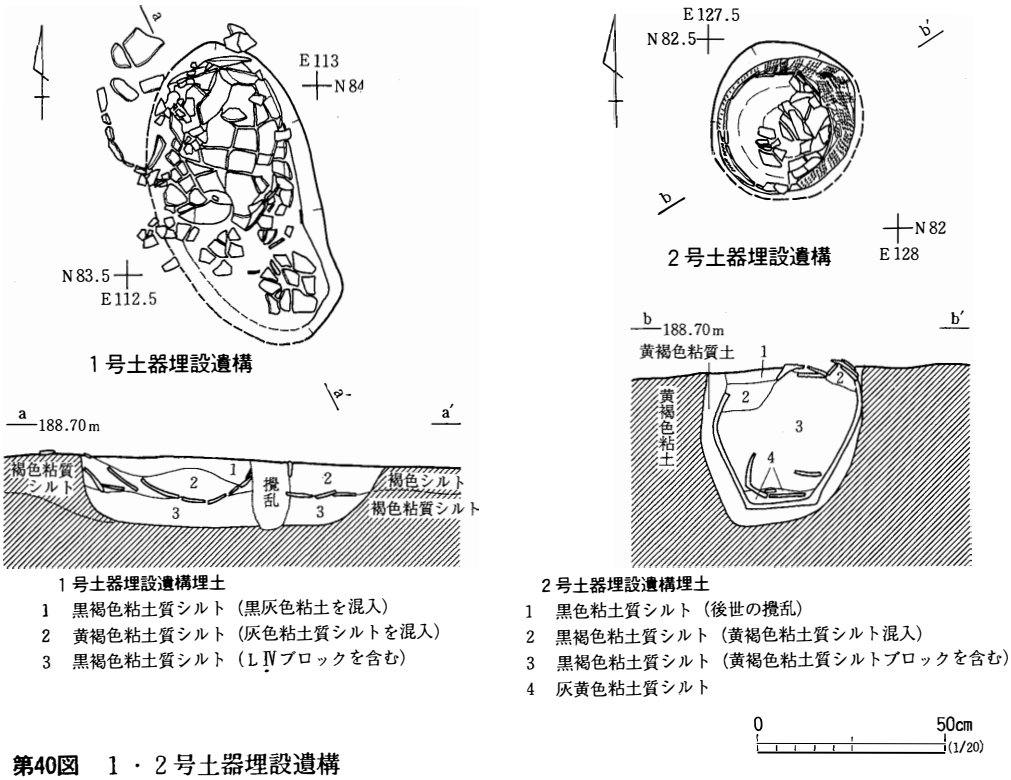
１号土器埋設遺構　ＳＭ01

遺　　構（第40図，図版25）

第１次調査区南東側のＬ－22グリッドで発見された。検出面はＬⅣである。付近はＬⅣ上部まで削平を受けており，本遺構もその上半は破壊されたものと考えられる。調査は，掘形の南北中心軸から西側の掘り込みを優先的に行い，平面図作成後に断ち割りを行って断面観察を行うという手順をとった。

掘形の平面形は楕円形で，上端が長径82㎝×短径43㎝，下端が長径73㎝×短径32㎝である。断面形は箱形をなし，検出面からの深さは18㎝を測る。掘形の中心軸はＮ－18°－Ｗを指す。

掘形内の堆積土は３層に区分される。ℓ１は黒褐色粘土質シルト，ℓ２は黄褐色粘土質シルトで灰色粘土が混じる。ℓ３は褐色粘土質シルトで，ℓ２に暗褐色粘土質シルトが混じった土質である。いずれの土層も良く締まっている。ℓ１の性格は不明であるが，ℓ２とℓ３については人



第40図　１・２号土器埋設遺構

為的埋土と判断される。

土器は，ℓ３上面からℓ２にかけて横位に埋設されていたが，削平のため，掘形の外側にも破片が散乱していた。１埋１の土器は，底部を掘形北端に向け，掘形の中心軸に対してやや斜向するような向きで埋設されていた。１埋２の土器は，掘形の南東側から出土している。ℓ３内からは土器が出土していないことから，厚さにして７㎝ほど土（ℓ３）を埋め戻し，その上に土器を安置して埋めたものと考えられる。

遺　　物（第41図，図版31）

２個体の土器が埋設されていた。１埋１は，現存高41.4㎝，体部最大径41.5㎝，底径11.6㎝を測る大型の壺形土器である。底部から体部下半にかけては直線的に開いて立ち上がり，体部上半で丸みを持ちながら強く内弯する器形である。体部のほぼ全面にＲの撚糸文が施文されているが，横位に埋設されていたため，体部の片面は削平の影響により欠損している。口縁部破片は全く出土しておらず，埋設された時点ですでに口縁部を欠いていた可能性が高い。

１埋２は，底径11.6㎝，現存高4.8㎝の底部破片である。Ｒの撚糸文を施文し，体部下端にケズリを加えている。接合するような体部破片は他に見当たらない。１埋１の土器に対する蓋として再利用されたものと思われる。

第41図　１号土器埋設遺構の土器

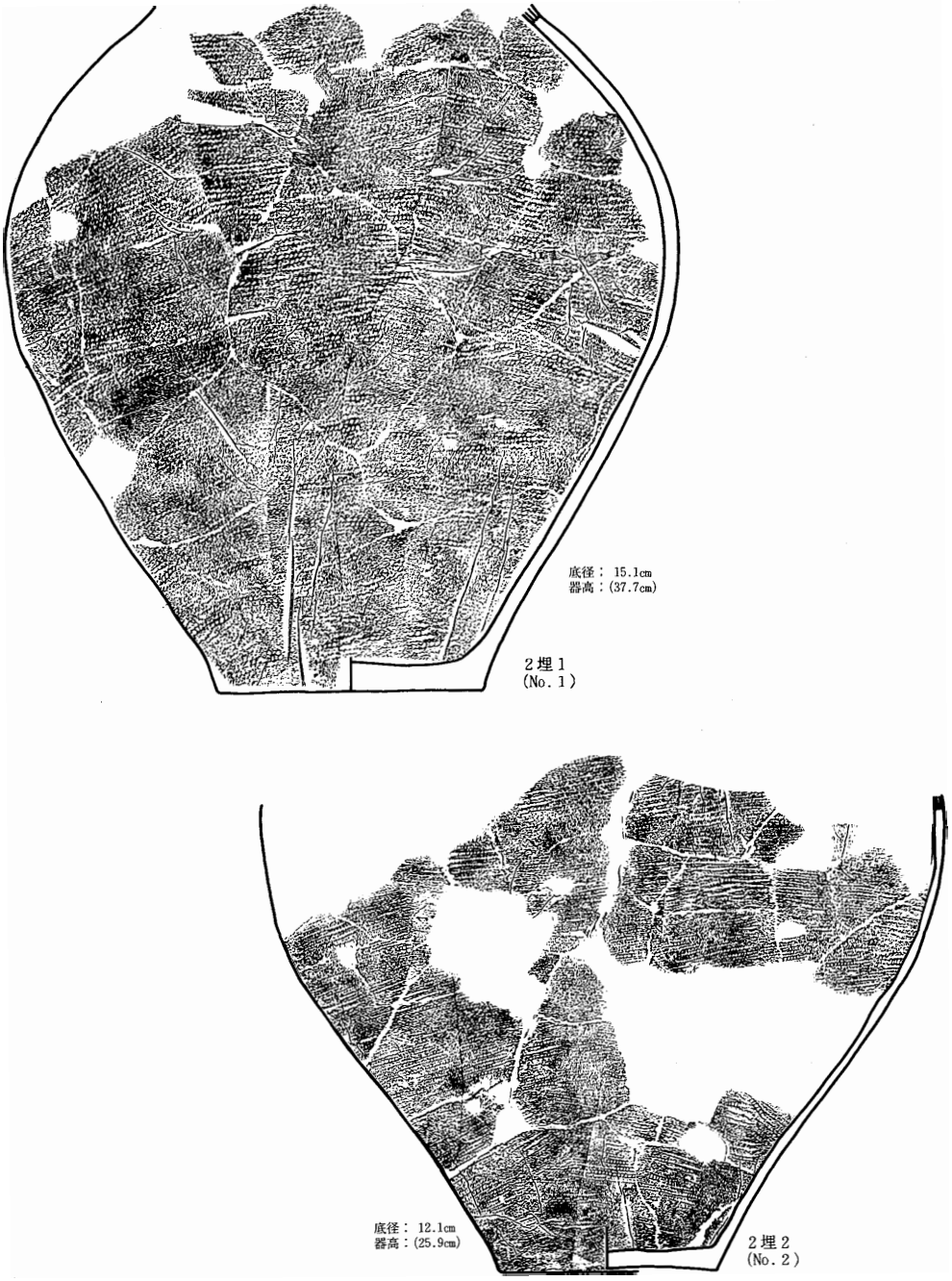
ま　と　め

本遺構は，２個体の土器を横位に埋設したものである。１埋１の土器が掘形北側にあり，１埋２の土器が掘形南側に埋設されている点を考慮すると，１埋２は，１埋１の開口部を覆う蓋として利用された可能性が高い。このような土器の出土状態から見て，本遺構は土器棺墓としての性格を持つものと判断できよう。本遺構の年代は，埋設土器の特徴から見て，弥生時代天王山式期に属すると考えられる。　（西　山）

２号土器埋設遺構　ＳＭ02

遺　　構（第40図，図版25）

第１次調査区南東側のＬ－23グリッドで検出した。遺構検出面はＬⅣで，検出段階では，土器の割れ口がほぼ円形に露出し，その中央付近に底部外面を上にした土器片が確認された。調査は，検出面における状況を図化し，埋設土器を残したまま南側を断ち割って断面観察を行い，さらに埋設土器の南半分を断ち割って，土器内の土層観察を行うという手順で進めた。



第42図　２号土器埋設遺構の土器

遺構は,口縁部を欠損する大型壺形土器(2埋1)の上に,体部下半のみが遺存する土器(2埋2)を底部を上にして被せ，掘形内に正位に埋設したものである。2埋2が2埋1の上に伏せられている状況は，検出面の東側において確認されている。ただ，2埋2が潰れているため，旧状がそのまま保たれた出土状態とはなっていない。

埋設土器内の堆積土は，4層に区分される。ℓ1は，灰黄色粘土で，LⅣに非常に近い土質である。ℓ2は黒褐色粘土質シルトで，ℓ3は黄褐色粘土のブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。ℓ4は灰黄色粘土で，2埋1内の底部付近に薄く堆積していた。ℓ3内からは2埋2の底部破片が出土しているが，検出面で出土した底部破片と接合している。このことから，2埋2は後世のなんらかの作用によって圧潰・陥没して，土器の一部が2埋1内に入りこんだものと考えられる。つまり2埋1は,もともとは内部が空洞となっていたこととなる。この点を考慮すると，ℓ1～ℓ3は土器が陥没してから流入堆積した土と見なされる。

掘形は，上端が径47㎝の円形の平面形を呈し，下端が長径27㎝×短径24㎝の楕円形を呈する。断面形は袋状で，検出面から底面までの深さは42㎝を測る。掘形と埋設土器の隙間には，黄褐色粘土が充塡されている。

遺　　物（第42図，図版31）

埋設土器は2個体である。2埋1は，掘形の下方に正位に埋設されていたものである。現存高37.8㎝，体部最大径37㎝，底径14.8㎝を測る壺形土器で，口縁部・頸部を欠いている。体部下半が直線的に外傾しながら開き，体部中央から上半は強く丸みを持ちながら内弯する器形である。体部の全面に直前段多条LR縄文が施されている。

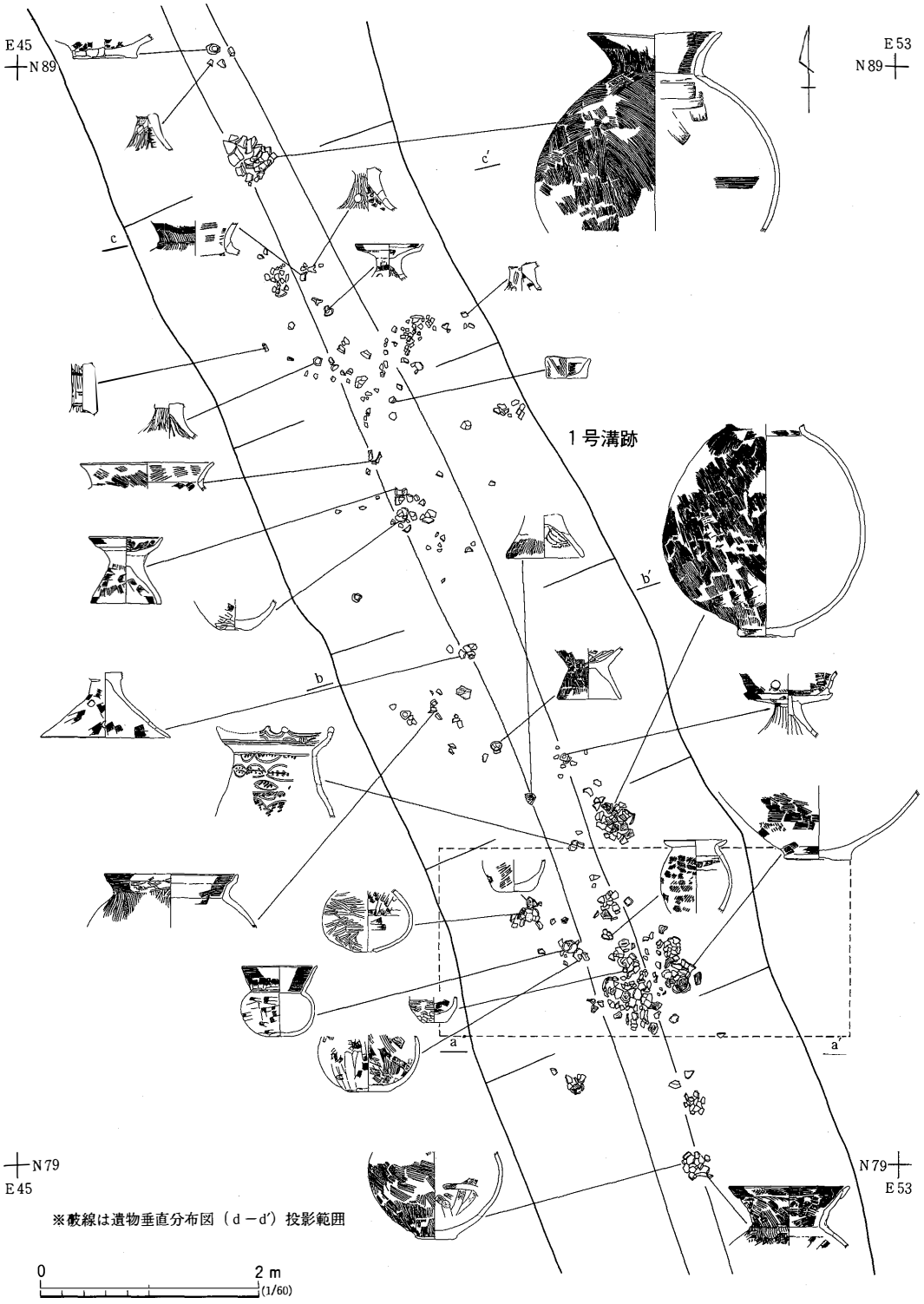
2埋2は，掘形の上方で底部を上にして伏せられていた土器である。前述のように，土器の一部が陥没して2埋1内のℓ3に入りこんでいる。現存高25.9㎝，最大径37.5㎝，底径12.2㎝を測る。体部中央から上を欠損しているが，器形から見て壺形土器であったものと思われる。体部全面に直前段多条LR縄文を施文している。

ま　と　め

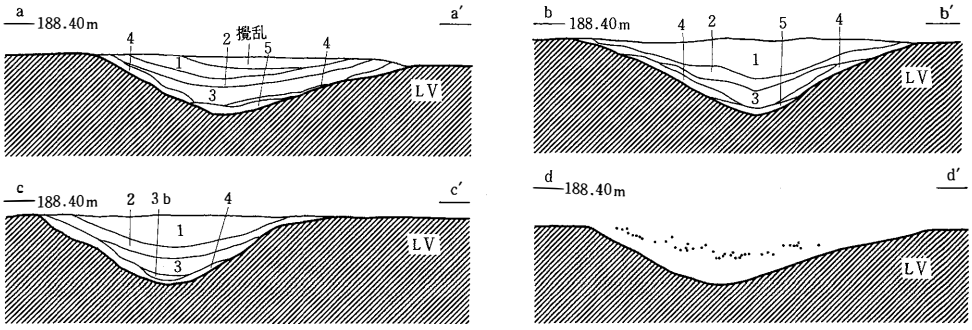
本遺構は，2個体の土器を合わせ口状にして正位に埋設したものである。堆積土の状態から見て，2埋1の内部は空洞であった可能性が高い。土器棺墓としての性格を持った遺構と判断できよう。本遺構の年代は，埋設土器の特徴から見て弥生時代天王山式期と考えられる。　（西　山）

第6節　溝　　跡

溝跡は6条発見された。このうち，4号溝跡と5号溝跡は近代のものであることが判明しているので，ここでは1～3・6号の4条の溝跡について報告する。


E45
N89
E53
N89
c
c′
1号溝跡
b′
b
a
a′
N79
E45
N79
E53
※破線は遺物垂直分布図（d－d′）投影範囲
0
2 m
(1/60)

第43図　１号溝跡（１）



1号溝跡堆積土
1　黒色シルト
（白色の砂をまばらに含む）
2　灰色シルト
（灰色粘土と黒色シルトの混土。遺物包含。堅緻）
3　黒色粘土質シルト
（有機質。吸水性あり）
3b　黒色粘土質シルト
（ℓ3よりやや灰色味を帯びる）
4　オリーブ黒色シルト
（LV相当土を含む）
5　灰色粘土質シルト
（LVを撹拌した層。酸化鉄多い）

0　2m
(1/60)

第44図　1号溝跡（2）

1号溝跡　SD01

遺　　構（第5・43・44図，図版26）

調査区西部のJ～M－13～16グリッドにまたがって検出された溝跡である。検出面はLVであるが，北半部はLVが削平されているため，LⅥで検出している。J－13グリッドから西側は，圃場整備による削平によって破壊されている。

溝跡は，南東から北西に向かって弓なりに弧を描いている。遺存部の長さは約40mで，検出面における幅は，遺存状態の良い南半部において2.60m～2.82mを測る。壁面が30°～35°の角度で直線的に立ち上がり，底面には平坦部が少ないため，溝跡全体の断面形は潰れた「V」字状をなしている。検出面から底面までの深さは46～58cmを測る。底面の絶対高は不揃いであり，北側で相対的に低い部分があるものの，流路跡と仮定するに足るような標高差は持たない。

遺構内堆積土は，ℓ1～ℓ5の5層に大別されるが，ℓ3とℓ4の間に薄層（ℓ3b）が存在する部分もある。ℓ1は非常に粒子の細かいシルトで，白色の細砂をまばらに含んでいる。ℓ2は，溝跡内全面に均一に存在する灰色のシルトで，第3遺物包含層におけるLⅡaに対比される土質と考えられる。LⅡaは調査区内のくぼ地にのみ確認される土層であるが，豪雨・氾濫などの要因によって堆積したものである可能性が高く，本遺構におけるℓ2もそうした自然的要因によって成層されたものと思われる。ℓ2内には遺物が多量に含まれている。ℓ3は，わずかに粘性を帯びた黒色シルトである。混入物はほとんど見られない。ℓ3bはℓ3よりもやや明るく灰色味を帯びた土であるが，基本的にはℓ3と同様の堆積土といえる。ℓ4は，オリーブ黒色を呈するシルトで，ℓ4とℓ5の中間的な層である。ℓ5は灰色の粘土質シルトである。灰黒色のシルトを混入しており，LVを撹拌した層と考えられる。これらの堆積土は，いずれも層厚が薄く，レ

ンズ状に漸次堆積していることから，自然堆積によるものと判断できる。

遺　　物（第45～52図，図版27・31～33）

本遺構から出土した遺物は，弥生土器162点，土師器5,027点,須恵器１点，石器・剝片類６点である。これらの遺物は，すべて堆積土のℓ２から出土したものである。ただし，遺構検出段階において溝跡の東西両端から出土した遺物の中には，「ℓ１」または「検出面」からの出土として取り上げたものがある。溝跡の掘り込みを進める過程で，レンズ状に堆積しているℓ２の東西両端が検出面に露出していることがわかり，サンプリングエラーであったことが判明した。

ℓ２は，黒色シルト層の直下に厚さ10㎝前後で堆積する灰色シルト層である。遺物は，この層からまんべんなく出土しているが，ℓ２が削平を被っている溝跡北半部では密度が希薄で，主に溝跡南半部に多くまとまっていた。南半部における遺物の平面分布を第43図に示した。また，ℓ２がレンズ状に堆積しているのに伴い，遺物の出土レベルも壁際では高く，中央部では低くなっている。その状況を第44図中に垂直分布図として示した。ℓ２とした土層の性質が，豪雨や氾濫などの自然的要因によって堆積したものと考えられる点や，溝跡の壁際にも流入した状態の遺物が存在する点などから，本遺構内の遺物は，自然的要因によって一気に流入埋没したと見るのが妥当と考えられる。

弥生土器（１溝64～77）　64は広口壺形土器である。口縁部下端に無文帯を持ち，頸部・体部には連弧文を基調とした文様が展開する。頸部文様帯の中位に円形竹管の横位連続刺突が加えられ，体部文様帯上端には，同一の円形竹管による交互刺突がなされている。65は，口縁部が強く開く壺形土器である。縄文施文後に，体部上端から口縁部にかけて丁寧なナデが加えられている。66は，体部が直線的に開く鉢形土器で，口縁部付近に径約３㎜の貫通孔がある。この貫通孔は，周囲の素地土の隆起状態から見て，焼成前に開けられていたものと判断される。約2／5が欠損しているため，２個一対の孔となるかどうかは不明である。口端から体部・底部の外面にまで縄文が浅く施文されている。67～77は破片資料である。おおむね天王山式期のものであるが，68は２本同時施文のシャープな平行沈線を描くもので，桜井式期のものと考えられる。

土師器甕（１溝３・46～57）　本遺構から出土した甕形土器においては，完形に復元されたものはない。口縁部に着目すると，口縁部上端が短くつまみ出されるもの(３・49・52)，頸部から丸みを帯びて外反するもの(46～48・50・53)，頸部で「く」字状に外折してそのまま直線的に開くもの(51)などの各種がある。54～57は台付甕形土器の脚部と思われる。

土師器壺（１溝２・24～45）　ミガキ調整を施す小型丸底の壺形土器については坩に分類しているので，ここではハケメ調整を主としたやや大型のものに限定する。２は，頸部が「Ｓ」字状に屈曲するものである。有段口縁をなす壺形土器としては，他に25・29・33などがあるが，直角に近い角度で口縁部が張り出すものは２のみである。25・33は，外反する口縁部に粘土帯を貼り付

けたもので，29は，別々に製作した口縁部と頸部を接合し，頸部上端に段を持たせたものである。頸部と体部の境界には横位の微隆線がめぐり，隆線上にはヘラ状工具の短沈線による刻みが連続的に加えられている。これと同様，別々に製作した口縁部と頸部を接合したものとしては，他に40があげられる。この土器の頸部内面には粁痕が観察される。26・28は，口縁部上端が短くつまみ出された壺形土器で，比較的小型である。頸部では，ハケメ調整単位の末端が当たるため，素地土が盛り上げられてミミズ腫れ状の隆線が形成されている。同様の効果を見せるものに25・27がある。頸部に横位隆帯を持つものとしては，29の他に41がある。41では，横位隆帯上にハケメ工具の先端部による刺突が加えられている。

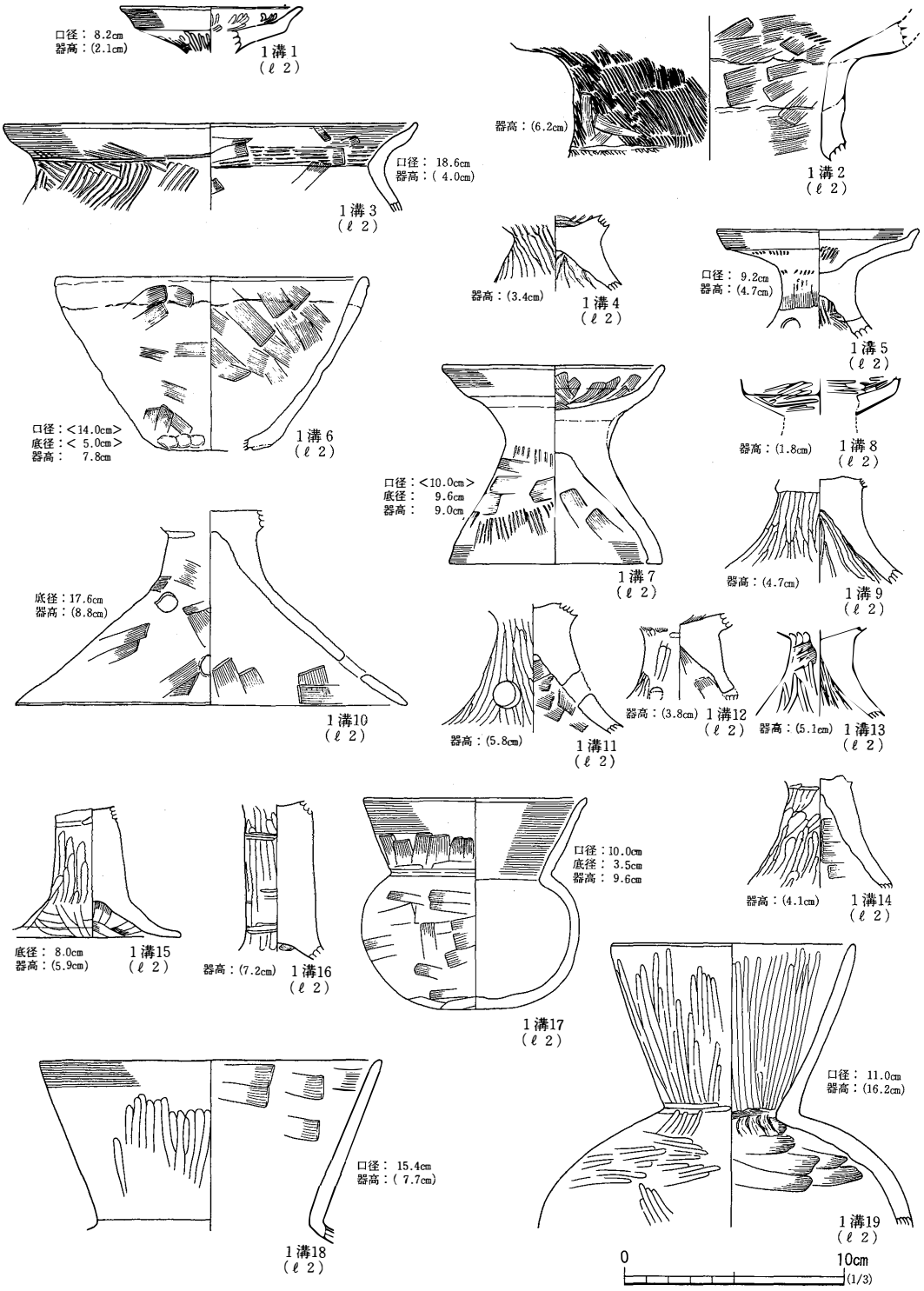
単純に外反する口縁部を持つものとしては，24・30・31がある。24は，体部がかなりゆがんだ器形で，口縁部にヨコナデ，体部にヘラナデが加えられている。30も同様の調整が加えられているが，ヘラナデの前にハケメを加えた痕跡を残している。31は，外面のほぼ全面にハケメを加えた大型の土器である。

口縁部を欠損するが，32～45の大半は壺形土器と考えられる。32・35～39・42～45のように，ドーナツ状の粘土帯を貼付して上げ底状の底部をなすものが多いが，34は平底となっている。

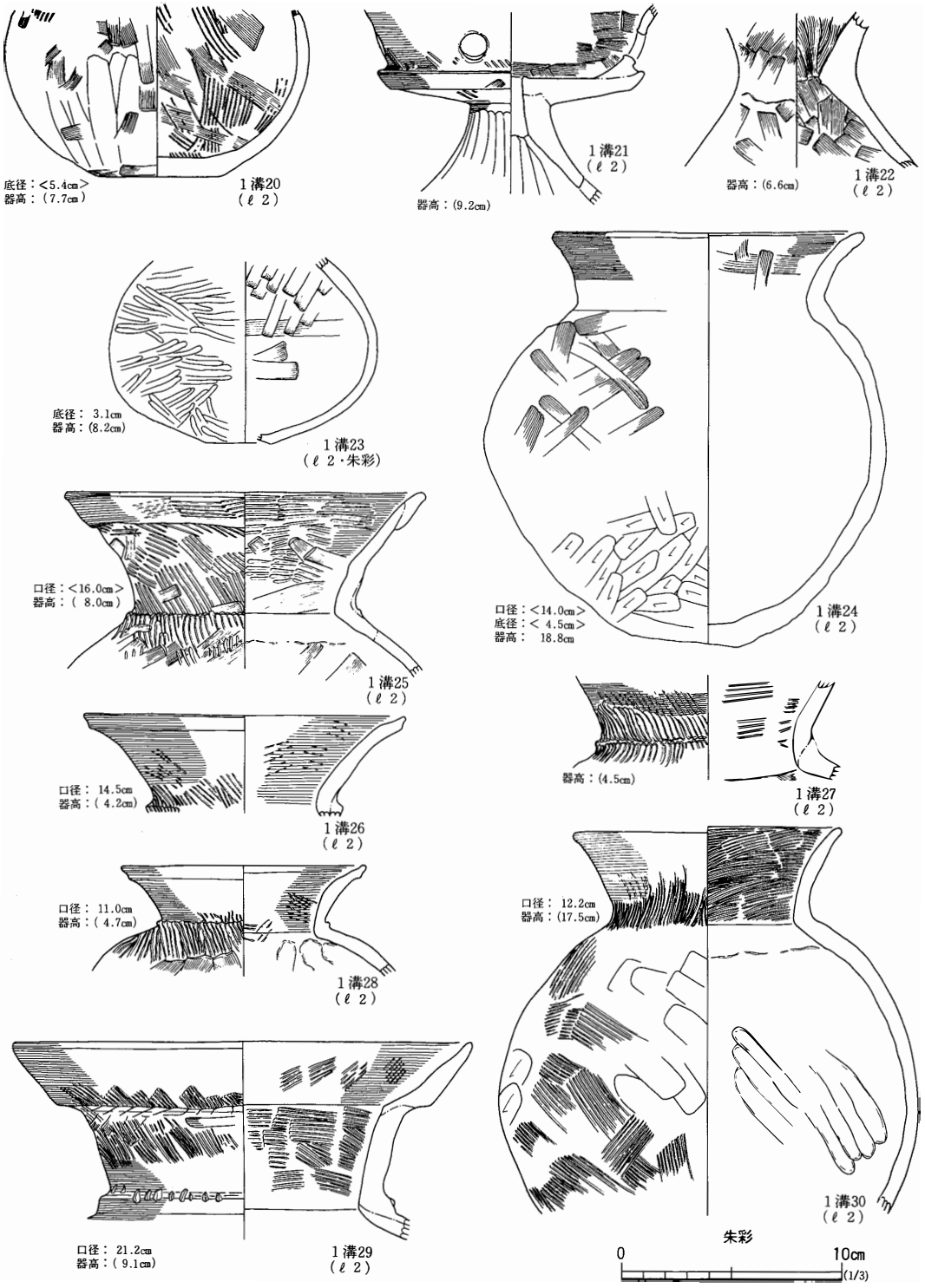
土師器坩　（1溝17～20・23）　坩形土器は量的には少ない。17は広口のもので，口縁部外面はヨコナデののち丁寧なナデが加えられ，体部外面はケズリののち簡単なナデが加えられている。ミガキが観察されるのは頸部のみである。18は厚手の口頸部で，縦方向のミガキが施されている。19は，全面に丁寧なミガキを加えたやや大型の坩形土器である。20はハケメののちに丁寧なナデが加えられている。23は，内外面に朱彩を施し，体部に丁寧なミガキを加えたものである。上げ底をなす底部には，焼成後に穿孔がなされている。

土師器器台　（1溝1・4・5・7・8・11～13・21・22）　器台には，全体の器形が鼓状をなすもの(4・22)と，受け部が小皿状をなすもの(1・5・7・8)，皿状の受け部に椀状の体部をのせた特殊器台(21)がある。このうち，21・22は，受け部と「ハ」字状の脚部との間に貫通孔が設けられている。受け部が小皿状をなすものは，ナデまたはミガキによって丁寧に調整されており，ハケメは痕跡的に残る程度のものが一般的である。1・5・8では受け部上端がつまみ出されて屈曲し，脚部上端も強くくびれているが，7は受け部がやや丸皿状で脚部上端の絞りが弱く，脚部全体の形態は鼓形のものに近い。21の椀状の体部には，径1.3㎝の円形の窓が6単位設けられている。11～13は脚部のみの破片である。11には径1.2㎝の円形の窓が3個設けられている。なお，1・8には朱彩が施されている。

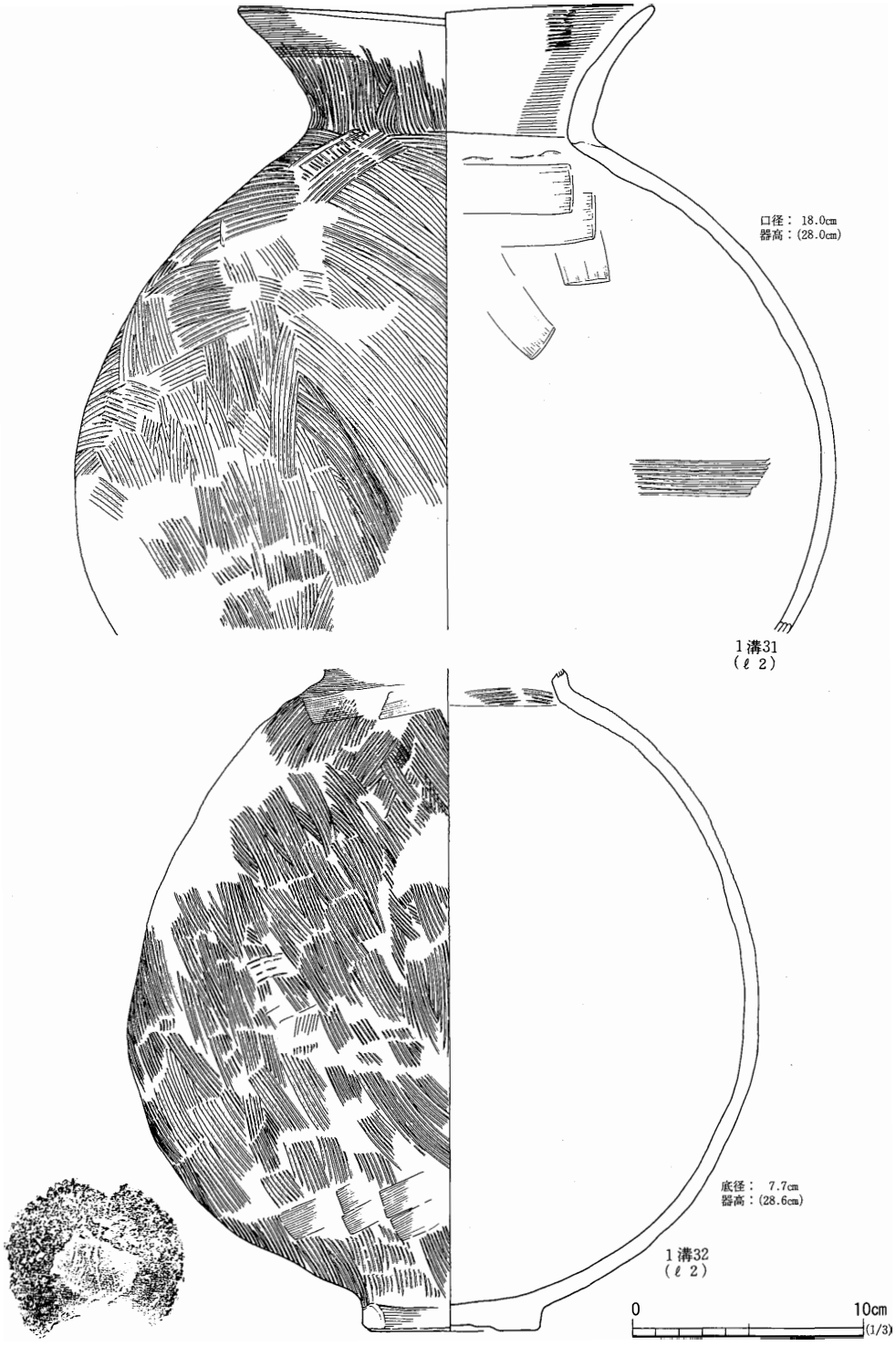
土師器高坏　（1溝9・10・14～16）　本溝跡内においては坏部が遺存しているものはなく，すべて脚部のみの出土である。10は，「八」字状に大きく裾を広げたもので，径1～1.2㎝の円形の窓を上部と下部に交互に設けている。脚部の3／5が欠損しているため詳細は不明だが，窓は上下



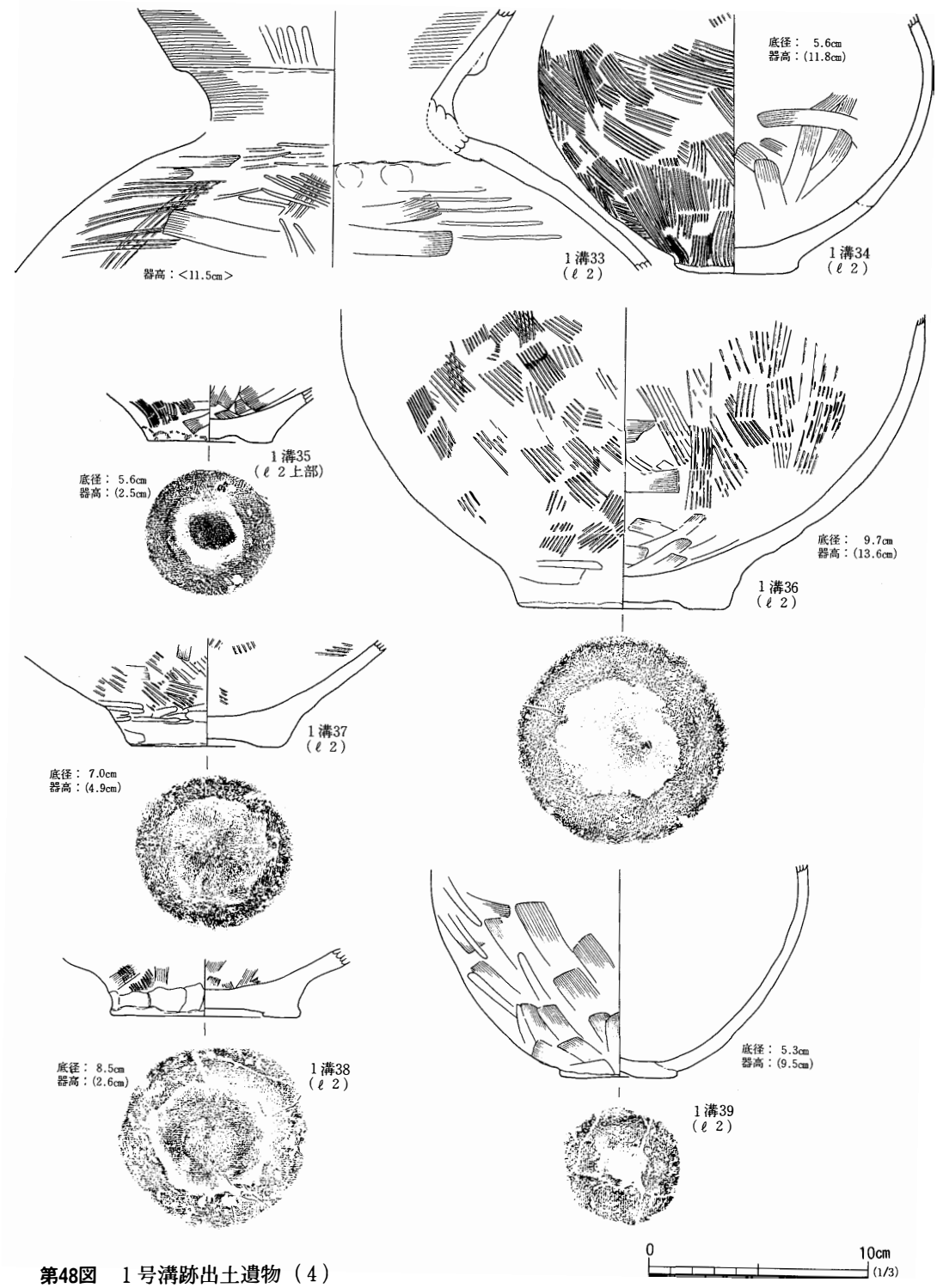
第45図　１号溝跡出土遺物（１）



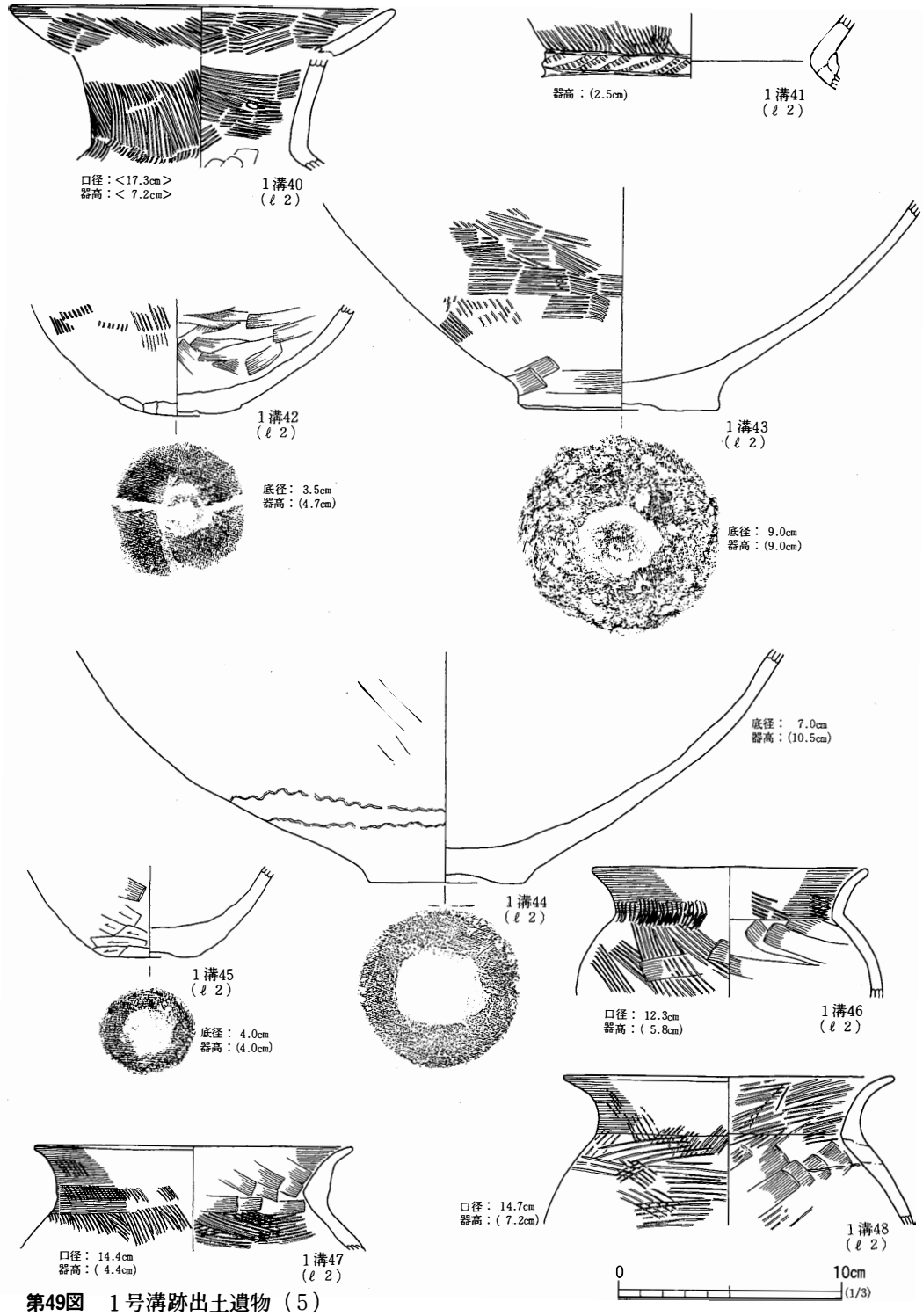
第46図　1号溝跡出土遺物（2）



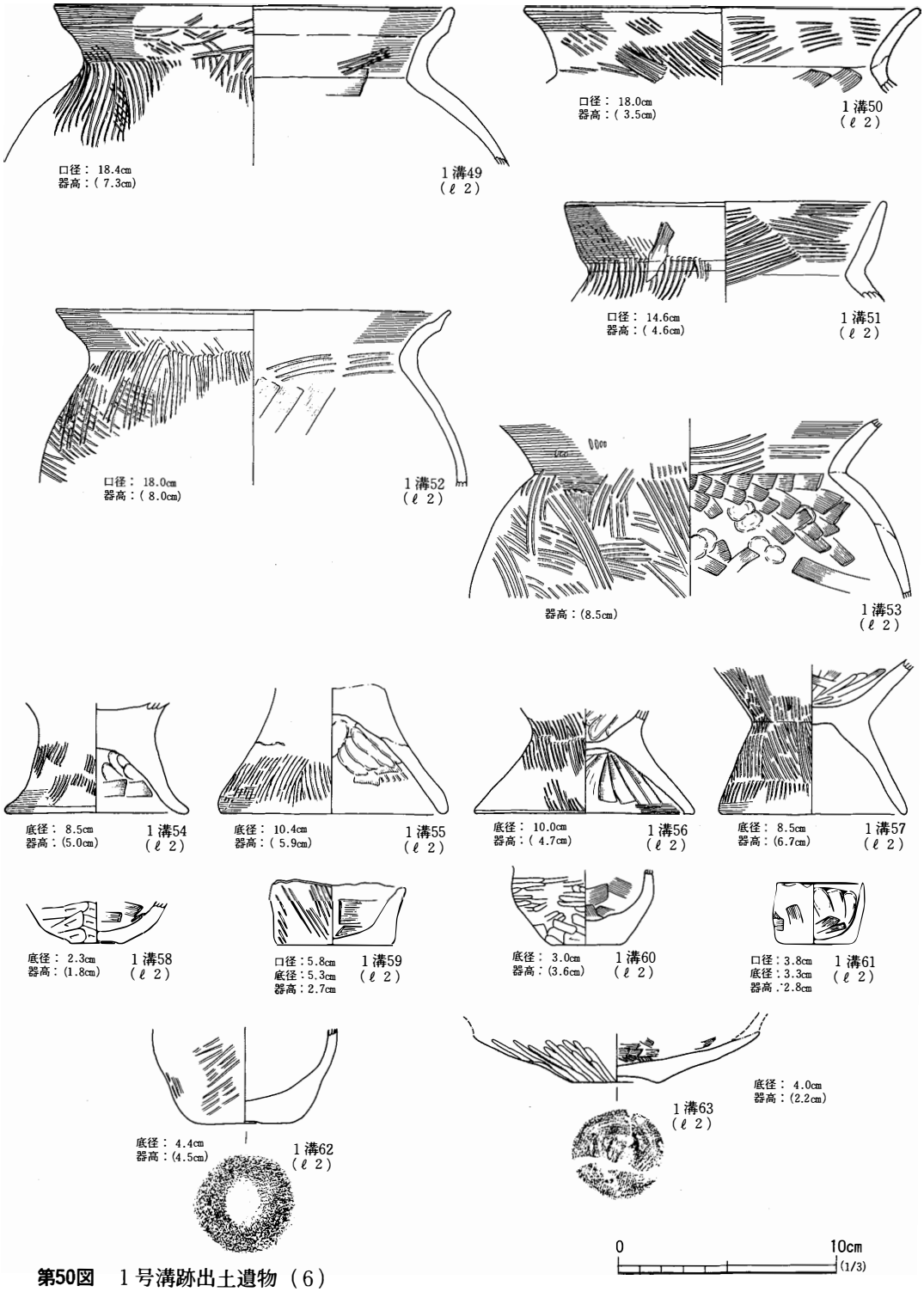
第47図　１号溝跡出土遺物（３）



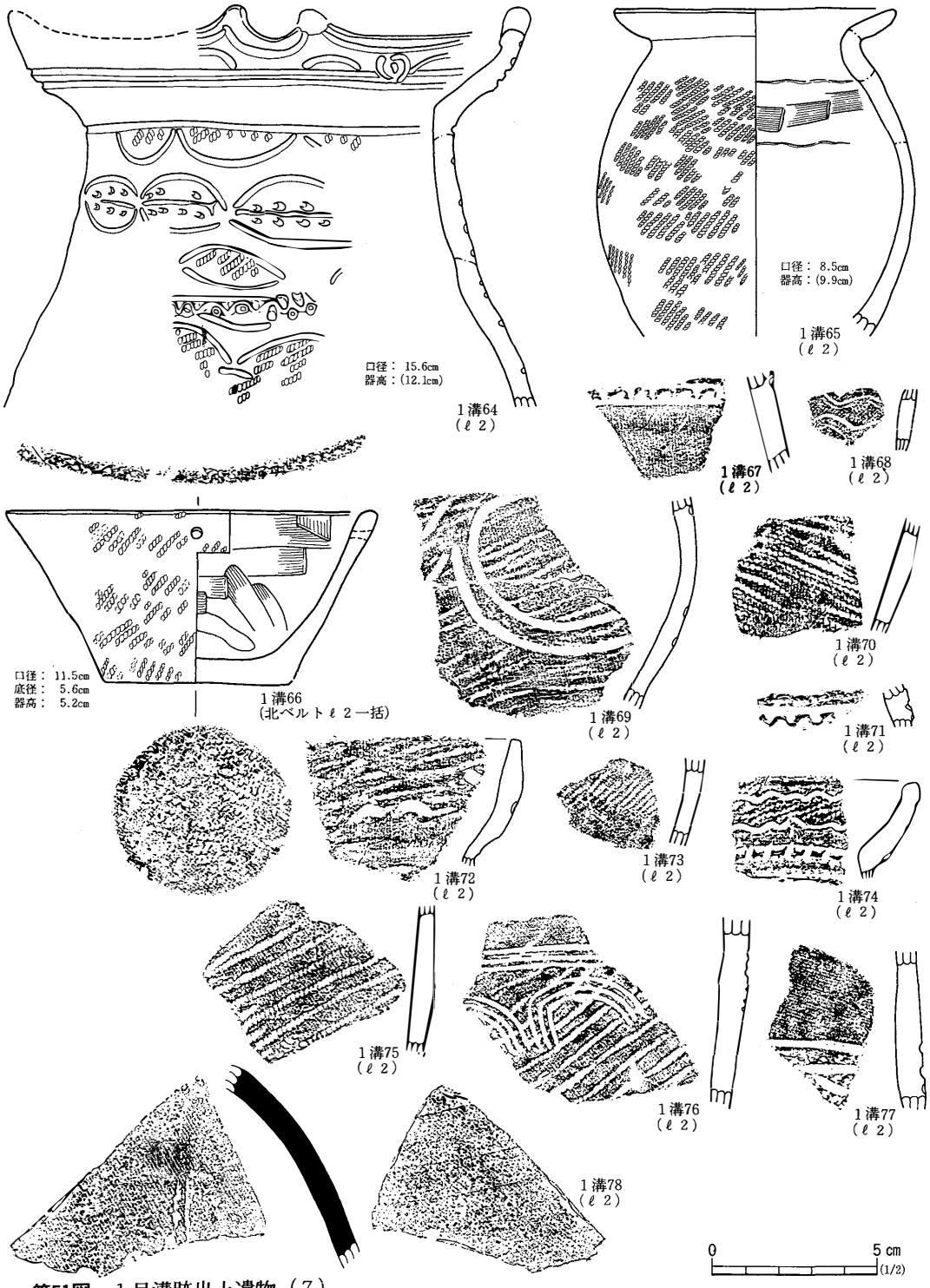
第48図　1号溝跡出土遺物（4）



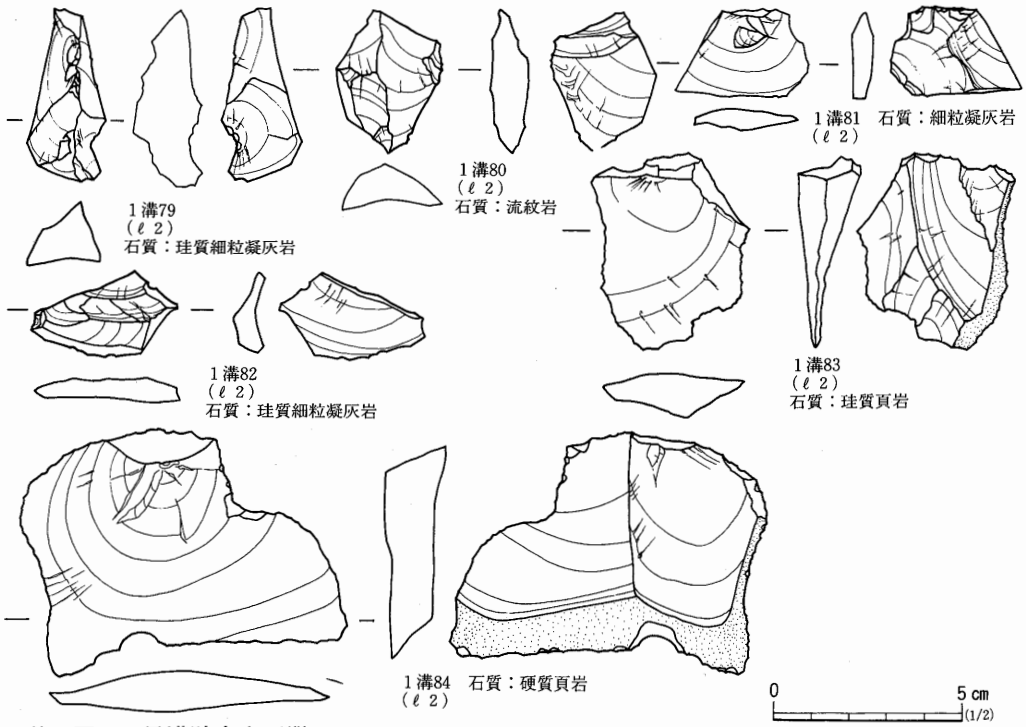
第49図　１号溝跡出土遺物（５）



第50図　1号溝跡出土遺物（6）



第51図　１号溝跡出土遺物（７）



第52図　1号溝跡出土石器

ともに3単位であると思われる。9・14も「八」字状に開脚するものである。15・16は，円柱状の脚部に大きく「八」字状に広がる脚裾部が付くものである。15には朱彩が施されている。

土師器甑　（1溝6）　6は，約2／5の遺存であり，底部も一部分が残るのみであるが，器形と調整の状態から見て甑と判断した。口縁部付近に粘土紐の積み上げ痕を明瞭に残し，内面に粗いヘラナデ，外面に粗いナデとユビオサエを加えている。外面は，ユビオサエのために凹凸を持ち，再酸化のため器面が荒れている。

土師器坏　（1溝63）　63は，底部にケズリを加えて上げ底とした坏である。外面には縦方向のミガキが丁寧に加えられ，内面にはハケメののち，細い線状痕を有するヘラナデを加えている。体部上半は剝落によって失われているが，皿状の体部下半の上に椀状の上半部が付く器形と思われる。素地土接合面にもヘラナデ調整痕が認められるので，体部の上半と下半を別々に製作して接合したものと思われる。

土師器小型土器　（1溝58～62）　58は，内面にヘラナデ，外面全面にケズリが加えられている。底部もケズリ出しによって上げ底とされている。59は，平底で外面に縦位のハケメ，内面に横位のヘラナデが加えられる。60は，厚手で丁寧なつくりの土器である。外反する口縁部が付くものと思われる。外面に丁寧なミガキ，内面に横位のナデが加えられる。61は，薄手平底で，内面に粗いユビナデ，外面に縦位のナデが加えられる。62は，底部中央がやや上げ底気味になるもので

ある。外面にハケメを施すが，内面は器面が荒れているため調整不明である。

須恵器　（１溝78）　１点のみ出土した。長頸瓶の体部と思われる。内外面にロクロナデが施されており，外面の一部には自然釉が認められる。

石器　（１溝79～84）　79はフレイクコアで，80・81・82はフレイクである。83もフレイクであるが，腹面左側縁に微細剥離痕が認められる。84は，打面周辺を除く縁辺部のすべてに微細剥離痕が認められる大型剥片である。

ま　と　め

本遺構は，「Ｖ」字状の断面形を呈する溝跡で，その形態から考えて人為的に掘削されたものと思われる。遺構が掘削された年代を示すような遺物は出土していないが，堆積土ℓ２からは多量の遺物が出土している。ℓ２は氾濫等の自然的要因によって堆積した土層と考えられるが，弥生土器・古式土師器のほかに奈良・平安時代のものと思われる須恵器も含まれることから，ℓ２の堆積年代は奈良・平安時代ごろと考えられる。また，遺物の出土はないが，ℓ２の下方に堆積するℓ３は，基本土層ＬⅡb～ＬⅡcに対応する性質のものである。以上の点を考慮し，本遺構の構築年代については，弥生時代から古墳時代前期の中で幅を持たせて考えたい。　（本　間）

２号溝跡　ＳＤ02

遺　　構　（第５図；和泉遺跡遺構配置図）

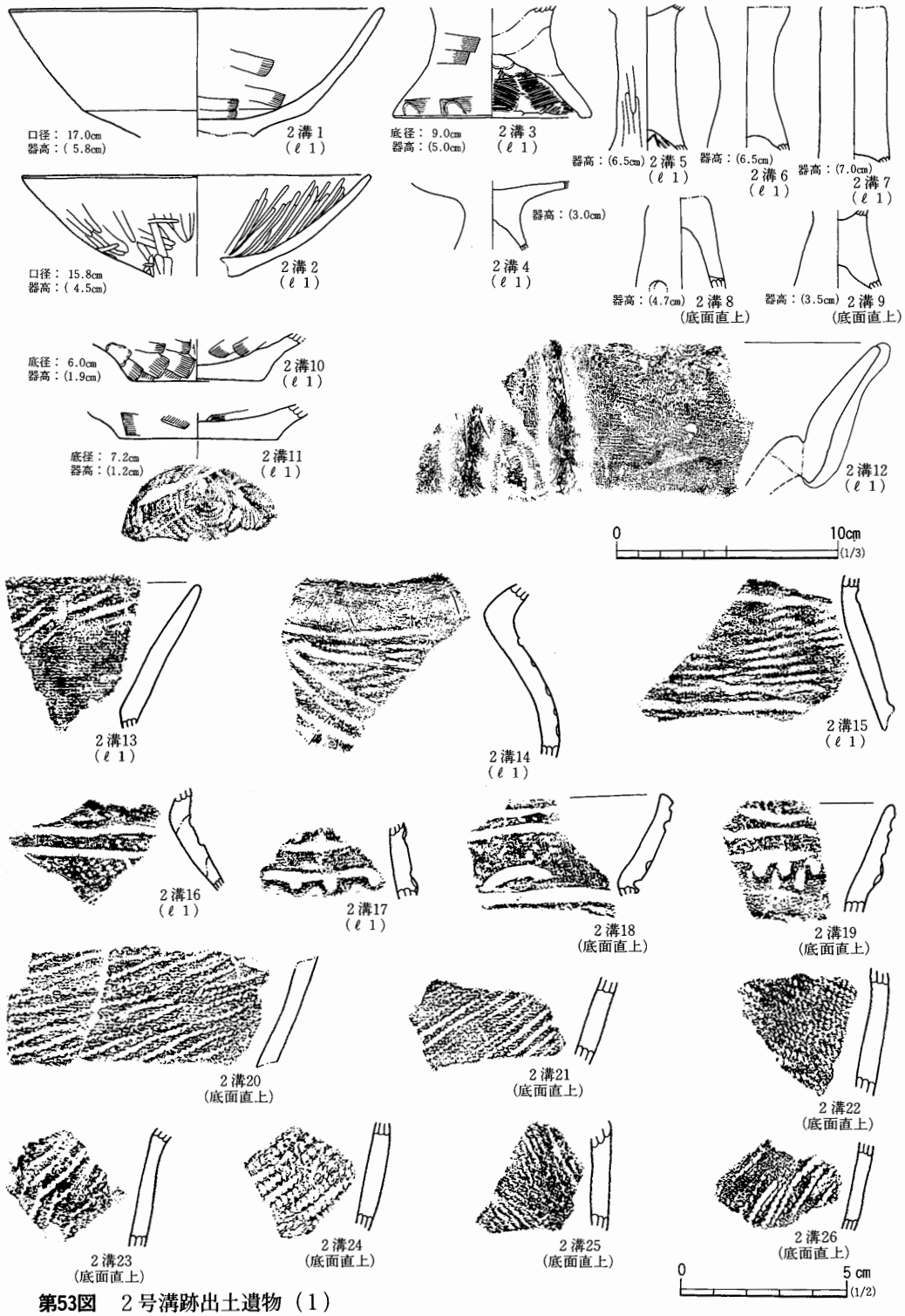
調査区中央部北端のＨ－17～22グリッドで検出した。検出面はＬⅥである。この付近は，圃場整備の際の削平によってＬⅤから上の土層がなく，遺構上端の層位は不明である。

溝跡は，東から西に蛇行しながら延びるものである。調査区内で確認された範囲は，東西の長さ60ｍ，南北の最大幅6.8ｍであるが，北壁が調査区の外にあるため，正確な幅については不明である。検出面から底面までの深さは，最大で1.6ｍを測る。南側の壁面は30°～40°の角度で立ち上がる。底面は礫層（ＬⅦ）にいたっており，ほぼ平坦である。

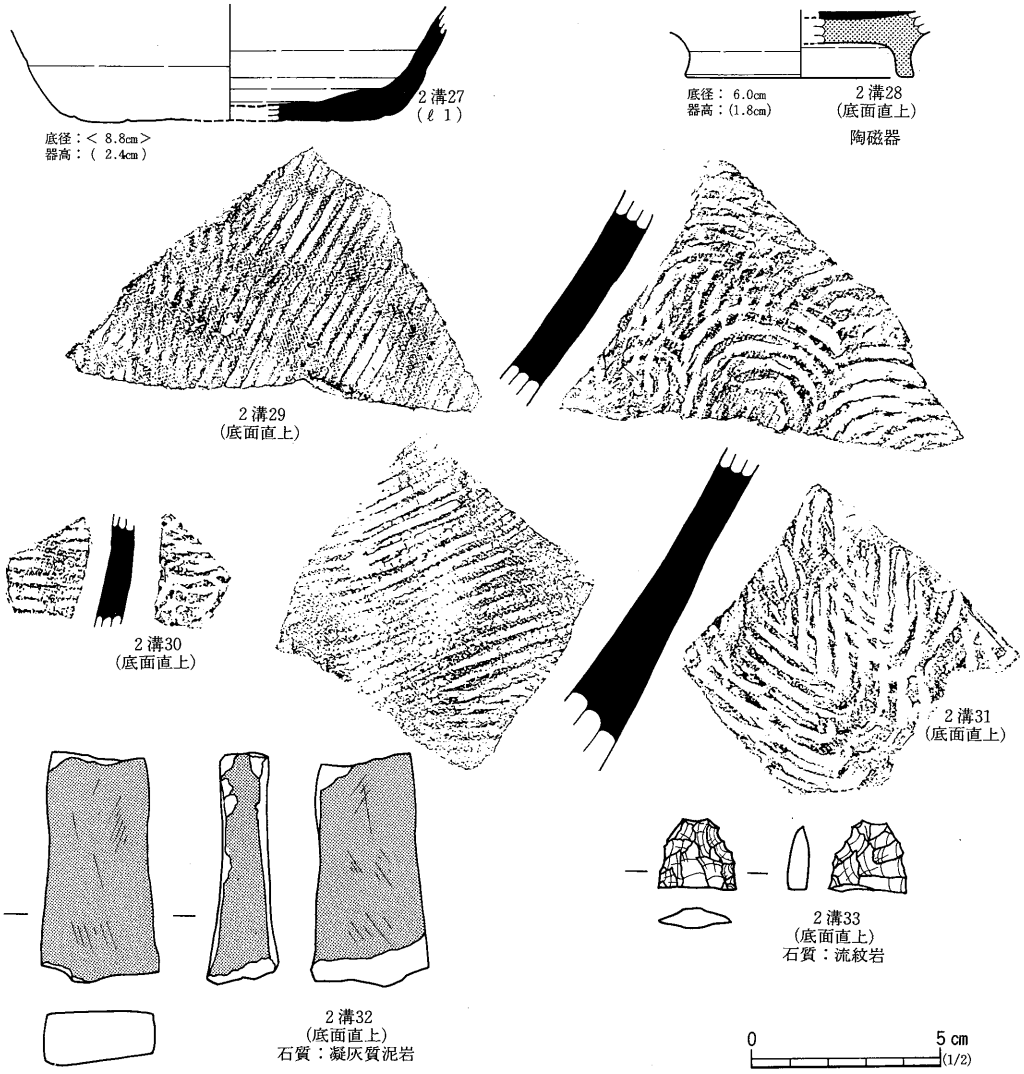
堆積土は，暗青灰色の粘土質シルトのみで，すべて圃場整備の際の盛土と判断される。これを便宜上ℓ１とした。ℓ１が盛土であることが一目瞭然であったため，調査開始当初はトレンチのみの調査で済ませる予定であった。しかし，ℓ１内にも遺物が多く，底面上からも遺存状態の良い土器が出土することが判明したため，全面を掘り下げた。

遺　　物　（第53・54図）

出土した遺物は，弥生土器片898点，土師器片75点，須恵器片９点，陶器片５点，砥石１点，石器16点である。このうち底面直上から出土したものは，２溝18～26の弥生土器片，２溝33の石器，２溝８・９の土師器高坏，２溝29～31の須恵器片，２溝32の砥石，２溝28の陶器片などで，いっさい年代的なまとまりを持たない。



第53図　2号溝跡出土遺物（1）



第54図　２号溝跡出土遺物（２）

弥生土器　（２溝14～26）　すべて天王山式期のものと思われる。口縁部の交互刺突文，体部の連弧文などが顕著に認められる。

土師器　（２溝１～13）　１・２・４～９はすべて高坏である。器面が荒れているため調整が判別しがたいものが多いが，脚部が円柱状のもの（５～７）と「八」字状のもの（４・８・９）の両者がある。３は器台または台付甕である。10・12は壺形土器と思われる。10は平底の底部破片で，内面には籾痕が認められる。12は縦位３条の棒状浮文を口縁部に有するものである。頸部との粘土紐接合面から剝がれた破片である。この接合面にはヘラ状工具による浅い刻みが連続的に加えられている。以上の土師器は古墳時代に属するが，11は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器甕で，

平安時代のものと思われる。底部周縁の一部に手持ちヘラケズリが加えられている。

須恵器　（2溝27・29～31）　27は底部回転ヘラキリで，再調整を加えない坏である。28～30は，外面に平行状のタタキメ，内面に青海波状の当て具痕を持つ甕の破片である。いずれも奈良～平安時代の所産である。

陶器　（2溝28）　椀形の器形を呈するものと思われる。ケズリ出しによる高台を持ち，内面に鉄釉が付着する。近世の所産であろう。

砥石　（2溝31）　凝灰岩質泥岩の礫を利用したものである。上下の端部を除く側面すべてを使用している。4面のうち，3面までが磨滅の度合が著しい。

石器　（2溝32）　欠損のため，全体の形状や器種は不明である。流紋岩の薄手の剝片素材を用い，周縁部に押圧剝離を加えている。

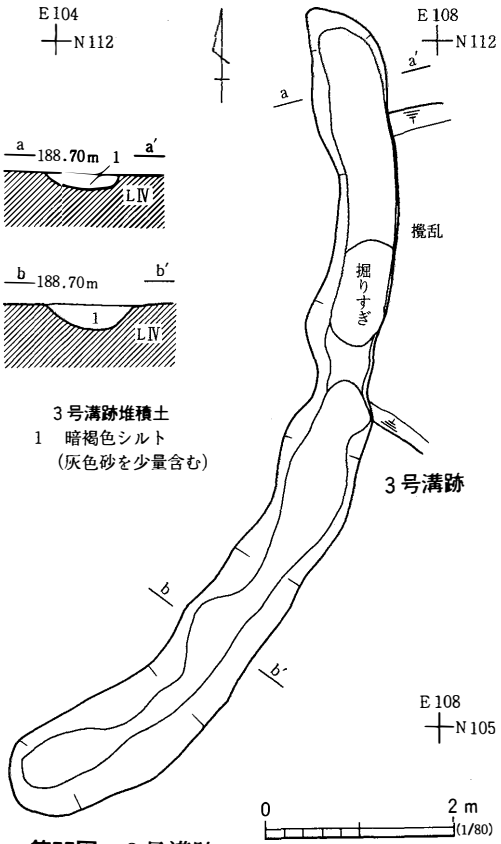
ま　と　め

本溝跡は，底面直上まで盛土に覆われており，底面直上からの出土遺物も近世まで及ぶことから，圃場整備以前までは開口していた溝跡と考えられる。周囲の状況から見て，現在調査区の北を流れている小河川の旧河道の可能性が極めて高い遺構と言えよう。　（本　間）

3号溝跡　SD03

遺　　構　（第55図）

調査区中央のI・J－21グリッドで検出した。検出面はLⅣである。遺構は北から南に向かって「ノ」字状に緩い弧を描く平面形を呈する。検出面における上端の規模は，長さが約9.8m，幅が0.6～1.06mを測る。断面形は鍋底状を呈しており，底面には起伏が認められる。検出面から底面までの深さは19～28cmを測る。堆積土は炭化物を含む暗褐色シルト1層のみである。人為的なものか自然に堆積したものかは判断できなかった。基本土層内には相当する土質のものが認められないので，人為的に埋め戻されたか，あるいは溝跡の掘削土が再流入したかのいずれかであろう。



第55図　3号溝跡

遺　　物

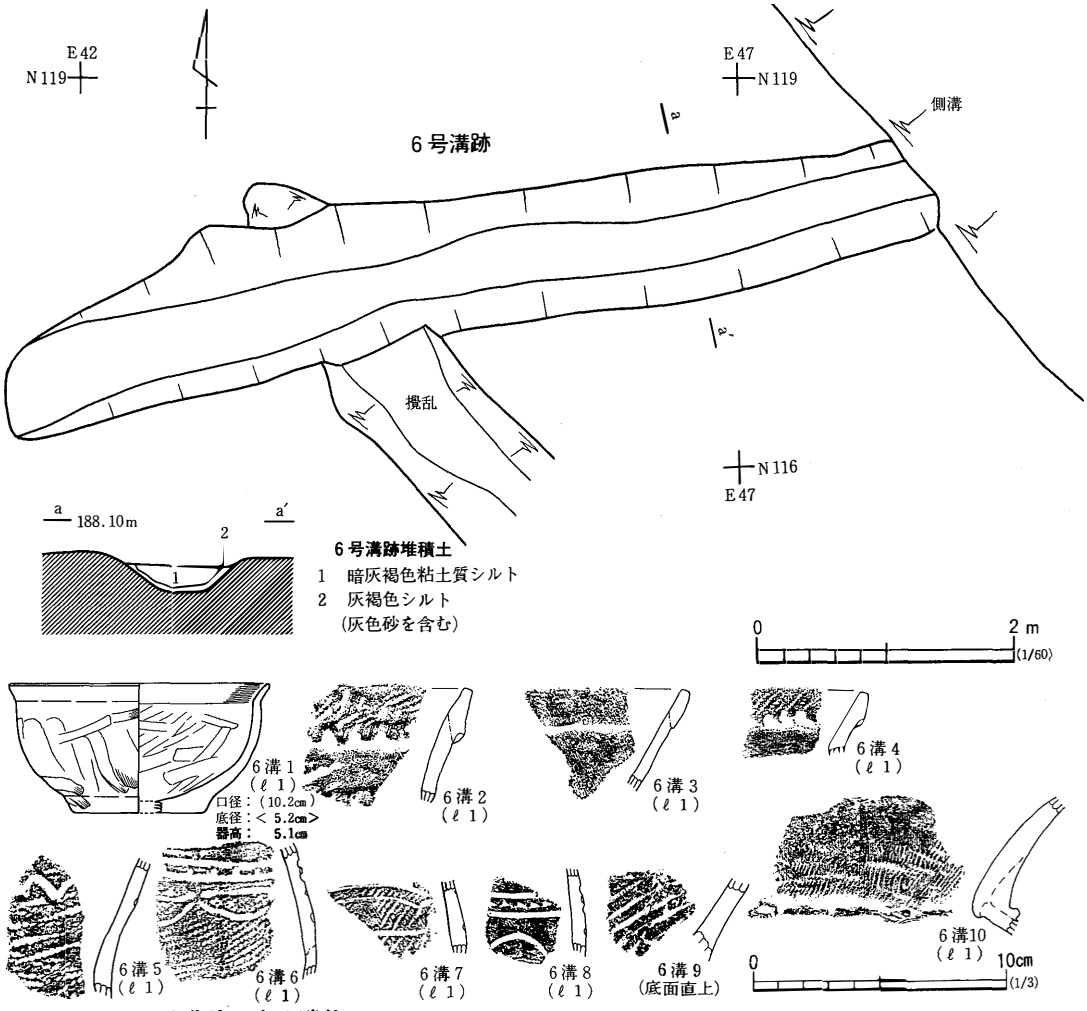
堆積土ℓ１の水洗選別により，弥生土器片12点と剥片類微量が出土している。微細な破片であるため図示していない。

ま と め

本遺構は，「ノ」字状の緩い弧を描く溝跡である。周溝墓の一部である可能性を考慮し，堆積土の水洗選別を行ったが，微細な遺物が少量得られたのみであった。遺構の年代や性格については不明である。　　（本　間）

６号溝跡　ＳＤ06　（第56図）

県道会津坂下・本郷線の直下のＩ－16グリッドＬＶから検出された。東側部分は側溝によって



第56図　６号溝跡・出土遺物

破壊されている。溝跡の残存長は約3.7ｍで，幅は約0.5ｍで，検出面からの深さは約15cmを測る。堆積土は２層に区分される。ℓ１は暗灰褐色粘土質シルトで，ℓ２は灰褐色シルトである。レンズ状の堆積状態を示すことから，自然堆積と考えられる。遺物は弥生土器片28点と土師器片349点が堆積土内から出土している。６溝１は，小型の鉢形土器で，口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ，体部内面はナデののちミガキが施されている。６溝10はハケメ調整を施した土師器壺形土器の頸部片である。他は天王山式期の破片である。出土土器が弥生時代～古墳時代前期に属することから，本遺構はその時期以後に埋没したと思われる。　（中　野）

第７節　遺物包含層

遺物包含層としては，県道周辺の北端部Ｈ・Ｉ－15グリッドの第１遺物包含層，県道西側南半部Ｌ・Ｍ－16グリッドの第２遺物包含層，調査区東端部Ｊ・Ｌ－28・29グリッドの第３遺物包含層が検出されている。いずれも，浅く窪んだ谷状地形に形成されたものである。

第１遺物包含層　ＳＨ01

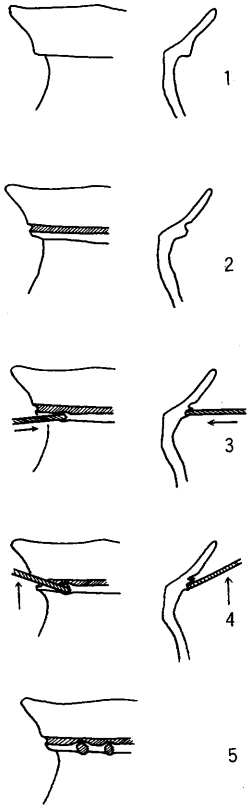
包含層の状況　（図版28）

調査区西部のＨ・Ｉ－15グリッドで検出された遺物包含層である。県道会津坂下・本郷線の直下とその北東側に位置している。県道の北東側は包含層の上部が削平されているが，県道直下における遺存状態は良い。この地区は，かつて畑であった部分に盛り土をして農道に利用されていた場所で，県道工事の際にさらに盛り土がなされたため，旧耕作土下の包含層の一部が残ったものである。包含層の範囲は，東西8.4ｍ・南北9.2ｍで，厚さは最大12cmを測る。基本土層ＬⅡｃの赤褐色ブロックが包含層で，遺物は主としてＬⅡｃの上部から出土している。

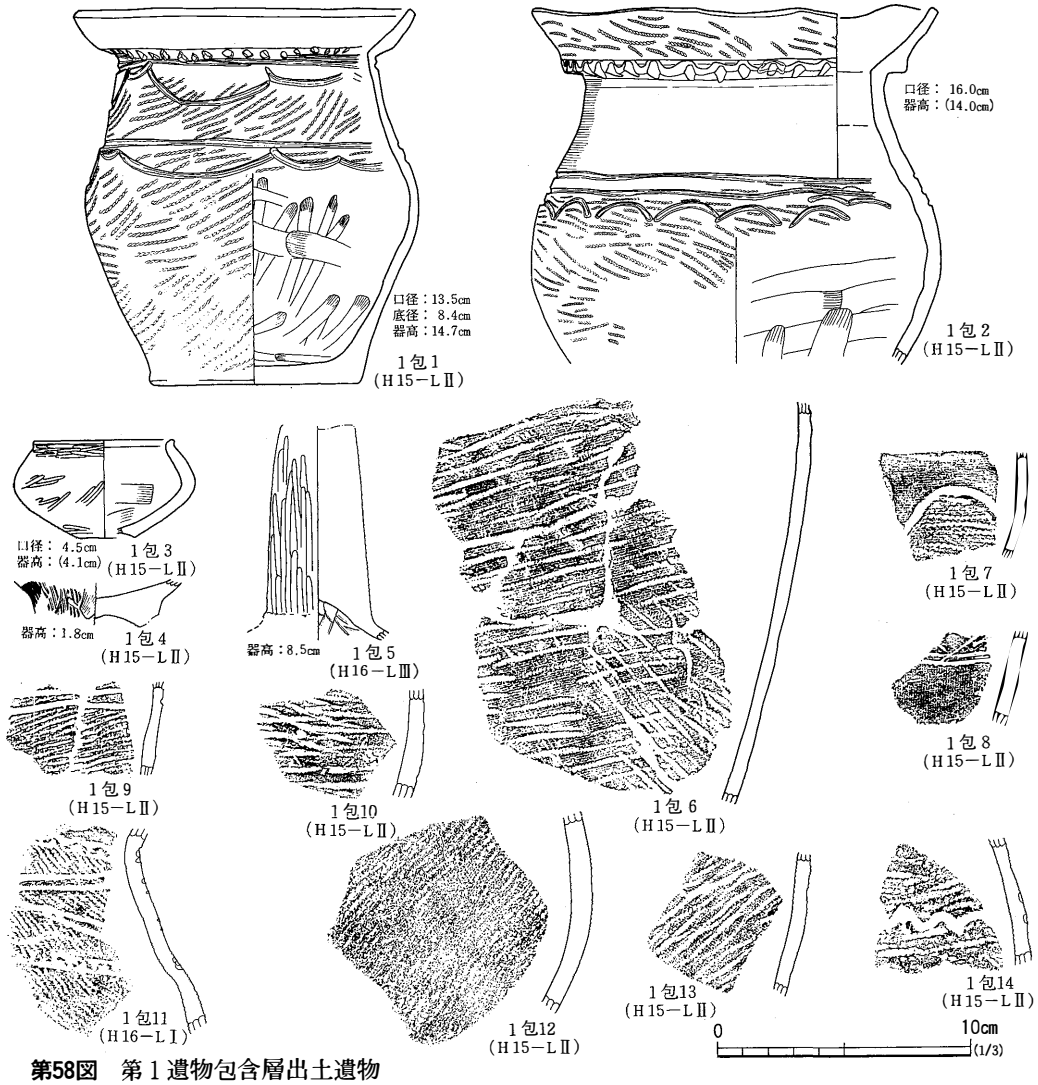
遺　　物　（第58図，図版28・33）

出土した遺物は，復元された土器２個体と土器片36点である。弥生土器が大半で，少量の土師器が含まれている。

弥生土器　（１包１・２・６～14）　復元・実測ができたのは深鉢形土器２点（１包１・２）のみであった。共に「く」形に外反する複合口縁で，頸部は「ハ」形にひらき最大径は体部上半にある。複合口縁の下端には，１は斜め上方からの連続刺突，２は模式図（第57図）に



第57図　文様施文法



第58図　第１遺物包含層出土遺物

示したような方法による波状隆線文が描かれている。頸部は１では縄文の上から横沈線の下方に開いた弧状沈線，２は横ナデが加えられ無文となっている。頸部と体部の間は共に沈線で区画され，体部上端には，１が開く弧状沈線・２は下が開く弧状沈線が縄文の上から描かれている。縄文は１はＬＲ，２は３本撚りのものである。

６と10・13は接合できなかったが同一個体の破片であり，他の弥生土器とは胎土・焼きが異なり，硬く濃いオレンジ色を呈する。外面には端部で絡条体を縛った撚糸原体を横方向に転がし，その後一部で縦方向にも転がしている。７は沈線で区画された磨消縄文のある破片である。８では外面に２本単位の平行沈線を横位・斜位に引いている。９・14は縄文の上に沈線を引いたもので，９は変形工字文風・14は鋸歯文である。11は頸部の破片であり，縄文の上から平行沈線と交

互刺突による文様を描いている。

土師器　（１包３～５）　土師器はＬⅡaの上部からの出土であり，出土状態からして他の弥生土器と共伴するものとは言えない。３は算盤玉形の小型土器であり，口縁が短く立ち上がり，外面にミガキ，内面にナデの調整が加えられている。４は台付甕の底部で，外面にはハケメ調整が加えられている。５は高坏の脚であり，柱状部には縦方向の丁寧なミガキが加えられ，裾が開く形態を呈している。　（木　本）

第２遺物包含層　ＳＨ02

包含層の状況　（第59図）

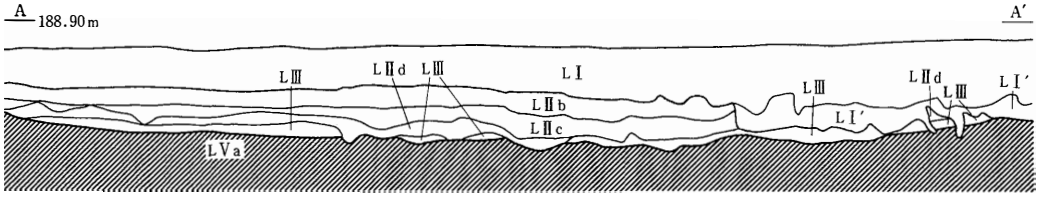
調査区西側のＬ・Ｍ－16グリッドで確認した遺物包含層である。この一帯は，なだらかに窪んだ谷状の地形となっており，包含層はこの窪地に形成されている。遺物を包含する層は基本土層のＬⅡb・ＬⅡcに対応する層で，ＬⅡdからも少量の遺物が出土している。ＬⅡdの下層にはＬⅢが薄く堆積し，ＬⅣは存在せず，以下はＬⅤとなる。

包含層の範囲は，東西7.2m、南北15.2mで，南端は調査区外に延びている。層の厚さは最大で40cmを測るが，遺物の分布は散漫で，最もまとまっていたのはＬ15グリッドＬⅡb～cにおいてであった。

遺　　物　（第60・61図）

出土した遺物は，弥生土器片354点，土師器片1,365点，石器・剥片類11点である。出土層や地点の違いによる年代的まとまりは確認できなかった。

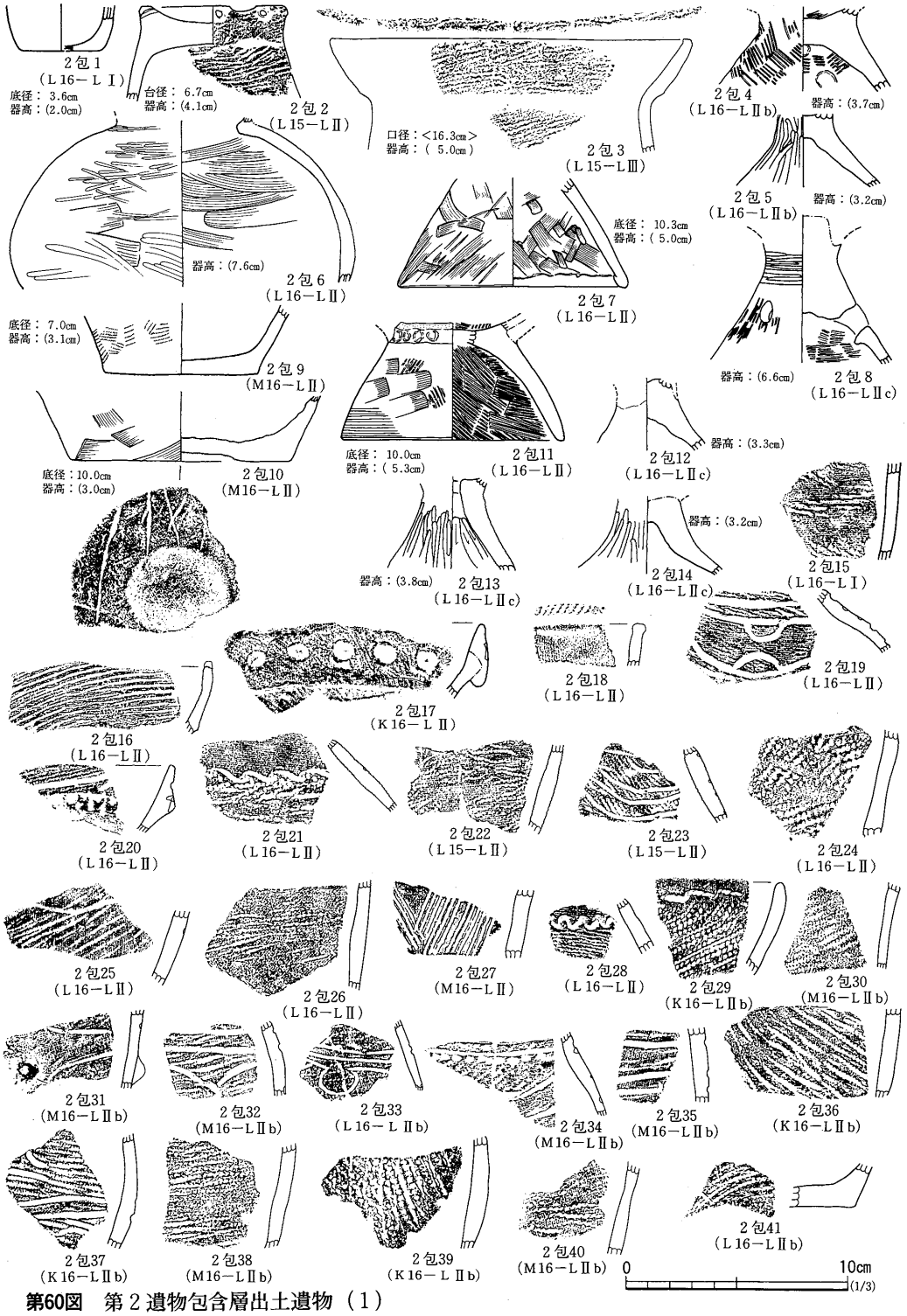
弥生土器　（２包２・３・９・10・15・16・18～60）　２・19・48・52は蓋と思われる。２は，上端周縁部に２個一対の浅い窪みを与え，その両脇に径２～３mmの細い貫通孔を通している。19・48・52は同一個体の可能性が高い。51は，なんらかの台付き土器の脚部と思われる。他は，壺形土器もしくは鉢形土器の破片と考えられる。３・16・20・44～46・53は，壺形土器の口縁部破



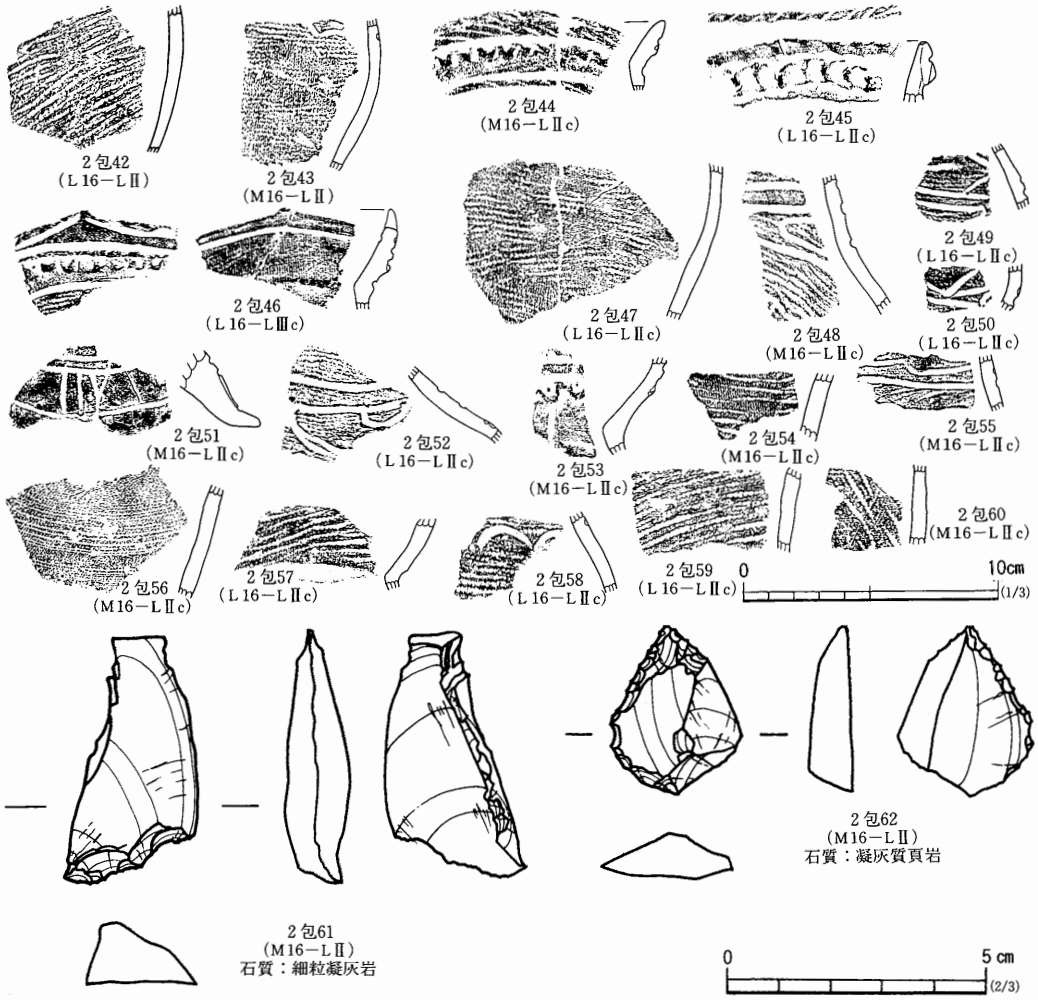
ＬⅠ　盛土層。圃場整備の際のもの。
ＬⅠ′　攪乱層。
ＬⅡb　(7.5Y3／1) オリーブ黒色シルト
ＬⅡc　(7.5Y3／1) 黒色シルト
ＬⅡd　(7.5Y3／1) オリーブ黒色シルト
ＬⅢ　(7.5Y5／2) 灰オリーブ色砂質シルト

0　2m (1/60)

第59図　第２遺物包含層断面



第60図　第２遺物包含層出土遺物（１）



第61図　第２遺物包含層出土遺物（２）

片である。３は口端・口縁部・頸部とに同一の撚糸文を施文している。16は小波状を呈する口縁で，撚糸文を施文しているが，口端は無文である。20・44～46・53は，いずれも口縁部文様帯下端に刺突文を加えている。この刺突文には，円形竹管を上下交互に加えるもの(53)，上方に円形竹管の刺突を加え，下方にヘラ状工具による縦長短沈線を加えるもの(20・44・46)，幅広の隆帯を貼付し，その上に指頭連続圧痕を加えるもの(45)の各種がある。44・45の口端には撚糸文が施文されている。鉢形土器の口縁部と思われるものに29がある。直前段多条ＬＲ原体とその結節の横位施文が行われている。同様の文様は，壺形土器の体部である21にも認められる。また，28は沈線で結節回転文と同様の効果を見せ，58は連弧文を描いている。縄文または撚糸文を地文としてその上に弧文を描くものは25・32・37などで，これに磨消手法を伴うものは31・34などである。27は、３本同時施文工具による平行沈線を集合させて鋸歯状文を描くものである。沈線は細くシ

ャープで，他の土器に施された沈線とは全く趣を異にする。９・10は底部破片である。９は体部に無節Ｌの縄文を施文し，底部には丁寧なナデが加えられている。10は，上げ底で，体部が直線的に立ち上がるものである。底部外面に線状の圧痕が５本認められる。

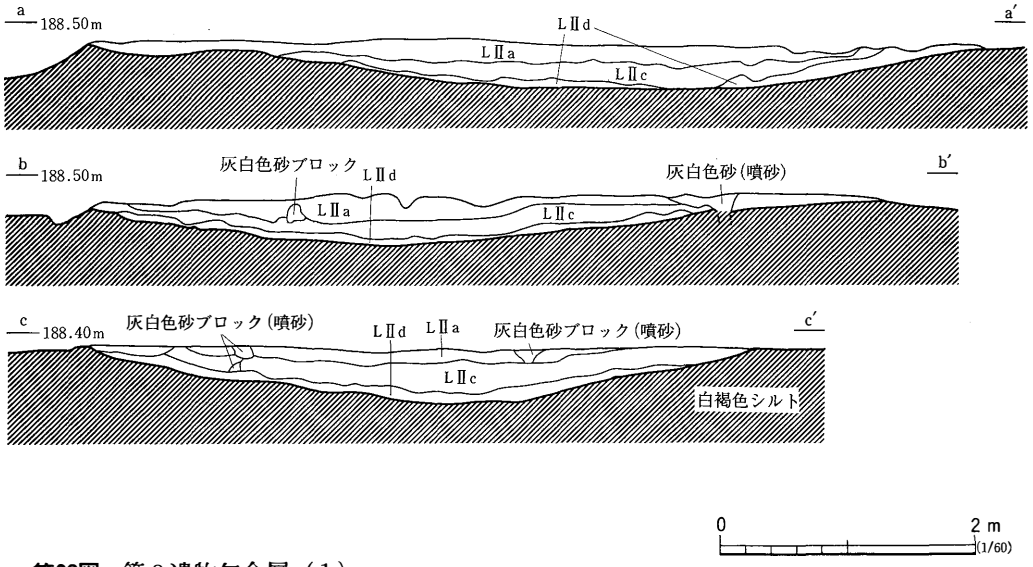
土師器　（２包１・４～８・11～14・17）　１は小型土器で内外面ともにナデが加えられている。６は，外面全面に丁寧なナデとミガキが加えられている坩である。17は複合口縁の壺形土器と思われる。頸部に加えられたハケメが口縁との接合部にまでくい込んでいることから，頸部と口縁部が別々に製作され，ハケメ調整を加えた後で接合されたものと判断できる。口縁部には径９㎜の円形竹管の刺突が加えられている。４は台付甕，７・11・13は器台，５・８・12・14は高坏の脚部と思われる。８には３個の円形窓が設けられている。

石器　（２包61・62）　61は，腹面の下縁部に粗い調整剥離，右側縁に微細剥離痕が認められる。62は一側縁の両面に交互剥離を加えている。いずれも未製品と思われる。　（本　間）

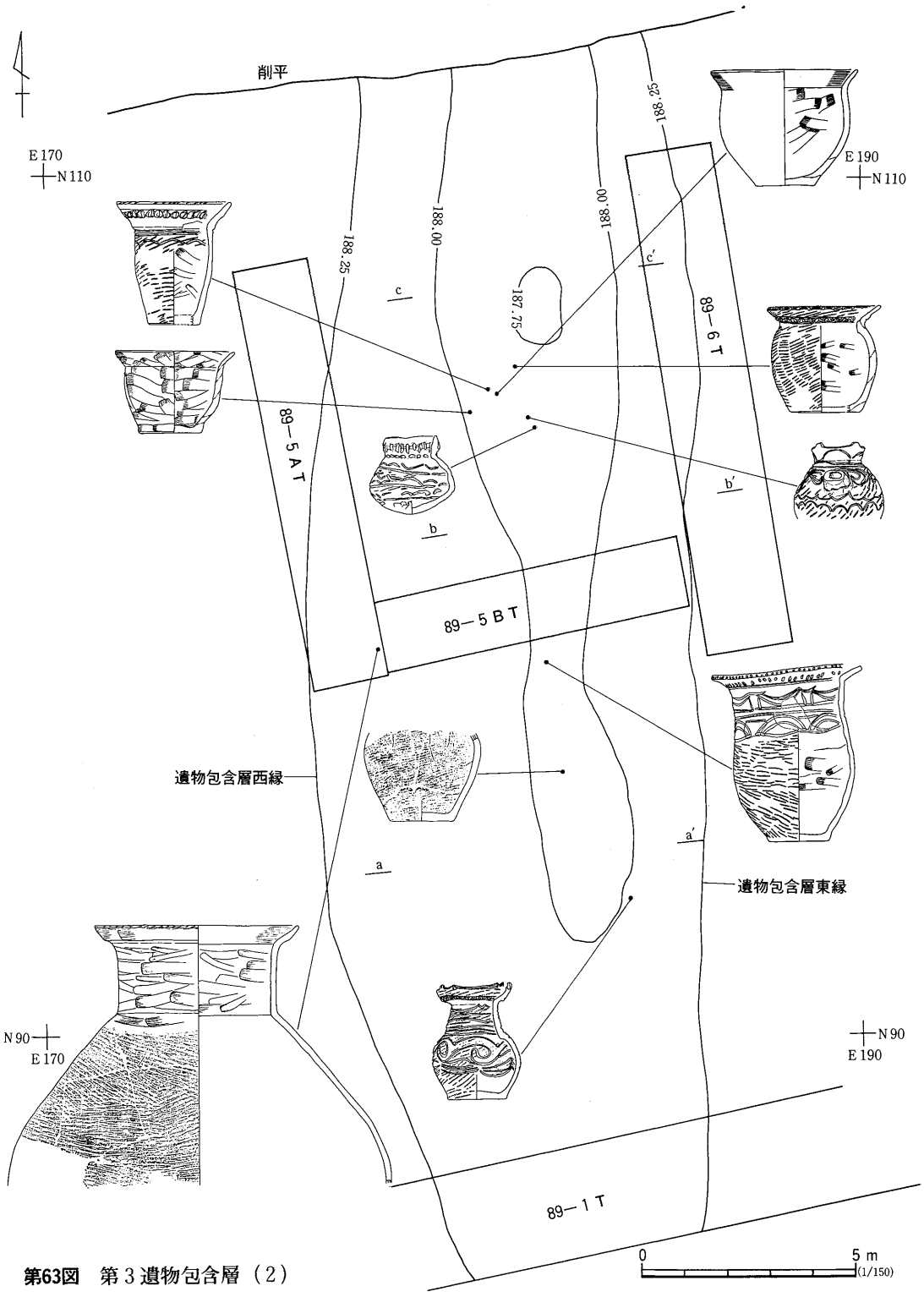
第３遺物包含層　ＳＨ03

包含層の状況　（第62・63図，図版28）

遺跡東端部Ｊ・Ｌ－28・29グリッドで，東西６ｍ・南北25ｍの南北方向に走る浅い窪みに堆積した遺物包含層であり，中央部の深さは35㎝～45㎝である。上層のＬⅡaは，暗灰褐色シルトで微細な砂質を呈し，土器片が少量出土している。中層のＬⅡcは，黒色シルトで粒子が細かく締まり・粘性があり，乾燥すると亀裂が入る。出土遺物は完形もしくはほぼ完形になる一括破片と土器片である。下層のＬⅡdは黒褐色シルトで，性質はＬⅡcに類似する。厚さは２㎝～10㎝と薄



第62図　第３遺物包含層（１）



第63図　第３遺物包含層（２）

いが完形土器・完形に近い一括破片・土器片・剝片・残核などが出土している。

遺　　物（第64～66図，図版28・33・34）

包含層内からは，弥生土器の復元個体13点，弥生土器片1,002点，剝片３点が出土した。

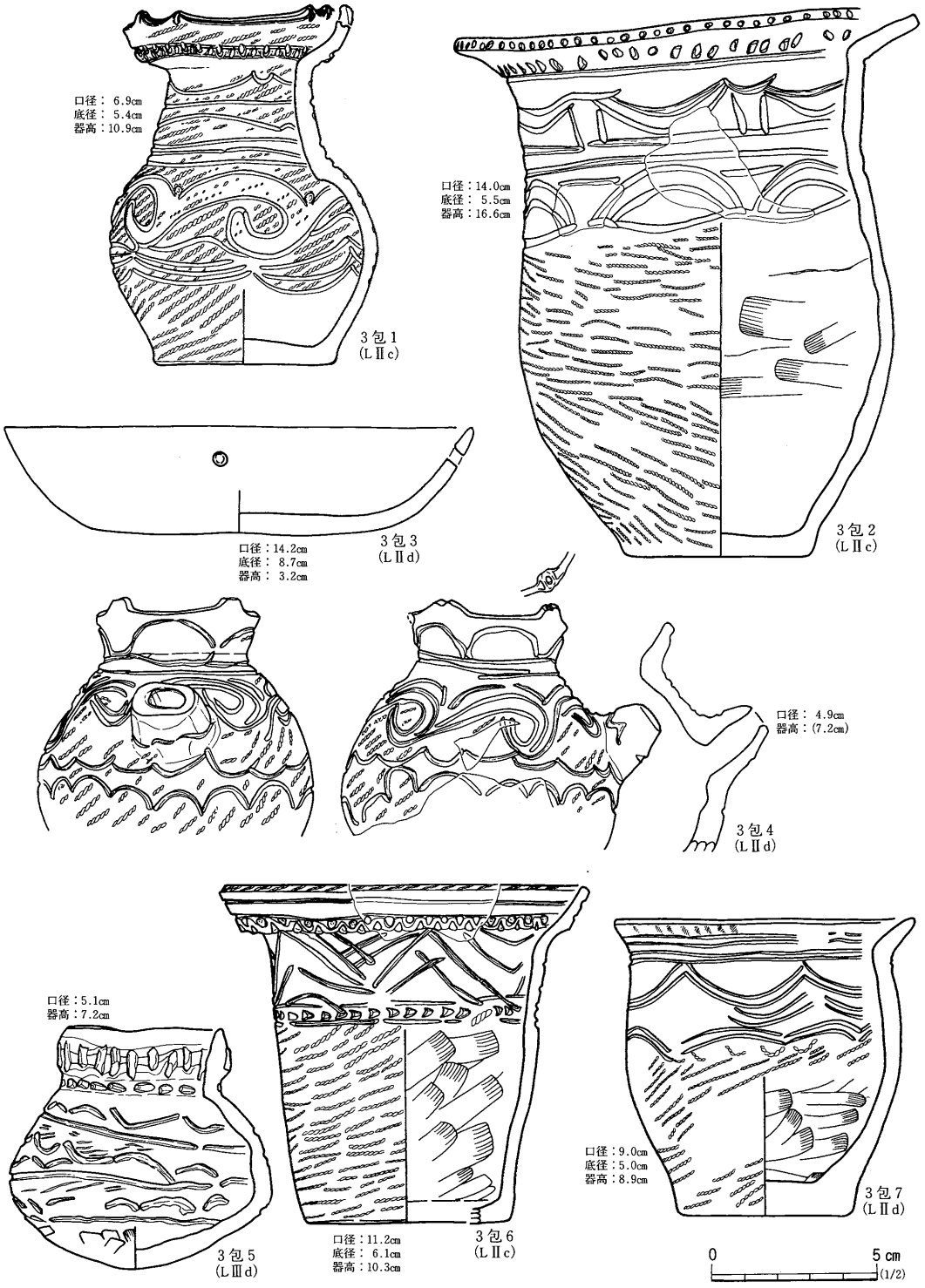
弥生土器　（３包１～30）　ＬⅡa出土の遺物で，18・22は薄手の口縁部破片である。18は口唇と口縁内側に沈線をひき，その後，口唇には外側から等間隔に刺突を加え波状隆線を作っている。口縁の文様は「く」状の隆帯の上下から縦長の交互刺突を加えたものである。22は口縁外面に２本の細い沈線を引き，下の沈線の斜め下から刺突を加え下に押し広げその間に縦の細い沈線を加えた文様がある。21も口縁部破片であるが，文様は幅３㎜の平行沈線による連弧文である。23は体部破片で，縄文の上から横方向の沈線とその下に沈線による鋸歯文を描いている。25・28は平行沈線の文様が描かれたものである。24は撚糸文が付されている。原体の回転方向が異なるため羽状に見えるが，同一原体である。

ＬⅡcからは弥生土器の壺２点（１・16），深鉢２点（２・６），壺か甕の体部と思われるもの１点，底部３点，口縁部破片２点，体部破片１点が出土している。破片はすべて小片である。

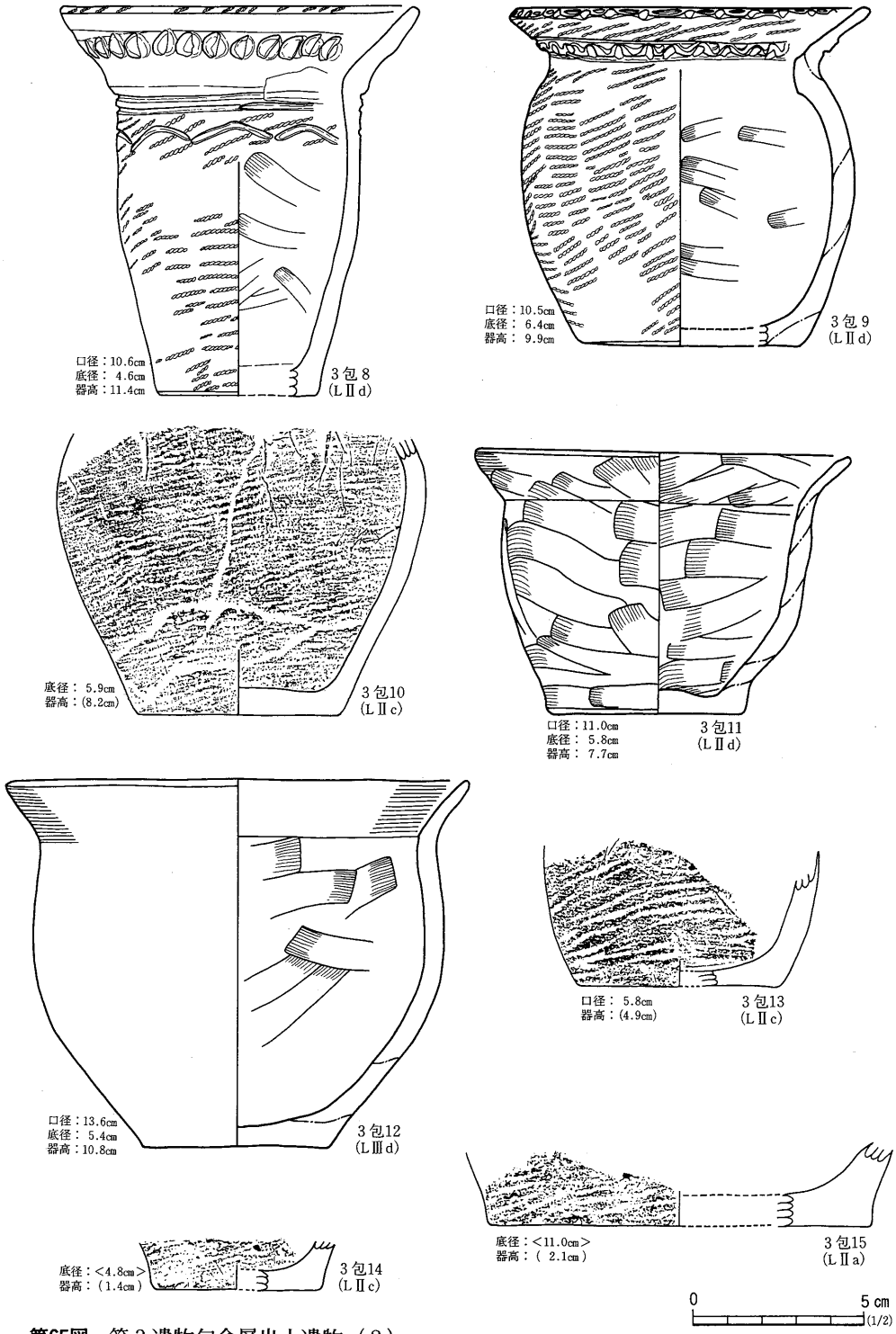
１は小型壺で，口唇には２個１組の小さな山形突起が３組付けられている。口縁下端には交互刺突文状の文様が付けられているが，２本の平行沈線の上方の線に円形の刺突を加えて下方向に広げ，その刺突の間の隆起部を縦の沈線で区切るもので，正式の交互刺突文ではない。頸部には真ん中の沈線を挟んで上下対称形に長いものと短いものとを組み合わせた３単位の連結弧線文が描かれている。頸部と体部の間は３本の沈線で区画され，体部は上下が連結弧線文で区画された沈線による入り組み渦文風の文様が描かれている。文様は５単位である。２は口縁が外反する深鉢形土器である。口唇には円形・口縁部には縦長の刺突が連続して加えられている。頸部から体部上端にかけては弓型の沈線文を中心とした７単位と思われる文様が描かれている。６はほぼ円筒形の体部を有し，口縁が外反する小型深鉢である。口唇には縄文，口縁には沈線と下端に交互刺突文，頸部～体部上半には沈線による重山形文，その下に２本の沈線の間に小さな連続爪形文を付した文様が描かれている。一番下の文様は沈線による重山形に切られているので，文様帯の範囲を決めるため最初に描かれたと考えられる。16は，平成元年度のトレンチ調査で出土した大型の壺形土器である。口端と体部に付加縄文を施文している。前年度範囲確認時出土資料であるため，層位的に他のＬⅡc出土土器と確実に共伴するかどうかは不明とせざるを得ない。体部下半から底部にかけての破片は外面のみ縄文のみ施されているが，29は底面に網代痕がみられる。

ＬⅡdからは，実測可能な土器８点，採拓可能な土器片３点，石核・フレーク各１点が出土している。３は浅鉢，４は注口土器，５は小型壺，７・９・11・12は体部がやや張り頸部がくびれるもので甕形土器，８は体部が張らない深鉢である。

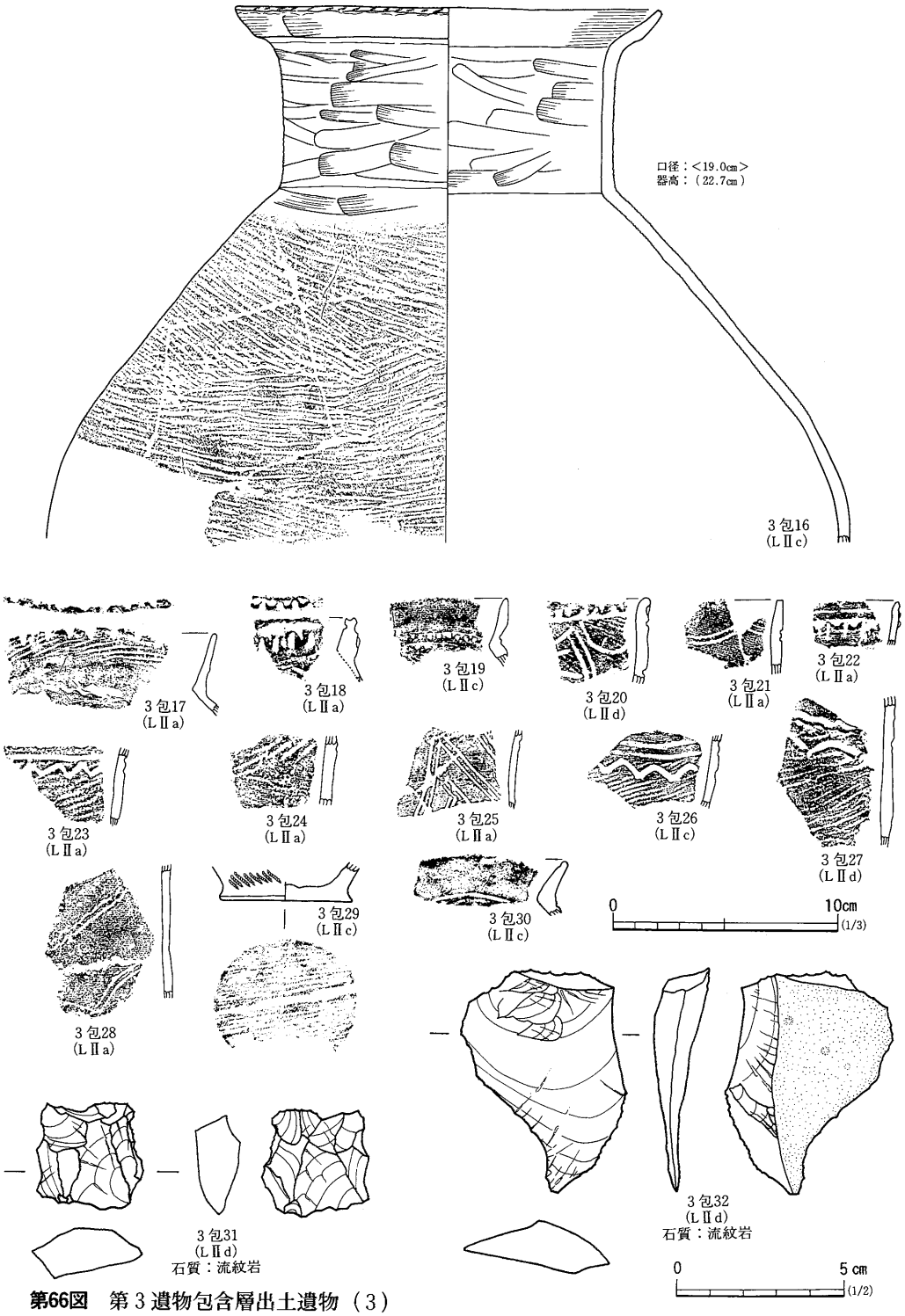
３は体部から底面に緩やかに移行する平底の浅鉢で，体部に小孔が１ヵ所開けられている。４



第64図　第３遺物包含層出土遺物（１）



第65図　第３遺物包含層出土遺物（２）



第66図　第３遺物包含層出土遺物（３）

は小型の注口土器で，口唇には頂部に刻みと刺突が加えられた突起が４ヵ所あり，口縁部には５単位の連続弧線，頸部には２本の沈線が巡り体部と区画されている。体部上半には２本の沈線による７単位の連結渦文，体部中位には連結弧線文を上下２本組み合わせた文様が付されている。５は丸底の小型壺である。体部はほぼ算盤玉形で，口縁部は直立する。口縁部には交互に斜め上方と下方から工具を突き刺し外側にはじいた縦長の交互刺突文，頸部には斜め横からの連続刺突，体部には横方向の沈線と弧状沈線を組み合わせた文様が描かれている。体部の文様の間に細い撚糸文の上にナデを加えたような痕跡も見られるがはっきりしない。７は口縁の短い小型甕である。口縁と頸部に幅３㎜の平行工具による浅い横沈線，その下には同じ工具による上向きの２段の連結弧線文，下の縄文のみの部分との間には下向きの連結弧線文が描かれている。縄文は末端に結節を持つ付加縄文である。９は頸部が強くくびれた小型甕で，口唇に沈線を引き外側の角に刻みを加え区切った文様が付されている。口縁下部には横方向の２本の沈線に交互刺突が加えられている。11・12は無文の小型甕であり、３は内外ともナデ，４は口縁と内面はナデで，外面は荒れて調整は不明である。17は甕の口縁破片で，口唇にキザミ，口縁外面に縄文，頸部に浅い沈線による山形文が描かれている。19は頸部に細かな刺突，30は頸部に沈線が付されている。

石器　（３包31・32）　ＬⅡdより石核が１点・剝片が１点出土している。31は，流紋岩製の石核で，縦3.2㎝・横3.3㎝・厚さ1.5㎝のほぼ正方形を呈する。両面とも主として周縁部から中心に向かう剝離面が見られ，円盤状石核の残核と考えられる。32は，流紋岩製の剝片であり，縦6.3㎝・横5.1㎝・厚さ1.4㎝を測る。打撃面は旧剝離面を利用した平坦打面であり，右の面の2／3は自然面を残している。　（木　本）

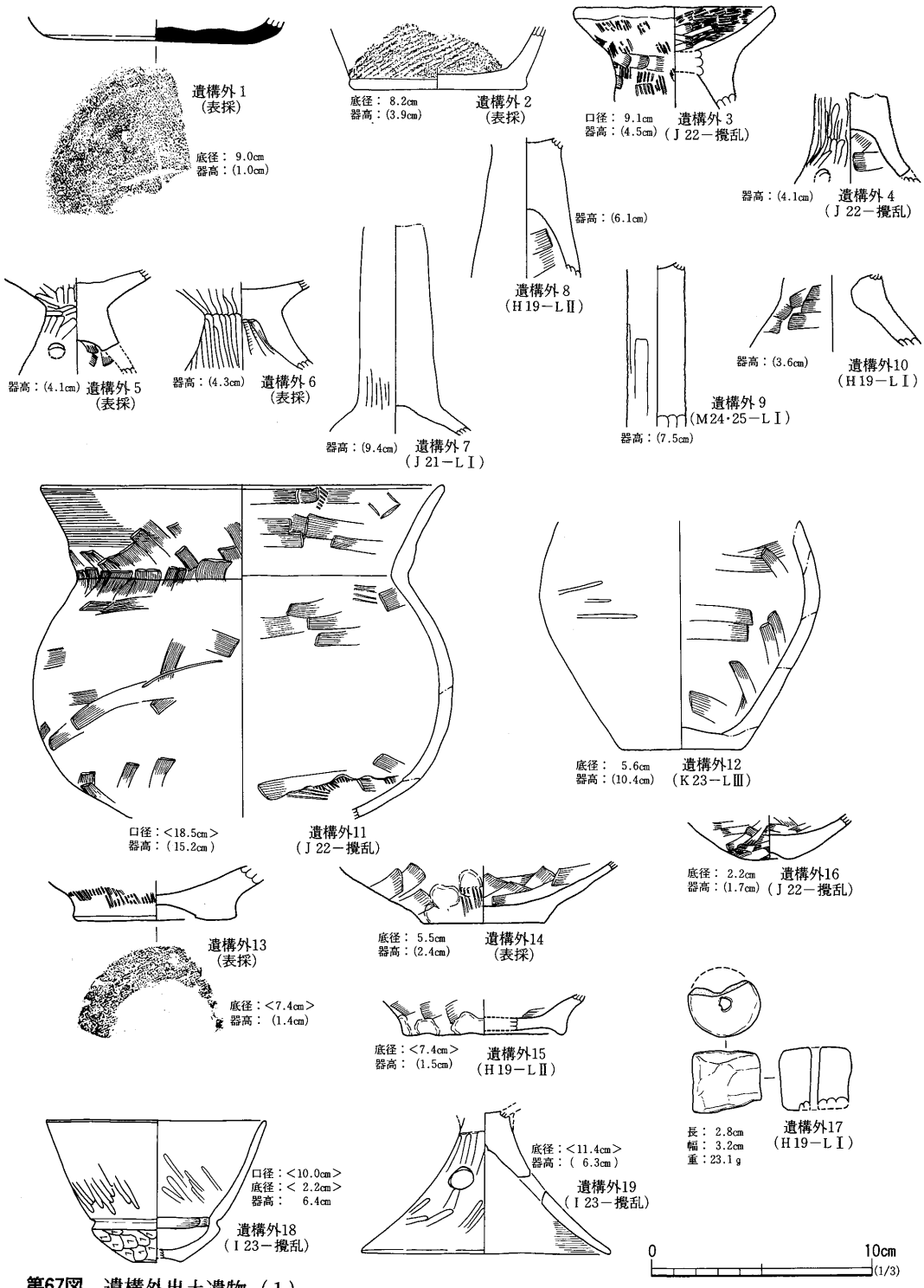
第８節　遺構外出土遺物

本節では，表土層・攪乱層など，遺構や包含層以外から出土した遺物を取りあげる。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの土器片が2,510点，土製品が１点，石器・剝片24点がある。

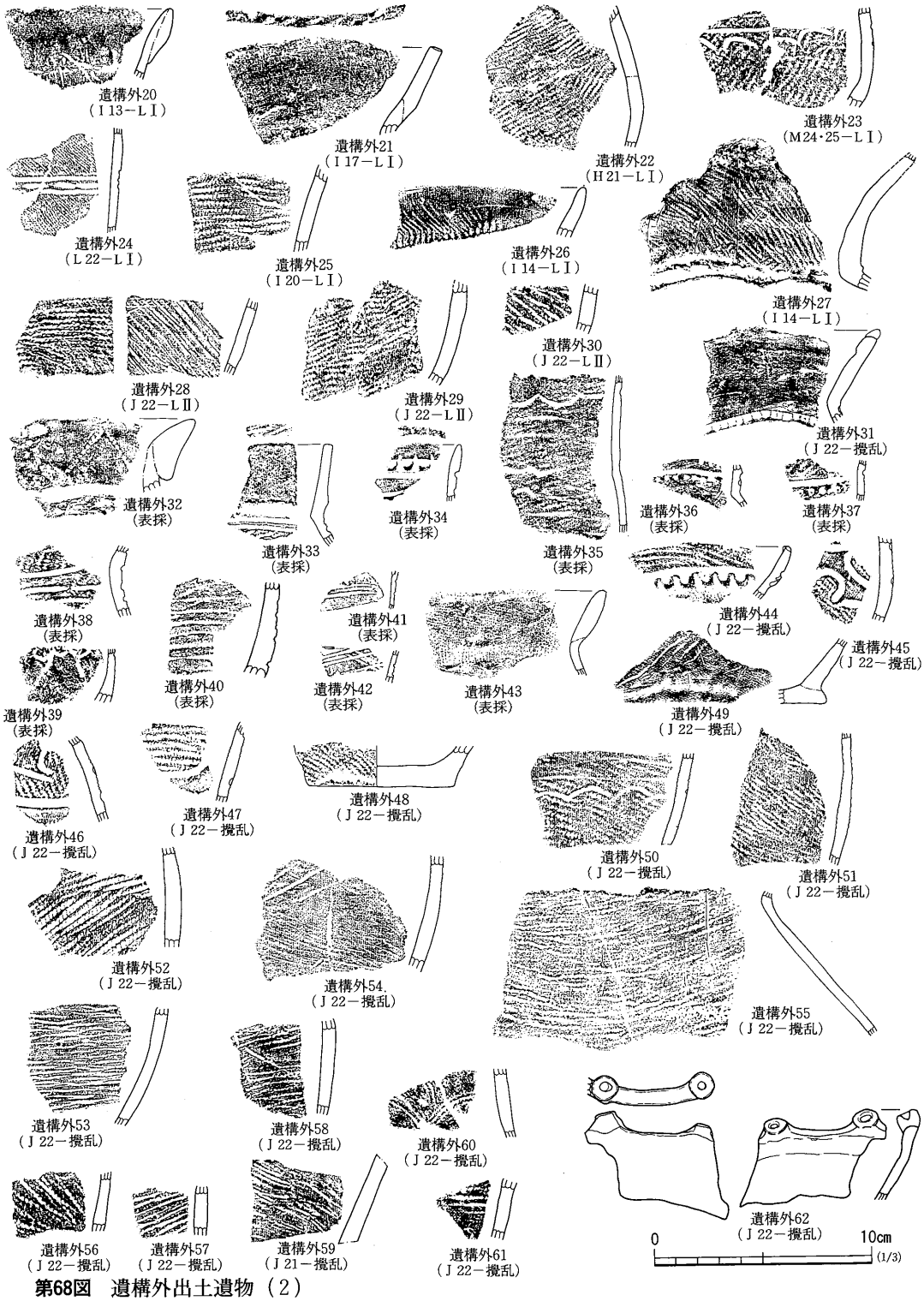
縄文土器　（遺構外45・46・62）　45・46は沈線で区画された連結入組文または雲形文を有するもので，62は小さな突起の頂部に円形の窪みを有するミガキのあるものである。

弥生土器　（遺構外２・21～25・28～42・44・47～61）　21・31～34・44は口縁部であり，21は口唇に縄文，31・32は押し引き刺突による文様，33は頸部に２本の平行沈線，44は沈線と交互刺突文が見られるものである。

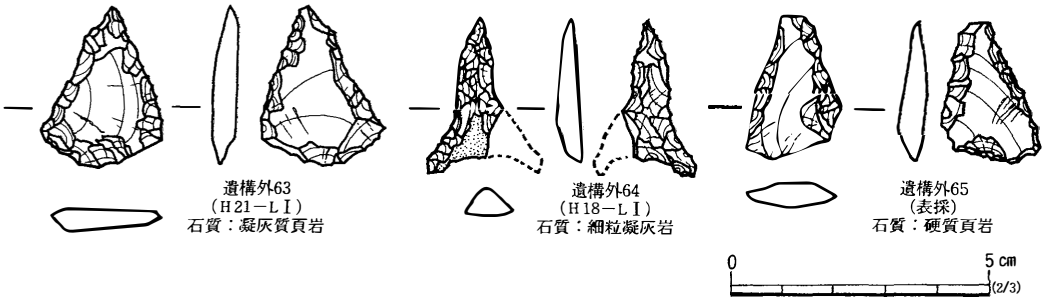
23・35～42・47・50・60は文様のある体部破片である。22・35は横方向と連弧文を組み合わせた文様，36・37は沈線の下に刺突を加えた文様，38・47は沈線文の文様を有するものである。41・42・60は２本単位の平行沈線による文様を有するものである。



第67図　遺構外出土遺物（１）



第68図　遺構外出土遺物（２）



第69図　遺構外出土石器

他は縄文のみの破片と底部破片である。

土師器　（遺構外３～15・18～20・26・27・43）　復元・実測可能個体は，高坏７点（４～９・19），器台２点（３・10），坩１点(18)，甕１点(11)，体部～底部の大型破片１点(12)，底部の破片４点(13～16)が出土している。

高坏は，脚が「ハ」形に開くもの（４～６・19）と，円筒形の脚で裾が開くもの（７・９）と，長い脚で下半分が中空のもの（８）がある。４・５は，脚中位に小さな円形の３ヵ所の窓を有する。脚が開くものは外面に丁寧なナデが加えられている。

10は鼓形の形態をなす器台と思われ，３は脚の上端中央部が欠損しているため高坏か器台かは不明だが，やはり鼓形を呈する器台の可能性が高いと思われる。

18は，底部が上げ底となる坩形土器である。口頸部には縦方向のミガキが加えられるが，体部にはケズリを残している。

11は口縁が「く」形に外反し，体部は背が低く中位が丸く張り出す甕で，底部は欠損して不明である。外面は荒れているがナデの痕跡，内面はハケメの上にナデの痕跡が見られる。

12は甕または壺と考えられ，表面は荒れているが外面の一部にミガキ，内面にはナデの痕跡が観察される。

須恵器　（遺構外１）　磨滅が著しいため，再調整の有無や切り離し手法については不明である。底部外面に「×」の線刻がなされている。

土製品　（遺構外17）　手捏ね成形による円柱状の土製品である。中央に径約６㎜の孔が穿たれている。

石　器　（遺構外63～65）　３点出土しており，61・63は未成品，62は脚の一つが欠損した石鏃である。石質は３点とも流紋岩である。　（木　本）

第３章　考　　察

第１節　遺物について

１．弥生土器について

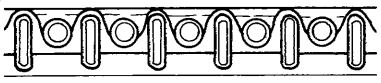
本遺跡では，住居跡内堆積土や土器埋設遺構，第１～第３遺物包含層などから多くの弥生土器が出土している。ここでは，最も良好なまとまりを持って出土した第３遺物包含層の土器群の検討にもとづいて，本遺跡の弥生土器の編年的位置について若干の考察を加えたい。

第３遺物包含層出土土器の特徴

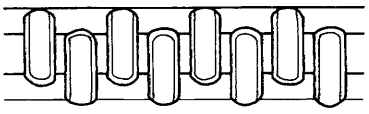
第３遺物包含層は，ＬⅡa～ＬⅡdの４層に細分できる。土器は，ＬⅡaで破片が８点，ＬⅡbは無遺物，ＬⅡcで復元個体４点・破片６点，ＬⅡdで復元個体８点，破片３点が出土した。包含層全体の厚さは最大25cmで，土質は各層とも近似しており，比較的短期間に堆積した可能性が高い。また，最上層のＬⅡaと最下層のＬⅡdの出土土器を比較してみると，ＬⅡa出土の３包18とＬⅡd出土の３包５の口縁部文様は同一の手法で描かれており，ＬⅡa出土の３包22とＬⅡd出土の３包９の頸部文様もほぼ同一と見なすことができる。さらに，ＬⅡa出土の３包21・25・28とＬⅡd出土の３包７に共通して２本一組の平行沈線による文様が認められることなどを考慮すれば，第３遺物包含層の出土土器群は，各層を合わせて一括性の高いものと考えられる。

第３遺物包含層出土土器のうち，器形の判明したものを器種別に分けると，大型壺１点，小型壺２点(長頸１・短頸１)，注口土器１点，浅鉢１点，深鉢１点，小型深鉢２点，小型甕５点となる。特徴的なのは，大型壺１点と深鉢１点を除いたほかは，すべて小型製品である点である。

まず，口縁部に施文される交互刺突文とそれに類する文様について見てみたい(第70図)。３包１の口縁部下端には交互刺突状の文様が認められるが，その施文手法を観察すると，上方の刺突は細い竹管状工具で横から施文されているが，その間を刻む短沈線は，工具の側面で隆帯部を刻むように加えられている。これを**Ａタイプ**とする。次に３包５について観察すると，口縁部のなだらかな隆帯部に，上と下から交互に短沈線を施文している。これを**Ｂタイプ**としよう。３包６は，いわば典型的な交互刺突文を施文している。横方向にほぼ平行する２本の沈線を引き，上下の沈線に交互に刺突を加え，上方の刺突は下向きに，下方の刺突は上向きにそれぞれ工具で広げ，刺突間の素地土が盛り上げられて波状隆線状となっている。これを**Ｃタイプ**とする。３包９は，口唇部に沈線を引き，沈線に重ねて下から上に向かう刻みを連続的に加えている。刻みによって沈線の一部が潰されて，逆に刻みの間には沈線の一部が残ることから交互刺突文に類似した文様効果を見せている。これを**Ｄタイプ**としておく。３包９の口縁部下端にはＣタイプの交互刺突文

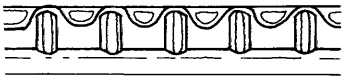


Ａタイプ

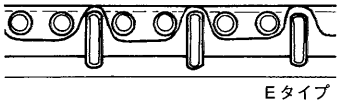


Ｂタイプ

Ｃタイプ

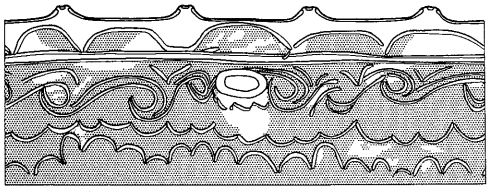


Ｄタイプ

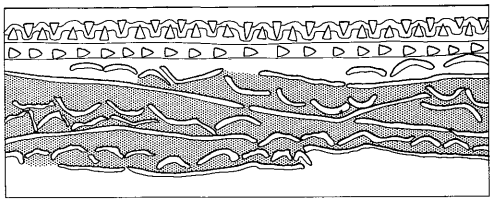


Ｅタイプ

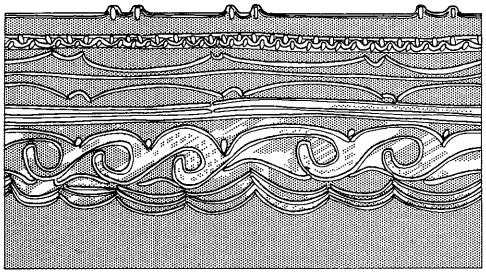
第70図　交互刺突文様式図



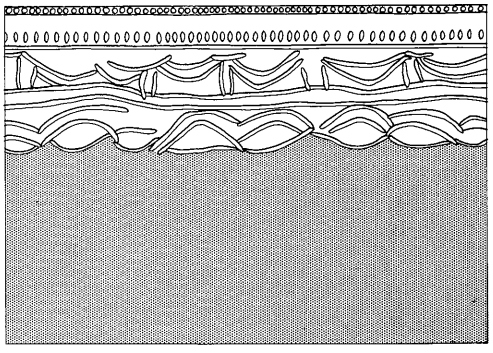
1



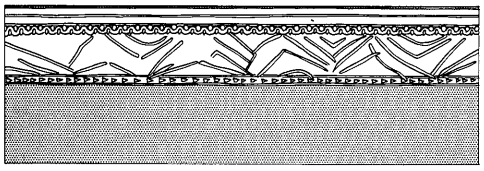
2



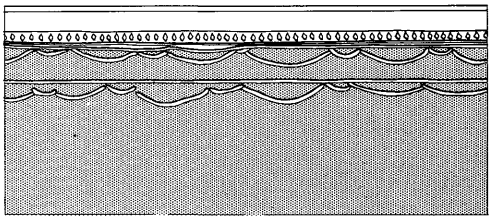
3



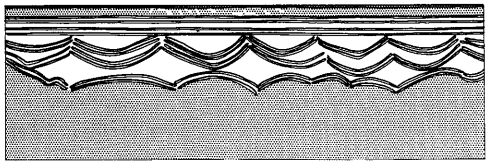
4



5



6



7

1　３包－ＬⅡｄ(第64図４)　　2　３包－ＬⅡｄ(第64図５)
3　３包－ＬⅡｃ(第64図１)　　4　３包－ＬⅡｃ(第64図２)
5　３包－ＬⅡｃ(第64図６)　　6　１包－ＬⅡ（第58図１）
7　３包－ＬⅡｄ(第64図７)

第71図　土器文様模式図

も加えられている。

次に体部文様を観察すると(第71図)，その多くは横沈線と横の弧状沈線の組み合わせによって文様を構成していることがわかる。３包１・３包４では，渦文に近い連続波状文と弧状沈線が組み合わせられている。他の土器とは特徴が異なるものとしては３包７がある。平行工具による２段の横沈線を頸部に施し，体部上半にも平行工具による２本一組の沈線で連続弧線文を描いている。地文は付加縄文である。

これら第３遺物包含層の土器文様の特徴をまとめると，次のようになる。

ａ．交互刺突文およびそれに類する文様を多用する土器群であるが，施文手法にはＡ～Ｄの４つのタイプがある。

ｂ．文様のモチーフは，横沈線と横の弧状沈線の組み合わせであるが，壺・注口土器には連結渦文状の沈線文も見られる。また，３包６では重山形文も認められる。

ｃ．細い平行工具による文様を有する土器が伴い，それには付加縄文が用いられている。

他の遺物包含層・遺構出土の弥生土器

第１遺物包含層の１包１・１包２は，両者とも横沈線と横の弧状沈線の組み合わせによる体部文様を有し，１包２の口縁部下端にはＤタイプとした交互刺突文が認められる。第３遺物包含層と同じ土器群に属するものと考えられる。

他の遺構から出土した土器の多くは断片的で，層位的なまとまりも欠くため，十分な対比はできない。土器棺と思われる埋設土器も，地文のみであるため同様である。ただ，７坑１は，算盤玉状の体部を有する小型壺で，体部下半が底部に向かって搾るように磨かれている。作りは丁寧で，全体に赤色顔料が塗られ，他の土器と比べて胎土も精選されている。第３遺物包含層の土器とは全く異なった作りである。したがって，和泉遺跡の弥生土器は，少なくとも第３遺物包含層を中心とした土器群と７号土坑の土器とに分けることができる。

土器群の位置付け

第３遺物包含層を中心とした土器群は，その器形や交互刺突文を多用する点から，弥生時代後期の天王山式に属するものと考えられる。この時期の土器群は，平成元年度に調査した会津坂下町能登遺跡からまとまって出土している。天王山式期の資料としては質量ともに極めてすぐれており，本遺跡に地理的にも近いことから，比較資料としては最適である。

第３遺物包含層で指摘した特徴ａは，能登遺跡の土器群にもそのまま当てはまる。ただし，能登遺跡の土器には，Ａタイプの変形というべき２個の刺突に１ヵ所の刻みというふうに繰り返すものもある。これを**Ｅタイプ**(第70図)とする。Ｅタイプは能登遺跡では大型の土器のみに認められる。大型土器の少ない本遺跡ではこのタイプが欠落した可能性も考えられる。特徴ｂも能登遺跡に共通する。しかし，重山形文の土器は能登遺跡には存在しない。特徴ｃにおける平行工具による

文様は能登遺跡には見られないが，その崩れと思われるものは若干出土している。

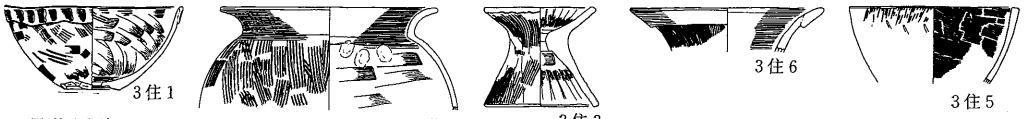
このように，能登遺跡の土器群と本遺跡の土器群とは共通する点が多いものの，特徴ｃの文様の有無という点でやや異なる。特徴ｃとした２本単位の平行工具による文様は，県内では中期後半に位置付けられている桜井式に多用される。桜井式に相当する土器は，会津地方では会津若松市川原町口遺跡などから出土している。本遺跡の３包７に見られる横に連続した弧状沈線も中期後半の南御山Ⅱ式から桜井式に特徴的なモチーフであり，この土器の地文である付加縄文も桜井式にはかなり一般的である。また，３包６の崩れた重山形文も南御山Ⅱ式・桜井式のモチーフから変形したものと考えられる。さらに横沈線と横の弧状沈線の組み合わせのモチーフも桜井式からの変形と考えることもできる。なお，能登遺跡では平行工具による文様はないが，付加縄文の土器は１点出土している。この土器は体部では押圧が弱く撚糸文状になっている。本遺跡の１包６の地文もこれに類するものであろう。

以上を総合すれば，和泉遺跡第３遺物包含層を中心とした土器群は，桜井式との接点の様子を示す天王山式成立期のものと考えられる。和泉遺跡の土器文様モチーフには桜井式に起源を持つと見られるものも多く，天王山式の文様要素の多くが在地の変化中にたどれる可能性を示した資料と言えよう。また，平行工具による文様の有無や甕の器形の違いから見て，能登遺跡との間には若干の時間差が考えられ，桜井式との関連から言えば，能登遺跡の土器群がやや年代的に新しいと思われる。７号土坑から出土した７坑１については，県内では今のところ類例がない。桜井式や天王山式に伴ってこのような土器が出土した事例も確認されていないため，より後出の土器と考えられる。体部の器形や底部付近のミガキの状態に着目してあえて類例を探せば，東京湾周辺の弥生時代後期後半の土器があげられる。今回の調査所見からはこれ以上言及できないが，今後このような土器を介し，東京湾周辺から東海地方の弥生時代後期の土器との関連性に目を向けていく必要があるものと思われる。

（木　本）

２．土師器について

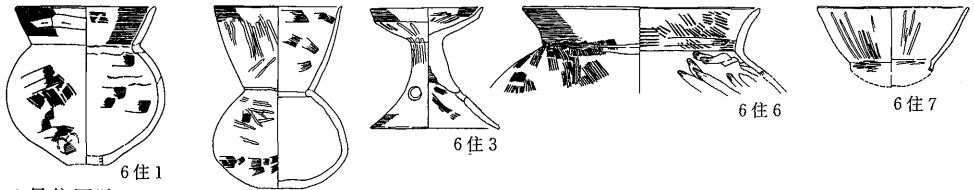
和泉遺跡から出土した土師器は，耕作土や２号溝跡内から出土した一部の土器を除けば，すべて古墳時代前期の塩釜式期に比定されるものと考えられる。これらの土器群は，竪穴住居跡・建物跡・土坑・溝跡・遺物包含層などから出土しており，出土量は破片数にして12,379点を数え，出土土器総数の83％を占めている。遺構内出土土器のうち，やや量的にまとまった出土を見たのは，３号住居跡・５号住居跡・６号住居跡・８号住居跡・１号溝跡などである。遺構どうしが重複する事例がないため，切り合い関係に基づく土器の新旧差の検討はできないが，３号住居跡と４号住居跡の２軒については，極めて接近して構築されていることから同時に存在したとは考えがたい。また，本章第２節で述べるように，柱が抜き取られたり人為的な埋め戻しがなされたり



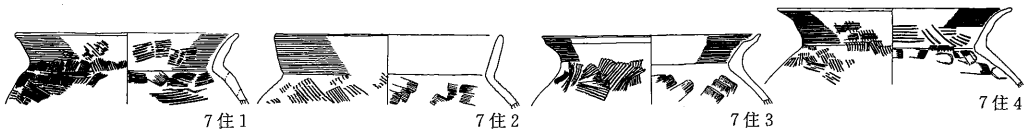
3号住居跡

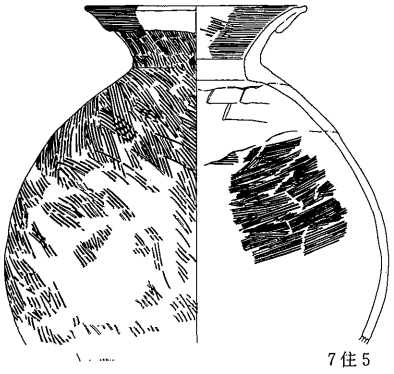
4号住居跡

5号住居跡

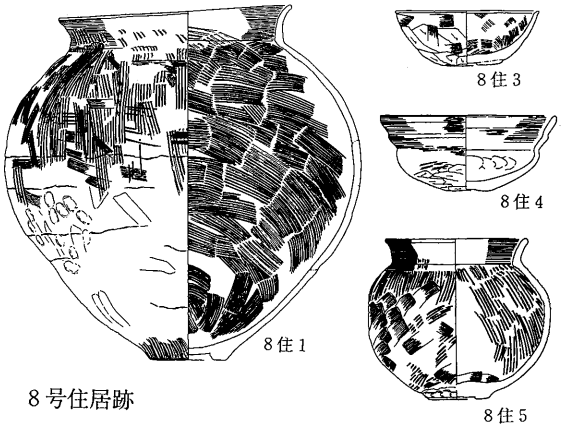


6号住居跡





7号住居跡



8号住居跡

第72図　住居跡出土土師器

した住居跡も見られることから，確認された13軒の住居跡には，時期差が存在する可能性が高い。本遺跡の土師器もある程度の時間差を有していると考えるべきであろう。

この時間差の確認のため，各住居跡出土土器の若干の比較を行ってみたい。ただ，各住居跡とも伴出する土器の個体数が少なく，そのセットの変化については知ることができない。ここでは個別の器種ごとに比較を行い，概要を把握するにとどめたい。

まず，坩形の椀について見てみよう。５号住居跡と６号住居跡で出土しているが(５住１・６住２)，ともに口縁部が長く，くびれが明確な点に共通性がある。器台を見ても，５住４と６住３は脚部が同形態である。したがって，この２軒の土器はほぼ同じ時期と考えられる。

壺は３号住居跡と７号住居跡に見られるが(３住６・７住５)，いずれも口縁部が同じ形態を呈している。口縁が外反しないものが５号住居跡と７号住居跡に見られ，口縁が外反し，なで肩のものは６・７・８号住居跡にそれぞれ認められる。

このようにして見ると，３・５～８号住居跡の土器は，同時期かかなり近い年代のものと考えられる。だが，遺構の配置から３号住居跡との同時存在は考えがたい４号住居跡の土器を見ると，器台(４住５)の小皿状受け部が強く屈曲したり，器台の脚部において窓の位置がかなり高い部分に設けられる(４住４)などの特徴があり，器形的にも異なる時期と考えられる。

１号溝跡における多量の土器群の中には，住居跡出土のものとは異なった特徴を示すものも多く認められる。だが，自然流入土と考えられるℓ２から出土したものであるため，一時期の土器組成を示すものとは言えず，編年的位置や細分の可否に関わる判断は保留しておきたい。

冒頭に述べたように，和泉遺跡の土師器は，その形態・技法から見て，東北地方土師器編年において古墳時代前期に位置付けられている「塩釜式」に属するものである。しかし，会津坂下町宮東遺跡などの土師器に見られるような北陸からの影響は消失しており，宮城県で最古の土師器とされる大橋遺跡の土器とも椀・高坏・坩などの形態が異なっている。したがって，和泉遺跡の住居跡出土土器は，塩釜式最古の段階よりはやや新しい時期のものと考えられる。　　(木　本)

第２節　遺構について　－特に住居と集落の構成に関して－

調査区内から発見された住居跡は13軒である。削平・攪乱のため全容を把握できないものが多いが，柱穴の配置状況などから考えて，おおむね隅丸方形の平面形を呈するものと言える。遺構内から出土している土器は弥生土器と古式土師器のみである。このうち，住居跡内に遺棄された土器によって確実に年代を把握できるのは，４号住居跡から８号住居跡までの５軒である。

遺棄された遺物によって年代が判明している４号から８号までの５軒の住居跡のうち，削平を受けている７号住居跡を除く４軒は，４個の主柱穴を持ち，主柱穴と周壁との間に断面擂鉢状の

ピットを１基設ける構成を示している。このピットは，いずれも開口したままの状態で廃絶されており，その状況から見て柱穴ではないことが明らかであり，小規模ながら貯蔵穴の可能性が高い。これをかりに貯蔵穴と呼ぶならば，削平を受けた７号住居跡においても主柱穴の脇に貯蔵穴を有することが判明しており，上記した５軒のすべてが，その基本的な構造において共通すると言える。貯蔵穴の位置に注目すると，隣接する柱穴と貯蔵穴との配列が，住居跡の南北中軸線に平行するように存在するもの（Ａタイプ；４～７号）と，住居跡コーナーを結ぶ対角線上に存在するもの（Ｂタイプ；８号）とがある。この点に着目して他の住居跡を観察すれば，１・３・12～14号の５軒についても同様の構成となっていることがわかり，１・13号が前者（Ａタイプ），３・12・14号が後者（Ｂタイプ）にあたる。

次に炉について見てみよう。炉を有する住居跡は２・４・６・８・10号の５軒で，炉を持たない住居跡には３号がある。他の７軒については，削平や未調査部分の存在などにより，炉の有無を確認できない。炉を有する５軒の住居跡について見てみると，炉はいずれも地床炉であり，住居跡の中央よりも周壁側に片寄って位置している点が共通する。また，柱穴を持たない２号と10号を除外すれば，４・６号の２軒は，４個の柱穴を囲まれた正方形の範囲の中に炉が取り込まれる構成となっており，８号では柱穴を結ぶ線上に炉が設けられている。

６号住居跡の場合，３基の炉が確認されているが，１号炉と２号炉は燃焼部を床面よりも掘り窪めて火を使用し，３号炉は床面上で直接火を使用している。４・８号住居跡では，いずれも床面を掘り窪めている。６号住居跡の３号炉は，焼け具合も極めて強いため，特殊な目的に使用されたものと考えている。６号住居跡では，住居の改築が認められるが，この改築にともなって，Ｐ８・２号炉→Ｐ７・１号炉という屋内施設の作り替えが認められる。Ｐ８・Ｐ７は炭化物が堆積する施設であり，木炭置き場の可能性が高い。また，２号炉・１号炉のほかに，３号炉という別の炉が併存する構造である点を考慮すると，６号住居跡は，なんらかの工房的な要素を合わせ持つ遺構であった可能性がある。砥石の出土を考慮すれば，鍛冶工房とまでは断定できないにせよ，鉄器の修繕等の作業を行っていた可能性があると言えよう。４号住居跡においては，炉壁の一部と思われるスサ入り粘土の製品も出土しているが，鉄滓や鍛造剝片などの裏づけ資料がないため，ここでは可能性の指摘にとどめておきたい。

調査区内の13軒の住居跡には，他の遺構と重複するものが存在しない。しかし，３号と４号，12号と13号のように，極めて近接している住居跡については，上屋のスペースを考慮した場合，同時存在は不可能である。また，６号のような改築の行われた住居跡も存在することから，本遺跡においては，何回かの住居の建て直し，あるいは建て替えがあったと考えるべきであろう。

重複関係のない遺構群の新旧関係を考えるにあたっては，人為的堆積土の有無や，柱穴から柱が抜き取られているかどうかの検討が重要となる。人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い住

居跡として，５号・８号の２軒がある。柱が抜き取られたことが明白な住居跡は，３号・５～８号の５軒である。他の１号・４号・12～14号の５軒には柱痕が認められる。２号・10号には柱穴がなく，11号については調査が不十分だったため判別できなかった。柱が抜き取られているものについて見てみると，南北の軸方位が真北からやや東側に偏っているものが多い。これに対し，柱痕を残すものは南北の軸方位がまちまちで，１号や14号のように真北から西に偏るものがあれば，４号・13号のように東に偏るものもある。こうした状況を見れば，本遺跡の住居跡が，決して単一時期に構築されたものではないことが理解される。柱の抜き取られているものが相対的に古いものであることは間違いないが，住居の耐用年数が不確実である点と，立て替え時期が不規則と思われる点を考慮し，３・５・６・８号→４・７・11・13号→１・12・14号というような，中軸方位に依拠した３段階の変遷を想定しておきたい。ただし，調査区において，南小泉式に確実に比定できる土器が出土していない点を考慮すれば，これら11軒の住居跡はすべて塩釜式期のものである可能性が高い。柱穴・壁溝のない２号と10号については，さらに古い弥生時代天王山式期のものと考えている。

カマドを持たず，柱穴脇に貯蔵穴を配置する住居跡は，各地の調査例から見て，少なくとも５世紀後半までは継続するようである。５世紀の住居跡の場合，炉は４個の柱穴を結んだ正方形の外側に設けられることが多い(東村西原遺跡など)。炉は，燃焼部を皿状に掘り窪めた地床炉である。貯蔵穴は，炉の位置とは反対側の周壁コーナーに設けられる特徴がある。貯蔵穴と柱穴の位置関係は，先に見たＡタイプとＢタイプの両者がある。５世紀中葉には一部の地域でカマドが出現するが(郡山市永作遺跡など)，カマドを持つ住居と持たない住居はしばらく併存するようである。５世紀におけるカマドを持たない住居跡と本遺跡の住居跡とを比較すると，以下のような特色を指摘することができる。

①炉が小規模で，４個の柱穴に囲まれた範囲の内部に位置する。

②貯蔵穴は，炉が位置する側のコーナー部に設けられる場合(４・８号住居跡)と，炉と反対側のコーナー部に設けられる場合(６号住居跡)の両者がある。　(本　間)

第3節　まとめ

和泉遺跡は，北会津郡北会津村の北端，会津坂下町と境を接する地点に存在する。会津盆地を南から北に向かって流れる大川と宮川の合流点に近い，平坦な沖積面に営まれた遺跡である。会津盆地床における古代遺跡の典型的な立地を示す遺跡と言える。

今回の調査区で発見された遺構・遺物の年代は，弥生時代後期天王山式期と古墳時代前期塩釜式期である。

弥生時代後期の遺構としては，土器埋設遺構2基と土坑1基があり，2号住居跡・10号住居跡もこの時期の可能性を有している。天王山式の土器は，第3遺物包含層において良好な出土状態を示し，少量ながら弥生時代中期後半の桜井式に相当する土器も共伴している。土器群の文様構成は桜井式からの流れで理解できるものも多く，天王山式成立期の様相を示す資料と考えられる。

古墳時代前期の遺構では，竪穴住居跡群が注目される。塩釜式期の住居跡がブロックとして確認されたものとしては，会津盆地内では最初の例となるものである。比較的まとまった出土をみた3・5～8号住居跡の土器群は，短い時間幅に収まるものと考えられ，その時期は塩釜式の中頃と思われる。4号住居跡・1号溝跡の土器群は，これらとはやや様相を異にしている。

今回の調査は，和泉遺跡の主要部分を調査したかたちとなるが，その北限と南限については明確でなく，南側に接する下和泉遺跡との関係も不明である。本遺跡が独立したものであれば，弥生時代後期と古墳時代前期のみに営まれた遺跡ということになり，下和泉遺跡をも取り込んだ大遺跡の一部とすれば，弥生時代後期から奈良・平安時代まで，この付近で地点を変えながら営まれた集落の一部を調査したことになる。　（木　本）

引用・参考文献

坪井　清足　1953　「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格」『史林』36－1

磯崎　正彦　1956　「天王山式土器の編年的位置について」『上代文化』26号

氏家　和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

伊藤　玄三　1966　「弥生文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』Ⅲ

大越　道正他　1980　「西原遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

丹羽　茂他　1985　『宮城県文化財調査報告書104号　今熊野遺跡Ⅰ－古代編』宮城県教育委員会

柳沼　賢治他　1987　「永作遺跡」『郡山東部7』郡山市教育委員会・㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

田中　敏　1987　「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号

須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』

大越　正道他　1990　「能登遺跡」『東北横断自動道遺跡調査報告10』福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

第2編　横沼西遺跡

遺跡記号	AW－YN
所在地	会津若松市神指町北四合字横沼西
時代・種類	平安時代－集落跡
調査期間	(第1次)平成元年　8月22日～10月27日
	(第2次)平成2年　4月23日～5月30日
調査員	(第1次)佐原　崇彦　　只野　幸廣
	西山眞理子
	(第2次)小熊　博治　　伊藤　勝彦
協力機関	会津若松市教育委員会

挿　図・表　目　次

［挿　図］

第１図　横沼西遺跡周辺地質図……114
第２図　横沼西遺跡周辺地形図・工事計画図……115
第３図　横沼西遺跡周辺遺跡分布図……117
第４図　横沼西遺跡グリッド配置図……120
第５図　横沼西遺跡基本層序図……122
第６図　横沼西遺跡遺構配置図……折込み
第７図　１号住居跡……124
第８図　１号住居跡出土遺物（１）……126
第９図　１号住居跡出土遺物（２）……127
第10図　１号住居跡関連遺物……127
第11図　2a号住居跡……128
第12図　2a号住居跡カマド……129
第13図　2a号住居跡出土遺物……130
第14図　2b号住居跡……131
第15図　2b号住居跡出土遺物……132
第16図　１号・２号建物跡（１）……134
第16図　１・２号建物跡（２）……135
第17図　３号・４号建物跡（１）……136
第17図　３・４号建物跡（２）……137
第18図　３号建物跡出土遺物……138
第19図　５号建物跡（１）……140
第19図　５号建物跡（２）……141
第20図　５号建物跡出土遺物……142
第21図　６号建物跡（１）……143
第21図　６号建物跡（２）……144
第22図　６号建物跡出土遺物……145
第23図　７号建物跡……146
第24図　８号建物跡……147
第25図　８号建物跡出土遺物……149
第26図　９号建物跡……150
第27図　９号建物跡出土遺物……151
第28図　10号建物跡……152
第29図　10号建物跡出土遺物……153
第30図　11号建物跡（１）……154
第30図　11号建物跡（２）……155
第31図　12号建物跡……156
第32図　２号土坑出土遺物……159
第33図　４号土坑出土遺物……159
第34図　６号土坑出土遺物……160
第35図　10号土坑出土遺物……162
第36図　11号土坑出土遺物……163
第37図　16号土坑出土遺物……163
第38図　19号土坑出土遺物……164
第39図　24号土坑出土遺物……165
第40図　28号土坑出土遺物……166
第41図　29号土坑出土遺物……168
第42図　30号土坑出土遺物……169
第43図　34号土坑出土遺物……171
第44図　36号土坑出土遺物……172
第45図　１～９号土坑……173
第46図　10・11・16～19・24～28号土坑……174
第47図　29～39号土坑……175
第48図　２号溝跡出土遺物……177
第49図　５号溝跡出土遺物……178
第50図　１～６号溝跡……179
第51図　１～３号焼土遺構……180
第52図　１・２号柱列……181
第53図　遺構外出土遺物……183
第54図　県内出土の刈り鎌……189
第55図　郡山台遺跡・墓料遺跡堀立柱建物跡……191
第56図　建物跡主軸方位分布図……192
第57図　建物跡面積分布図……192
第58図　横沼西遺跡遺構時期変遷図……194
第59図　横沼西遺跡遺構時期区分図……195

［表］

第１表　横沼西遺周辺遺跡地名表……118
第２表　１号建物跡ピット計測表……133
第３表　２号建物跡ピット計測表……133
第４表　３号建物跡ピット計測表……137
第５表　４号建物跡ピット計測表……137
第６表　５号建物跡ピット計測表……141
第７表　６号建物跡ピット計測表……144
第８表　７号建物跡ピット計測表……148
第９表　８号建物跡ピット計測表……148
第10表　９号建物跡ピット計測表……151
第11表　10号建物跡ピット計測表……153
第12表　11号建物跡ピット計測表……155
第13表　12号建物跡ピット計測表……157
第14表　土坑一覧……176
第15表　土師器一覧表……184・185
第16表　須恵器一覧表……185・186
第17表　建物跡一覧表……192

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　地理的環境

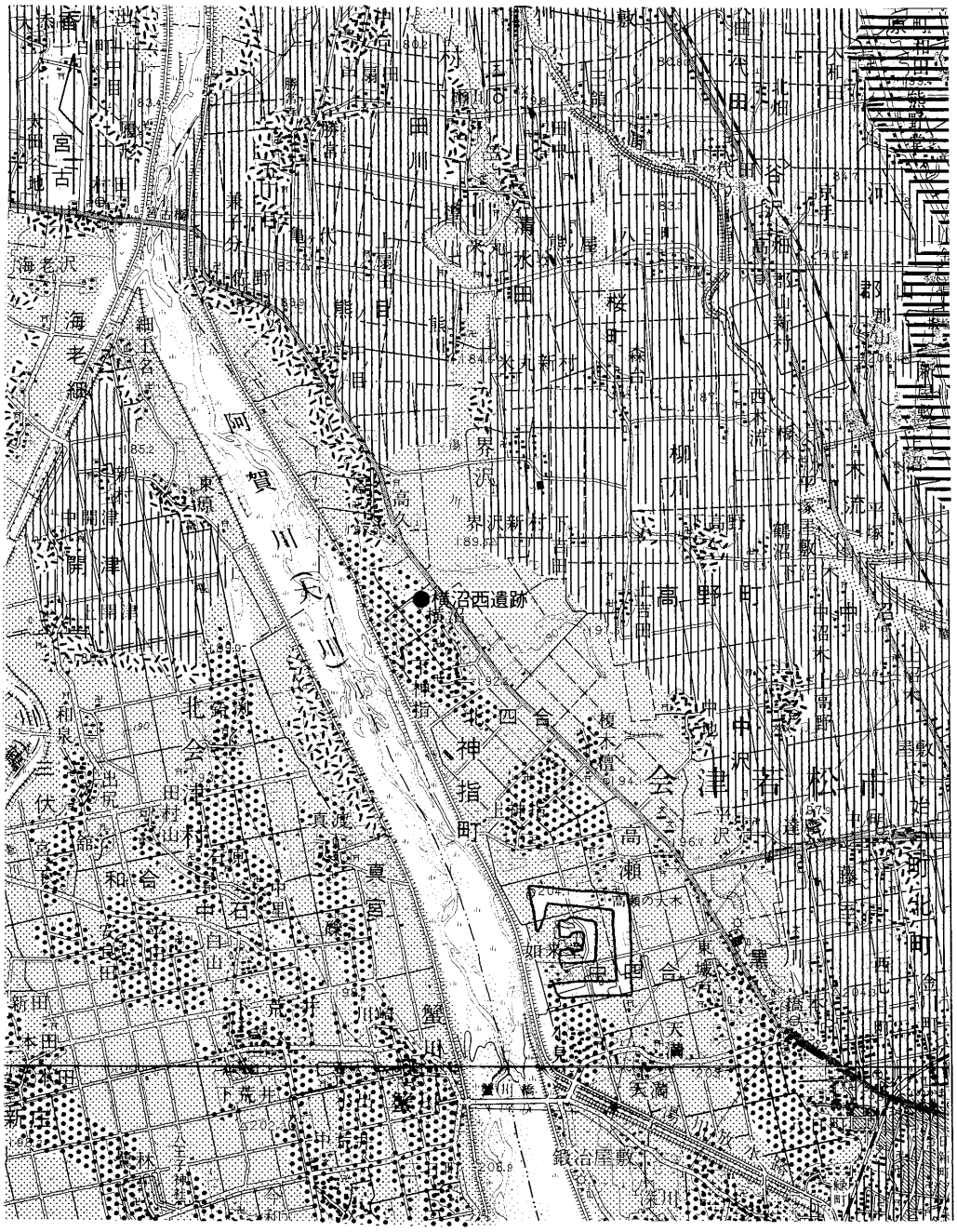
横沼西遺跡は，会津若松市神指町北四合字横沼西地内に所在する。ここは，会津盆地のほぼ中央に位置し，ＪＲ会津若松駅から北西に約5.4㎞の距離にある。東接して国道49号線が南北に走り，西へ約500ｍで盆地内最大の河川である阿賀川（大川）に達する。会津若松市の北西端にあたり，北会津郡北会津村までは西に約700ｍ，河沼郡会津坂下町までは北西に約800ｍ，河沼郡湯川村までは北へ約1.5㎞である。

遺跡の立地する会津盆地は，東北地方の内陸性盆地列の南端の位置を占める。南北約32㎞，東西約13㎞と南北に細長い形をしている。面積は約300㎢の広さをもち，福島県内最大の盆地である。標高は180～220ｍ程であるが，阿賀川が流れ出す一番低い所では標高170ｍまで下がる。盆地の西側には，第三紀層や比較的古い第四紀層で形成されている丘陵が，標高500ｍ以下の高度でなだらかに連なっている。盆地の東側には，脊炙山などのなだらかな山地が800ｍ前後の高度で南北に連なり，その北側には猫魔火山がある。盆地内を流れる川は，北流するものとして阿賀川・宮川（鶴沼川），西流するものとして猪苗代湖から流れ出る日橋川，南流するものとして大塩川・姥堂川・濁川などがあげられる。いずれも盆地内で阿賀川に合流し，阿賀川は西流しながら新潟県を通り，最終的には日本海に注いでいる。

盆地内の地形は，比較的古い更新世の堆積物層は埋没してしまい，完新世の堆積物によって形成された高位沖積段丘面と，低位沖積段丘面，および河川に沿って発達する氾濫原（第１図の底位面Ｉも含む）の３つに大きく区分することができる。

横沼西遺跡は，先にも述べたが会津盆地のほぼ中央に位置しており，標高は190～191ｍである。第１図地質分類図では，氾濫原に区分された底位面に含まれると判断される。その中でも遺跡の東部および北部に比べ0.5～１ｍ程僅かに高くなっており，氾濫原上の微高地上に立地しているものと考えられる。遺跡の地質には，会津若松市北部の低位沖積面に見られるような沼沢軽石層の２次堆積物である沼沢浮石質砂層は見られない。このことは，盆地内の標高200ｍ以下に堆積したと考えられる沼沢浮石質砂層が，阿賀川よって浸蝕された結果と判断できる。横沼西遺跡は，その後に派生した比較的新しい段階での氾濫による堆積物が地表を覆い，その上に立地した遺跡と考えられる。

現在，遺跡周辺は水田および畑地となっている。盆地内の他地域に比べ畑地の割合が高い。この辺りが氾濫原上の微高地であることの裏付けであろう。　（伊　藤）



高位沖積段丘面　　低位面Ⅰ（微高地）　　低位面Ⅱ（氾濫原）

火山泥流堆積物　　自然堤防　　低位沖積段丘面

第１図　横沼西遺跡周辺地質図

国土地理院　0　1000　2000 m　(1/50,000)

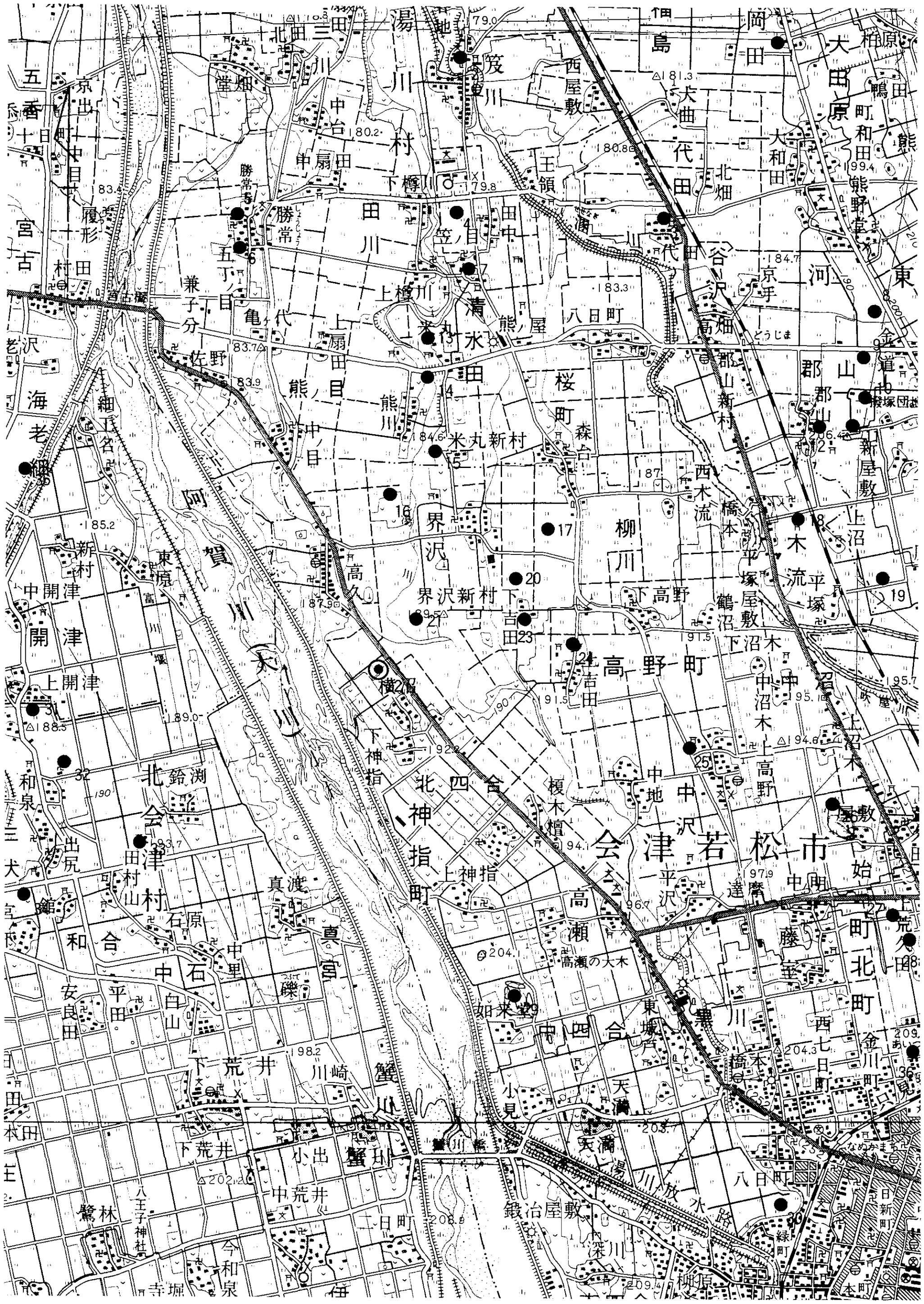
第２図　横沼西遺跡周辺地形図・工事計画図

第２節　歴史的環境

遺跡の所在する会津盆地には，東丘陵・西側周縁部の古墳群を初めとして，旧石器時代以降各時代の遺跡が分布している。これまで，会津盆地における遺跡の確認調査は，他地方に比べやや遅れていたが，昭和40年代後半から圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の分布調査により遺跡発見が相次ぎ，一部では発掘調査も実施されるようになった。さらに，近年の圃場整備事業，高速道路の促進等により緊急発掘調査の件数は，年を追うごとに増加の兆しを見せている。考古学上の成果があがってきた反面，遺跡が年々姿を消してゆく現状を呈している。しかし，一方では，会津若松市の大戸窯址群や会津坂下町の杵ケ森古墳のように，遺跡保存を目的とした調査や，貴重な遺産を破壊から守ろうとする動きも見られるようになってきた。

会津地方における旧石器時代の遺跡は，猪苗代湖畔の笹山原Ａ遺跡，盆地西辺では，高郷村の塩坪遺跡が知られるが，盆地内からは単発的にしか発見されていない。縄文時代の遺跡は，盆地周辺の丘陵・段丘上に立地する傾向が窺える。河東町の大野原で早期～前期，田中原・八田道下で中期の遺物が採取されており，後期の遺跡は姥清水・清水原・戸波・草倉山遺跡など，東長原の台地上を中心に点在する。晩期は横手・ノクネ・木ノ下分の地区で発見されている。盆地の西～南西側では，草創期後半の土器が出土した大村新田遺跡，早期末葉～前期の冑宮西遺跡，後期末～晩期後葉の上冑Ａ遺跡などがある。弥生時代になると，盆地内に数多くの集落が営まれるようになる。前期では，再葬墓で知られる墓料遺跡が不動川添いに位置し，中期においては，標式遺跡となった南御山遺跡・二ッ釜遺跡・河原町口遺跡が本遺跡南方の盆地低位面に所在している。後期後半頃とされる田中原遺跡では，淡水産のカラスガイ・イシガイからなる小規模な貝塚が形成され，籾殻痕のある土器，石庖丁・磨製石斧などが出土している。

古墳時代になると，大塚山古墳群・堂ヶ作古墳を初めとして会津盆地東縁の丘陵一帯に古墳・横穴墓が造営され，会津盆地に所在する古墳密集地帯の一つを形成する。盆地床の古墳としては，会津坂下町の亀ヶ森古墳群と北会津村の田村山古墳が知られていたが，近年会津坂下町の男壇・宮東遺跡，杵ヶ森古墳の調査により会津地方の古墳文化起源の実態が明らかにされつつある。横穴墓については，河東町の駒板新田で29基の横穴墓を調査し，７世紀前半～８世紀後半の横穴墓群であることと確認された。奈良・平安時代の遺跡は，ここ数年で調査例が増加している。掘立柱建物跡・溝跡を中心とした船ヶ森西遺跡，自然河川床より大量の須恵器が出土した上吉田遺跡，弥生～古墳時代との複合遺跡である屋敷遺跡などがある。奈良・平安時代の須恵器の生産活動は，奈良時代前半～後半頃まで周辺丘陵の小規模な須恵器窯跡で中心に営まれ，９世紀に入ると大戸窯址跡群において量産体制が確立するのである。　（小　熊）



第3図　横沼西遺跡周辺遺跡分布図

第１表　横沼西遺跡周辺遺跡地名表

	遺跡名	住所	種別	時期	遺物
1	地蔵窯跡群	河東町大字岡田字地蔵	窯跡	奈良・平安	土師器・須恵器・窯跡４基
2	笈川館跡	湯川村大字笈川字館	城館跡	中世	
3	荒木館跡	河東町大字代田字代田	城館跡	中世	
4	畑田遺跡	湯川村大字清水田字畑田	散布地	平安	
5	堂後遺跡	湯川村大字勝常字堂後	散布地	弥生	弥生土器・勾玉
6	村南遺跡	湯川村大字勝常字村南	散布地	弥生	弥生土器
7	笠ノ目館跡	湯川村大字清水田字堂前	城館跡	中世	
8	南原遺跡	河東町大字熊野堂字南原	集落地	縄文～中世	縄文土器・弥生土器・土師器
9	金屋遺跡	河東町大字郡山字金屋	散布地	縄文～古墳・平安	縄文土器・弥生土器
10	明石塚館跡	河東町大字郡山家明石塚	城館跡	中世	
11	本宮遺跡	河東町大字郡山字本宮	城館跡	中世	
12	古宮遺跡	河東町大字郡山字古宮	散布地	縄文～古墳	縄文土器
13	堂北遺跡	湯川村大字清水田字堂北	散布地	平安	
14	一本木遺跡	湯川村大字熊ノ目字一本木	散布地	平安	
15	村前遺跡	湯川村大字清水田字村前	散布地	平安	
16	東高久遺跡	会津若松市神指町高久字東高久	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器・須恵器
17	干刈遺跡	会津若松市高野町界沢字干刈	散布地	弥生・奈良・平安	
18	橋本木流古墳	会津若松市高野町橋本字木流	古墳	古墳	
19	宮ノ腰遺跡	河東町大字広田字宮ノ腰	散布地	弥生・古墳	
20	矢玉遺跡	会津若松市高野町界沢字矢玉	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器
21	向川原遺跡	会津若松市高野町界沢字向川原	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
22	横沼西遺跡	会津若松市神指町北四合字横沼西	集落跡	古墳・奈良・平安	土師器・須恵器
23	下吉田遺跡	会津若松市高野町柳川字下吉田	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器
24	上吉田遺跡	会津若松市高野町柳川字吉田	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
25	上高野遺跡	会津若松市高野町上高野	散布地	縄文	貝類
26	屋敷遺跡	会津若松市町北町屋敷	集落跡	弥生～平安	弥生土器・土師器・須恵器
27	宮下遺跡	会津若松市町北町上荒久田字宮下	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
28	村西遺跡	会津若松市町北町上荒久田字村西	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器
29	神指城跡	会津若松市神指町高瀬・中四合	城館跡	近世	
30	二ッ釜遺跡	会津若松市神指町黒川字二ッ釜	散布地	弥生	弥生
31	和泉遺跡	北会津村大字和泉字原山	集落跡	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器
32	下和泉遺跡	北会津村大字和泉字中分	散布地	奈良・平安	土師器
33	田村山古墳	北会津村大字和合甲字塚越	古墳	古墳	土師器・内行花文鏡・剣
34	三伏遺跡	北会津村大字三伏乙字町畑	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
35	金山Ｂ遺跡	会津坂下町大字新開津金山	散布地	平安	土師器・須恵器・木製品
36	鶏林遺跡	会津若松市町北町石堂字鬼渡甲	散布地	弥生・奈良・平安	弥生土器・土師器

（遺跡の名称及び種類・時期は『福島県埋蔵文化財一覧を基に付加補充した。）

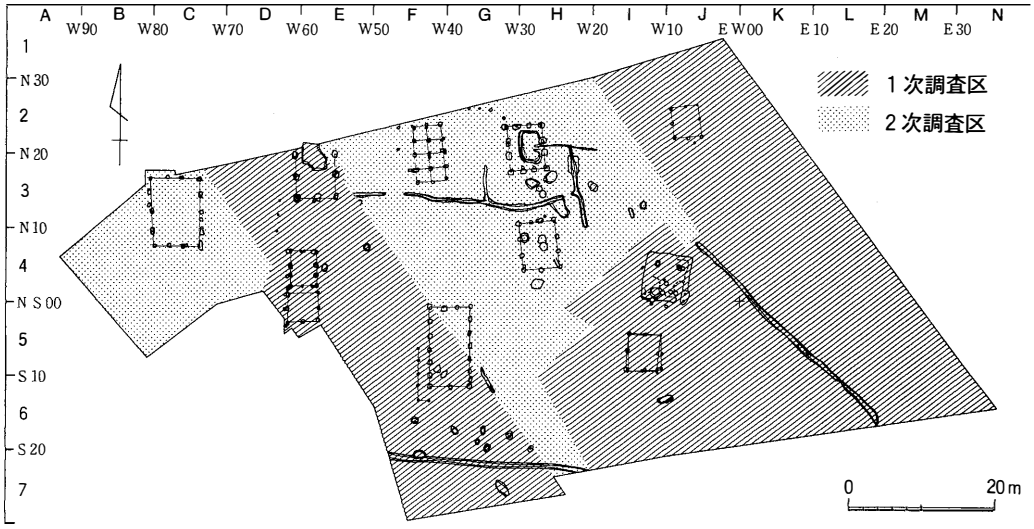
第３節　調　査　経　過

１，平成元年度の調査

東北横断自動車道いわき～新潟線(磐越自動車道) ９次区間の建設に伴い，横沼西遺跡の4,800㎡に路線がかかることとなった。調査は，用地買収の関係上，２年度にわけて実施することとなった。平成元年度，福島県教育委員会は，まず2,400㎡についての発掘調査を財団法人福島県文化センター(以下，県文化センター)に委託した。平成元年７月11日，日本道路公団・福島県教育庁文化課(以下，公団・文化課)及び，県文化センターと協議を行った。公団側から，阿賀川の架橋工事に関わる進入路を，早急に敷設する必要があるとの要望が出され，９月末を目途に，調査区南縁の約700㎡を最優先に調査することに決定した。８月22日，県文化センターは，調査員２名を配して，表土除去作業を開始し，引き続き検出・精査に入った。９月21日，進入路予定区域の調査が終了。同９月，国道を跨ぐ橋脚部分の600㎡の追加調査の要望があり，引き続き調査を実施，10月27日に次年度調査区域の縄張りと遺跡周囲の環境整備を最後に，本年度分3,000㎡の全調査を終了した。平成２年３月19日，公団・県総合交通課・文化課及び文化センターの４者によって，平成２年度の発掘調査に関する協議が公団仙台建設局会津若松工事事務所で持たれた。その結果，調査終了予定を５月末とすること，ただし，橋梁工事の資材置き場に予定される地区については，５月11日を終了目標とすることなどが決められた。（佐　原）

２，平成２年度の調査

前年同様，福島県教育委員会は調査を県文化センターに委託した。県文化センターでは第２次調査面積の1,800㎡に対して，調査員２名を配し調査を実施することとした。２次調査開始に当たっての協議は，公団・企業体・文化課・県文化センターの出席のもと，平成２年４月10日，横沼西遺跡において行われた。ここでは，前年度協議の未決事項であった排土置場・プレハブ設置箇所等の取り決めや，調査期間・調査範囲・資材置場予定地の引き渡し期日・農道迂回路等についての確認がなされた。問題の排土置場は，工事区域との都合上，調査区から離れた地盤の軟弱な箇所に選定された。同年４月24日，重機を導入し表土除去作業を開始した。作業は連日進められたが，排土運搬車両の選定と導入の遅延によって，作業期間は大幅に遅れ，資材置場予定地の引渡し期日が目前に迫った５月９日に終了した。表土除去開始の翌日から，重機の稼働区域を避けて，遺構の検出・精査を開始したが，結局，第１次調査区域を含む東側約1,000㎡の引き渡しは，予定期日を１週間繰り下げた５月18日に行った。残る調査範囲の遺構精査・地形測量は５月29日に終了した。翌30日には遺跡周辺の環境整備・発掘器材等の撤収を行い，調査終了期日の５月31日に，文化課立ち会いのもと全区域を公団側に引き渡し，２年に渡る調査を完了した。（小　熊）



第４図　横沼西遺跡グリッド配置図

第４節　調　査　方　法

横沼西遺跡の調査は，用地買収の関係もあって，総面積4,800㎡の調査対象範囲を平成元年に3,000㎡，平成２年で1,800㎡とに分割して調査を行った。第１次調査の範囲は，調査区中央を縦断する農道を挟み，凹字状に広がる範囲で，第２次調査の範囲は，農道～調査区北端部・同西端部である。５・６・12号建物跡は，第１次調査で発見した遺構であるが，第２次調査の区域に跨がって検出されたため，遺構精査は第２次調査で実施している。

表土除去は，第１・２次調査共に覆爪バケットを装着したバックホーで行い，第２次調査における排土運搬には，クローラーダンプ(ゴムキャタピラー)を使用した。

第１次調査の遺構検出が進む段階で，地区割りのための基準杭の設定に取り掛かった。調査区全体を国家座標に乗せる方針を立て，原点は，既に座標値の明らかな路線中心杭から導き，調査区におけるNS00・EW00とした。原点の座標値はＸ＝169,790.0，Ｙ＝4,570.0である。そこから，Ｘ・Ｙ両軸を調査区を囲む範囲まで延長させ，Ｘ軸にアラビア数字，Ｙ軸にはアルファベットを，北西隅から10ｍごとに付してグリッドを設定した。遺構は，大型のものは四分法，それ以外については二分法で発掘することを原則として，図化にあたっては1／20の縮尺を採用し記録した。また，規模の大きい溝跡については，1／100・1／200の縮尺も採用している。地形図は，平板測量で作成し1／200の縮尺を用いた。

写真撮影では，35㎜・ブローニーサイズの１眼レフカメラを用い，モノクロ・リバーサルフィルムを併用し記録を行った。　（小　熊）

第2章　遺　構　と　遺　物

第１節　基本層序と遺構の分布

１．基本層序

調査区の現況は，蔬菜畑・造園木仮植地として利用されていたる。しかし，遺跡周囲の水田同様圃場整備による地山の削平が，かなり広範囲に及んでいることが確認された。調査区を縦断する農道下からは，耕作機による畝跡が検出されており，圃場整備と合わせて農道を敷設した可能性も高い。その中で，造園木仮植地となっていた調査区中央～北半部は一段高くなっており，古い地形が比較的良い状態で残された唯一の場所である。

基本層序は，調査区北端部・同西端部の周壁及び調査区南側に設定したトレンチによって観察した。層序は大きく６層から成る。細かくは，ＬⅡが２層，ＬⅣが３層に細分されるため，最大９層に分層される。遺構の検出は，第１次調査及び第２次調査の一部の範囲ではＬⅢ上面で行った。しかし，2a号住居跡をＬⅡaから検出したことから判断すれば，大半の遺構の掘り込みは，耕作土直下のＬⅡa及びＬⅡb上面からであったと推察される。各層の詳細は，以下に述べる通りである。

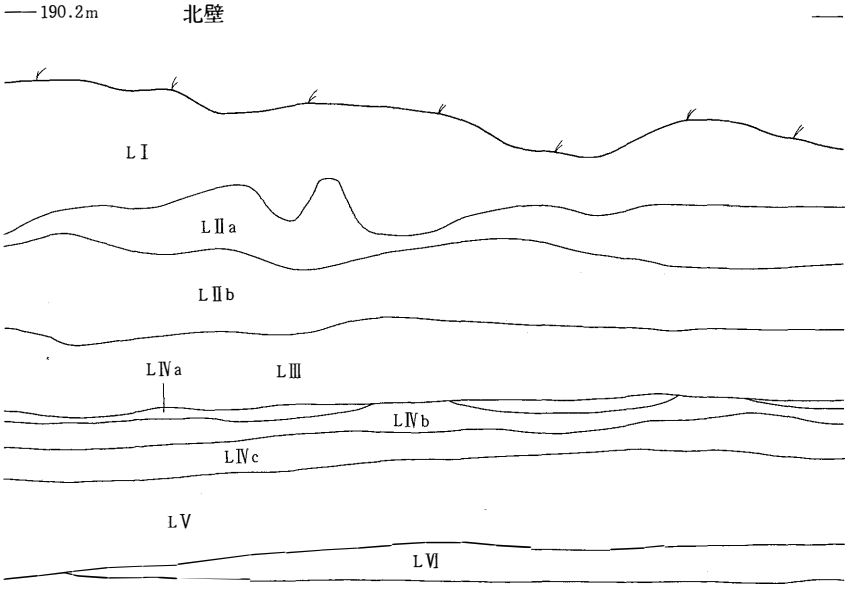
現耕作土であるＬⅠは，やや粘質な灰褐色シルトで層厚15～40cmを測る。ＬⅡは，酸化鉄が斑に付着し，砂・黒褐色土・灰黄色土等が不均一に混入する層である。灰褐色粘質シルトをＬⅡa，暗灰褐色粘質シルトをＬⅡbとした。層厚は，ＬⅡaが４～23cmで，ＬⅡbが17～30cmである。ＬⅢは，調査区全体に現れるプライマリーな層で，層厚18～25cmを測る黒褐色粘質シルトである。同じく，プライマリーな層であるＬⅣは，ＬⅣa・ＬⅣb・ＬⅣcの３層からなる。ＬⅣaは明灰白色粘土，ＬⅣbは灰褐色砂・白灰色粘土の混合土，ＬⅣcは暗灰褐色砂・礫層である。これらは，ほぼ完全な水平の堆積状況を示すもので，礫→砂→粘土の順に堆積する水性堆積の一連の過程が観察できる。ＬⅣの層厚は15～18cmである。ＬⅤは，植物遺体及び炭化物を含む黒褐色粘質シルトで，層厚は20～25cmを測る。ＬⅥは，酸化鉄がクラックに沈殿した明灰色砂質シルトである。

２．遺構の分布状況

２年次に渡る調査で，住居跡３軒(内，建て替えに因るもの１軒)・掘立柱建物跡12棟(内，建て替えに因るもの２棟)・土坑17基・焼土遺構３基・柱列２列・溝跡６条を検出・調査した。約5,000㎡の範囲を調査したにも関わらず，井戸跡は１基も検出されなかった。

遺構は，調査区の南東側を除いた広範囲に分布する。調査区南東側からは，北東方向に延びる

新しい溝跡１条(１号溝跡)が検出されただけである。本跡の中心的遺構である掘立柱建物跡は，建物の主軸を揃え，整然と配置されている点に，その特徴が示されている。真北に主軸方向をもつ建物跡は，調査区の北西側から南東方向に，ほぼ等間隔に並ぶ。建物跡間の距離は15ｍ内外である。また，３・４・６・11号建物跡の位置関係を見ると，北側に位置する建物の南妻と，南に位置する建物の北妻を揃えた状態にある。主軸がやや西側に傾く建物跡は，調査区中央から，北側の範囲に分布するが，その分布範囲は前者より狭い。10号建物跡を群の中心として，半径約15ｍの範囲に収まるものである。本跡ただ１棟の総柱建物跡(９号建物跡)は，この10号建物跡の西側に位置している。７号建物跡は，他の遺構とも近接しない調査区北東側に孤立している。2a・2b住居跡は，10号建物跡に切られ，建物身舎内で完全に重複する。また，１号住居跡は，１・２号建物跡の北側約５ｍの地点に位置している。土坑は，11・26・27号土坑を除き，すべて建物跡・住居跡の南側に隣接又は近接して分布している。この状況は，特に６・10号建物跡付近で顕著に現れ，３～７・10号土坑は，10号建物跡北側柱列の約５ｍ南側に帯状に分布する。遺構の密集度・分布範囲から判断して，調査区北側が遺跡の中心部にあたると考えられる。　　(小　熊)



LⅠ	灰褐色	シルト	
LⅡa	灰褐色	粘質シルト	(砂・赤褐色砂質シルト混入・酸化鉄斑状に沈澱)
LⅡb	暗灰褐色	粘質シルト	(黒褐色・灰黄色　粘質シルト混入・酸化鉄斑状に沈澱)
LⅢ	黒褐色	粘質シルト	(黒褐色・灰黄色　粘質シルト混入)
LⅣa	明白灰色	粘土	(白色砂・酸化鉄混入)
LⅣb	灰褐色	砂・白灰色　粘土　混合土	(酸化鉄混入)
LⅣc	暗灰褐色	砂・礫	(風化凝灰岩混入)
LⅤ	黒褐色	粘質シルト	(植物遺体混入・酸化鉄沈澱)
LⅥ	明灰色	砂質シルト	(酸化鉄クラックに混入)

第５図　横沼西遺跡基本層序図

第２節　竪穴住居跡

横沼西遺跡からは２軒の竪穴住居跡が発見された。１号住居跡は第１次調査で，２号住居跡は第２次調査においてそれぞれ検出し，精査を実施した。２号住居跡は１度建て替えを行っており，新しい住居を2a号住居跡，旧い住居を2b号住居跡との名称を付して，個別に取り上げ説明を加えている。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（第７図，図版４・５）

本住居跡は，第１次調査で調査した遺構であり検出面はＬⅣ，Ｆ－３グリッドに位置する。重複している遺構は，７～９号ピット，17～19・24号土坑である。24号土坑以外はすべて本住居跡より新しい。また検出時において確認した平面形が，かなり崩れたものであることから，住居跡が２軒重複している可能性を考慮しながら調査を進めたが，重複関係は確認できず１軒として取り扱った。更に検出時においてすでに貼床面が露呈しており，壁はすでに破壊されていた。このように後世の削平がかなり進んでおり，住居の細部については不明な点が多い。

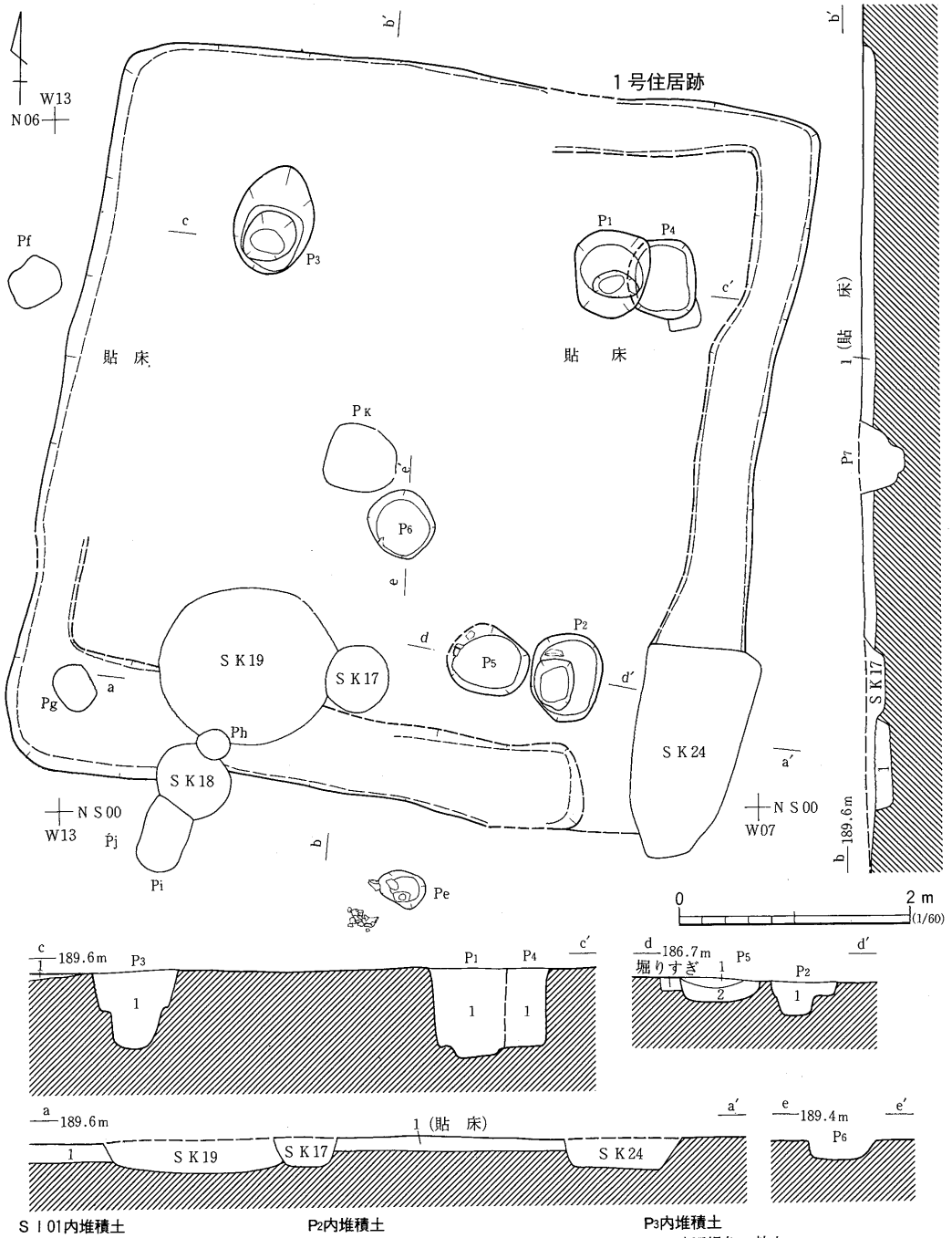
平面形は南北6.3ｍ，東西6.0ｍのほぼ正方形であり，主軸はＮ－13°Ｅである。貼床は厚さ約10㎝を測り，床土は灰褐色粘質シルトである。住居構築時の排土を利用したものと推察される。壁溝は，幅約70㎝，深さ約10㎝である。

住居内ピットは６基検出されており，うちP_1～P_5は当住居跡の柱穴である。これらのピットは床を貼った後に構築されており，P_4・P_2の堆積土は灰褐色粘土で，P_2は炭化物・焼土粒を極微量に含む。P_1・P_3・P_5の堆積土は暗灰褐色粘土であり，P_1は焼土塊を含む。堆積土の状況やピットの位置関係から２時期に区分できるものと考えられ，P_2・P_4とP_1・P_3・P_5に分かれる。P_6については不明である。P_1とP_4の重複関係からP_2が旧く，P_2・P_4から$P_5$$P_1$に作り替えられたことが分かる。$P_3$はほかにピットが検出されなかったことから，２時期ともに使用されたがP_1・P_3の新しい時期と共通することから，２時期重複した可能性が考えられる。

貼床を除去すると，壁際に溝が巡り，かなり凹凸のきつい底面が検出された。これらは床面とするには平坦面が狭く，また壁溝とするには中途できれることから貼床面下の防湿・排水を目的とした施設であると推察される。

遺　　物（第８・９図，図版32）

本住居跡からは土師器杯と須恵器杯がほぼ同量出土している。また特殊なものとしては住居跡内北側より鎌と刀子が出土し，付近からは砥石も出土している。



SI01内堆積土
1　灰褐色　粘質シルト（黒色粘土ブロック混入）

P1内堆積土
1　暗灰褐色　粘土

P2内堆積土
1　暗灰褐色　粘土　（炭化物混入）
2　灰褐色　粘土　（焼土ブロック混入灰黄褐色粘土混入）

P3内堆積土
1　暗灰褐色　粘土

P4内堆積土
1　灰褐色　粘土　（炭化物・焼土粒混入）

第７図　１号住居跡

土師器　杯は１住１～７であり，すべてロクロ成形を行い，内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。２は墨書土器である。文字は一部しか確認できないが，倒位に「萬」と読める。底部回転糸切り後体部外面下部に回転ヘラケズリ再調整を行う。５は底部回転糸切り・体部外面下端に手持ちヘラケズリ再調整を行う。７は体部外面下端に回転ヘラケズリ再調整を施す。

甕は８～11であり，すべてロクロ成形である。８は口縁端部がやや内傾しながら立ち，胴部は緩く膨らみながら下半部へと延びる。９・11は底部資料である。11は胴部外面下端に回転ヘラケズリ再調整を行い，底部外面は回転糸切り・無調整である。

10は復元口径8.2㎝の小甕であり，受け口状の口縁を呈し，胴部はほぼ直線的である。内面にはカキメ調整がみられる。

須恵器　杯は12～20であり，すべてにロクロナデ痕がみられる。底部はすべて回転ヘラキリ痕が観察され，胎土の観察や形態から会津若松市大戸址産のものと考えられる。

甕は21・22である。外面にタタキ痕をもつ体部破片である。

23は，双耳杯の復元推定図であり，耳部が口縁部付近に付く形態のものである。

石製品　24は凝灰岩質の砥石であり，住居跡北側からの出土である。体長は12.8㎝，幅が5.9㎝，重さ635ｇである。３隅に穿孔がみられ，紐穴と考える。

鉄製品　25は鎌で，返りが左側にみられることから，左利き用の鎌である。また返り部付近には木質がわずかに遺存していることから，この部分に柄が付いたものと思われる。先端部は平らな形態であるが，先端部が欠損している可能性も考えられる。刃部の観察から，かなり使用されたものであることがわかる。遺存体長23.9㎝，最大幅4.9㎝である。

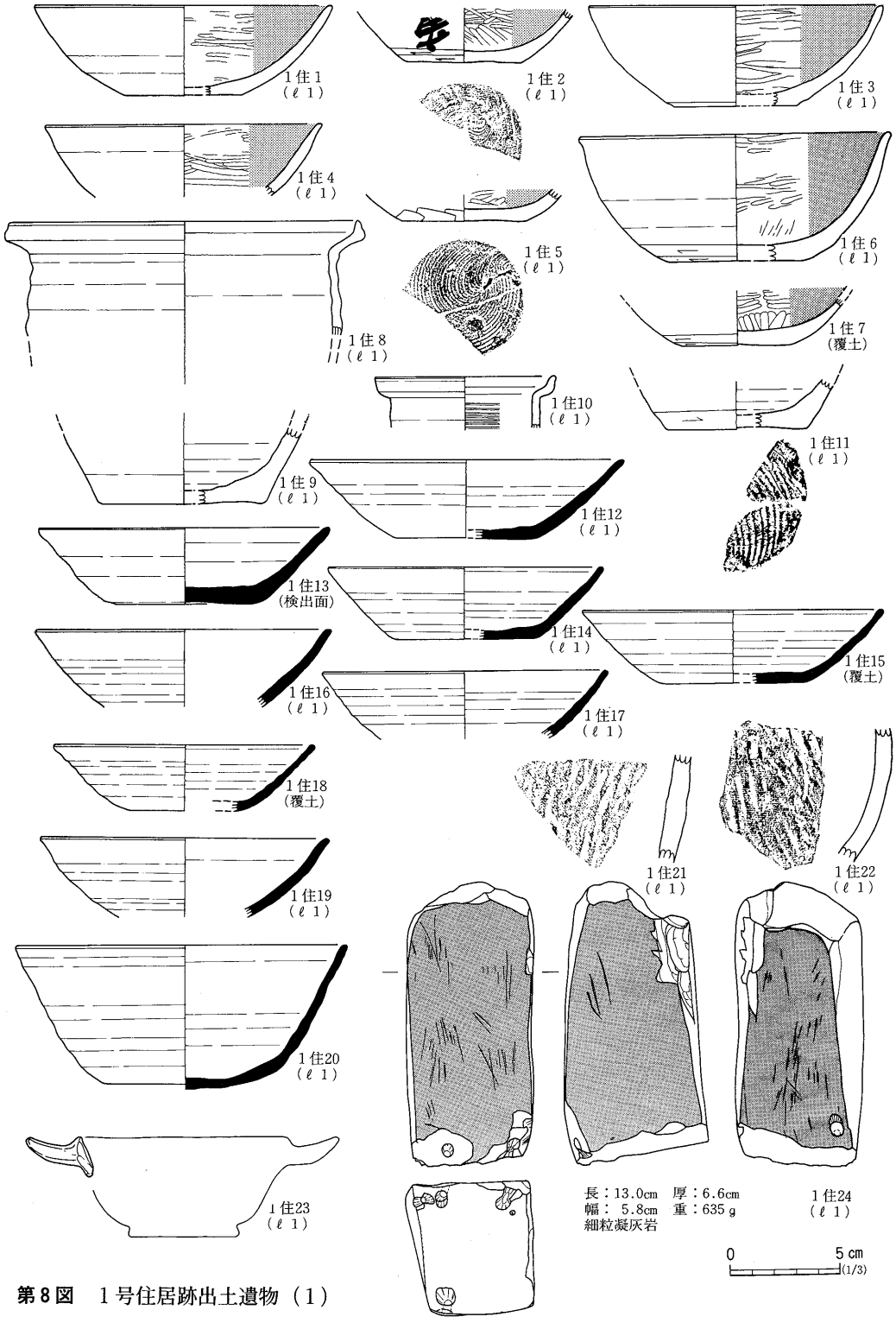
刀子　26は中茎付近の資料である。身との境に木質がわずかに遺存しており，柄がついたものと思われる。遺存体長8.8㎝，最大幅1.5㎝である。

ま　と　め

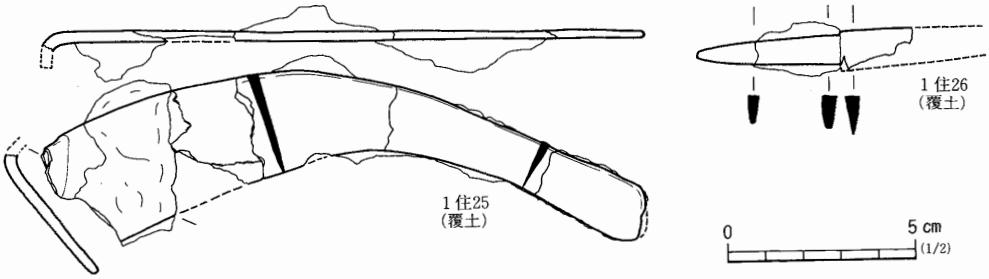
本住居跡は貼床構造を持つ住居跡であり，床面下には防湿・排水用と思われる施設が確認されたが，後世の削平が著しく遺存状態は非常に悪かった。

削平を受けたとはいえカマドの痕跡さえも確認することができず，煮炊用の施設については不明である。出土遺物は，土師器・須恵器・鉄製品・砥石などさまざまであるが，甕の出土が非常に少ない点が特徴的である。

須恵器杯を中心に遺物の年代を推察すると，器高が3.1～3.6㎝(大型杯は除く)，底径／口径比が，0.42～0.51であることから，大戸古窯址群南原19・25号窯に近似しており，９世紀前半に比定されるものと考えられる。さらに，土師器の形態も考慮すると，本遺構出土の遺物は９世紀前半に位置付けられ，本遺構もその時期に比定されるものである。　(西　山)



第８図　１号住居跡出土遺物（１）



第９図　１号住居跡出土遺物（２）

１号住居跡関連遺物　（第10図　図版33）

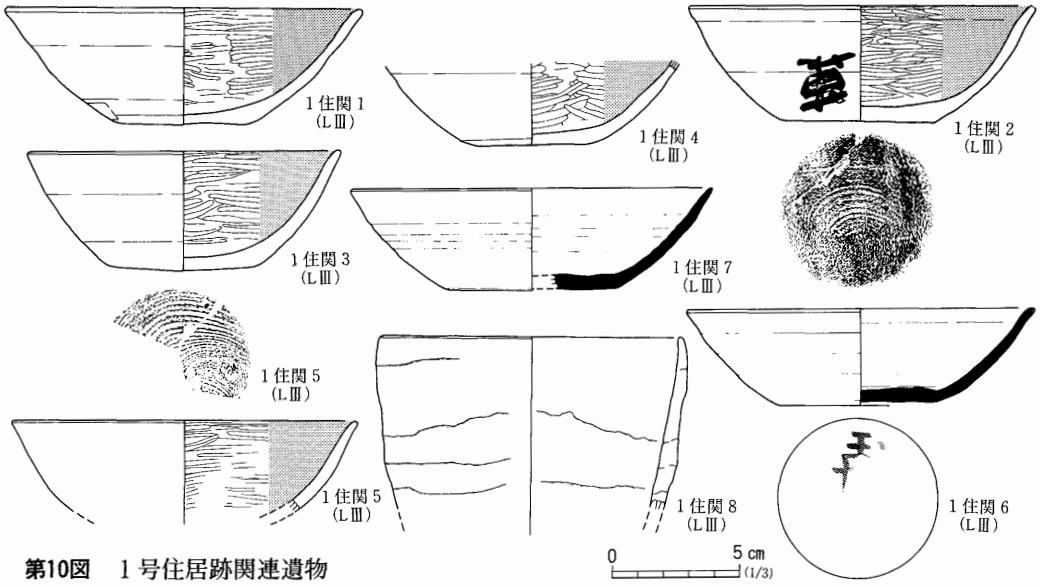
１号住居跡南側において，遺構検出時に出土した遺物である。これらの遺物を取り去った後にP_5を検出した。また遺物の周囲には，焼土が散布していたが焼け面は確認されなかった。

土師器　杯は１～５である。１は体部下端を手持ちヘラケズリしており，内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。２は墨書土器である。１住２と同様に「萬」の文字が倒位にかかれている。底部外面は回転糸切り後ナデ調整を施し，内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。

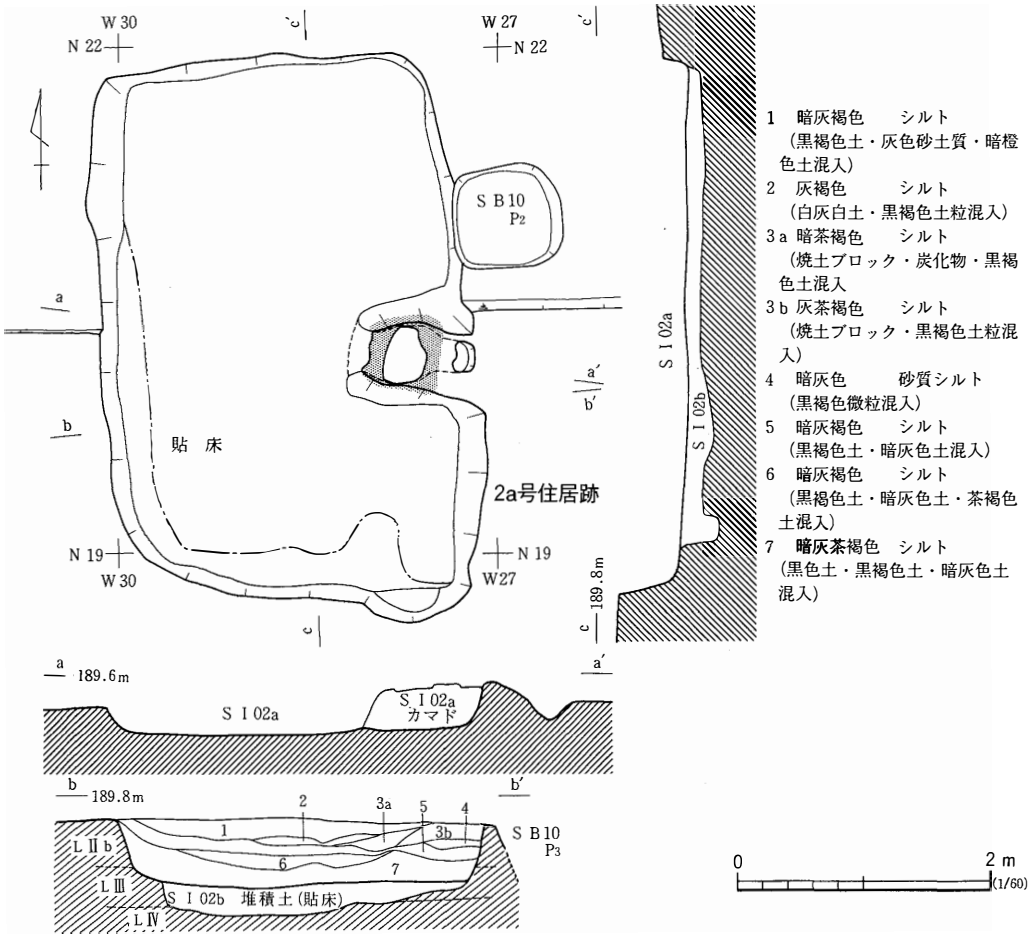
筒形土器　８は口径12cm，遺存器高７cmである。胎土はやや砂を多く含み杯類より粗い。

須恵器　杯６は口径13.5cm，底径6.4cm，器高3.8cm，底径／口径比0.47である。７は口径14.5cm，底径6.8cm，器高4.0cm，底径／口径比0.47である。ともに底部外面は回転ヘラキリである。

以上のようにこれらの遺物は，「萬」の墨書をもつ土器がみられることや，須恵器杯の計測値が近似する点から１号住居跡出土の遺物と密接な関係があるものと考えられる。したがって本遺物の時期は，９世紀前半に比定されると考える。　（西　山）



第10図　１号住居跡関連遺物



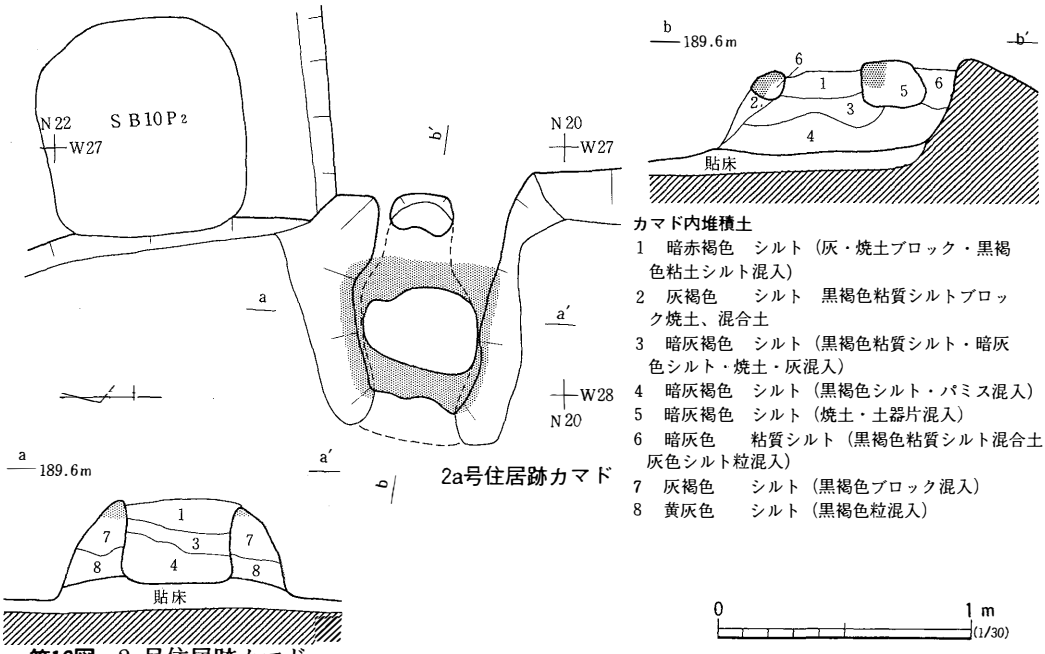
第11図　2a号住居跡

2a号住居跡　ＳＩ2a

遺　　構（第11・12図版６・７）

調査区北側のＧ・Ｈ－２・３グリッドにおいて検出した。遺構の検出・精査は第２次調査で実施した。第１次調査次検出面のＬⅢ上面から遺構検出を試みたが，表土剝ぎの途中，カマドをＬⅡaから発見するに至って，遺構掘り込み面はＬⅢより１層上面と確認された。従って，検出面はプラン北半がＬⅢ上面，南半はＬⅡaとなった。本跡は，2b号住居跡の建て替えの住居跡で，10建物跡内部に完全に重複して位置している。本住居跡の東壁はＳＢ10Ｐ$_2$に切られており，その新旧は2b号住居跡→2a号住居跡→10号建物跡の順に新しくなる。

住居跡の規模は，東西2.5ｍ，南北4.2ｍ。平面形は，南北を長軸方向とした長方形を呈している。本住居跡は，建て替え時に西壁南半～南壁～東壁南半を，24～65㎝外方に拡張している。



第12図　2a号住居跡カマド

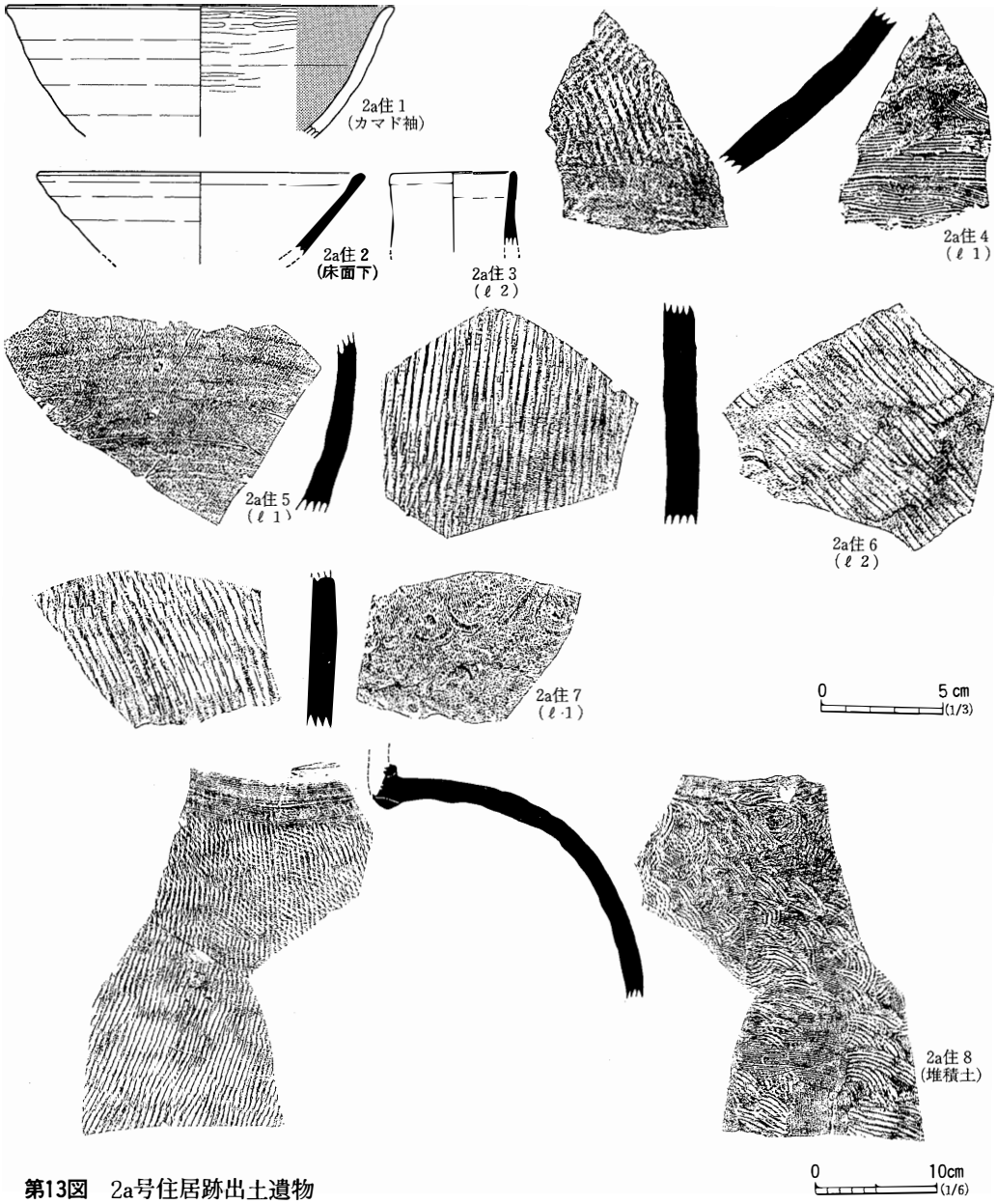
南西コーナー部は，鈍角に開く曲線的な形状に変更され，南東コーナー部には，カマド取り壊しの痕跡が弧状の張り出しとなって残る。真北に対する主軸線の傾きは，Ｎ－４°Ｗを指す。

堆積土は，７層に分けられた人為堆積土である。ℓ１の暗灰褐色シルトには，黒褐色・灰色・暗橙色土が斑状に混入し，ℓ３ａ・ｂには，攪拌された状態の焼土ブロック・黒褐色土を含む。層厚は最大14cmで，東壁から中央にかけて堆積している。ℓ６・ℓ７は，締まりの弱い暗灰褐色・暗灰茶褐色シルトで，黒色・黒褐色・暗灰色土がℓ１と似た状態で混入している。

床面は，2b号住居掘形に重複する部分に，暗灰色・暗灰褐色シルトを投入・整地して貼床とし，拡張した西壁南半～南壁際は，地山ＬⅢを床面として利用している。床面の規模は，東西2.3ｍ，南北3.9ｍで，床面積は約9.0m²である。周壁の遺存高は，東壁で最大41cm，同じく西壁は50cm，南壁が38cm，北壁では19cmを計測した。壁の立ち上がりは，西壁北半で若干緩くなるものの，概ね80°前後の傾斜角を持つ。壁面に際立った凹凸は見られない。

カマドは，東壁中央の貼床上に作り付けられている。全長約100cm，最大幅94cm，高さ約43cmで，平面形は台形を呈する。極めて遺存状態が良く，天井部中央には釜口が遺存する。カマド内堆積土は５層から成り，締まりの強い暗灰褐色シルトを主とする。焼土は，燃焼部を厚く覆うℓ４にはほとんど含まれず，上層のℓ１～ℓ３と煙出し穴堆積土のℓ６にのみ混入する。また，炭化物は各堆積土を通じて検出されなかった。

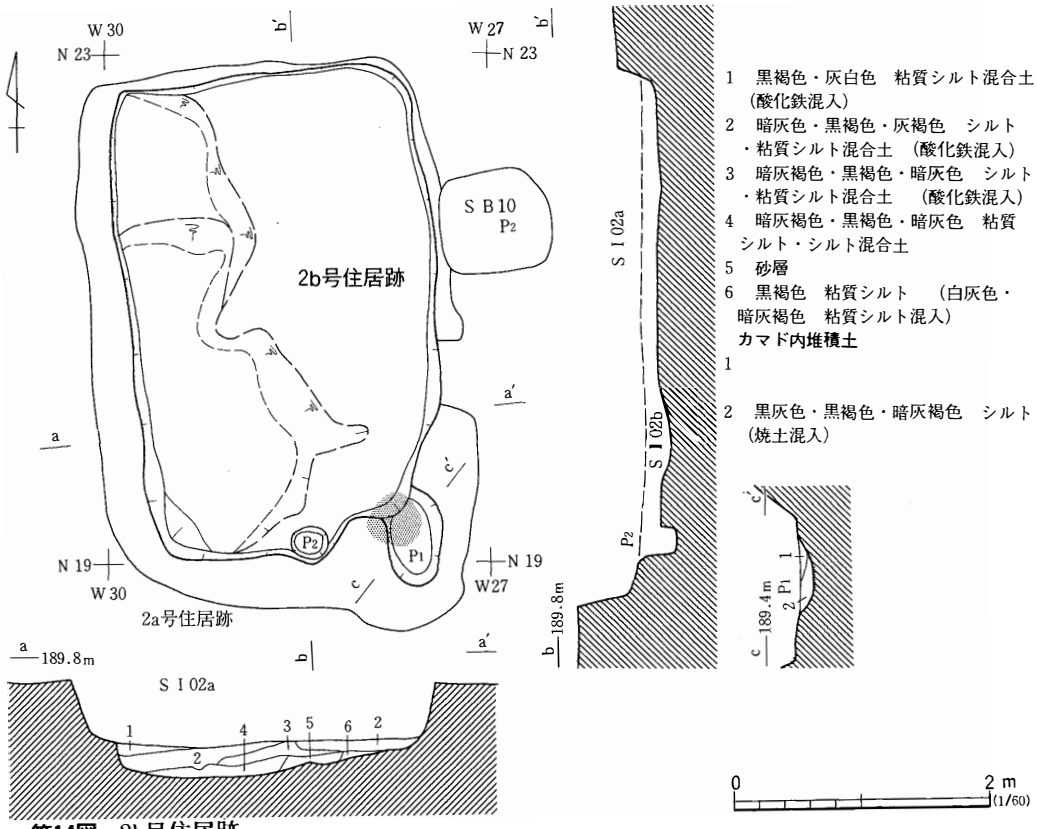
焚口は，下端幅40cm，上端幅32cm，高さは26cmで台形状を成す。燃焼部は概ね水平な平坦面で，底面・奥壁に赤変箇所は認められない。燃焼部の幅約57cm，奥行きは約60cmである。袖部・天井



第13図　2a号住居跡出土遺物

部は芯材を用いず，灰褐色・黄灰色の粘質土で築いている。右袖部は長さ78㎝，左袖部は82㎝で，袖幅は左右ともに14～25㎝である。床面から天井部までの高さは33～43㎝で，壁際から焚口に向け緩く傾斜する。釜口は天井部中央に設けられ，周縁は一部崩落している。上端径は33㎝×46㎝で歪んだ隅丸方形状を成す。煙出し穴は径14㎝×25㎝の不整楕円形で，釜口から約30㎝奥に開口している。釜口周囲の焼けは著しく，赤変硬化している。

床面及び遺構の周囲からは，柱穴・ピットは検出されなかった。



第14図　2b号住居跡

遺　　物（第13図，図版40）

堆積土・床面・カマドから，ロクロ成形の土師器杯・甕，須恵器杯・瓶子・甕が出土している。とりわけ，須恵器甕の破片が大半を占め，確認できた固体数は５個体にのぼる。

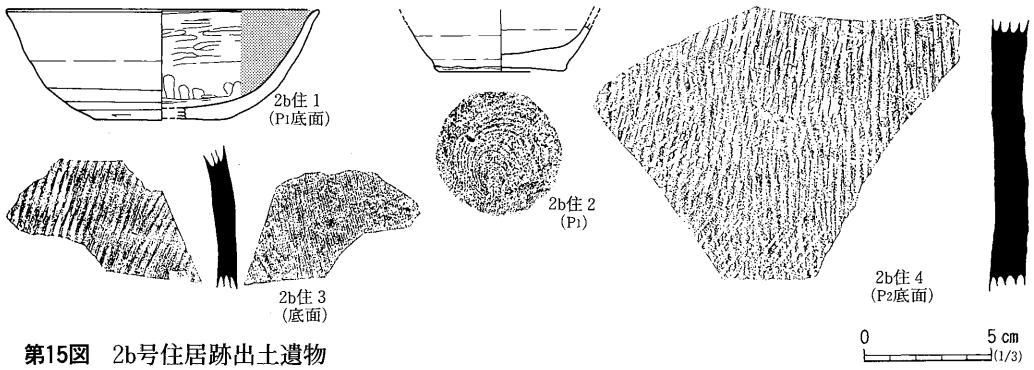
土師器　１は，カマド袖部から出土したロクロ成形の杯である。口縁部～体部下半までが遺存する。内面へラミガキ・黒色処理を施す。

須恵器　２は杯，３は長頸壺または瓶子の口縁部～頸部であろうか。４～８は甕である。７は外面を平行タタキ，内面には同心円状のアテ具痕を明瞭に残す。８は頸部基部に段を巡らすもので，内面の波濤文のアテ具痕を，不定方向のカキメで乱雑に撫で消している。

ま　と　め

本住居跡は，2b号住居跡建て替えの住居で，本住居跡廃絶・整地後に10号建物跡が構築されている。カマド燃焼部に赤変硬化した箇所が見られない状態は，カマドの使用頻度の低さ，もしくは住居使用期間の短さを物語ると推察される。

年代決定の要素となる遺物が稀薄で，時期の特定はできないが，出土土師器は表杉ノ入式期に限られている。本住居跡も，平安時代前半に所属するとみられる。　（小　熊）



第15図　2b号住居跡出土遺物

2b号住居跡　ＳＩ2b

遺　　構（第13図，図版40）

Ｇ・Ｈ－２・３グリッドに位置する2a号住居跡床面で検出した。検出の層位はＬⅢに当たり，掘形底面は，ＬⅣaの明白灰色粘土からＬⅣcの暗灰褐色砂質シルトにまで及ぶ。

住居跡の規模は，東西2.4ｍ，南北3.7ｍで，平面形は，やや西に傾いた長方形を呈する。プラン北半は，2a号住居跡掘形と一致している。主軸の方向はＮ－５°－Ｗを指す。

掘形内の堆積土は，建て替えの際に投入し，突き固めた人為堆積土で，暗灰褐色・黒褐色粘質シルトの混合土を主体としている。掘形底面は，起伏のある未整地面で，細かな凹凸も目立つ。また，底面西半には，長径265㎝，短径140㎝，最深29㎝を測る２か所の不整の掘り込みが見られる。当初の床面は，東半側に見られるＬⅣa上面付近にあたり，西半の掘込みは貼床下の湿気抜き土坑と判断される。ピットは２個検出された。P_1は，南東コーナー部に位置する楕円形を呈するもので，平面規模は42㎝×59㎝，深さは10㎝である。堆積土は，焼土と焼土を多量含有した黒灰色の混合土の２層である。北側底面及びその周囲の径約40㎝の範囲が，火熱により赤変している。P_2は，径25㎝×30㎝，深さが14㎝の円形のピットで，南壁を割って掘り込まれている。

遺　　物（第15図，図版40）

遺物は，掘形底面・堆積土・ピットから，土師器・須恵器が出土している。

土師器　出土土師器はすべてロクロ成形である。１は杯で外面体部下半～底部に回転ヘラケズリ再調整を施す。２は小型甕の底部で，底部切り離しは回転糸切りである。

須恵器　３・４は甕体部の破片である。４の内面は，波濤文のアテ具痕を粗く撫で消している。

ま　と　め

本住居跡は，建て替えで破壊されており，掘形の底面付近を残すに過ぎない。底面・ピットの状態から推察して，貼床を持ち，南東コーナー部にカマドを備えた住居であったと考えられる。

出土遺物から判断して，平安時代初め頃の住居跡と思われる。（小　熊）

第３節　掘立柱建物跡

第１次・第２次調査を通して，掘立柱建物跡は12棟検出された。側柱建物跡が11棟，総柱建物跡は１棟（９号建物跡）である。側柱建物跡のうち２棟が建て替えを行っている。

建物跡は，すべて南北方向を長軸とした南北棟の建物であるが，主軸が真北に対してやや西に傾く一群（２・７～10号建物跡）と，ほぼ真北を示す一群（１・３～６・11・12号建物跡）とに分けられる。前者は，2a号住居跡を切って構築した10号建物跡を群の核として，調査区中央からやや北側に分布している。また後者の一群は，調査区北西から南東方向に向けて，大規模→小規模→大規模→小規模の順に整然と階段状に配置されている。側柱建物跡は，３間×６間規模が１棟，３間×４間が１棟，３間×３間が２棟，２間×３間が２棟，２間×２間が４棟である。総柱建物跡は２間×４間の大型の建物である。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（第16図，図版10・11）

調査区中央部，やや南寄りＩ－５グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。２号建物跡とは重複関係にあり，本遺構は２号建物跡の建て替えである。P_4・P_5・P_6・P_8が，それぞれＳＢ02P_3・P_4・P_5・P_6を切っている。検出面はＬⅢ上面で，地山は灰黄褐色・赤褐色の粘質土を斑状に含む黒褐色粘質土である。上部は耕作による攪乱を受けているが，柱穴の遺存状況は良好である。

桁行き２間×梁行き２間の南北側柱建物跡で，東側柱列の柱痕の中心を通る軸線の傾きは，Ｎ－６°－Ｅを示す。20ｍ西側，Ｆ・Ｇ－５・６グリッドに位置する６号建物跡，そこからさらに西側，Ｄ・Ｅ－３グリッドの５号建物跡，Ｄ・Ｅ－４・５に位置する３・12号建物跡，Ｂ・Ｃ－３・４グリッドに位置する11号建物跡などは，１号建物跡とほぼ同じ方位を示す。

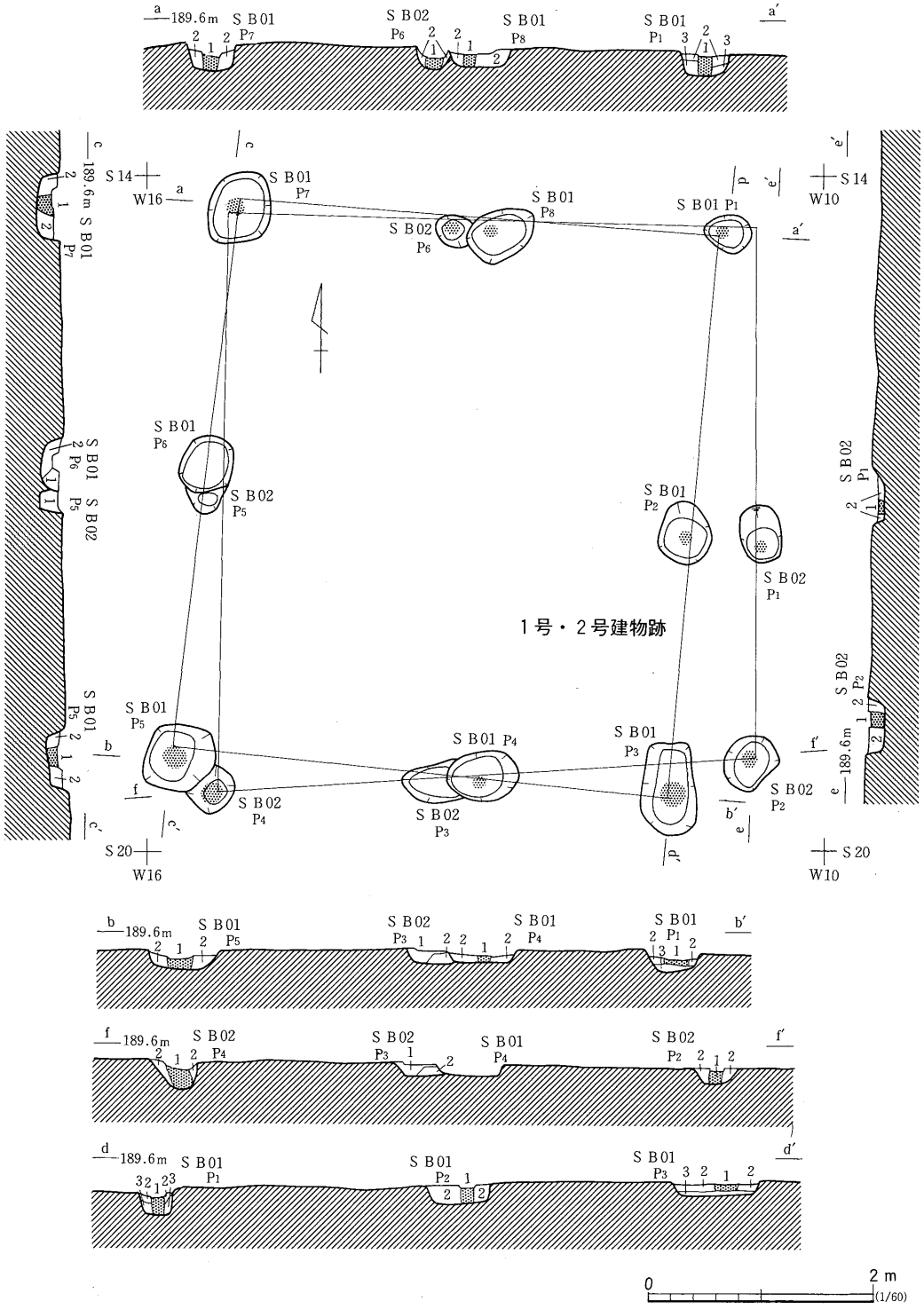
柱穴掘形は不整方形を呈し，ピットの大きさは，掘形中心を通る長さが42～65cm，深さは20cm程であるが，P_3は１号建物跡の中で最も大きく，83×50cmの不整な長円形のプランを持つ。

第２表　１号建物跡ピット計測表　単位（cm）

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
長軸	42	57	83	64	65	50	63	60
短軸	34	46	50	46	60	46	54	44
深さ	23	19	13	11	18	20	21	16
柱痕	10	12	21	11	10	－	16	10
抜穴								

第３表　２号建物跡ピット計測表　単位（cm）

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6
長軸	50	51	54	40	36	32
短軸	34	40	34	(34)	(20)	28
深さ	11	12	14	17	20	20
柱痕	13	12	－	22	－	14
抜穴						



第16図　１号・２号建物跡（１）

ＳＢ01
P1内堆積土
1　茶褐色　　シルト
2　黄褐色　　シルト
（茶褐色シルトブロック混入）
3　黒褐色　　シルト
P2内堆積土
1　灰褐色　　シルト
2　黄褐色　　シルト
P3内堆積土
1　灰褐色　　シルト
2　黒褐色　　シルト
P4内堆積土
1　黄茶褐色　シルト
2　黄褐色　　シルト
P5内堆積土
1　灰褐色　　シルト
（白色粘質ブロック混入）
2　黄褐色　　シルト
P6内堆積土
1　黄褐色　　シルト
2　黄褐色　　シルト
（黒色ブロック混入）
P7内堆積土
1　茶褐色　　シルト
（褐色シルトブロック混入）
2　黄褐色　　シルト
P8内堆積土
1　黒褐色　　シルト
（褐色シルトブロック混入）
2　灰黄褐色　シルト
ＳＢ02
P1内堆積土
1　黒褐色　　シルト
2　灰黄褐色　シルト
P2内堆積土
1　灰褐色　　シルト
2　灰黄褐色　シルト
P3内堆積土
1　灰褐色　　シルト
2　黒褐色　　シルト
P4内堆積土
1　灰褐色　　シルト
2　黄褐色　　シルト
P5内堆積土
1　黄褐色　　シルト
P6内堆積土
1　黒褐色　　シルト
2　茶褐色　　シルト
（黄褐色シルトブロック混入）

第16図　１・２号建物跡（２）

柱間隔は，北妻の柱痕の芯～芯で，東から2.06ｍ＋2.28ｍ，南妻で1.72ｍ＋2.68ｍ，東側柱列では北から2.74ｍ＋2.30ｍ，西側柱列では2.34ｍ＋2.60ｍを測る。したがって，東側の柱列が西側の柱列より幾分長めであるが，北妻で６尺９寸＋７尺６寸，南妻で５尺７寸＋８尺９寸，桁行は東側柱列で９尺１寸＋７寸＋７寸，西側柱列で７尺８寸＋８尺７寸であろう。１号建物跡Ｐ$_2$・Ｐ$_6$の２基はわずかに建物内側に入るが，建物全体の形を歪めるほどのものではなく，柱列の並び方は良好である。

ま　と　め

この建物跡は２号建物跡をほぼ同じ規模で建て替えたものである。両者の時間的隔たりは小さいものと考えられる。

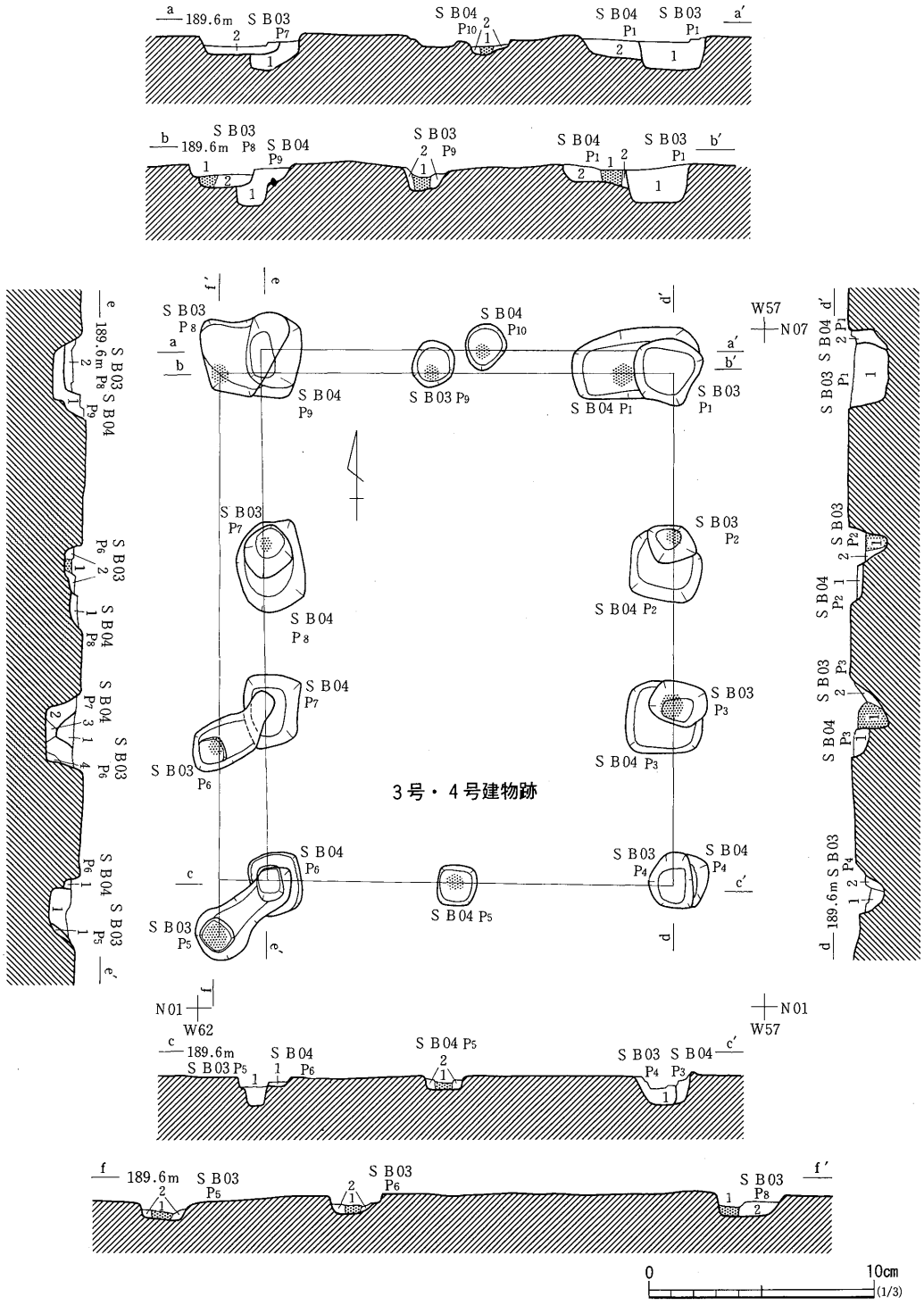
この建物跡からは遺物は出土していないが，近接し，建物の軸の傾きの近い５号・８号・10号建物跡から表杉ノ入式期の土師器，３号建物跡から同時期の須恵器が出土している。恐らくはこれらの建物跡の時期と大きな隔たりはないと考えられ，９世紀頃の所属と推察される。（只　野）

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（第16図，図版10・11）

調査区中央部，やや南寄りＩ－５グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。１号建物跡と重複関係にあり，１号建物跡は２号建物跡の建て替えである。Ｐ$_3$・Ｐ$_4$・Ｐ$_5$・Ｐ$_6$が，それぞれＳＢ01Ｐ$_4$・Ｐ$_5$・Ｐ$_6$・Ｐ$_8$によって切られている。検出面は，ＬⅢ上面で地山は灰黄褐色・赤褐色の粘土質を斑状に含む黒褐色粘質土である。上部は耕作による攪乱を受けているが，柱穴の遺存状態は良好である。

桁行き２間×梁行き２間の南北側柱建物跡で，東側柱列の柱痕の中心を通る軸線の傾きは，Ｎ－３°Ｅを示す。20ｍ西側，Ｆ・Ｇ－５・６グリッドに位置する６号建物跡，そこからさらに西側，Ｄ・Ｅ－３グリッドの５号建物跡，Ｄ・Ｅ－４・５に位置する３・12号建物跡，Ｂ・Ｃ－３・４グリッドに位置する11号建物跡などは，１号建物跡とほぼ同じ方位を示す。



第17図　３号・４号建物跡（１）

ＳＢ03
P1内堆積土
1　黄褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）
P2内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
P3内堆積土
1　灰褐色土
2　灰褐色土
（黄褐色土ブロック混入）
P4内堆積土
1　灰褐色土
（黒色土混入）
2　黄褐色土
（黒色土混入）
P5内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
P6内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）
P7内堆積土
1　黄褐色土
2　灰褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）
P8内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）

ＳＢ04
P1内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）
P2内堆積土
1　明黄褐色土
P3内堆積土
1　黄褐色土
P4内堆積土
1　黄褐色土
（黒色シルトブロック混入）
P5内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
（灰褐色土ブロック混入）
P6内堆積土
1　黄褐色土
（黒色粘質ブロック混入）
P7内堆積土
1　茶褐色　シルト
2　黄褐色　シルト
（黒色土ブロック混入）
3　黒褐色土
（砂質土混入）
4　黄褐色土
（粘質土）
P8内堆積土
1　黄褐色土
（黒色ブロック混入）
P9内堆積土
1　黄褐色土
（黒色ブロック混入）
P10内堆積土
1　灰褐色土
2　黄褐色土
（黒色粘質土ブロック混入）

第17図　３・４号建物跡（２）

柱穴掘形は不整隅丸方形を呈する。ピットの大きさは，掘形中心を通る長さが32～51cm，深さは，深いもので20cm程で，２号建物跡のピットは建て替えられた１号建物跡のピットと比べると全体的に小振りで，やや浅めである。

柱間隔は，北妻では東西両端の柱穴を検出できないため測定不能であるが，南妻で2.80ｍ＋2.00ｍ，東側柱列では南側１間のみ1.80ｍを，西側柱列では南側１間のみ2.64ｍを，桁行となるＰ$_3$－Ｐ$_6$間の距離は4.90ｍを測る。したがって，梁行は北妻で不明，南妻で９尺３寸＋６尺７寸，東側・西側柱列は南側１間分が，それぞれ９尺１寸＋７尺７寸，Ｐ$_3$・Ｐ$_6$間は16尺３寸ということになる。なお，北妻東西の隅柱は，１号建物跡により再度利用された可能性がある。

ま　と　め

この建物跡はほぼ同じ規模の１号建物跡によって建て替えられている。２号建物跡が切られているが，建て替えという観点から推定すれば，あまり時間的隔たりはないものと考えられる。

掘形埋土・柱痕からは，遺物は１点も出土していない。しかしながら，建物の主軸方向が類似する５号・８号・10号建物跡から表杉ノ入式期の土師器が出土している。また，隣接する１号住居跡から９世紀前半～中葉の遺物が大量出土していることを考えれば，本建物跡の所属もこれらに近い時期が想定される。

（只　野）

第４表　３号建物跡ピット計測表

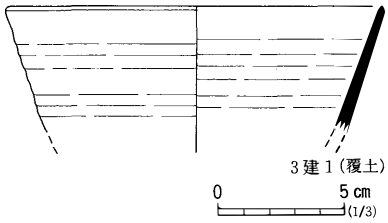
単位（cm）

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	61	40	46	48	104	92	46	78	42
短軸	60	30	38	40	48	40	43	62	37
深さ	40	36	36	26	25	18	15	14	12
柱痕	－	14	22	－	24	14	12	16	14
抜穴									

第５表　４号建物跡ピット計測表

単位（cm）

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸	114	65	68	52	37	56	66	80	67	40
短軸	62	54	66	48	36	46	48	60	45	38
深さ	38	12	16	28	12	26	34	14	28	13
柱痕	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
抜穴					有	有				



第18図　３号建物跡出土遺物

３号建物跡　ＳＢ03

遺　　構（第17図，図版12）

調査区中央部から西寄りＤ・Ｅ－４グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。３号建物跡は４号建物跡の建て替えである。P_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6・P_7・P_8が，それぞれＳＢ04P_1・P_2・P_3・P_4・P_6・P_7・P_8・P_9を切っている。検出面はＬⅡｂで，地山は灰黄褐色・赤褐色・黒褐色の粘質土を斑状に混入させる暗灰褐色粘質土である。検出面より上では畑作による攪乱を受けているが，柱穴の遺存状態は良好である。桁行３間×梁行２間の南北側柱建物跡で，東側柱列の柱痕の中心を通る軸線はほぼ真北を示す。南側に隣接するＳＢ12，北側，Ｄ・Ｅ－３グリッドに位置するＳＢ05，15ｍ東側のＦ・Ｇ－５・６グリッドに位置するＳＢ06，さらに東側，Ｉ－５グリッドに位置するＳＢ02とほぼ同じ方位を示している。

東側柱列の柱穴の掘形は，不整隅丸方形を呈する。隅柱であるP_1はやや大きめであるが，大きさ40～61cm，深さ26～40cmと，ピットの規模は揃っている。それに対して，西側柱列のP_5，P_6，P_8の３ピットでは，建て替えの際の抜き取り穴を利用していると思われ，それぞれＳＢ04P_6，P_7，P_9から50cm程西側に拡張した形のプランが確認されている。P_7はＳＢ04P_8の内部に位置している。そのため，東側柱列と西側柱列とでは，ピットの形・規模・配列の差異が際立っている。特にP_5は南西方向に張り出すために，建物全体に歪みが生じている。柱間隔は，北妻の柱痕の芯～芯で東から，2.14ｍ＋1.86ｍ，南妻で4.08ｍ，東側柱列では北から1.50ｍ＋1.50ｍ＋1.60ｍ，西側柱列では1.52ｍ＋1.80ｍ＋1.68ｍを測る。したがって梁行は北妻で７尺２寸＋６尺２寸，南妻で13尺６寸，桁行は東側柱列で５尺＋５尺＋５尺３寸間，西側柱列でP_5が南側に飛び出すことから，５尺１寸＋６尺＋５尺６寸となるものと考えられる。

遺　　物（第18図，図版12）

P_8から須恵器が２点出土している。須恵器杯の体部で，口径14cm，残存器高５cmを測る。底部から口縁部への立上がりは急で，形態的には椀にあたる。焼成は不良で，色調は淡黄色である。もう１点の須恵器も，焼成不良の，淡黄色の須恵器の細片である。

ま　と　め

この建物跡は，４号建物跡を建て替えたものである。建物の規模，ピット，抜き穴の利用から，４号建物跡との時期差はあまりないものと考えられる。近接し，建物の軸方向の傾きの近い５・８・10号建物跡から表杉ノ入式式期の土師器，このＳＢ03から土師器と同時期と考えられる須恵器が出土していることから，この建物跡も９世前半から中頃のものであろう。　（只　野）

４号建物跡　ＳＢ04

遺　　構（第14図，図版12）

調査区中央部から西寄りＤ・Ｅ－４グリッドにおいて検出された掘立柱建物跡である。３号建物跡は４号建物跡の建て替えである。ＳＢ03P_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6・P_7・P_8により，それぞれＳＢ04P_1・P_2・P_3・P_4・P_6・P_7・P_8・P_9が切られている。検出面はＬⅡbで，地山は灰黄褐色・赤褐色・黒褐色の粘質土を斑状に混入させる暗灰褐色粘質土である。検出面より上は畑作による攪乱を受けているが，柱穴の遺存状態は良好である。

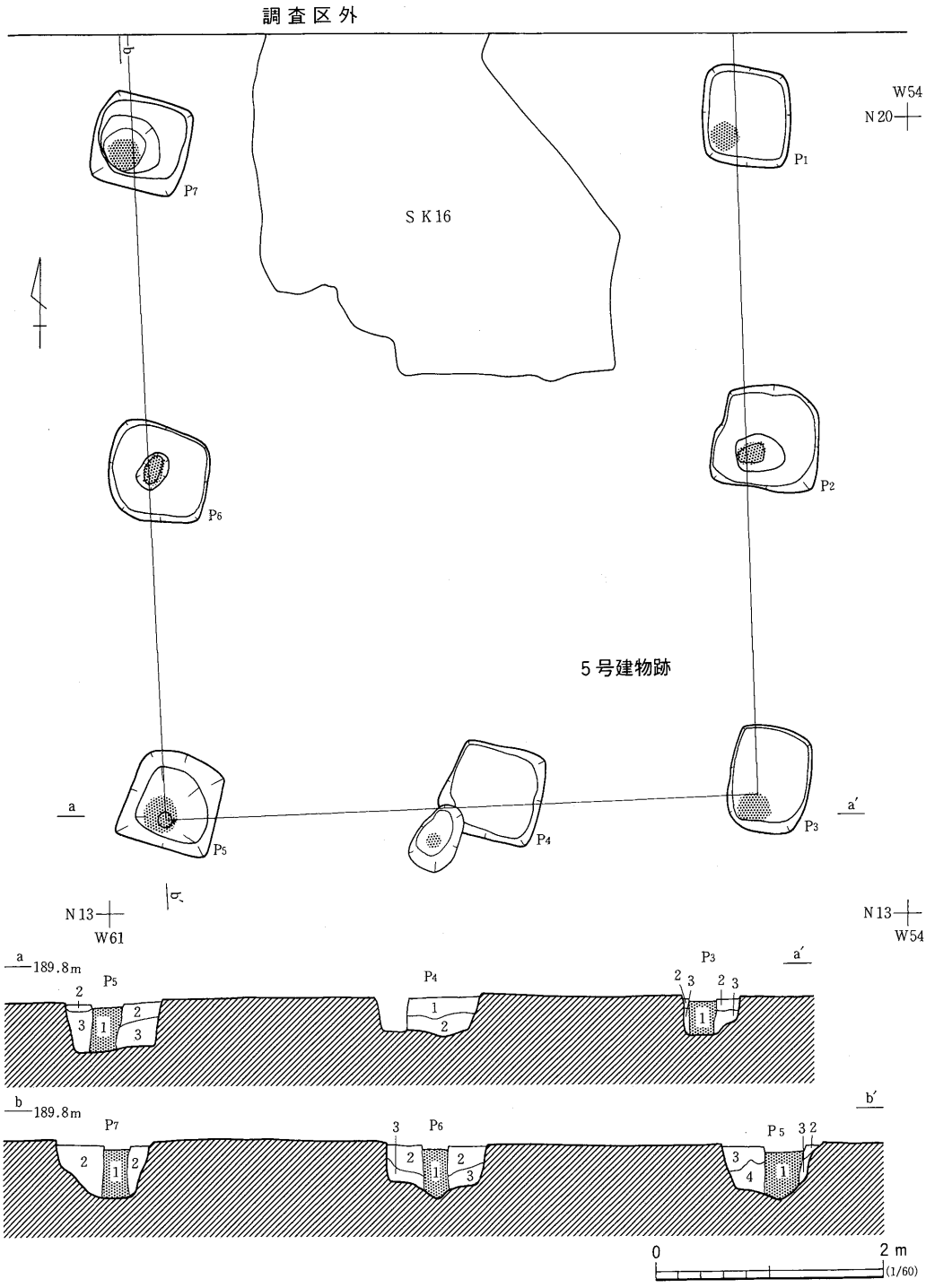
桁行き３間×梁行き２間の南北側柱建物跡で，西側柱列の柱痕の中心を通る軸線はほぼ真北を示す。南側に隣接する12号建物跡，北側のＤ・Ｅ－３グリッドに位置する５号建物跡，15ｍ東側のＦ・Ｇ－５・６グリッドに位置するＳＢ06，さらに東側，Ｉ－５グリッドに位置するＳＢ01とほぼ同じ方位を示している。

柱穴の掘形は，不整隅丸方形を呈する。隅柱であるP_1の114㎝×62㎝を除くと，大きさ68～40㎝，深さ12～34㎝を測り，ピットの形，大きさともに整っており，整然と配列されている。

P_4，P_{10}以外では，３号建物跡建築の際に柱を抜き取ったり，ピットを破壊しているために柱痕を確認できない。P_1の柱痕の位置は柱列の配列から考えて不自然である。柱間隔の計測に際しては，残っているP_5，P_{10}の柱痕の芯，とその他についてはピットの中心との距離を出すこととする。柱間隔は，北妻で東から，1.68ｍ＋1.87ｍ，南妻で2.00ｍ＋1.64ｍ，東側柱列では北から1.70ｍ＋1.36ｍ＋1.48ｍ，西側柱列では1.90ｍ＋1.26ｍ＋1.54ｍを測る。したがって梁行は北妻・南妻では，５尺６寸＋６尺２寸，６尺７寸＋５尺５寸，桁行は東側柱列で５尺７寸＋４尺５寸＋４尺９寸，西側柱列で６尺３寸＋４尺２寸＋５尺１寸と考えられる。

ま　と　め

この建物跡は，３号建物跡によって建て替えられている。建物の規模，ピット，抜き穴の利用という点からから，両者との時期差はあまりないものと考えられる。この遺構からは，遺物は出土していないが，近接し，建物の軸方向がほぼ同じ５・８・10号建物跡から表杉ノ入式式期の土師器が出土し，４号建物跡を建て替えた３号建物跡からは，前述の土師器と同時期と考えられる須恵器が出土している。このことからこの建物跡は３号建物跡よりは古いことは確認されているがそれほど時期差のない９世前半から中頃のものと考えられる。（只　野）


調査区外
W54
N20
P1
P7
SK16
P2
P6
5号建物跡
a
a′
P5
P4
P3
N13
W61
N13
W54
a
189.8m
P5
P4
P3
a′
b
189.8m
P7
P6
P5
b′
0
2 m
(1/60)

第19図　５号建物跡（１）

P3内堆積土
1　暗褐色　粘質シルト
2　黄褐色　粘質シルト
3　灰褐色　粘質シルト　（黒色粘土ブロック混入）

P6内堆積土
1　暗褐色　粘質シルト
2　黄褐色　粘質シルト
3　灰褐色　粘質シルト　（黒色粘土ブロック混入）

P4内堆積土
1　黄褐色　粘質シルト
2　灰褐色　粘質シルト　（黒色粘土ブロック混入）

P7内堆積土
1　暗褐色　粘質シルト
2　黄褐色　粘質シルト

P5内堆積土
1　暗褐色　粘質シルト
2　暗褐色　粘質シルト
3　黄褐色　粘質シルト
4　灰褐色　粘質シルト　（黒色粘土ブロック混入）

第19図　５号建物跡（２）

５号建物跡　ＳＢ05

遺　　構（第19図，図版13）

調査区北西に位置するＤ・Ｅ－２・３グリッドで発見した建物跡である。第１次調査で大半の精査を終え，農道に掛かって検出できなかった北東隅柱のＰ$_1$だけは，第２次調査で調査した。検出面はＬⅡbとＬⅢの漸移層で，Ｐ$_1$・Ｐ$_3$・Ｐ$_5$・Ｐ$_6$がＬⅡb暗灰褐色粘質シルト，それ以外はＬⅢ黒褐色粘質シルトの上面で検出している。遺構の掘り込みは，ＬⅡbからと思われる。

北側列の中央付近で，調査区外に延びる16号土坑と1／4程度重複している。しかしながら，土坑検出・完掘時においても両者切り合いの形跡は認められておらず，ここから新旧の判断はできない。また，柱痕をもった所属不明ピットが，Ｐ$_4$掘形の南西隅を切っている。

本跡は，東西列を桁行とした２間×２間規模の側柱建物跡であるが，北妻中央に位置すべき柱穴が検出されないことを考えれば，桁行はさらに北側の調査区外に延びると思われる。建物の軸線の方向はＮ－２°Ｗを指す。

柱穴の掘形は，方形を基調とした83㎝×82㎝～102㎝×91㎝と規模の大きいもので，深さは37㎝～60㎝まであり一定はしていない。柱痕は円形・楕円形を呈し，Ｐ$_4$を除いた柱穴から検出されている。径は，南西隅柱にあたるＰ$_5$の32㎝が最大で，他は24～28㎝の間に収まる。柱痕はすべて底面に達しており，Ｐ$_2$・Ｐ$_5$・Ｐ$_6$掘形底面には，径34㎝×24㎝～58㎝×50㎝，深さ６～11㎝の円形の凹みが認められる。掘形埋土は，灰褐色の粘質シルトが主体で１～３層に分層された。各柱痕の中心間で計測した柱間隔は，東列で北から2.80ｍ＋3.12ｍ，同じく西列は2.80ｍ＋3.05ｍ。南列の柱間隔は東から(2.65)ｍ＋(2.60)ｍである。これによれば，梁行が９尺等間，桁行は９尺５寸＋10尺を基調としたと考えられる。

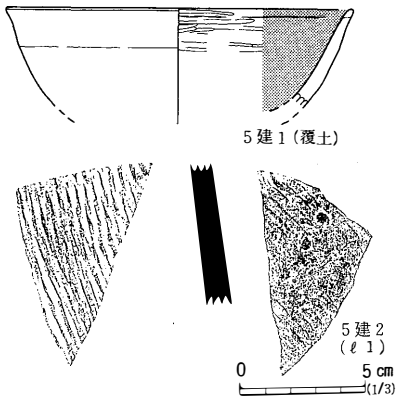
遺　　物（第20図，図版13）

Ｐ$_4$・Ｐ$_5$の掘形埋土からロクロ整形の土師器杯・甕，Ｐ$_6$掘形埋土からは須恵器杯が僅かながら出土している。いずれも破片であり，図化できたものは５建１だけである。

第６表　５号建物跡ピット計測表

単位(㎝)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長軸	88	102	94	85	184	88	83
短軸	78	91	70	83	80	84	82
深さ	58	46	60	37	53	48	57
柱痕	26	24	25	－	32	26	28
抜穴							



第20図　５号建物跡出土遺物

５建１　P_4埋土から出土したロクロ成形の土師器杯で，口縁部～体部下半の約30％が遺存する。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部で若干外反する。内面をヘラミガキし黒色処理を施す。

ま　と　め

建物跡の全容は把握できなかったが，掘形の規模・柱痕径を見た限りでは，他の建物跡より優れた構造の建物であったと推察される。建物の主軸方向は，東側に分布する建物跡群よりも，むしろ３・４・６号建物跡に近似している。両者並存の可能性はかなり高いと推察される。本遺跡の所属時期は，これら遺跡跡と同様の９世紀前半頃と思われる。出土遺物は，表杉ノ入式期の範疇に含まれるものである。　（小　熊）

６号建物跡　ＳＢ06

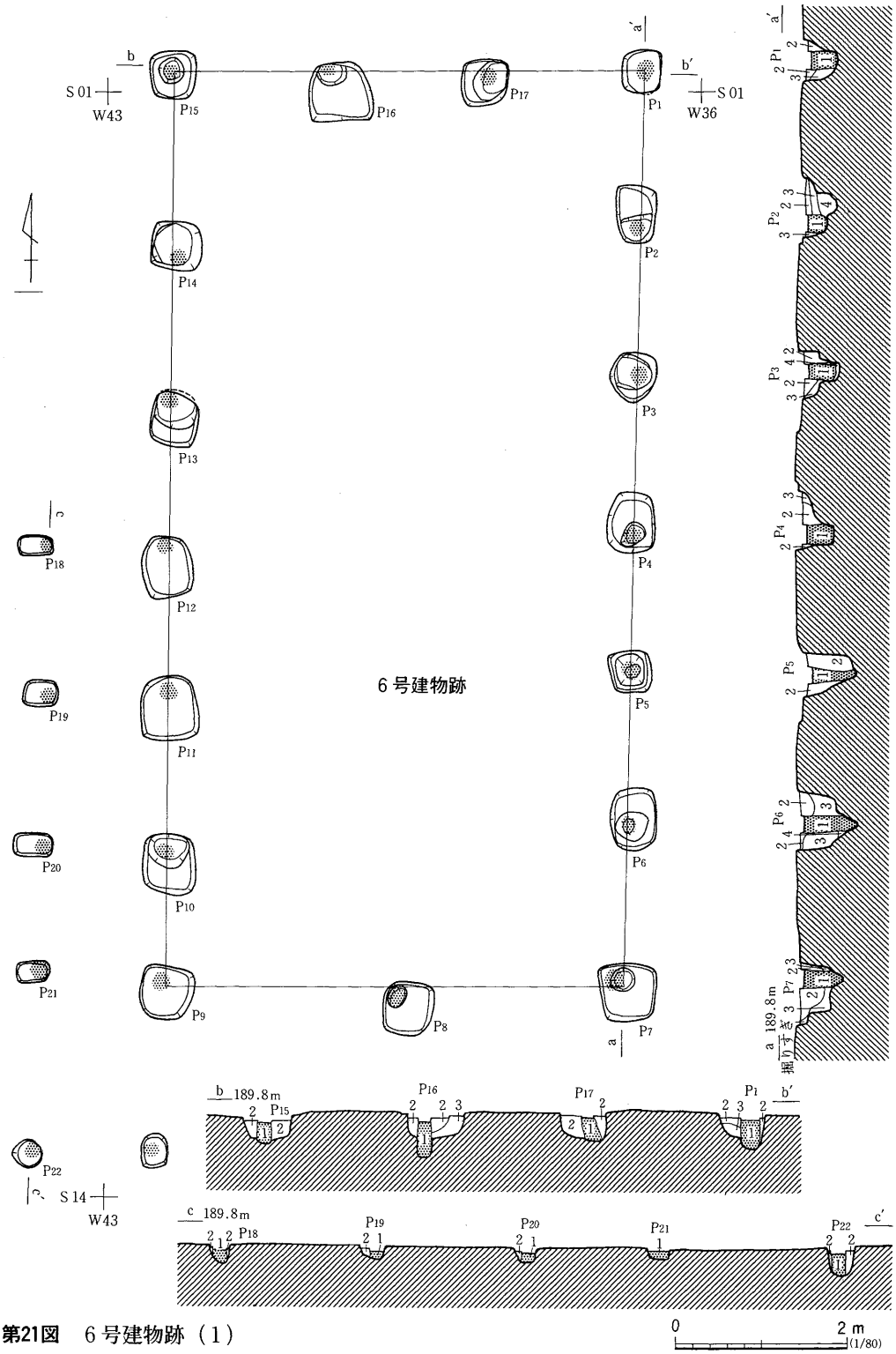
遺　　構（第21図，図版14・15）

調査区中央に近いＦ・Ｇ－５・６グリッドで検出した大型の掘立柱建物跡である。調査区の制限上，第１次調査では全体の約1／2を検出したに止どめ，第２次調査で精査を実施している。本建物跡は，軸線方向を共にする２号建物跡・３号建物跡のほぼ中間に位置しており，２号建物跡から西に約20ｍ，３号建物跡からは東に約15ｍ離れている。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトの上面である。P_6・P_7間で37号土坑，P_{10}・P_{11}付近では１・２号焼土遺構と重複している。互いに掘形との切り合いは無く，新旧関係はとらえられない。

本建物跡は，桁行は６間，梁行は北妻が３間，南妻は２間という変則的な構造をもつ南北棟の側柱建物跡で，西側柱南半には，Ｌ字に折れる長さ４間の目隠塀が付く。東西約5.5ｍ，南北約10.7ｍで，身舎の面積は約59㎡程だったと推測される。軸線の方向はＮ－１°－Ｅを指す。

身舎の柱穴掘形は，方形を基調とした径45cm×51cm～68cm×77cm規模のもので，深さは22～67cmとばらつきが目立つ。柱痕はすべての柱穴で確認された。径は16～25cmで，平面形は円形・楕円形をなしている。P_3・P_9・P_{12}の柱痕は，掘形底面に達しておらず，５～14cmの厚さに突き固められた粘土上に乗っている。これら以外は底面まで及んでいる。P_5～P_7・P_{16}の柱痕からは焼土が検出され，P_1～P_4・P_6・P_7・P_9・P_{10}・P_{17}の柱痕では炭化物粒が混入が認められた。掘形埋土は，暗灰褐色・黒褐色の粘質シルトが主体となっている。

目隠塀の掘形は，東西に長い長方形を基調としており，身舎の掘形より規模・深さとも劣っている。柱痕は，22～16cmで平面形は円形・楕円形を呈する。P_{22}の柱痕には，焼土・炭化物粒が混入していた。


6号建物跡
S01
W43
S01
W36
S14
W43
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
189.8m
0
2 m
(1/80)

第21図　６号建物跡（１）

P1内堆積土
1　暗褐色　シルト　（炭化物混入）
2　暗灰褐色　シルト　（黒色粘質シルト粒混入）
3　黒褐色・暗灰褐色　粘質シルト・シルト混合土

P2内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（炭化物・砂混入）
2　暗灰褐色・暗灰黄色　シルト混合土（暗灰土粒混入）
3　暗灰黄色　シルト　（暗灰色土・黒褐色土混入）
4　黒褐色　粘質シルト　（暗灰黄色シルト混入）

P3内堆積土
1　暗灰色　シルト　（砂・炭化物・暗褐色土粒混入）
2　暗灰黄色　シルト　（暗灰色土・黒褐色土混入）
3　黒褐色・暗灰黄色　シルト混合土（砂混入）
4　灰褐色・黒褐色・粘土・粘質シルト混合土　（砂混入）

P5内堆積土
1　暗灰褐色　粘質シルト　（焼土粒混入）
2　暗灰茶褐色　シルト　（酸化鉄・黒褐色粘質ブロック・砂混入）

P6内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（暗灰色粘質土ブロック・焼土粒・炭化物混入）
2　暗灰褐色・暗灰黄色　シルト混合土（暗灰色土粘土ブロック・黒褐色土混入）
3　暗灰茶褐色　シルト　（暗灰色粘土ブロック・黒褐色土粒混入）

P7内堆積土
1　暗灰褐色　シルト（炭化物・焼土粒混入）
2　暗灰茶褐色　シルト（白灰色ブロック・酸化鉄粒・黒褐色粒混入）
3　暗灰褐色・暗灰黄色　シルト混合土（暗灰黄色ブロック・黒褐色粘土質土ブロック混入）

P15内堆積土
1　暗灰色　粘質シルト　（黒褐色土粒混入）
2　暗灰褐色・黒褐色　シルト・粘質シルト混合土（酸化鉄混入）

P16内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（黒褐色シルト粒・焼土粒混入）
2　暗灰黄色・暗灰褐色　シルト混合土（黒褐色シルト粒・焼土粒混入）
3　黒褐色・暗灰褐色　シルト混合土（砂混入）

P17内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（炭化物粒混入）
2　暗灰黄色・暗灰褐色　シルト混合土（黒褐色土粒混入）

P18内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（黒褐色粒混入）
2　暗灰色　シルト　（黒褐色粒混入）

P19内堆積土
1　灰黄色　シルト　（黒褐色土粒混入）
2　黒褐色・灰褐色　粘質シルト・シルト混合土

P20内堆積土
1　暗灰褐色　シルト　（黒褐色粒混入）
2　黒褐色・灰褐色　粘質シルト・シルト混合土

P21内堆積土
1　灰黄色　シルト　（黒褐色土粒混入）

P22内堆積土
1　暗灰色　シルト　（焼土粒・炭化物混入）
2　暗灰褐色　シルト　（黒褐色シルト酸化鉄混入）

第21図　6号建物跡（2）

柱痕の芯で測定した柱間隔は，東列北から1.85m＋1.75m＋1.85m＋1.58m＋1.82m＋1.82m，西列は2.18m＋1.70m＋1.70m＋1.72m＋1.88m＋1.52mで，P_9・P_{23}間は1.98mである。南列は東から2.68m＋2.78m，北列は1.87m＋1.89m＋1.86mである。ここから推察すれば，桁行6尺＋5.5尺＋6(5.5)尺＋5.5尺＋6尺＋6(5.5)尺，梁行は北妻が6尺等間，南妻は9尺等間を基準に構築したと考えられる。目隠塀は西側柱から4尺8寸あまりの間隔をとり，間尺は側柱に対応させている。北側部分は攪乱が著しく，塀が西側柱北半にも及ぶかは確認できなかった。

第7図　6号建物跡ピット計測表　　炭＝炭化物　単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	51	68	58	72	51	72	69	63	63	70	77	74
短軸	45	47	56	56	48	53	61	60	61	62	68	58
深さ	49	30	48	46	67	61	53	48	42	38	30	22
柱痕	25	20	24	22	23	21	25	22	22	22	22	20
抜穴	炭	炭	炭	炭	焼土	焼炭	焼炭		炭	炭		

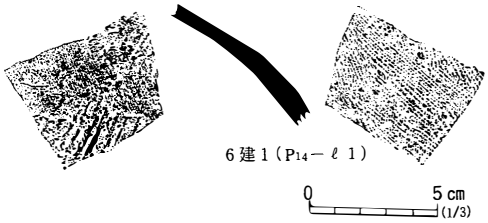
Pno	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	
長軸	62	62	58	72	54	42	42	46	40	33	40	
短軸	56	56	55	67	48	23	30	26	26	32	32	
深さ	22	42	30	55	34	19	15	24	14	31	30	
柱痕	22	19	19	16	19	16	19	20	22	18	18	
抜穴				焼土	炭					焼炭		

遺　　物

P_3・P_5・P_6・P_{14}・P_{17}・P_{24}の柱痕・埋土から土師器杯・甕，P_3～P_5・P_{24}の柱痕からは須恵器杯の破片が出土している。小片であり図化できなかったが，土師器はすべてロクロ整形で，底部～体部下半に回転ヘラケズリ再調整を加えた杯が含まれる。

ま　と　め

６間×３間規模で目隠塀を備える本建物跡は，総柱建物跡の９号建物跡や大型の11号建物跡と並び，本遺跡の中心的遺構である。建物内部の２ヵ所に残る焼け面の存在や，柱痕に焼土が含まれていることからみて，火災により焼失した可能性も指摘される。



第22図　６号建物跡出土遺物

出土遺物は，表杉ノ入式期でも比較的古い段階の特徴をそなえている。所属時期は９世紀前半頃と推察される。　（小　熊）

７号建物跡　ＳＢ07

遺　　構（第23図，図版16）

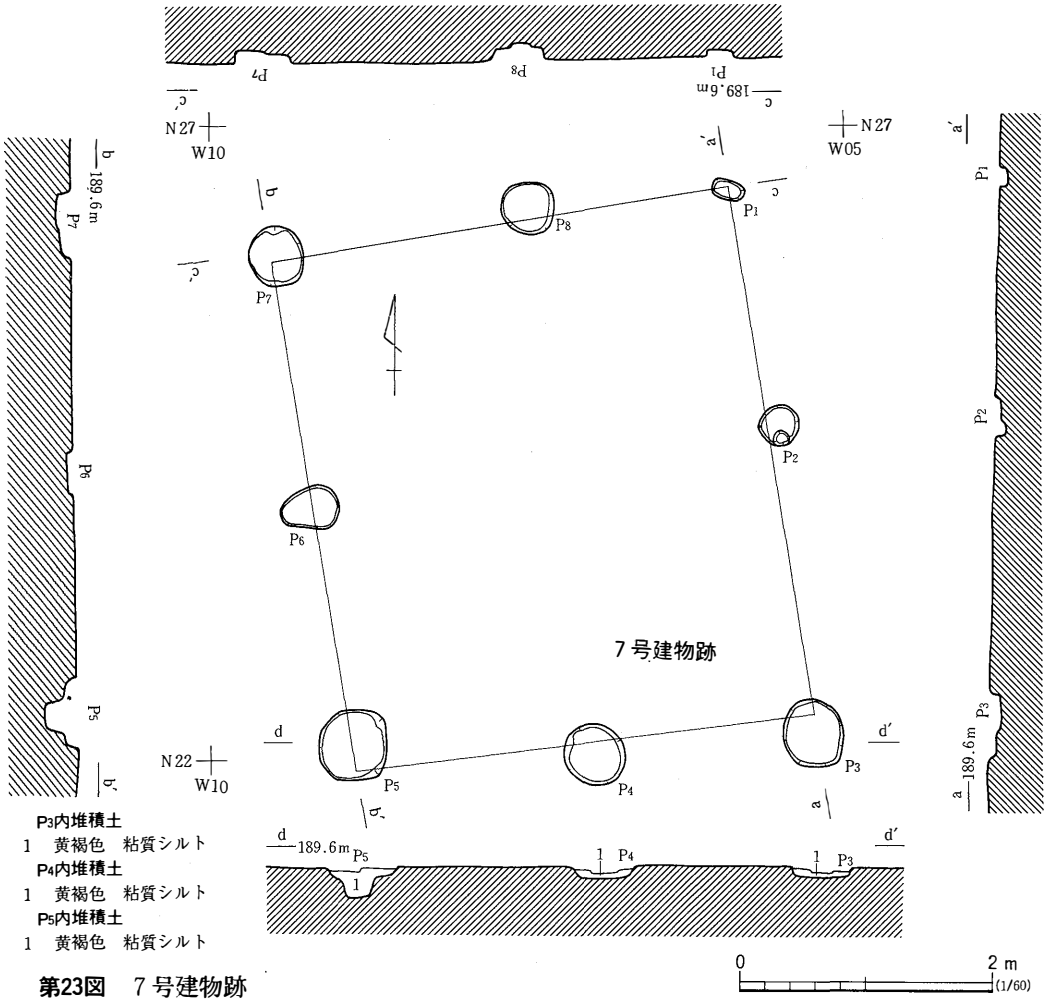
本調査区北東隅，Ｊ－２グリッドに位置する。東へ10ｍ程で国道49号にでる。北東に僅かに傾斜するが，ほぼ平坦なＬⅢ上面で，黄褐色粘質シルトのピット群として検出され，その配列から，東西２間・南北２間の掘立柱建物跡と判断した。

他遺構との重複関係はない。同じ建物跡との位置関係は，本建物跡西側柱列から西に20.5mで10号建物跡が，本建物跡西南隅柱から西南に23ｍで８号建物跡の北西隅柱がある。西南約11ｍにある27号土坑が最も近い遺構である。本建物跡は，上述のように，調査区北東隅に他遺構とは間をおいて存在している。

柱穴の平面形は不整円形が基調となっている。他にこれに類する楕円形・隅丸方形がある。大きさは，長径・短径とも40ｍ以上のものが多い。P_5が長径55㎝・短径53㎝で最大であり，P_1が長径24㎝・短径19㎝で最少である。深さは，P_5の28.5㎝が最大で，他は12㎝以下が多く，P_3の7.5㎝が最も浅い。全体に柱穴の遺存状態は良好とはいえない。

掘形の埋土は，上記の黄褐色粘質シルト１層のみである。柱痕は一個も検出されなかった。P_2・P_5・P_8には，掘形の底面に柱痕に該当すると思われる窪みが存在するが，埋土の状況からは確認するに至らなかった。

各柱列の間隔は，東側柱列が北から1.93ｍ＋2.49ｍ，西側柱列が北から2.04ｍ＋1.87ｍ，南側柱列が東から1.76ｍ＋1.91ｍ，北側柱列が東から1.56ｍ＋2.08ｍである。これを間尺に換算すると，東側柱列が北から６尺４寸＋８尺３寸，西側柱列が北から６尺８寸＋６尺２寸，南側柱列が東から５尺９寸＋６尺４寸，北側柱列が東から５尺２寸＋６尺９寸となる。これによれば，建物のプランは不整台形で，２間×２間の南北棟と考えられる。東側柱列・西側柱列とも方位はＮ－９°－Ｗである。遺物は検出されなかった。



第23図　７号建物跡

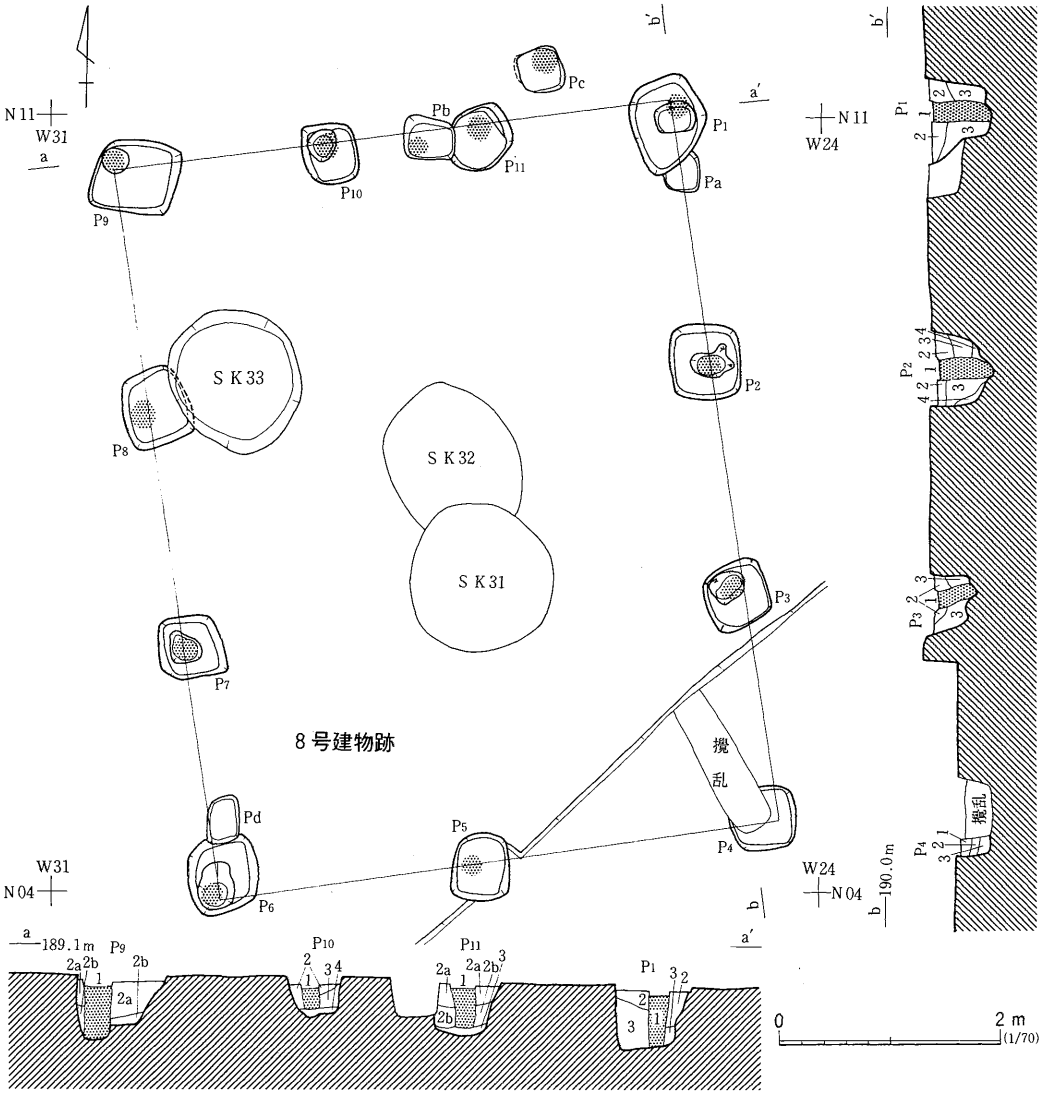
ま　と　め

本建物跡は遺存状況が悪く，その詳細は不明である。ＬⅢでの検出であるが，本来はかなり上層からの掘り込みであったと思われる。出土遺物がなく，所属時期は特定できないが，周辺からは，表杉ノ入式期に属する土器片が多く検出され，それ以降の遺物は皆無であること，また，他の建物跡と方位が近似することから，概ね９世紀後半頃に属すると考えたい。　（佐　原）

８号建物跡　ＳＢ08

遺　　構（第24図，図版17）

調査区中央のＧ・Ｈ－３・４グリッドで検出した掘立柱建物跡である。第２次調査で検出・精査を実施した。西側柱の柱筋が通る10号建物跡からは，南に約６ｍ離れ，４号溝跡からは，南に約２ｍ離れた一角で，ＬⅢの漸移層が地山となっている。北妻にあたるＰ$_4$とＰ$_5$の一部が削平を



P1内堆積土
1　茶褐色　　シルト
2　暗灰茶褐色　シルト（黒色ブロック混入）
3　暗灰茶褐色　シルト

P2内堆積土
1　茶褐色　　シルト
2　灰茶褐色　シルト（暗褐色シルト混入）
3　灰褐色　　シルト（茶褐色シルト混入）

P3内堆積土
1　茶褐色　　シルト
2　灰褐色　　砂質シルト
3　灰茶褐色　砂質シルト（黒色ブロック混入）

P4内堆積土
1　灰茶褐色・黒褐色　シルト混合土
2　灰褐色　　粘質シルト
3　暗褐色　　砂質シルト

P9内堆積土
1　灰褐色　　粘質シルト（黒褐色シルト混合）
2a　暗灰褐色・黒褐色　シルト・粘質シルト混合土（赤褐色粒混入）
2b　暗灰褐色・黒褐色　シルト・粘質シルト混合土（灰褐色シルト混入）
3　灰白色　　粘質シルト（灰褐色シルト混入）

P10内堆積土
1　灰褐色　粘質シルト
2　灰褐色・黒褐色　シルト・粘質シルト混合土（赤褐色粒混入）
3　灰茶褐色・灰褐色シルト混合土（赤褐色粒混入）
4　灰黄色・黒褐色　粘土・粘質シルト

P11内堆積土
1　灰褐色　粘質シルト（砂・黒褐色粒混入）
2a　黒褐色・灰褐色・白灰色　粘質シルト・シルト混合土
2b　黒褐色・灰褐色・白灰色　粘質シルト・シルト混合土
3　灰白色　粘質シルト

第24図　８号建物跡

受けており，ⅠⅣb灰褐色砂質シルトで検出した。それ以外はⅠⅢ黒褐色粘質シルト上面が検出面である。本建物跡は，31～33号土坑・所属不明のピットと重複している。P_1はP_aを切り，P_8は33号土坑，P_{11}はP_bにそれぞれ切られている。31・32号土坑とは直接の切り合いになく，新旧は不明である。また，南東隅柱のP_4は，後世の暗渠施設によって約1／4が破壊されている。

建物の規模は，桁行が3間，梁行は北妻が3間・南妻2間で，梁行が南北で異なる作りは，6号建物跡の場合とまったく同じである。本建物跡も南北棟の側柱建物跡である。東西約5.1m，南北約6.7mで，建物内部の面積は約34m²と推定される。軸線の方向は，N－6°Wを示す。

掘形は，方形を基調とはしているものの，その形状・規模にばらつきが目立つ。径は48cm×55cm～65cm×79cmで，深さは34cm～67cmである。柱痕は，P_4を除くすべてのピットから検出された。平面形は円形・楕円形で，径は20～27cmである。柱筋が通り，柱の太さも均一化している。P_{10}・P_{11}は，粘土を突き固めた上に柱を据えており，その厚さは7～9cmを測る。埋土は，粘性の強い灰黄色・灰白色シルトが主体で，2～4層に分けられる。

各柱列の柱間隔は，東列で北から2.36m＋2.04m＋(2.10)m，同じく西列は2.31m＋2.16m＋2.24mである。南列は，東から(2.70)m＋2.36m，北列は1.81m＋1.40m＋1.94mである。これによれば，桁行は7尺8寸＋7尺＋7尺で，梁行は，北妻が5尺5寸＋4尺＋5尺5寸，南妻は7尺5寸等間で構築したと考えられる。

第8表　7号建物跡ピット計測表

単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6
長　軸	24	32	53	50	55	46
短　軸	19	30	48	48	53	35
深　さ	12	8.5	7.5	11	28.5	10.5

P№	P7	P8
長　軸	46	42
短　軸	43	42
深　さ	11.5	12

第9表　8号建物跡ピット計測表

単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長　軸	79	70	68	60	60	67	58
短　軸	65	64	66	55	52	64	57
深　さ	67	61	49	34	46	44	50
柱　痕	22	21	27×18	攪乱	20	20	23×19

P№	P8	P9	P10	P11	Pa	Pb	Pc
長　軸	69	73	55	63	(　)	46	42
短　軸	(60)	66	48	55	32	36	38
深　さ	45	57	47	51	32	35	39
柱　痕	26×20	24	22	23	—	18	23

遺　　物（第25図，図版17）

P_3の柱痕から，土師器杯・甕が出土している。

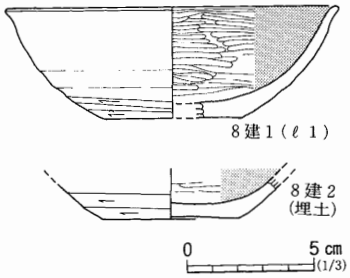
8建1　ロクロ成形の土師器杯で，体部下半～底部までの約30％が遺存する。底径約5.3cmである。体部～底部に回転ヘラケズリ再調整を施す。

8建2　同じくロクロ成形の土師器杯である。口縁部～底部までの約45％が遺存する。体部は内湾して立ち上がり，口縁部で短く外反する。回転ヘラケズリを体部下半～底部に行っている。内面は，底面に幅の広い放射状ヘラミガキ・体部には横位のヘラミガキを施している。

ま　と　め

本建物跡は，軸線方向が一致する9・10号建物跡から，やや東偏した位置に立地するものの，三者はほぼ等間隔で配置されているとみることができ，同時期に機能していた可能性は極めて高い。出土遺物

は，表杉ノ入式期に所属し，杯における調整技法は古い段階の特徴を示す。９世紀前半頃の建物跡である。（小　熊）



第25図　８号建物跡出土遺物

９号建物跡　ＳＢ09

遺　　構（第26図，図版18）

第２次調査で，Ｆ・Ｇ－２・３グリッドにまたがり検出した掘立柱建物跡で，５号建物跡から東に約10ｍ，10号建物跡からは西に約８ｍ離れて位置している。検出面は，ＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。

南妻柱列の柱穴は，他の柱穴掘形と異なる円形プランで，一回り規模も小さい。廂になることも想定されたが，南北の間尺に狭まりもなく，柱痕の規模もしっかりしていることから，その可能性は薄いと判断している。したがって，この建物跡は，桁行４間，梁行２間の，南北棟の総柱建物跡ということになる。規模は，南北約7.2ｍ，東西約4.1ｍで，推定面積は約30㎡である。建物の軸線の方位はＮ－６°－Ｗを指す。

柱穴は，方形を基調として掘られているが，形状の整ったものは少ない。径は，46㎝×34㎝～67㎝×53㎝，深さは19～47㎝で，全体的にばらつきが目立つ。P_1～P_4・P_8・P_9・P_{11}～P_{14}は柱抜き取り穴を持つ。柱痕が確認できたのは，P_5・P_7・P_{10}・P_{15}だけである。柱痕の平面形は，円形及び楕円形ですべて底面まで達している。径は21～24㎝である。

大半の柱痕が欠失しているため，正確な柱間隔の計測はできないが，掘形の位置・抜き穴の形状から判断すると，梁行は６尺等間，桁行は北から６尺＋５尺＋６尺＋５尺と推察され，１～２列目と３～４列目の間隔を広めにとった間尺であったと考えられる。

遺　　物（第27図，図版18）

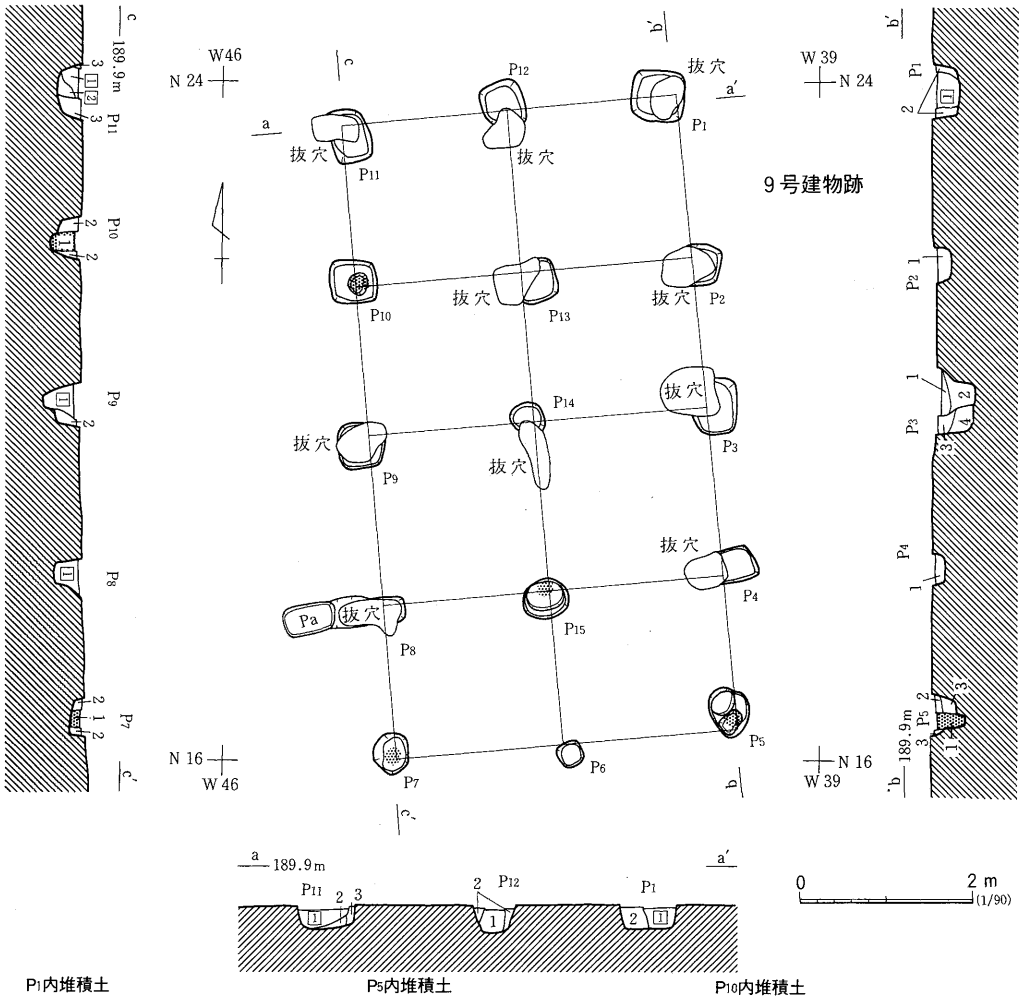
P_4・P_8の抜き穴埋土から土師器甕・須恵器杯，P_{14}掘形埋土から土師器杯，P_{15}柱痕からは須恵器杯が出土している。うち，図化できたものは，P_{14}出土の土師器杯１点である。

９建１　P_{14}掘形埋土出土の土師器杯である。体部下端～底部までの約40％が遺存する。底部径は約7.8㎝と広めで，外面体部～底部周縁に回転ヘラケズリ再調整を施す。底部の切り離しは，回転糸切りである。

ま　と　め

今回検出した建物跡で，総柱建物跡はこの９号建物跡以外にはない。総柱建物としての４間×２間規模は破格で，希にみるものである。また，柱抜き取り穴を明瞭に残し，建て替えを実施していない点では11号建物跡に類似している。

出土遺物は，表杉ノ入式期の古い段階に所属するものであり，８号建物跡存続時期との矛盾は看取されない。ほぼ同時期に機能していた建物跡であろう。（小　熊）



P1内堆積土

1　暗灰褐色・暗灰色・粘質シルト・シルト混合土　（酸化鉄・黒褐色シルト混入）

2　暗灰色　粘質シルト　（酸化鉄・黒褐色シルト混入）

P2内堆積土

1　暗灰色・暗灰褐色　粘質シルト混合土　（黒褐色シルト混入）

P3内堆積土

1　黒褐色・灰黄白色・灰褐色　粘質シルト・粘土ブロック・シルト混合土

2　灰褐色・明灰色・黒褐色　粘質シルト・シルトブロック混合土

3　黒褐色・灰黄白色・灰褐色　粘質シルト・粘土ブロック・シルト混合土（酸化鉄混入）

4　暗灰褐色　シルト　（黒褐色粘質シルト・黄褐色シルト混入）

P4内堆積土

1　灰茶褐色　シルト　（黒褐色シルト混入）

P5内堆積土

1　暗灰褐色　粘質シルト　（酸化鉄沈澱）

2　黒褐色・白灰色　シルト

3　暗灰褐色　粘質シルト　（黒褐色粘質シルト混入）

P7内堆積土

1　暗灰褐色　粘質シルト　（酸化鉄沈澱）

2　暗灰褐色　粘質シルト　（黒褐色粘質シルト混入）

P8内堆積土

1　灰褐色　粘質シルト　（黒褐色シルト・灰黄色粘質シルトブロック混入）

P9内堆積土

1　灰褐色　暗灰褐色　粘質シルト混合土

2　黒褐色・暗灰褐色　粘質シルト混合土

P10内堆積土

1　暗灰褐色　粘質シルト　（黒褐色シルト・白色粘質土混入）

2　暗灰褐色・黒褐色　粘質シルト混合土

P11内堆積土

1　黒褐色・灰褐色　砂質シルト・粘質シルト

2　灰色・暗灰褐色　砂質シルト・シルト　（黒褐色土混入）

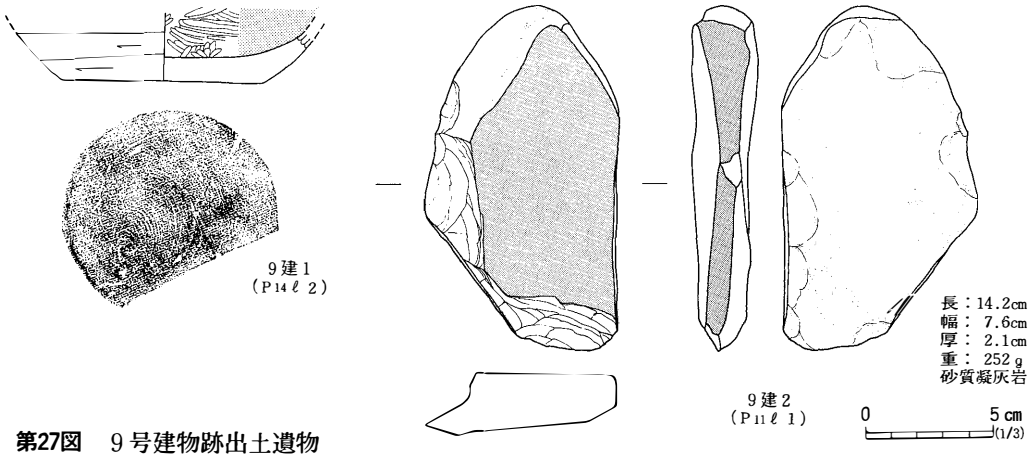
3　青灰色・黒褐色　砂質シルト・シルト

P12内堆積土

1　暗灰褐色　砂質シルト　（黒褐色シルト混入）

2　暗灰色　粘質シルト

第26図　９号建物跡



第27図　９号建物跡出土遺物

10号建物跡　ＳＢ10

遺　　構（第28図，図版19）

Ｇ・Ｈ－２・３グリッドで検出した掘立柱建物跡で，９号建物跡から東へ約８ｍ，８号建物跡からは，北へ約６ｍ離れて位置している。検出面は，北半がＬⅢ黒褐色粘質シルト上面，南半がＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。建物内部で2a号住居跡と完全に重複しており，カマド北側の東壁をP_2が切っている。住居跡より本建物跡が新しい。

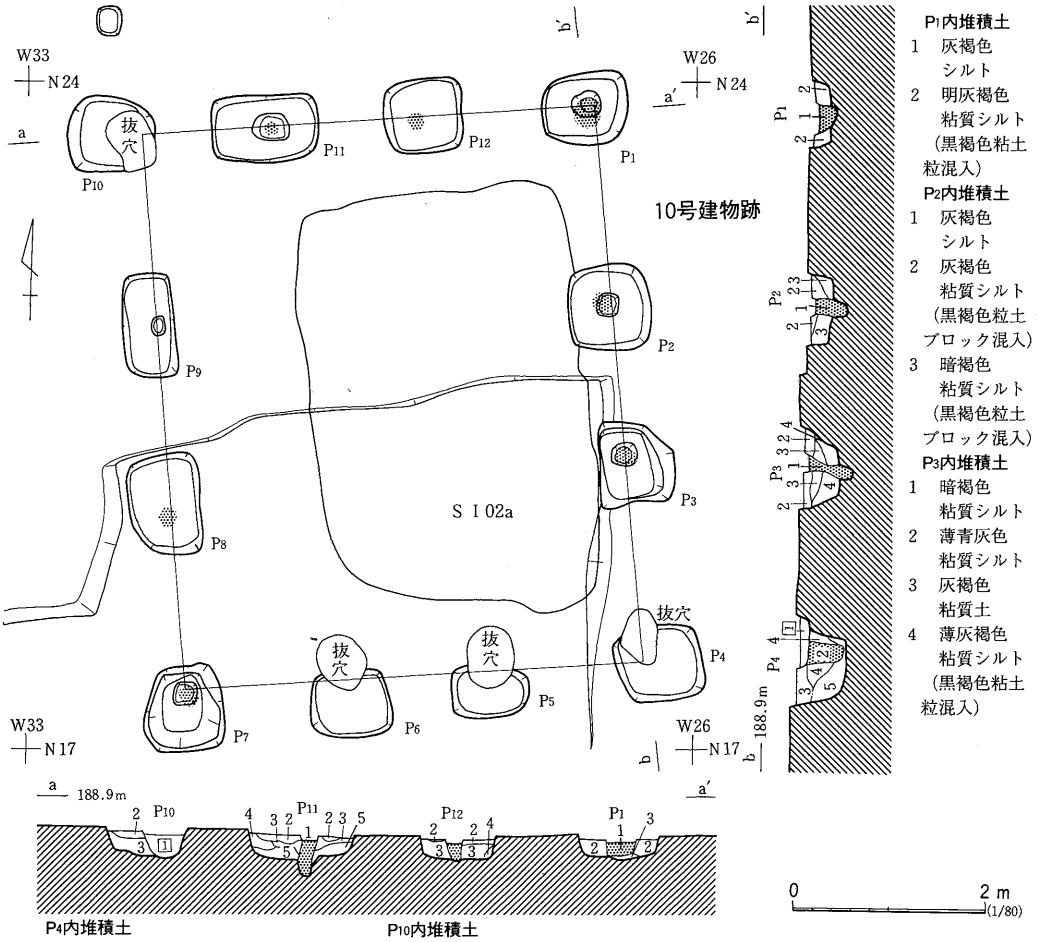
建物は，東西３間×南北３間規模の，南北棟の側柱建物跡である。東西約4.8m，南北約5.8mで，推定面積は約28m²である。建物の軸線方向は，Ｎ－６°Ｗを示す。

柱穴掘形は，長径１ｍを越す大型のものを含み，方形・長方形の平面形を呈する。上端規模は，81cm×76cm～113cm×71cmで，柱筋に長径を合わせている。深さは，32～70cmである。深さに見られるばらつきは，検出面の高低差によるもので，底面レベルはほぼ一定している。柱痕は，柱抜き取り穴が検出されたP_4～P_6・P_{10}及びP_9以外の柱穴で検出した。平面形は，円形・楕円形で，径は19～33cmである。P_1柱痕が，厚さ約５cmの灰色粘質シルト上に乗る以外，すべて底面に達している。中でも，P_2・P_3・P_7・P_9・P_{11}の柱痕は，さらに約15～20cm底面にめり込んでいる。北西隅柱から約60cm北側に単独の方形ピットP_aがある。周囲に同程度のピットが見当たらず，西桁行の柱筋に合うところを見ると，本建物跡に伴う可能性が高い。上

第10表　９号建物跡ピット計測表　　単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	61	49	67	(51)	56	30	48	41	54
短軸	61	(45)	53	38	45	29	42	(33)	50
深さ	41	24	47	47	31	24	19	38	33
柱痕	－	－	－	－	21	－	23	－	－
抜穴	有	有	有	有				有	有

Pno	P10	P11	P12	P13	P14	P15	Pa	Pb
長軸	54	62	58	49	146	52	34	30
短軸	54	47	50	(47)	34	46	25	25
深さ	42	31	34	21	41	40	18	20
柱痕	24	－	－	－	－	21	17	18
抜穴		有	有	有	有			



P4内堆積土

1	黄灰褐色	シルト（酸化鉄・粒土粒混入）
2	灰褐色	粘質シルト・砂質シルト（黒褐色粒混入）
3	白灰褐色	粘質シルト
4	薄灰褐色	粘質シルト（黒褐色粒・酸化鉄混入）
5	灰褐色	粘質シルト（黒褐色ブロック混入）

P10内堆積土

1	灰褐色	粘質シルト（黒褐色粒混入）
2	灰褐色	粘質シルト（白褐色・黒褐色粒混入）
3	黄灰褐色	粘質シルト（酸化鉄・黒褐色ブロック混入）

P11内堆積土

1	灰褐色	シルト
2	灰白色	粘質シルト（酸化鉄混入）
3	灰褐色	粘質土（黒褐色粘土ブロック混入）
4	灰褐色	粘質シルト
5	暗灰褐色	粘質シルト（酸化鉄・黒褐色粒土粒混入）

P12内堆積土

1	灰褐色	粘質シルト
2	白褐色	粘質シルト
3	明灰褐色	粘質シルト（黒褐色粘土ブロック混入）
4	黒褐色	粒土ブロック

第28図　10号建物跡

端径は31cm×26cmで，深さは約17cmである。

各柱列の柱間隔は，東列北から2.02m＋1.64m＋(2.08)m，同じく西列は(1.99)m＋1.98m＋1.98mで，北列は東から1.76m＋1.50m＋(1.65)mである。

遺　　物（第29図，図版19）

P_6抜き穴埋土から須恵器の甕胴部の破片が出土している。これは，接合こそできなかったが，2a号住居跡・36号土坑から出土した須恵器甕(2a住６・36坑３)と同一固体のものである。

第29図　10号建物跡出土遺物

ま　と　め

出土遺物は稀薄で，遺構の時期を決定するには至らない。しかしながら，８・９号建物跡と本建物跡は，建物の軸線方向・配置からみて同時期に機能していたと考えられ，その時期は，2a号住居跡に連続する９世紀前半～中頃とみられる。　（小　熊）

11号建物跡　ＳＢ11

遺　　構　（第30図，図版20）

遺跡西側Ｄ・Ｅ－４・５グリッドで第２次調査により検出された建物跡で，検出遺構の中では最も西寄りに位置している。遺構検出面は，ＬⅡb暗灰褐色粘質シルトであり，酸化鉄が斑状に若干混入するという特徴を示している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

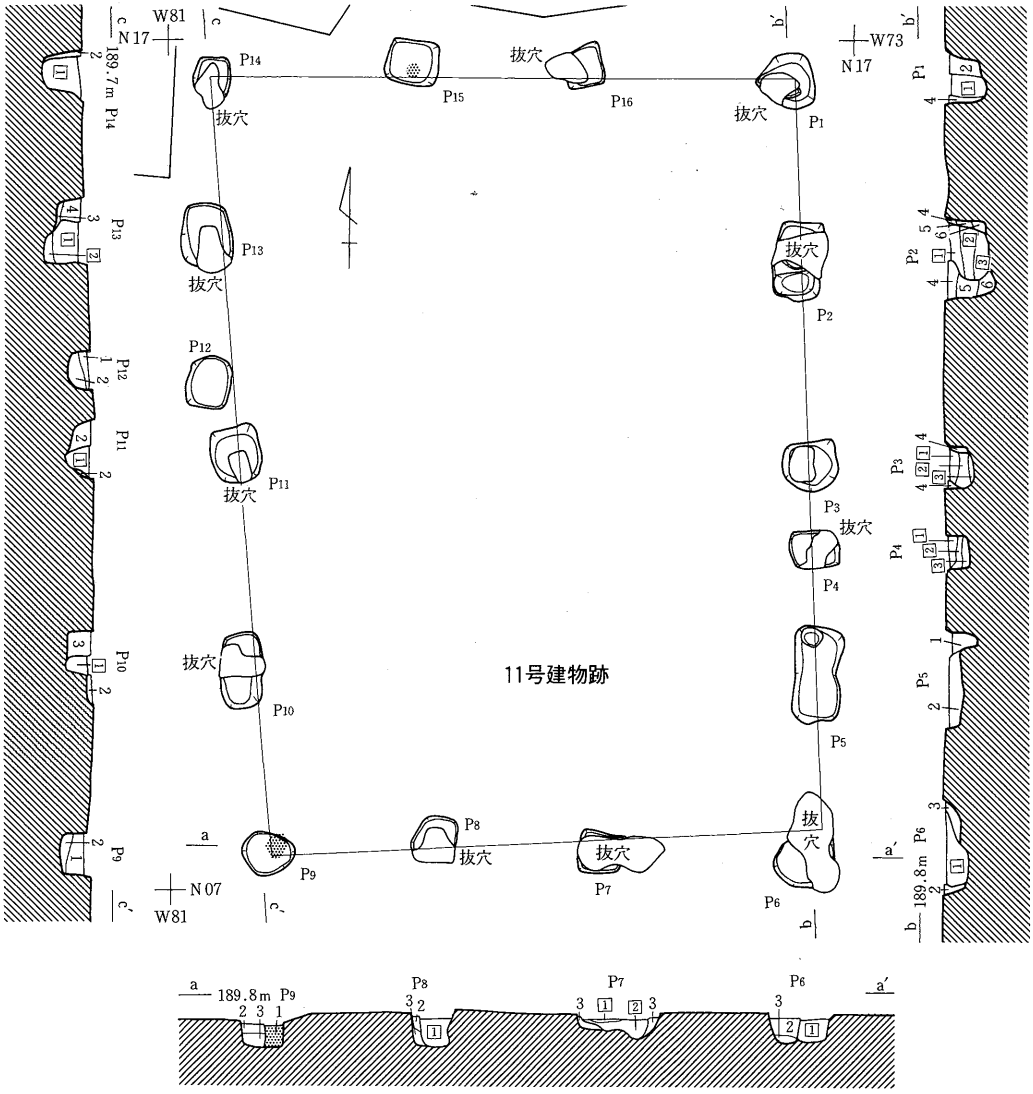
建物のプランは，桁行きとなる東側柱列と西側柱列がそれぞれ５間と４間で，梁行きが３間の南北棟である。この建物の東側柱列の軸線がＮ－１°Ｗで，西側柱列の軸線がＮ－３°Ｗであるため，北に向かって東西の両列がやや広がる様相を呈している。南北妻の中点間で計測した建物主軸方向はＮ－２°－Ｗを示している。

柱穴の掘形は，長径が48～116cm，短径が42～64cm（抜き取り穴としての長さを除く）である。抜き取り痕がP_5・P_9・P_{12}・P_{15}を除くすべてのピットに見られ，その中には抜き取るために，掘形としての形を変えてしまったと考えられるものも見られる。深さはピット最深部で21～58cmと一定しておらず，柱を抜く際に底面形にも変化が生じたものと考えられる。堆積土は灰褐色シルトが主であり，黒褐色シルトブロックを含んでいる。柱痕の見られるものはP_9とP_{15}で，それぞれ平面形は楕円形と円形を呈する。P_9は長径×短径が30cm×24cm，P_{15}は直径で16cmを測る。ピット間の距離は東柱列で北より2.00m＋2.40m＋1.04m＋1.50m＋2.16m，西柱列で北より1.88m＋2.52m＋2.60m＋2.10m，北柱列で東より2.40m＋

第11表　10号建物跡ピット計測表

単位（cm）

P_{No}	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_a
長軸	92	88	86	90	82	85	91	105	108	91	113	81	31
短軸	74	88	78	82	54	71	86	76	56	77	71	76	26
深さ	32	43	59	50	53	56	70	61	45	37	48	38	17
柱痕	33	22	24	－	－	－	20	19	－	－	19	21	－
抜穴				有	有	有				有			



P1内堆積土
1　灰褐色　　シルト（黒色粒混入）
2　明灰褐色　シルト（黒色・茶色粒混入）
3　黒色　　粘質ブロック

P2内堆積土
1　明白灰褐色　シルト（黒色・茶色粒混入）
2　明灰褐色　　シルト（黒色・茶色粒混入）
3　灰褐色　　シルト（黒色ブロック混入）
4　黒褐色・明白褐色　シルト混合土（黒色ブロック混入）
5　黒褐色・灰褐色　　シルト混合土（黒色ブロック・茶色粒混入）
6　明白灰褐色　シルト（茶色粒混入）

P5内堆積土
1　暗灰褐色　シルト（茶色粒・黒色粒混入）
2　灰褐色・暗灰褐色　シルト混合土

P3内堆積土
1　明灰褐色　　シルト（黒色粒混入）
2　灰褐色　　シルト（茶色・黒色粒混入）
3　明灰褐色　　シルト（茶色・黒色粒混入）
4　黒褐色　　粘質シルト

P4内堆積土
1　明灰褐色・灰褐色　シルト混合土（黒色ブロック混入）
2　明灰褐色　シルト（茶色粒混入）
3　暗灰褐色　シルト（黒色ブロック混入）

P6内堆積土
1　灰褐色・黒褐色　シルト混合土
2　暗灰褐色・明灰褐色　シルト混合土（黒色・茶色粒混入）
3　灰茶褐色　シルト

第30図　11号建物跡（1）

0　2 m (1/90)

P7内堆積土
1　暗灰褐色・明灰褐色　シルト混合土
2　明灰褐色　シルト（黒色・茶色粒混入）

P8内堆積土
1　黒褐色・明灰褐色・灰褐色　シルト混合土（黒色・茶色粒混入）
2　暗茶褐色　砂質シルト（茶色粒混入）
3　暗灰褐色　粘質シルト

P10内堆積土
1　暗灰色・灰褐色　シルト混合土（黒褐色シルト粒・酸化鉄混入）
2　暗灰色・白灰色・シルト混合土
3　暗灰褐色・白灰色・黒褐色　シルト混合土

P9内堆積土
1　暗灰褐色　シルト（黒色・茶色粒混入）
2　黒褐色・明灰褐色・灰褐色　シルト混合土（黒色ブロック混入）
3　暗灰褐色　シルト（黒色ブロック混入）

P11内堆積土
1　暗褐色・白灰色　粘質シルト・シルト（黒褐色シルト粒・黄橙色粘質土混入）
2　黒褐色・明灰褐色・灰褐色　シルト混合土（黒色ブロック混入）

P12内堆積土
1　黒褐色・暗褐色・灰褐色　シルト
2　暗褐色・白灰色　粘質シルト・シルト（黒褐色シルト粒・黄橙色粘質土混入）

P13内堆積土
1　暗灰色・暗灰褐色　シルト（酸化鉄混入）
2　暗灰褐色　砂質シルト
3　暗灰色　粘質シルト（黒褐色シルト　粒・酸化鉄混入）
4　黒褐色　粘質シルト（暗灰色シルト混入）

P14内堆積土
1　暗灰褐色・暗灰色　シルト混合土（炭化物粒・酸化鉄粒混入）
2　暗灰色　シルト（黒褐色シルト粒混入）

第30図　11号建物跡（2）

2.00m＋2.36m，南柱列で東より2.40m＋1.96m＋1.88mを測る。間尺は，桁行きで７尺＋８尺＋８尺＋７尺，梁行きで８尺＋７尺＋８尺と考えられ，７尺から８尺を基本にして建物が建てられていたと考えられる。

遺　　物

遺物はＰ$_5$掘形埋土より土師器片が１点出土している。底部から体部下半の破片で，底部・体部下半とも外面は左側に向かって回転ヘラケズリ再調整が施されている。切り離し技法は不明である。内面は黒色処理されており，ヘラミガキが行われている。

胎土はやや粗でガラス質の粒を含んでいる。器厚は4～5mmを測る。調整技法などから表杉ノ入式期の所産と思われる。

ま　と　め

11号建物跡は，出土遺物が表杉ノ入式期の所産と思われることから，９世紀初めから中頃にかけて存在したものと思われる。

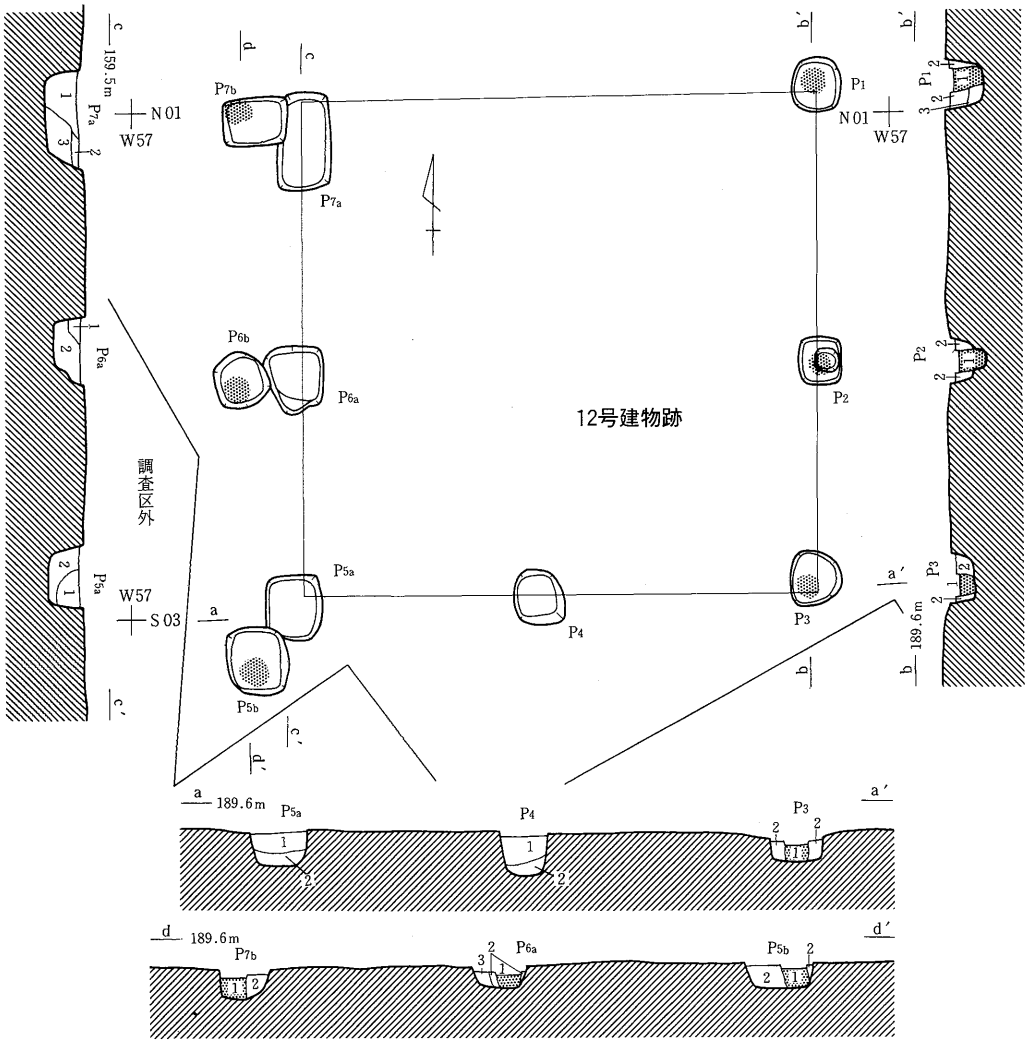
この建物跡は，ほとんどの柱穴に抜き取り痕があるという点で特徴が認められる。同じように抜き取り痕を有し，掘形の規模もほとんど同じ建物跡として９号建物跡がある。これらは同一の原因で意図的に廃絶したものと考えられる。また，３・４号建物跡，５号建物跡，12号建物跡および６号建物跡とは，主軸線が互いにほぼ真北方向を指すことで共通性を示す。これらのことから，11号建物跡とその周辺の建物跡はほぼ同時期に存在し，建物群を形成していた可能性が高いと思われる。　（伊　藤）

第12表　11号建物跡ピット計測表

単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
長軸	72	96	64	(60)	116	74	(54)	56
短軸	64	60	58	44	50	(60)	48	50
深さ	50	58	43	33	37	33	27	45
柱痕	－	－	－	－	－	－	－	－
抜穴	有	有	有	有		有	有	有

Pno	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	62	90	64	62	82	60	60	(48)
短軸	52	52	58	50	58	42	52	46
深さ	33	46	35	30	51	48	45	21
柱痕	30	－	－	－	－	－	16	－
抜穴		有	有		有	有		有



P1内堆積土
1　暗灰色　シルト（黒褐色シルト粒・酸化鉄粒混入）
2　灰褐色　シルト（酸化鉄粒混入）
3　灰褐色・黒褐色　シルト混合土

P2内堆積土
1　暗灰色　粘質シルト（黒褐色土・焼土粒混入）
2　黒褐色・灰褐色　シルト混合土

P3内堆積土
1　暗灰色　シルト（黒褐色シルト粒・酸化鉄粒混入）
2　灰褐色　シルト（酸化鉄粒混入）

P4内堆積土
1　灰褐色　シルト　黒褐色粘土ブロック混合土
2　暗灰色　砂質シルト（酸化鉄粒混入）

P5a内堆積土
1　黒褐色・白灰色・灰茶褐色粘質シルトブロック・シルト
2　灰褐色　シルト　黒褐色粘土ブロック混合土

P5b内堆積土
1　黒褐色　粘土ブロック
暗灰色　シルト
2　灰茶褐色　シルト（黒褐色シルト粒・酸化鉄混入）

P6a内堆積土
1　暗灰褐色　シルト（炭化物粒混入）
2　灰茶褐色　シルト（酸化鉄・黒褐色土粒混入）

P6b内堆積土
1　黒褐色　粘土ブロック
暗灰色　シルト
2　灰茶褐色　シルト（黒褐色シルト粒・酸化鉄混入）

P7b内堆積土
1　暗灰褐色・白灰色・黒褐色シルト・粘質シルト・シルト
2　灰茶褐色・黒褐色シルト・シルトブロック
3　暗褐色・灰褐色粘質シルト・シルト

P7a内堆積土
1　暗灰褐色・白灰色・黒褐色シルト・粘質シルト・シルト
2　灰茶褐色・黒褐色シルト・粘質シルトブロック
3　暗褐色・灰褐色粘質シルト・シルト

0　2 m
(1/60)

第31図　12号建物跡

12号建物跡　ＳＢ12

遺　　構（第31図，図版21）

遺跡西側Ｄ・Ｅ－４・５グリッドで第２次調査により検出された建物跡である。遺構検出面は酸化鉄が斑状に沈澱したものを含むＬⅢ黒褐色粘質シルトである。３・４号建物跡がすぐ南に位置しているが重複関係にはない。

建物のプランは，原則として東西列２間と南北列２間の側柱建物であるが，北側柱列の中央ピットが検出できず，変則的な２間×２間となっている。軸線はＮ－１°－Ｗの傾きを持ち，ほぼ真北を向いている。同じ方向を向く建物跡として３・４・６・11号建物跡が挙げられる。

柱穴掘形の規模は，長径が38～80cm，短径が32～48cmであり，深さは14～31cmを測る。平面形は，P_{7a}の長径が他と比べ80cmと長い以外はさほど大きな違いはなく，基本的には隅丸方形を呈している。P_{5a}・P_{6a}には抜き取り痕も見られた。柱痕はP_1・P_2・P_3・P_{5b}・P_{6b}・P_{7b}で確認でき，形状は円形で直径18～22cmを測る。柱間隔は東列で北より2.26ｍ＋1.74ｍ，西列のP_{5a}－P_{6a}－P_{7a}列で北より2.12ｍ＋1.82ｍ，P_{5b}－P_{6b}－P_{7b}列で北より2.20ｍ＋2.24ｍ，南列で東より2.16ｍ＋1.94ｍ，北列で4.10ｍである。間尺は，桁行きで北より７尺＋６尺，梁行きは７尺等間の建物跡であると考えられる。

遺　　物

P_{5b}掘形埋土より土師器片が１点出土している。口縁部で内外面とも浅黄橙色を呈し，器厚は3mmとたいへん薄い。器形および調整技法等については，磨滅が激しく詳細は確認できない。

ま　と　め

12号建物跡は，出土遺物も少なく遺物からの判断は難しい。３・４号建物跡との軸線の方向や位置を考えれば，３・４号建物跡と何等かの関係があったと考えることは可能であろう。

また，２本の西側柱列関係については，P_{5a}とP_{6a}に抜き取り痕の形跡が確認できることから，P_{5a}－P_{6a}－P_{7a}列を抜き，P_{5b}－P_{6b}－P_{7b}列をもって建物を立て替えたとも考えたが，東および南北列には立て替えた形跡がなく，間尺や柱列の方向もずれてくることから，その可能性は薄いと思われるる。P_{5b}－P_{6b}－P_{7b}列にともなう建物跡が西側の調査区外へ広がる可能性もあるが，第１次調査における試掘では，その形跡は確認されておらず，はっきりとした結論を出すまでには至っていない。３・４号建物跡との関連性から，９世紀初めから中頃にかけて存在し機能したものと思われる。

（伊　藤）

第13表　12号建物跡ピット計測表

単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5a	P5b	P6a	P6b	P7a	P7b
長軸	42	38	44	44	54	50	44	52	50	80
短軸	40	32	40	40	48	46	44	44	40	42
深さ	31	28	24	32	20	30	14	23	26	28
柱痕	20	18	18	—	22	—	20	—	22	—
抜穴										

第４節　土　　坑

横沼西遺跡では，第１次調査で17基，第２次調査で14基の合計31基の土坑を発見した。遺跡内での土坑の分布は一様ではなく，１号住居跡内及び６・10号建物跡南側付近に偏っていることが分かる。土坑と住居跡・建物跡との関係が注目されるところである。各土坑については，構造と出土遺物を中心に述べ，その他詳細については第14表に記した。なお，12～15・20～23号土坑は，１号住居跡付随の柱穴及び，所属不明の柱穴と判断されたため，調査終了後欠番とした。

１号土坑　ＳＫ01　（第45図）

１号土坑は，遺跡の南西Ｉ・Ｊ－５グリッドで第１次調査により検出した。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトである。形状は平面形で上端・下端とも東西方向に長く，南側に凹凸のある不整方形を呈している。規模は上端幅で222㎝×88㎝，下端幅で132㎝×66㎝を測る。深さは最深部で14㎝を測るが，８～10㎝でほぼ平坦である。断面形は皿状であり，底部から上端へは30°～60°で立ち上がっている。西方向を除いてやや急な立ち上がりを見せている。堆積土は黒褐色シルトブロックを含む黄灰褐色粘質シルトで，人為堆積土である。

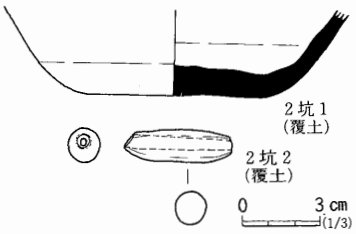
遺物については，土師器片４点・須恵器片５点が出土している。須恵器片の中に回転ヘラ切り痕を明確に残す杯底部も見られるが，その他については小片であるため器形その他の判断がしがたい。本土坑の機能した時期については，出土遺物から平安時代初めから中頃と考えられる。性格については不明である。　（伊　藤）

２号土坑　ＳＫ02　（第32図，図版22）

２号土坑は，遺跡の南Ｇ－６グリッドの南東部で第１次調査により検出された。４ｍ以内には３・４・５・７号土坑が存在し，遺跡の中でも比較的土坑の集中している所である。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトである。平面形は，南北にやや長い不整円形を呈し，規模は上端の長径×短径が115㎝×96㎝，下端が94㎝×78㎝を測る。検出面から底部までの深さは浅く一様に10～11㎝で，底面は平坦である。断面形は皿状で，壁面は30°～40°でやや緩やかに立ち上がっている。堆積土は１層で明褐色シルトのブロックを含む褐色シルトで，人為堆積土である。

遺物は，須恵器の杯・甕と土錘が出土している。２坑１は須恵器杯で，底部から体部下半にかけての破片である。底径7.0㎝，残存高3.4㎝を測る。底部器厚が１㎝と分厚い。体部は内外面ともロクロナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ切り後，軽いヘラナデを行い再調整している。土錘は完形品で出土している。形態は紡錘形を呈し，中心からややずれて径４～５㎜の孔が通っ

ている。両端部径6～9㎜，中央部径1.3㎝，全長4.3㎝を測る。重量は5.8ｇである。器面はやや荒れ気味である。須恵器甕は，平行タタキメを外面に残す。本土坑は，出土遺物から平安時代初めから中頃にかけて機能したものと思われる。性格については，ごみ捨て穴の可能性が高い。　（伊　藤）



第32図　2号土坑出土遺物

3号土坑　ＳＫ03　（第45図）

3号土坑は，遺跡の南Ｇ－6・7グリッドで第1次調査により検出された。近くには2・4・5号土坑があり土坑が集中している。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトで，切り合い関係は認められなかった。規模は上端の長径×短径が104㎝×82㎝，下端が95㎝×70㎝を測り，平面形で南北にやや長い不整円形を呈している。断面形は鍋底状で深さは，18㎝を測る。底面はほぼ平坦といえる。壁面は65°～70°の比較的急な立ち上がりを見せる。堆積土は3層に別れ，1層は焼土ブロックを含む黒褐色シルトである。2層は明褐色シルトで，3層は褐色シルトである。2・3層ともに粘性がたいへん強い。

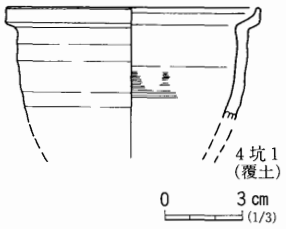
本土坑からは，遺物の出土は認められず，時期や性格については不明である。　（伊　藤）

4号土坑　ＳＫ04　（第33・45図，図版22）

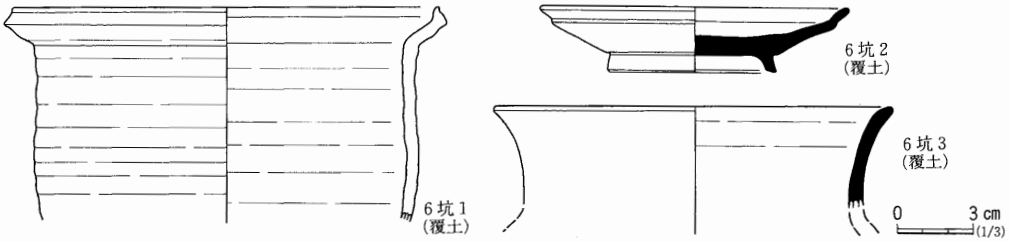
4号土坑は，遺跡の南Ｇ－6グリッドで第1次調査により検出された。すぐ南には3・5号土坑があり，遺跡内でも土坑の集中している地域である。遺構の検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトであり，他の遺構との切り合い関係は確認されなかった。規模は上端幅で70㎝×117㎝，下端幅では52㎝×152㎝を測り，平面形で南北に長い楕円形を呈する。深さは最深部で14㎝を測り，壁はやや曲線的に立ち上がっている。断面形は鍋底状といえる。堆積土は3層に分層される。1層は灰褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトである。2層は灰褐色シルトブロックを含む明茶褐色シルトで，3層は，1・2層に比べ粘性が強く，目が粗い黒褐色シルトである。

出土遺物は，土師器の杯・甕片と須恵器杯片である。4坑1は土師器小型甕である。口縁部から胴部上半にかけて遺存し，推定口径10㎝，残存器高4.4㎝を測る。器厚は0.4㎝で大変に薄い。胴部上半は直線的に立ち上がり，口縁部で鋭く外反させ，更に真上に引き出している。ロクロ成形後，外面にはカキメを施している。体部内外面には，煮こぼれと思われる炭化物が一部に付着している。しかし，器面に変熱により劣化した箇所は窺えない。

本土坑の時期および性格については，平安時代初めから中頃にかけての廃棄物処理穴と考えられる。　（伊　藤）



第33図　4号土坑出土遺物



第34図　６号土坑出土遺物

５号土坑　ＳＫ05　(第45図)

５号土坑は，遺跡の南Ｇ－６グリッドで第１次調査により検出された。３号土坑と４号土坑のほぼ中間に位置する。遺構の検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトであり，他の遺構との切り合い関係は認められなかった。規模は上端の長径×短径が85cm×71cm，下端が64cm×56cmで，深さは18cmを測る。平面プランはほぼ円形を呈している。壁は40°～45°で最深部より比較的緩やかに立ち上がっている。断面形は鍋底状で，堆積土は２層に分けられる。１層は明茶褐色シルトで焼土ブロックを含んでいる。２層は黒褐色砂質シルトある。

出土遺物は須恵器杯片が２点出土している。底部から体部下半にかけてのもので回転ヘラ切り痕を残す。胎土の中に白色微粒を含む大戸窯址群産の特徴を示している。

本土坑の時期および性格については，４号土坑に類似しているものと思われる。　(伊　藤)

６号土坑　ＳＫ06　(第34・45図，図版22)

６号土坑は，遺跡の南Ｇ－６グリッドの南西部で第１次調査により検出された。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトである。形状は平面形で上端・下端とも北西から南東にかけて長い不整楕円形を呈している。長軸方向はＮ－48°－Ｗである。規模は上端幅で144cm×73cm，下端幅で100cm×61cmを測る。深さは最深部で14cmを測り，底部から上端へは南東壁で30，北西壁では10と北西壁側が緩やかに立ち上がる。堆積土は３層に分けられる。１層は灰褐色シルトブロックを含む茶褐色シルトである。２層は明褐色シルトで，３層は１・２層に比べ粘性の強い茶褐色シルトである。

出土遺物は土師器杯・甕と須恵器杯・盤および須恵器短頸壺である。６坑１は土師器甕で推定口径16.8cm，残存器高8.4cmを測る。ロクロ成形で内面にロクロナデ調整を施している。長胴形を呈しており，口縁部で外反後口唇部を内側上方に引き出している。器厚は約５mmである。６坑２は須恵器盤で高台が付いている。口径12.1cm，底径6.5cm，器高8.4cmを測る。ロクロナデ調整を内外面ともに施しており，底部は回転ヘラ切り後高台部を付けている。体部上方では外面に段，内面に稜を形成し，口縁部をやや外反ぎみに７mm程度引き出している。高台はハの字状に開き，外高が７mm，内高が６mmと外側がやや高くなっている。高台内側底面に朱が付着している。発色

・質感からベンガラと思われる。6坑3は須恵器短頸壺で推定口径15.8cm，残存器高3.9cmを測る。ロクロナデ調整を内外面ともに施し，口縁部を曲線的に外反させている。6坑2・3ともに，胎土の中に白色微粒を含むという特徴を示すことから大戸窯址群産のものであると推定される。本土坑の時期および性格については，4・5号土坑と同様廃棄物処理穴であると思われる。(伊　藤)

7号土坑　SK07　(第45図)

第1次調査で発見した小型の土坑である。調査区南側のH－6・7グリッドに位置し，LⅢ黒褐色粘質シルトで検出した。平面形は楕円形で，規模は，長径85cm，短径48cmである。深さは最大13cmと比較的浅く，断面の形状は鍋底状を呈する。底面は平坦で，壁及び底面に凹凸は見られない。堆積土は3層からなる人為堆積土で，灰褐色・褐色シルトが主体を成している。南壁～底面には，灰色粘土ブロックが混じった黒褐色シルトが，薄く堆積している。

遺構から遺物は出土しておらず，時期・性格は不明である。　(小　熊)

8号土坑　SK08　(第45図)

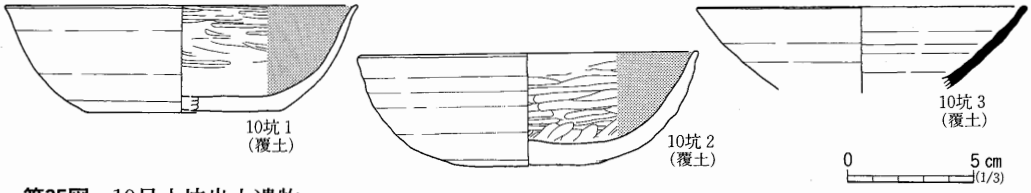
調査区南端にあたるG－7グリッドで検出した不整楕円形の土坑である。第1次調査で精査を行った。検出面は，LⅢ黒褐色粘質シルトである。壁上半は既に削平され，僅かに底部近くを残すのみである。上面の形状は草鞋型ともいえ，真北に対する長軸線の方向はN－39°Wを示す。規模は，長径270cm，短径114cmで，壁の遺存高は12cmである。堆積土は1層で，粘性の強い灰褐色シルトである。堆積の経緯は，自然作用によると考えられる。

遺構に伴う出土遺物はなく，時期の確定はできない。また，性格も不明である。　(小　熊)

9号土坑　SK09　(第45図)

調査区の南西F－7グリッドに位置し，2号溝跡を切って構築された土坑である。第1次調査で調査を行った。検出面は，LⅢ黒褐色粘質シルトである。土坑の長軸側で，溝跡の北壁に重なるように重複している。平面の形状は楕円形で，南壁中央が幾分内側に凹んでいる。長径は198cm，短径は112cmで，壁上端から底面までの深さは，最大45cmである。断面の形状は，鍋底状を呈する。底面は，緩い曲面を呈しながら壁に連続している。堆積土は6層から成る人為堆積土で，各層に黄色及び黄褐色砂質土がブロック状に混入している。上層のℓ2は，水分を含み若干グライ化した様子が窺える。堆積土の主体は，黒褐色砂質シルトである。

溝跡の埋没後に構築された土坑で，比較的新しい時期が想定されるが，遺物が1点も出土していないため断定はできない。　(小　熊)



第35図　10号土坑出土遺物

10号土坑　ＳＫ10　（第35・46図，図版22）

Ｆ－６グリッドのＬⅢで検出した小型の土坑である。調査は第１次調査で行った。６号建物跡から南に約４ｍ離れており，本坑に規模・形状とも似た２～６号土坑が，東側約15ｍの範囲に分布している。平面形はやや歪んだ楕円形を成し，南壁の一部に凹凸がある。規模は，長径125㎝，短径82㎝である。壁上端から底面までの深さは最大15㎝と比較的浅く，断面の形状は皿状を呈する。底面は凹凸のない平坦面で，西側に緩く傾斜している。堆積土は３層からなる人為堆積土で，黄褐色・暗褐色シルトが主体である。東壁から底面に厚く堆積するℓ３は，灰色土ブロックと共に遺物を包含している。

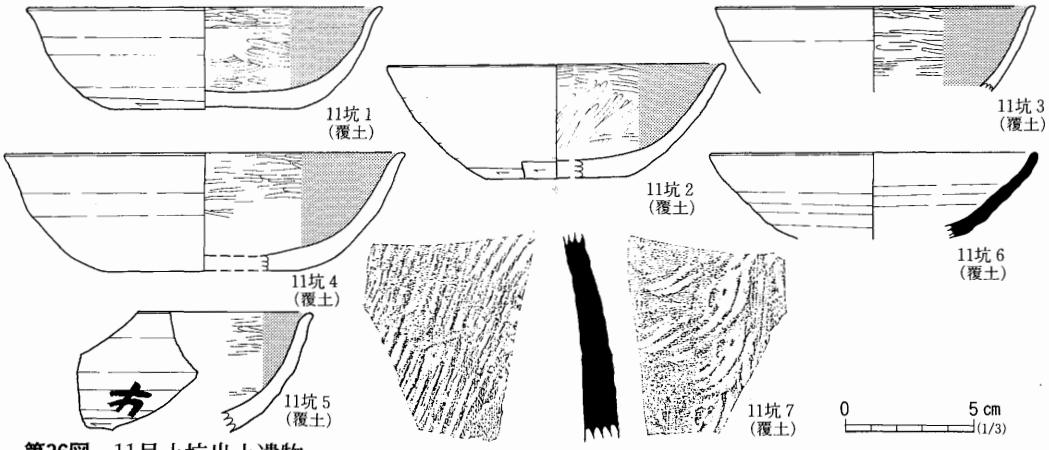
土坑の堆積土・底面から土師器杯・甕，須恵器杯が出土している。10坑１・２は底面から出土したロクロ成形の土師器杯である。１は，身浅く広めの底部を有するもので，体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整を施している。２は，高台状の底部から体部は内湾して立ち上がる。底部は，ヘラ状工具によって周囲に沈線を巡らせた後，手持ちヘラケズリ・ナデで整形している。底部径は約６㎝を測る。底部の切り離しは，１・２共に回転糸切りである。３は，底面出土の須恵器杯で，口縁部から体部下端までの約35％が遺存する。体部が直線的に開く器形で，器面の内外面をロクロナデ調整している。

出土遺物は表杉ノ入式期に所属するもので，土師器杯からは９世紀前半頃の年代が想定される。本坑は，平安時代前半に機能したごみ捨て穴であろう。　（小　熊）

11号土坑　ＳＫ11　（第36・46図，図版35・41）

第１次調査で発見した小型円形の土坑である。Ｅ－４グリッドのＬⅢ黒褐色粘質シルトで検出した。長径85㎝，短径48㎝で，壁上端から底面までの深さは最大20㎝である。断面の形状は鍋底状を呈する。底面は概ね平坦で，壁に若干の凹凸が見られる。堆積土は３層からなる人為堆積土で，ℓ１茶褐色シルトには，焼土・炭化物が混入している。

堆積土・底面から，土師器杯・甕，須恵器杯・甕が比較的まとまった状態で出土している。11坑１～５は，底面から出土したロクロ成形の土師器杯である。１・２・５の器面外面には回転ヘラケズリ再調整を加え，１・２は体部下端から底部全面に及んでいる。５の体部下半に，下半分



第36図　11号土坑出土遺物

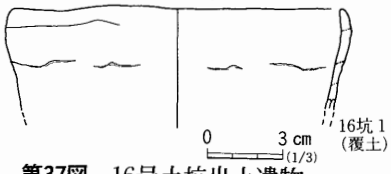
が磨滅した墨書きの文字が見える。「真」もしくは「方」であろうか。6は底面出土の須恵器杯で，口縁部～体部下端までの約30％が遺存している。口縁部がやや内湾する器形で，内面と外面上半までをロクロナデしている。7も同じく底面から出土した，須恵器甕胴部の破片である。外面に縦位の平行タタキメを残し，内面は青海波状のアテ具痕を荒くナデ消している。

出土遺物・堆積土の混入物から判断して，10号土坑と同じく平安時代前半に機能した，廃棄物処理のための土坑と思われる。　　（小　熊）

16号土坑　ＳＫ16　（第37・46図）

16号土坑は遺跡の北東部Ｅ－２・３グリッドで第１次調査により検出された。５号建物跡内に位置し，一部調査区外に延びており，検出された部分においては，切り合い関係は認められなかった。遺構の検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルト下面である。平面形は，北側が調査区外のため，プランの全容を明らかにすることができなかった。調査できた範囲においては，南西壁が内側にＳ字カーブした不整方形を呈している。規模は上端の長径×短径が314cm×(298)cm，下端が302cm×(291)cmで，深さは33cmを測る。遺構の掘込み面は，壁面の観察より16号土坑覆土上にＬⅢの堆積が見られないことからＬⅢ上面と考えられる。壁面は一様に急な立ち上がりを見せている。断面形は箱状で，底面は平坦である。堆積土は４層で，１・２層は粘質のシルトで，３・４層は砂質のシルトである。堆積状況から見て人為堆積土と考えられる。

出土遺物は，土師器の杯・甕，須恵器の杯・甕である。16坑１は土師器の甕で，円筒形をしているものと思われる。推定口径13.0cm，口縁部の厚さ４mmを測り，埋土内より出土している。非ロクロ成形で，内外面に輪積み痕を残している。胎土はやや粗く，焼成も良いとはいい難い。



第37図　16号土坑出土遺物

本土坑の存在した時期および性格については，５号建物跡との関係を切り離して考えることはできない。つまり16号土坑は５号建物跡を廃絶する段階で作られたものであると考えるのが妥当であろう。　（伊　藤）

17号土坑　ＳＫ17　（第46図）

Ｉ－４グリッドで検出した小型の土坑である。19号土坑・１号住居跡と重複関係にあり，本土坑が一番新しい。検出面は１号住居跡貼床面である。

平面形は円形であり，長径が約60㎝，短径が約56㎝である。検出面から底面までの深さは，約15㎝である。堆積土は，暗褐色粘土であり木炭粒・焼土粒を多く含むものであった。遺物の出土はない。

本土坑は検出状況や堆積状況からすると，１号住居跡内に確認されなかった炉跡またはカマドになる可能性も否定できないが，明確な根拠をつかむことができなかったため土坑とした。（西山）

18号土坑　ＳＫ18　（第46図）

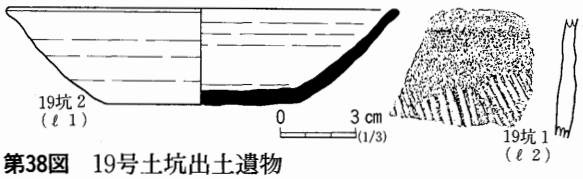
調査区中央部Ｉ－４グリッドで１号竪穴住居跡覆土上に検出された。覆土上では19号土坑とともに，P_3によって切られている。平面形はやや不整な円形で，長径68㎝，短径60㎝，深さ30㎝を測る。浅い土坑内部に深い小型の土坑を掘り込んだ形で，壁の立上がりは緩いＳ字状を呈する。

堆積土は２層に分けられるが，１層の暗灰褐色土，２層の暗褐色土，どちらも炭化物・焼土の粒子を含む。堆積土中より内面黒色処理を施す土師器の細片が出土している。この土坑の性格は不明であるが，出土遺物から，他の建物跡とほぼ同時期の９世紀前半から中頃に，１号竪穴住居廃棄後に掘り込まれ，利用されたものと思われる。　（只　野）

19号土坑　ＳＫ19　（第38･46図，図版41）

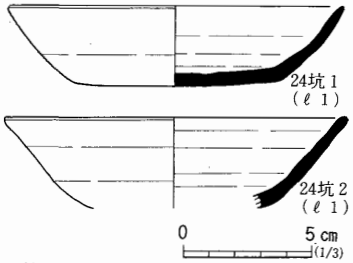
調査区中央部Ｉ－４グリッドで１号竪穴住居跡覆土上に検出された。覆土上では17号土坑に，また18号土坑とともに，P_3によって切られている。平面形はやや不整な円形で，長径152㎝，短径136㎝，深さ9㎝を測る。極浅い土坑で，壁の立ち上がりは緩やかである。

堆積土は１層であるが，炭化物・焼土の粒子を多く含む。堆積土中より内面黒色処理を施す土師器の細片が出土している。この土坑の性格は不明であるが，出土遺物から，他の建物跡とほぼ同時期の９世紀前半から中頃に，１号竪穴住居廃棄後に掘り込まれ，利用されたものと思われる。　（只　野）



第38図　19号土坑出土遺物

24号土坑　ＳＫ24　（第39・46図）



第39図　24号土坑出土遺物

Ｊ－４・５グリッドに位置する土坑で，１次調査で検出・精査を行った。１号住居跡と重複しており検出面はＬⅣである。本土坑の方が旧い。

平面形はやや崩れた隅丸長方形であり，長軸1.86ｍ，短軸が0.92ｍ，長軸方向はＮ－16°Ｅである。検出面からの深さは約10㎝，底面はほぼ平坦である。また底面よりピットが２基検出された。ピットは南北方向の中心軸に沿うように並んでおり，両方とも径約26㎝の円形のプランで，深さは約５㎝である。

遺物は底面近くより，須恵器杯が出土している。24坑１は口径13.2㎝，底径7.8㎝，器高3.2㎝を測り，底径／口径比0.59である。底部外面は回転ヘラ切りであり，胎土の観察から大戸窯址群産と考えられる。24坑２は口径13.4㎝，遺存器高3.5㎝を測る。胎土の観察から大戸窯址群産と考える。

本土坑は重複関係から，１号住居跡構築以前のものであることが分かる。また出土遺物は，１号住居跡よりも旧い様相を示しており，その時期は８世紀末～９世紀初頭である。　（西　山）

25号土坑　ＳＫ25　（第46図）

25号土坑は遺跡の西側Ｅ－４グリッドで検出された。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトである。本土坑の西0.4ｍに３・４号建物跡が存在する。他の遺構との切り合い関係は認められない。規模は上端の長径×短径が105㎝×78㎝，下端が100㎝×74㎝で，平面プランは南北方向にやや長い楕円形を呈している。深さは12㎝を測り，平坦な底面より壁はほぼ垂直に立ち上がっていく。堆積土は１層で暗褐色シルトである。

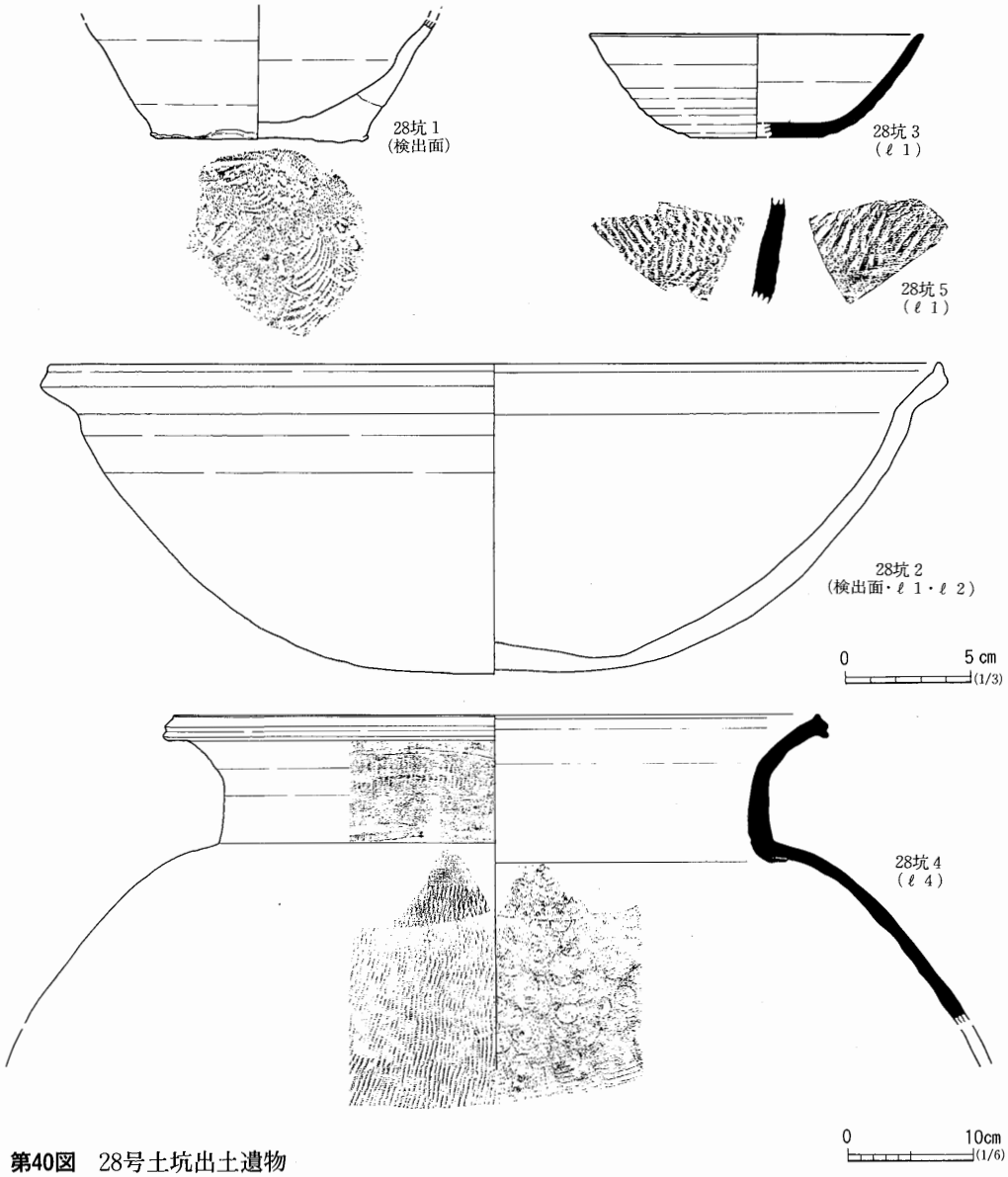
本土坑からは，遺物の出土は認められなかったため，時期や性格については不明である。

（伊　藤）

26号土坑　ＳＫ26　（第46図）

Ｉ－３グリッドのＬⅢ黒褐色粘質シルトで検出した土坑である。調査は第２次調査で行った。近接する27号土坑から，約１ｍ南西に位置している。上面の形状は長方形で，長軸は北西方向に向いている。真北に対する軸線方向はＮ－23°－Ｗを示す。規模は，長径140㎝，短径26㎝で，壁の遺存高は25㎝である。堆積土は，暗青灰色・灰茶褐色シルト混合土の１層で，酸化鉄が混じっている。堆積の経緯は，人為的作用によると考えられる。

遺構に伴う出土遺物はなく，時期の確定はできない。また，性格も不明である。　（小　熊）



第40図　28号土坑出土遺物

27号土坑　ＳＫ27　（第46図）

第２次調査で発見した小型の土坑である。Ｉ－３グリッドに位置し，ＬⅢ黒褐色粘質シルトで検出した。平面形はやや歪んだ円形で，長径90㎝，短径79㎝である。壁上端は削平を受けており，底面までの深さは最大９㎝と浅い。断面の形状は皿状を呈する。底面・壁には若干の凹凸が見られる。堆積土は，人為堆積土の暗青灰色・灰茶褐色シルト混合土で，土質共に26号土坑の堆積土と極めてよく似ている。

遺構から遺物は出土しておらず，時期・性格ともに不明である。　　（小　熊）

28号土坑　ＳＫ28　（第40・46図，図版23・24）

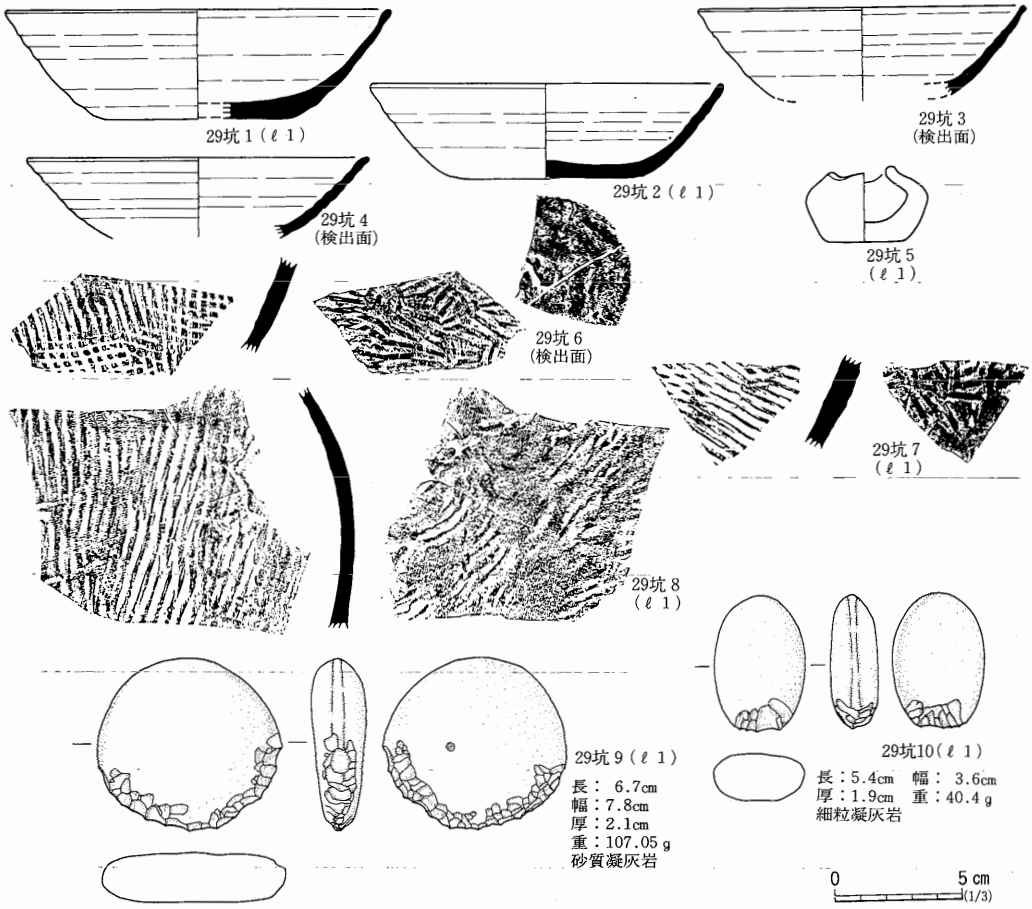
第２次調査で，Ｈ－３グリッドのＬⅢ上面で検出した土坑である。本坑は，10号建物跡に近接し，西側壁で，所属不明の方形ピットを約1／2程切っている。平面の形状は楕円形で，長軸は北東方向に傾いている。軸線の真北に対する偏度はＮ－42°－Ｅである。土坑の規模は，長径193㎝，短径146㎝で，底面までの深さは32㎝である。断面の形状は箱形である。底面は平坦で，壁ともに凹凸はない。堆積土は４層からなる人為堆積土で，暗灰褐色・灰褐色シルトを主体としている。検出面・堆積土から土師器杯・甕・鍋，須恵器杯・大甕・甕が出土している。土師器はすべてロクロ成形である。28坑１は土師器甕で，底部に切り離し痕を明瞭に残している。切り離しは回転糸切りである。器面内外面に入念なロクロナデを施す。２は土師器鍋である。推定口径35.4㎝，同器高12.4㎝で全体の約40％を遺存する。器壁は，体部中位から徐々に厚みを減じて底部では約0.4㎝と薄くなる。口縁部は短く外傾し，口唇部を上方に摘み上げている。体部から底部外面に広く炭化物が付着している。３・４は須恵器杯で，３は内面と外面上半をロクロナデしている。５は，北壁際のℓ１・ℓ２から潰れた状態で出土した須恵器大甕で，口縁部から胴部上半まで遺存する。太く短く立ち上がる頸部と，撫で肩様に落ちる胴部を特徴とする。口縁部は緩く外反し，端部は斜外方及び上方に引き出している。胴部の器壁は頸部に比べて薄く，十分に叩き絞めを行っている。

遺物はℓ１・ℓ２に集中し，底面～ℓ３・ℓ４からはほとんど出土していない。半ば埋めかけた段階で，短期間に土器を廃棄したと推察される。出土土師器は，すべて表杉ノ入式期に所属するもので，形式的幅はさほど見られない。出土遺物は９世紀前半～中頃の所産とみられ，遺構の時期も同様と考えられる。　　（小　熊）

29号土坑　ＳＫ29　（第41・47図，図版41）

29号土坑は，遺跡の中央部やや北寄りのＨ－３グリッドで第２次調査により検出された土坑である。検出段階で４号溝跡との切り合い関係が確認され，29号土坑を４号溝跡が切っている。遺構の検出面は，ＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。規模は上端幅で322㎝×152㎝，下端幅で307㎝×142㎝を測り，平面形は南下しながら幅を狭めており，不整台形を呈する。深さは最深部で32㎝を測り，北壁は南壁に比べ鋭く立ち上がっていく。底面はほぼ平坦であり，断面形は鍋底状と言える。堆積土は２層に分けれる。１層は暗灰褐色シルト，２層は灰褐色砂質シルトで人為堆積土である。

出土遺物は，土師器の杯，須恵器の杯・甕・長頸瓶，手捏ね土器など多数出土している。29坑

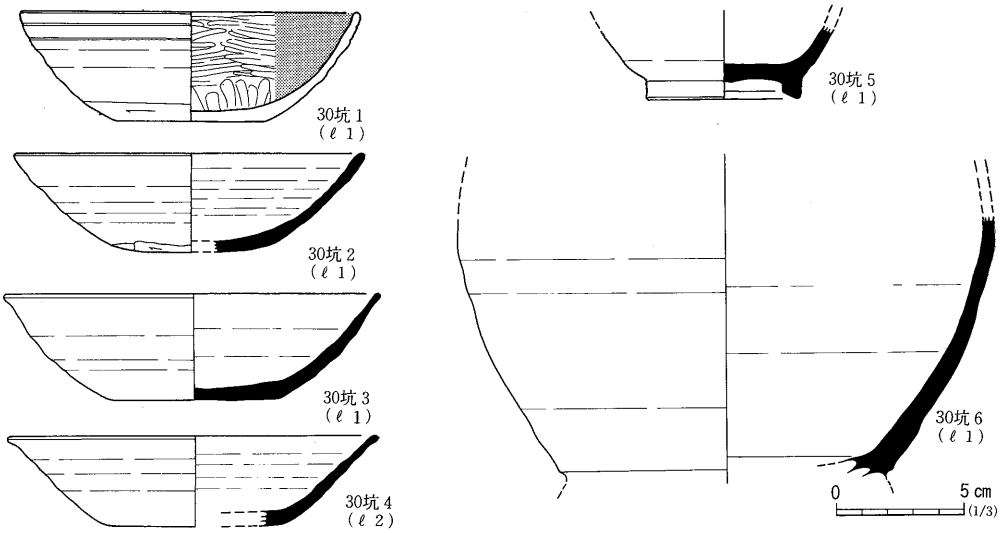


第41図　29号土坑出土遺物

３・４は須恵器杯である。ロクロナデ調整を内外面ともに軽く施している。29坑１も須恵器杯である。推定口径15.2cm，器高4.3cmを測り，ℓ１より出土している。内外面ともにロクロナデ調整を施し，底部は回転ヘラ切り後ナデツケで再調整している。29坑５は手捏ね土器である。口縁部が若干破損しているが，ほぼ完形品でℓ１より出土している。底径3.0cm，胴部最大径5.0cm，器高3.0cmを測る。ロクロ成形の可能性が高く，内外面ともにロクロナデ調整を施し，外面に至っては単位は不明瞭であるがミガキのあとが見られる。29坑２は須恵器杯である。口径14.0cm，器高3.7cm，推定底径7.6cmを測り，ℓ１より出土している。29坑１・３・４に比べ胎土がやや粗く，焼き膨れが見られる。ロクロナデ調整を内外面ともに施しており，底部は回転ヘラ切り後ナデツケで再調整している。また，約１mm程度の線刻が底部中央を横切るように走っている。また，須恵器甕は外面に平行タタキメ目を有し，内面にはアテ具痕が見られるが単位は不明瞭である。

本土坑の機能した時期については，出土遺物から平安時代初めから中頃と考えられる。性格については不明である。

（伊　藤）



第42図　30号土坑出土遺物

30号土坑　ＳＫ30　(第42・47図，図版23)

30号土坑は，遺跡の北寄りＨ－３グリッド北東部で第２次調査により検出された。検出時に５号溝跡との切り合い関係が確認され，30号土坑を５号溝跡が切っていることが分かった。遺構の検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。規模は上端の長径×短径が258cm×143cm，下端が242cm×130cmで，深さは28cmを測る。平面プランは南北に長い長方形を呈している。断面形は鍋底状で底面は平坦である。堆積土は２層に分かれ，ℓ１は暗灰褐色シルトで炭化物と焼土粒を若干含む。ℓ２は灰褐色シルトでℓ１同様炭化物を含む。人為堆積土と考えられる。

出土遺物は，土師器の杯・甕，須恵器の杯・甕である。30坑１は土師器杯である。口径１3.6cm，器高4.3cm，底径5.8cmを測り，ℓ１より出土している。内面は黒色処理で，体部は横に底部は放射状にヘラミガキを行っている。外面はにぶい黄橙色を呈し，ロクロナデ調整を施している。口縁は内弯ぎみで２本の沈線を巡らせるという特徴を示している。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整を行っており，底部の切り離し技法については不明である。30坑３は須恵器杯である。口径14.8cm，器高4.3cm，底径6.8cmを測り，ℓ１より出土している。ロクロナデ調整を内外面ともに施しており，底部は回転ヘラ切り後軽くナデツケで再調整している。30坑４および30坑２も須恵器杯である。30坑４は推定口径14.6cm，残存器高3.5cm，を測り，ℓ２より出土している。底部まで含めた内外面にロクロナデ調整を施している。口縁部はやや外反し青灰色の重ね焼き痕が見られる。30坑２は口径13.8cm，器高3.9cmを測り，ℓ１より出土している。内外面にロクロナデ調整を軽く施しており，底部は手持ちヘラケズリ再調整である。30坑６は須恵器甕で胴部から底部にかけて一部残っているのみである。底部には高台付きの跡が見られる。推定の

胴部最大径21.2㎝，残存器高10.4㎝を測る。内外面にロクロナデ調整を施しているが，内面は剝離したような粗れが見られる。外面には自然釉がかかっている。30坑５は高台付の須恵器杯であると予想されるが，残存部が体部下半一部から底部にかけてであり水瓶か椀の可能性もある。底径は6.0㎝を測る。底部は回転ヘラ切り，残存部は内外面ともロクロナデ調整を施している。高台は底部に対して垂直に立ち内面高３㎜，外面高７㎜で外側が高くなっている。30坑２・３・４・５・６ともに胎土の中に白色微粒を含むという特徴を示すことから大戸窯址群産であると推定される。

本土坑は，出土遺物から平安時代初めから中頃にかけて機能したものと思われる。性格については，ごみ捨て穴の可能性が高い。　（伊　藤）

31・32号土坑　ＳＫ31・32　（第47図）

Ｈ－４グリッドの８号建物跡内部で検出した土坑である。調査は第２次調査で行った。建物跡内部の東桁柱寄りに位置しており，32号土坑が31号土坑南壁を約1／5切って構築している。建物跡との新旧関係は不明である。平面の形状は，32号土坑は円形，31号土坑は楕円形で，両者は同等の規模を有する。32号土坑の径は，118㎝×115㎝，31号土坑は(120)㎝×100㎝，深さは，32号土坑が６㎝，31号土坑は30㎝である。堆積土は，32号土坑が暗灰褐色シルト，31号土坑は暗青灰色砂質シルトを主体とした自然堆積土である。ともに上層に酸化鉄が混入している。

遺構に伴う出土遺物はなく，時期の確定はできない。また，性格も不明である。　（小　熊）

33号土坑　ＳＫ33　（第47図）

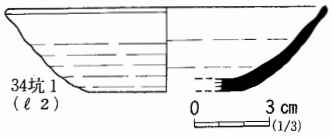
調査区中央のＨ－４グリッドに位置し，８号建物跡を切って構築された土坑である。２次調査で調査を行った。検出面はＬⅢ黒褐色粘質シルトである。建物跡内部に位置し，土坑の西側壁でP_9掘形の東壁を切っている。平面形は円形で，南壁中央が幾分外側に膨らんでいる。長径は133㎝，短径は118㎝で，深さは，最大28㎝である。断面の形状は，鍋底状を呈する。底面は，緩い曲面を呈しながら壁に連続している。堆積土は３層から成る人為堆積土で，ℓ１の暗灰褐色シルトには炭化物・植物遺体が帯状に混入している。ℓ２は，締まりの弱い暗灰色シルトで堆積土の主体を成している。

建物跡廃絶後でも，比較的新しい時期が想定されるが，出土遺物が１点もないため断定はできない。　（小　熊）

34号土坑　ＳＫ34　（第43・47図）

34号土坑は遺跡の北半部Ｈ－３グリッドで第２次調査により検出された。検出時に二つの土坑

の切り合い関係が確認され，34号土坑の北東部で35号土坑の南東部を切っていることがわかった。遺構の検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。規模は上端の長径×短径が115cm×94cm，下端が102cm×80cmで，平面プランは南北にやや長い楕円形を呈している。深さは39cmを測り，壁面は70°～80°の急な立ち上がりを見せる。断面形は箱状で，底面は平坦である。堆積土は２層よりなり，１層は灰褐色シルト，２層は明灰褐色シルトで粘性が乏しい。



第43図　34号土坑出土遺物

出土遺物は，土師器杯，須恵器杯・甕である。34坑１は須恵器杯で啖青灰色を呈している。推定口径12.6cm，器高3.3cm，推定底径6.2cmを測り，ℓ２より出土している。内外面とも軽いロクロナデ調整を施している。底部はナデからナデツケを施しており，切り離し技法については不明である。胎土には砂粒を多く含む。また白色微粒が混入することから大戸窯址群産であると推定される。

本土坑は，出土遺物から９世紀初めから中頃にかけて機能したものと思われる。性格については，10号建物跡と何等かの関連があったものと推測される。（伊　藤）

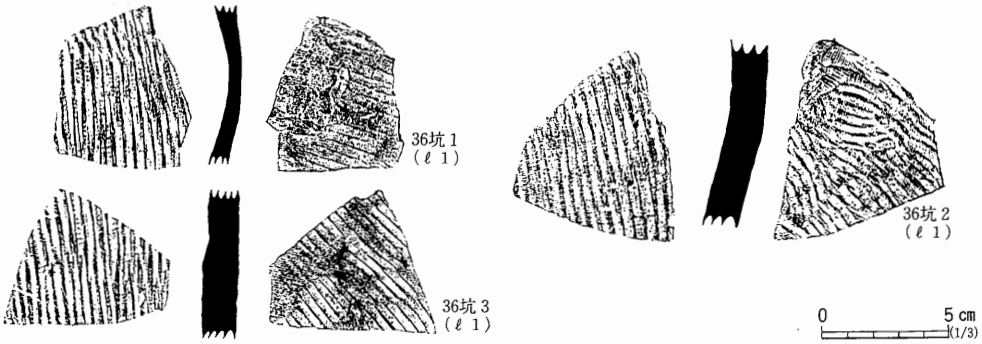
35号土坑　ＳＫ35（第47図）

35号土坑は遺跡の北半部Ｈ－３グリッドで第２次調査により検出された。検出段階で34号土坑との切り合い関係が確認され，35号土坑が34号土坑に先立つものである。遺構の検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。規模は上端幅で78cm×72cm，下端幅で74cm×62cmを測り，平面形は北西から南西にやや長い楕円形を呈する。深さは最深部で20cmを測り，壁は比較的急な立ち上がりを見せているが，南西壁は34号土坑に切られて確認できない。底面はほぼ平坦であり，断面形は箱状と言える。堆積土は２層に分かれる。１層は灰褐色シルトで２層は明灰褐色シルトである。どちらも人為堆積土である。

出土遺物は，土師器片と須恵器片である。出土している遺物から34号土坑に先立つが，大きな時期差はないものと考えられる。（伊　藤）

36号土坑　ＳＫ36（第44・47図，図版41）

36号土坑は遺跡の北半部Ｈ－３グリッド西側で，第２次調査により検出された。10号建物跡から南に僅か１ｍの距離にある。遺構の検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。規模は上端の長径×短径が190cm×135cm，下端が176cm×122cmで，深さは16cmを測る。平面プランは東側にやや突出した不整形を呈する。壁面は一様に急な立ち上がりを見せている。断面形は箱状で，底面は西から東への緩やかな傾斜を持つ平坦面である。堆積土は１層で灰褐色シルトのある。



第44図　36号土坑出土遺物

遺物は，須恵器の杯と甕の破片が出土している。出土遺物は34・35号土坑出土遺物と同時期のものであり，34・35号土坑と同時期に存在し同じような性格を持っていると考えられる。(伊　藤)

37号土坑　ＳＫ37　(第47図)

６号建物跡のＰ$_6$・Ｐ$_7$間に位置した小型の土坑である。第２次調査において，Ｇ－６グリッドのＬⅢで検出した。検出当初は，建物跡柱穴と考えられていた。しかし，柱痕が無く，長軸方向・埋土の状況が他とちうことから，単独の土坑として取り上げた。建物跡との新旧関係は，直接切り合いの関係になく不明である。平面形は長方形を呈し，長径106㎝，短径51㎝，壁上端から底面までの深さは最大18㎝と規模は小さい。底面中央には，深さ10㎝を測る不整形の凹みがある。堆積土は２層に分けれる人為堆積土で，現耕作土に似た灰褐色・白灰色シルトの混合土を主体としている。

遺物は出土していないが，堆積土の状況から時期は新しいと考えられる。　(小　熊)

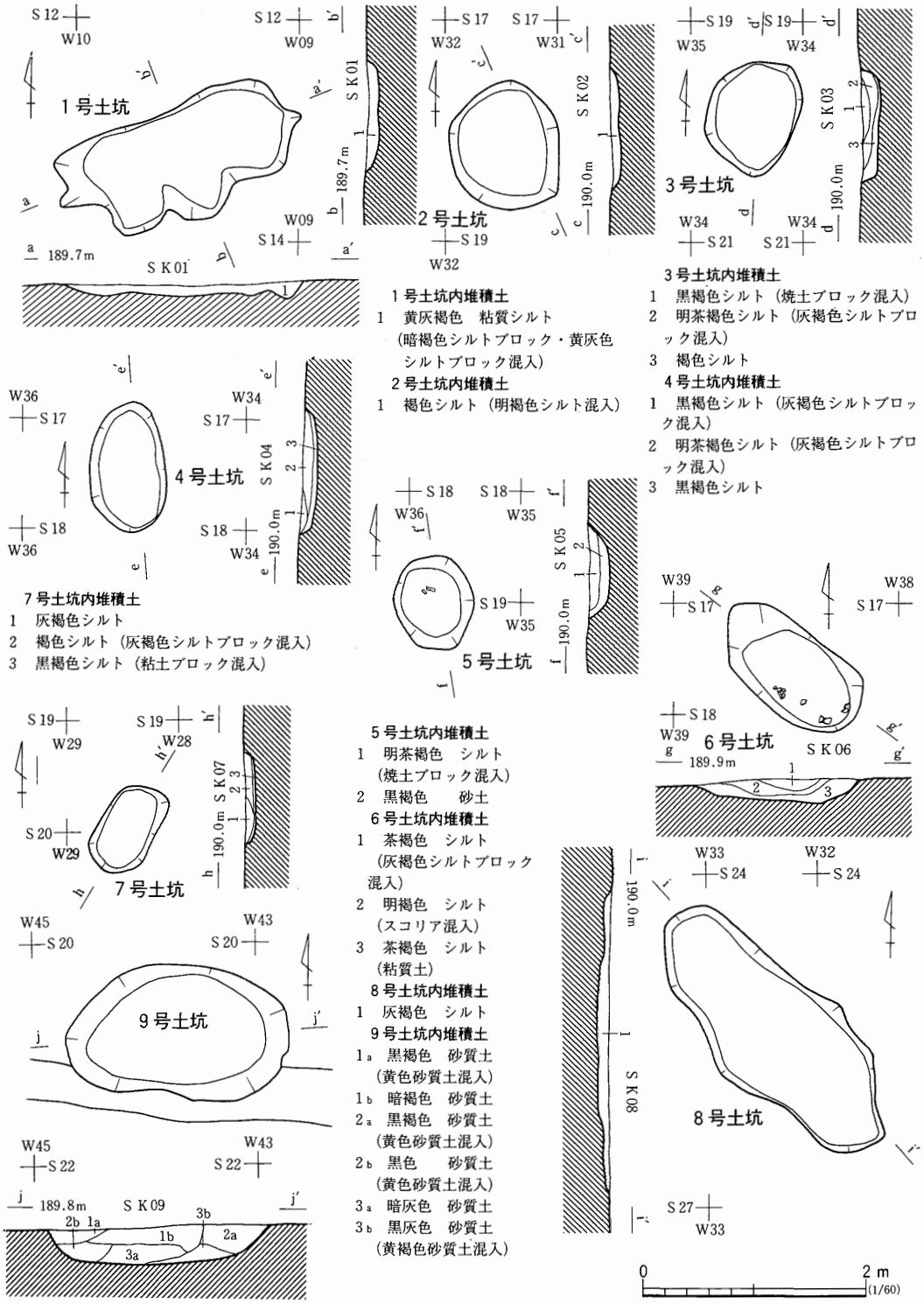
38号土坑　ＳＫ38　(第47図)

調査区中央Ｉ－３グリッドのＬⅢ黒褐色粘質シルト上面で検出した土坑である。調査は第２次調査で行った。８号建物跡から約１ｍ南に位置し，所属不明のピットを切っている。上面の形状は，角に丸みを帯びた方形で，西壁は外側に湾曲して半円状を呈する。規模は，長径147㎝，短径124㎝で，深さは最大14㎝である。堆積土は，白灰色・赤褐色砂質シルトと黒褐色粘質シルトの混合土の１層だけである。埋没のプロセスは人為堆積と考えられる。

堆積土から土師器・須恵器が若干出土している。いづれも小片であり，時期の確定はできない。また，性格も不明である。　(小　熊)

39号土坑　ＳＫ39　(第47図)

Ｈ・Ｉ－３グリッドのＬⅢで検出し，２次調査で調査を行った。５号溝跡から東に約１ｍ離れ



1号土坑内堆積土

1　黄灰褐色　粘質シルト
（暗褐色シルトブロック・黄灰色シルトブロック混入）

2号土坑内堆積土

1　褐色シルト（明褐色シルト混入）

3号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト（焼土ブロック混入）
2　明茶褐色シルト（灰褐色シルトブロック混入）
3　褐色シルト

4号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト（灰褐色シルトブロック混入）
2　明茶褐色シルト（灰褐色シルトブロック混入）
3　黒褐色シルト

7号土坑内堆積土

1　灰褐色シルト
2　褐色シルト（灰褐色シルトブロック混入）
3　黒褐色シルト（粘土ブロック混入）

5号土坑内堆積土

1　明茶褐色　シルト
（焼土ブロック混入）
2　黒褐色　　砂土

6号土坑内堆積土

1　茶褐色　シルト
（灰褐色シルトブロック混入）
2　明褐色　シルト
（スコリア混入）
3　茶褐色　シルト
（粘質土）

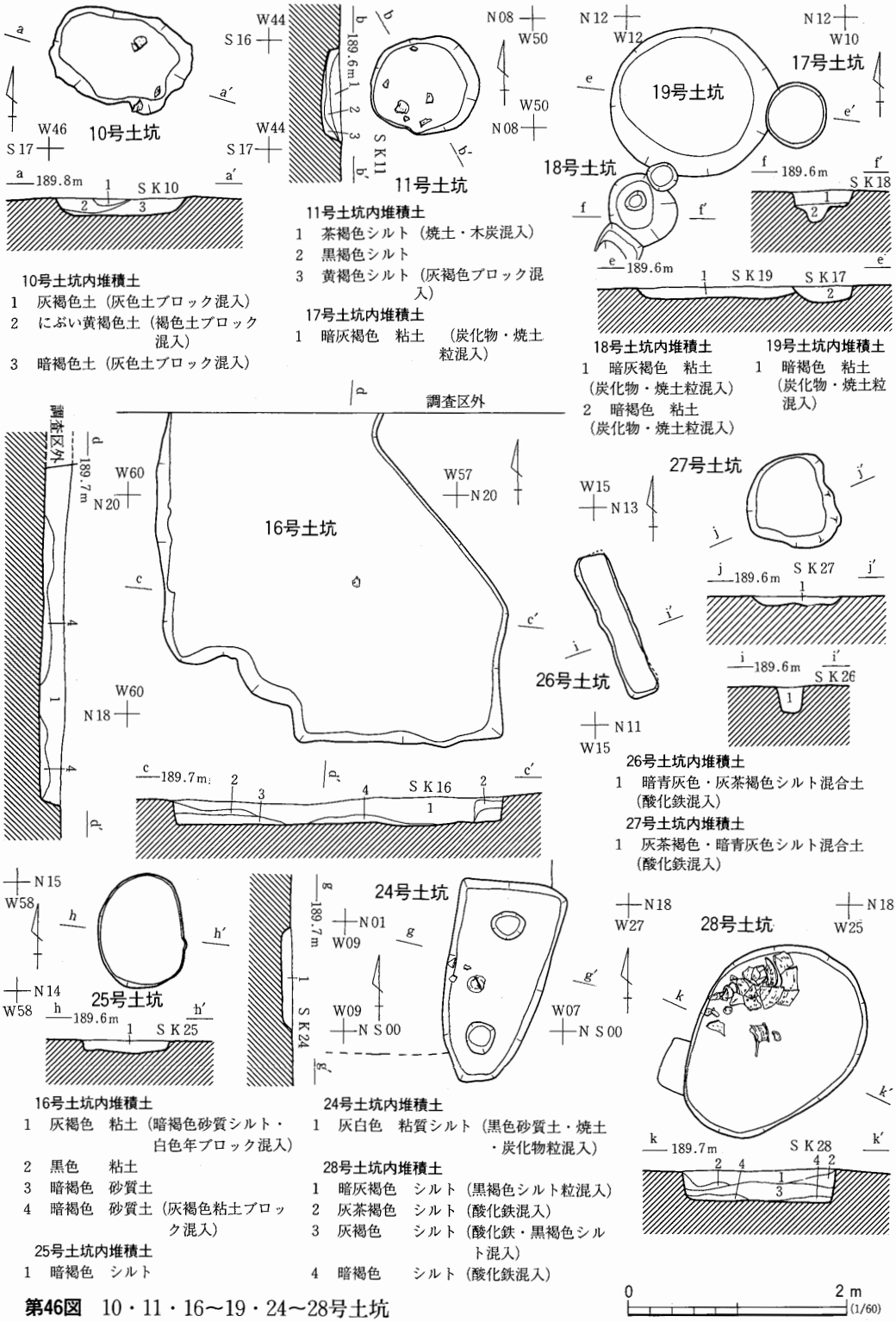
8号土坑内堆積土

1　灰褐色　シルト

9号土坑内堆積土

1a　黒褐色　砂質土
（黄色砂質土混入）
1b　暗褐色　砂質土
2a　黒褐色　砂質土
（黄色砂質土混入）
2b　黒色　　砂質土
（黄色砂質土混入）
3a　暗灰色　砂質土
3b　黒灰色　砂質土
（黄褐色砂質土混入）

第45図　1～9号土坑



10号土坑内堆積土

1　灰褐色土（灰色土ブロック混入）
2　にぶい黄褐色土（褐色土ブロック混入）
3　暗褐色土（灰色土ブロック混入）

11号土坑内堆積土

1　茶褐色シルト（焼土・木炭混入）
2　黒褐色シルト
3　黄褐色シルト（灰褐色ブロック混入）

17号土坑内堆積土

1　暗灰褐色　粘土　（炭化物・焼土粒混入）

18号土坑内堆積土

1　暗灰褐色　粘土（炭化物・焼土粒混入）
2　暗褐色　粘土（炭化物・焼土粒混入）

19号土坑内堆積土

1　暗褐色　粘土（炭化物・焼土粒混入）

26号土坑内堆積土

1　暗青灰色・灰茶褐色シルト混合土（酸化鉄混入）

27号土坑内堆積土

1　灰茶褐色・暗青灰色シルト混合土（酸化鉄混入）

16号土坑内堆積土

1　灰褐色　粘土（暗褐色砂質シルト・白色年ブロック混入）
2　黒色　　粘土
3　暗褐色　砂質土
4　暗褐色　砂質土（灰褐色粘土ブロック混入）

25号土坑内堆積土

1　暗褐色　シルト

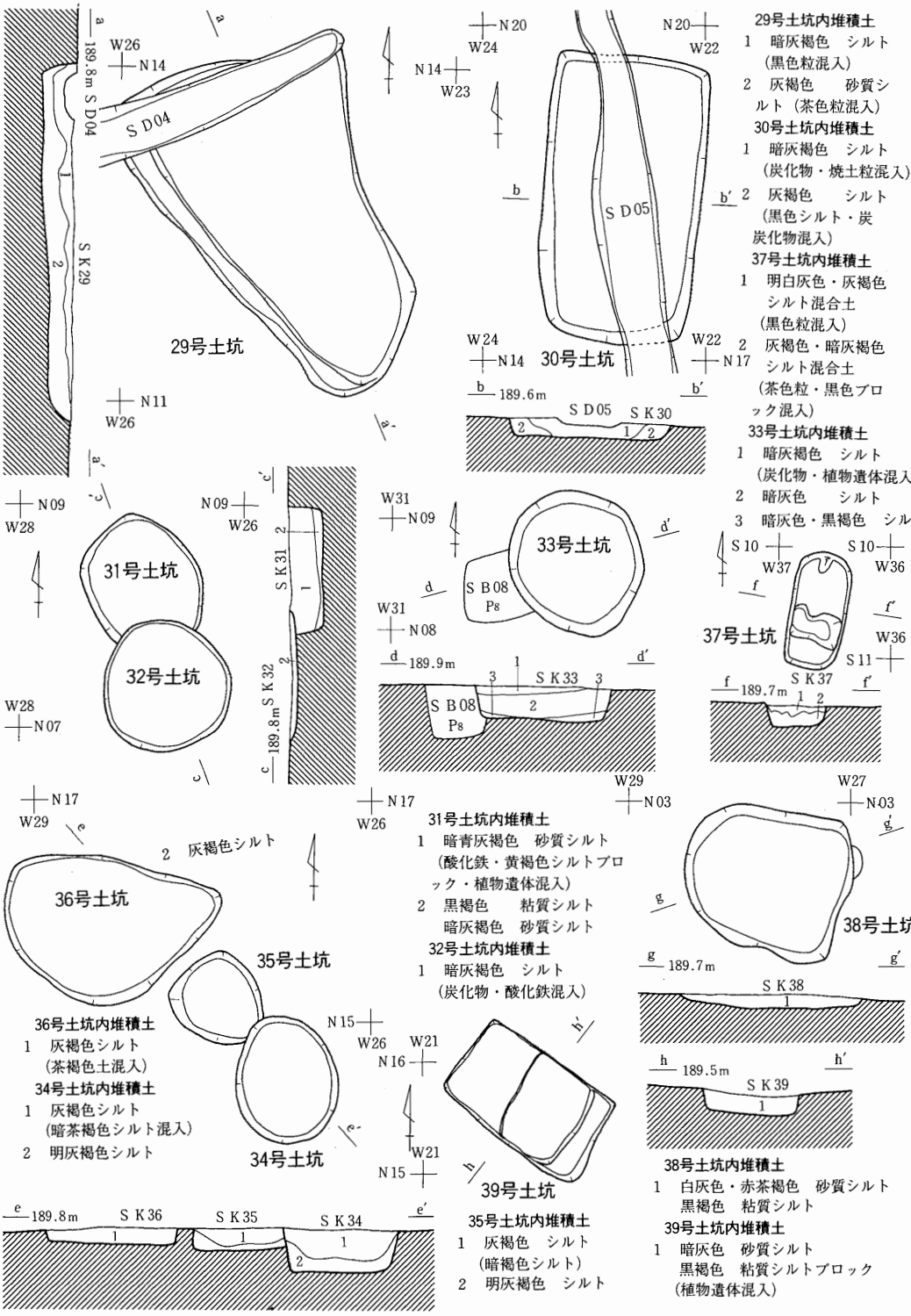
24号土坑内堆積土

1　灰白色　粘質シルト（黒色砂質土・焼土・炭化物粒混入）

28号土坑内堆積土

1　暗灰褐色　シルト（黒褐色シルト粒混入）
2　灰茶褐色　シルト（酸化鉄混入）
3　灰褐色　　シルト（酸化鉄・黒褐色シルト混入）
4　暗褐色　　シルト（酸化鉄混入）

第46図　10・11・16～19・24～28号土坑



第47図　29～39号土坑

第14表　土坑一覧

土坑番号	挿図	グリッド	重複関係 旧<新,＝同時期	断面形	平面形	規模(cm) 上端幅	下端幅	深さ	長軸方向	備考
1	第45図	Ｉ・Ｊ－５	―――	皿状	不整方形	222× 88	132× 66	14	Ｎ－69°－Ｅ	土４，須５
2	第45図	Ｇ－６	―――	皿状	不整円形	115× 96	94× 78	11	Ｎ－02°－Ｅ	土４，土製品１
3	第45図	Ｇ－６・７	―――	鍋底状	不整円形	104× 82	95× 70	18	Ｎ－01°－Ｅ	
4	第45図	Ｇ－６	―――	鍋底状	楕円形	117× 70	102× 52	14	Ｎ－01°－Ｅ	土17，須４
5	第45図	Ｇ－６	―――	鍋底状	円形	85× 71	64× 56	18	Ｎ－30°－Ｗ	須２
6	第45図	Ｇ－６	―――	皿状	不整楕円形	144× 73	100× 61	19	Ｎ－48°－Ｗ	土12，須７
7	第45図	Ｈ－６・７	―――	鍋底状	楕円形	85× 48	74× 39	13	Ｎ－30°－Ｅ	
8	第45図	Ｇ－７	―――	皿状	不整楕円形	270×114	257× 98	12	Ｎ－39°－Ｗ	
9	第45図	Ｆ－７	ＳＤ02＜ＳＫ09	鍋底状	楕円形	198×112	157× 92	45	Ｎ－87°－Ｅ	
10	第46図	Ｆ－６	―――	皿状	不整楕円形	125× 82	103× 68	15	Ｎ－67°－Ｗ	土23，須６
11	第46図	Ｅ－４	―――	鍋底状	円形	98× 81	80× 76	20	Ｎ－81°－Ｗ	土39，須８
16	第46図	Ｅ－２・３	ＳＢ05不明	箱状	不整形	314×(298)	302×(291)	33	―――	
17	第46図	Ｉ－４	ＳＩ01＜ＳＫ19＜ＳＫ17	鍋底状	円形	59× 58	52× 52	15	―――	土４，須２
18	第46図	Ｉ－４・５	ＳＩ01＜ＳＫ18＜Ｐ９・Ｐ10	箱状	不整形	68× 60	44× 33	43	Ｎ－37°－Ｗ	底面に円形Ｐ有
19	第46図	Ｉ－４	ＳＩ01＜ＳＫ19＜ＳＫ17，Ｐ	皿状	円形	146×143	116×110	10	Ｎ－57°－Ｅ	土19，須19
24	第46図	Ｊ－４・５	ＳＩ01＜ＳＫ24	鍋底状	不整台形	191× 92	175× 78	12	Ｎ－16°－Ｅ	土27，須５
25	第46図	Ｅ－４	―――	鍋底状	楕円形	105× 78	100× 74	12	Ｎ－04°－Ｅ	
26	第46図	Ｉ－３	―――	箱状	長方形	140× 26	132× 21	25	Ｎ－23°－Ｗ	
27	第46図	Ｉ－３	―――	皿状	不整円形	90× 79	74× 66	9	Ｎ－36°－Ｗ	
28	第46図	Ｈ－３	―――	箱状	楕円形	193×146	181×137	32	Ｎ－42°－Ｅ	土37，須25
29	第47図	Ｈ－３	ＳＫ29＜ＳＤ04	鍋底状	不整台形	322×152	307×142	32	Ｎ－28°－Ｗ	土76，須62
30	第47図	Ｈ－３	ＳＫ30＜ＳＤ05	鍋底状	長方形	258×143	242×130	28	Ｎ－05°－Ｅ	土11，須14
31	第47図	Ｈ－４	ＳＢ08不明，ＳＫ31＜ＳＫ32	箱状	楕円形	100×(100)	91×(95)	30	―――	
32	第47図	Ｈ－４	ＳＢ08不明，ＳＫ31＜ＳＫ32	皿状	円形	118×115	109×108	6	Ｎ－24°－Ｗ	
33	第47図	Ｈ－４	ＳＢ08＜ＳＫ33	鍋底状	円形	133×118	110×105	28	Ｎ－10°－Ｗ	
34	第47図	Ｈ－３	ＳＫ35＜ＳＫ34	箱状	楕円形	115× 93	102× 80	39	Ｎ－88°－Ｗ	土４，須４
35	第47図	Ｈ－３	ＳＫ35＜ＳＫ34	箱状	楕円形	78× 72	74× 62	20	Ｎ－50°－Ｅ	土１，須３
36	第47図	Ｈ－３	―――	箱状	不整形	190×135	176×122	16	Ｎ－79°－Ｅ	須２
37	第47図	Ｇ－６	ＳＢ06不明	不整状	長方形	106× 51	96× 44	18	Ｎ－12°－Ｅ	
38	第47図	Ｈ－４	―――	皿状	隅丸方形	147×124	135×108	14	Ｎ－74°－Ｗ	土８，須８
39	第47図	Ｈ・Ｉ－３	―――	箱状	長方形	141× 86	132× 82	18	Ｎ－54°－Ｗ	

土：土師器，須：須恵器の出土遺物点数を表わす。又、(　) 内数値は、残存値を表わす。

た位置にある。平面の形状は整った長方形で，長径141cm，短径は86cm，深さは18cmである。形状は浅い箱状を呈する。底面は，中央付近で方形に落ち込み段を形成する。段差は約15cmである。堆積土は，暗灰色砂質シルト・黒褐色粘質シルトの混合土で，植物遺体が混入している。粘性は弱いがよく締まっている。

遺物は出土していない。堆積土から判断すると，新しい時代に所属すると推察される。(小　熊)

第5節　溝　　跡

1号溝跡　ＳＤ01（第50図，図版28）

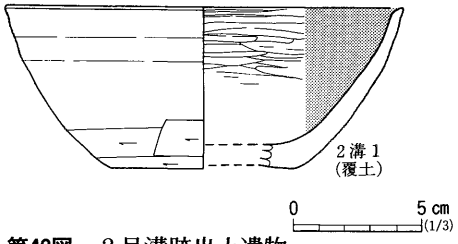
調査区東寄り，Ｌ－６グリッドからＪ－４グリッドにかけて，ＬⅢ上面で検出された。他の遺構との重複はない。規模は長さ35ｍ，幅106㎝，深さ11㎝を測る。直線状に伸びており，底面はほぼ平坦で，底面の高さから，機能時には，水は南東から北西に流れていたものと思われる。堆積土は，暗褐色土，場所により黄灰褐色粘質土である。

遺物はなく，機能した時期は不明である。（只　野）

2号溝跡　ＳＤ02（第48・50図，図版29）

調査区西寄り，Ｆ－７グリッドからＨ－７グリッドにかけて，ＬⅡb上面で検出された。９号土坑に切られている。両端が調査区外に伸びるため規模は明確にできないが，調査区内での長さ20.6ｍ，幅52㎝，深さ22㎝を測る。機能時には，水は東から西に直線状に流れていたものと思われる。堆積土は，褐色土と砂礫を含む茶褐色土の２層に分けられる。溝跡の堆積土から，内面に黒色処理を施した，口径15.5㎝，底径7.5㎝の表杉ノ入式の土師器が出土している。

この２号溝跡の北側には８基の土坑が点在すること，６号建物跡など，数棟の建物の南北の柱列と溝跡との角度はほぼ直角であること，各建物跡から出土した遺物と溝跡出土の遺物の時期がほぼ同時期と考えられることから，この溝は，９世紀前半から中頃にかけて造られた建物群の付属施設として機能したものと考えられる。（只　野）



第48図　２号溝跡出土遺物

3号溝跡　ＳＤ03（第50図，図版30）

３号溝跡は遺跡の北半部Ｇ－３グリッドで第２次調査により検出された。検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。９号建物跡と10号建物跡の中間やや東寄りを南北に走るように位置しており，南端は４号溝跡に合流する。上端幅×下端幅は北側で40㎝×22㎝，南側で90㎝×75㎝を測り，南下しながら幅を広げていく。深さは５～９㎝である。断面形は鍋底状で，堆積土は暗灰褐色シルト１層である。出土している遺物は，土師器片２点である。磨滅が激しく調整その他については不明である。

４号溝跡に合流することから，４号溝跡と同時期に存在・機能したと考えられる。９号建物跡と10号建物跡を区画した溝と思われる。（伊　藤）

４号溝跡　ＳＤ04　（第50図，図版30）

４号溝跡は遺跡の北半部Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ－３グリッドで第２次調査により検出された。検出面は主にＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。29号土坑と重複関係にあり，29号土坑を切っている。５号建物跡東側より８号建物跡北側まで続いており，全長29ｍである。東端は29号土坑を切って一応収束するが，約80㎝東側に溝が続くと思われる５号溝跡からの突出部があり，５号溝跡に合流する可能性もある。規模は上端幅20～70㎝，下端幅10～40㎝，深さ３～15㎝を測る。断面形は鍋底状で，堆積土は暗灰褐色シルト１層である。

出土遺物はなく，出土遺物から本溝跡の存在した時期を判断することはできない。建物跡との関係から区画溝的性格があったものと思われる。（伊　藤）

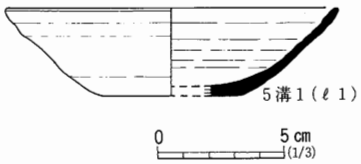
５号溝跡　ＳＤ05　（第49・50図，図版30）

５号溝跡は遺跡の北半部Ｈ－２・３グリッドで第２次調査により検出された。検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。８号建物跡と10号建物跡の西約４ｍを南北に走り，３号溝跡とは10号建物跡を挟んで並走している。溝北側で30号土坑を切っている。規模は上端幅×下端幅で平均55㎝×40㎝を測る。深さは６～15㎝である。断面形は鍋底状で，堆積土は暗灰褐色シルト１層である。出土している遺物は，土師器の杯・甕，須恵器の杯・甕である。５溝１は須恵器杯で，ロクロ調整がみられる。底部は特徴的で手持ヘラケズリ後，細線を刻んでいる。胎土の様子から地元の大戸窯跡群産のものであると推定される。土師器甕は，底部破片である。底部切り離しは回転糸切りで，外面に炭化物が付着している。土師器杯は，底部から体部下半にかけて残存し，回転ヘラケズリ再調整を施している。

本溝跡の存在した時期は，出土遺物から９世紀中頃と考えられる。30号土坑を廃棄した後，時を余り経ないで機能した区画溝と思われる。（伊　藤）

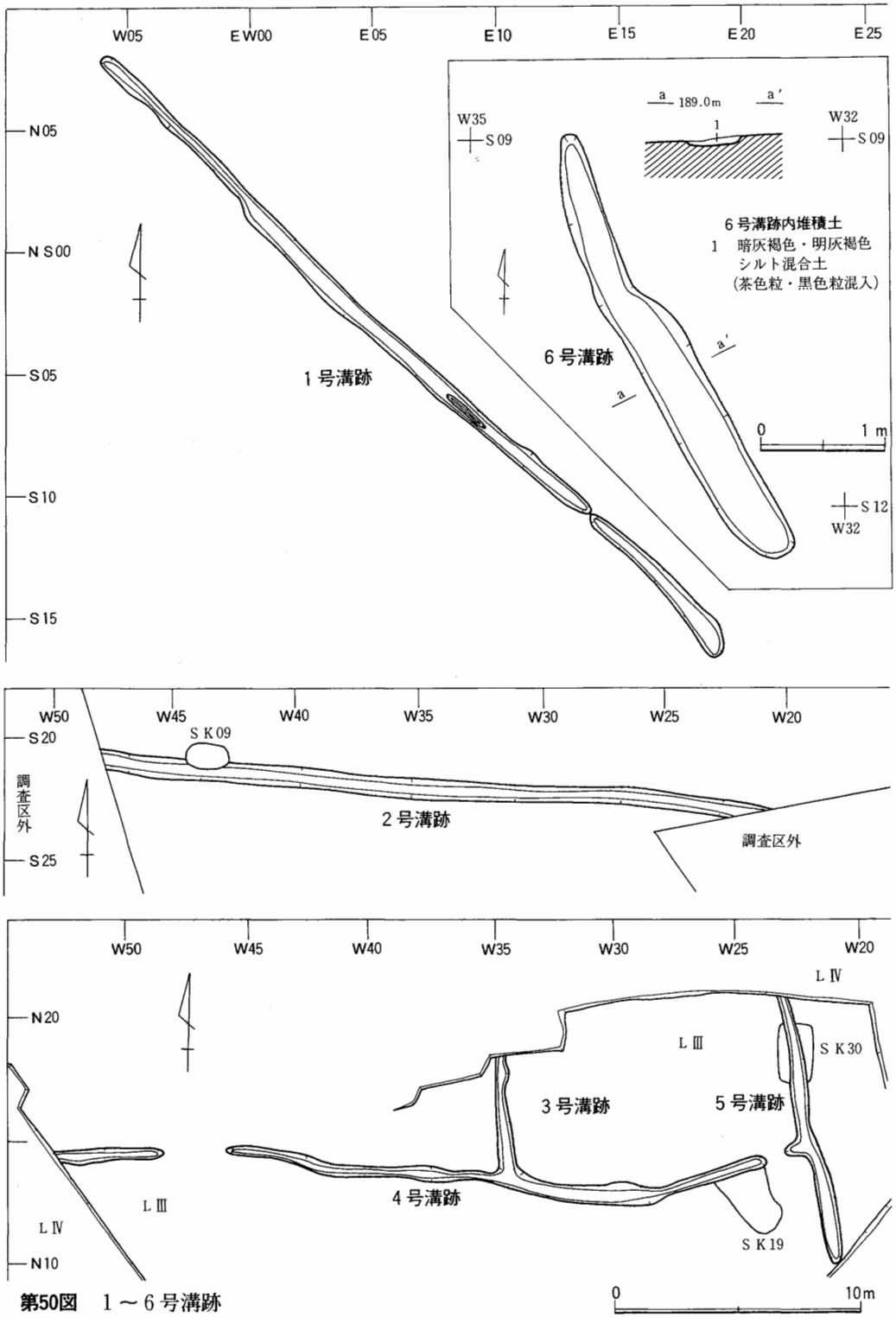
６号溝跡　ＳＤ06　（第50図，図版31）

６号溝跡は遺跡の南半部Ｇ－５・６グリッドで第２次調査により検出された。６号建物跡から約1.4ｍ東に位置している。検出面はＬⅡb暗灰褐色粘質シルトである。上端幅と下端幅との最大径はそれぞれ48㎝と36㎝，深さは平均で約３㎝である。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は，１層で明灰褐色シルトと暗灰褐色シルトの混合土である。



第49図　５号溝跡出土遺物

出土遺物はなく，本溝跡の存在した時期および性格を判断することはできない。（伊　藤）


W05
EW00
E05
E10
E15
E20
E25
N05
NS00
S05
S10
S15
1号溝跡
6号溝跡
a
a'
189.0m
1
W35
S09
W32
S09
6号溝跡内堆積土
1　暗灰褐色・明灰褐色
シルト混合土
(茶色粒・黒色粒混入)
0
1m
S12
W32
W50
W45
W40
W35
W30
W25
W20
S20
S25
SK09
2号溝跡
調査区外
調査区外
N20
N10
LⅢ
LⅣ
3号溝跡
4号溝跡
5号溝跡
SK30
SK19
0
10m

第50図　1～6号溝跡

第６節　その他の遺構と遺物

焼土遺構

１号焼土遺構　ＳＧ01　（第51図，図版26）

Ｆ・Ｇ－４グリッド，ＬⅡb上面で検出した。６号建物跡内部に位置し，２号焼土遺構と近接する。焼土面は黄橙色を呈し，酸化範囲は，長径108㎝，短径100㎝，深さ９㎝を測る。平面形は不整隅丸方形である。検出面から，内面黒色処理が施された表杉ノ入式の土師器の杯の破片が出土している。６号建物跡の柱穴の堆積土にも焼土が混じることから，この遺構は２号焼土遺構と共に，９世紀前半から中頃の家屋焼失の痕跡と考えられる。（只　野）

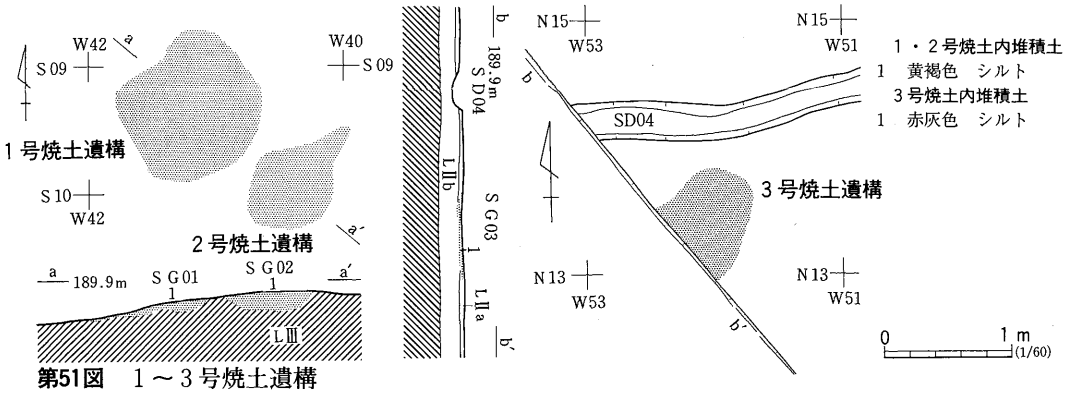
２号焼土遺構　ＳＧ02　（第51図，図版26）

Ｆ・Ｇ－４・５グリッド，ＬⅡb上面で検出した。６号建物跡内部に位置し，１号焼土遺構と近接する。焼土面は黄橙色を呈し，酸化範囲は，長径106㎝，短径66㎝，深さ16㎝を測る。平面形は不整形である。検出面から，土師器の杯が出土した。杯は内面黒色処理が施される表杉ノ入式のものである。６号建物跡の柱穴の堆積土にも焼土が混じることから，この遺構は１号焼土遺構と共に，９世紀前半から中頃の家屋焼失の痕跡と考えられる。（只　野）

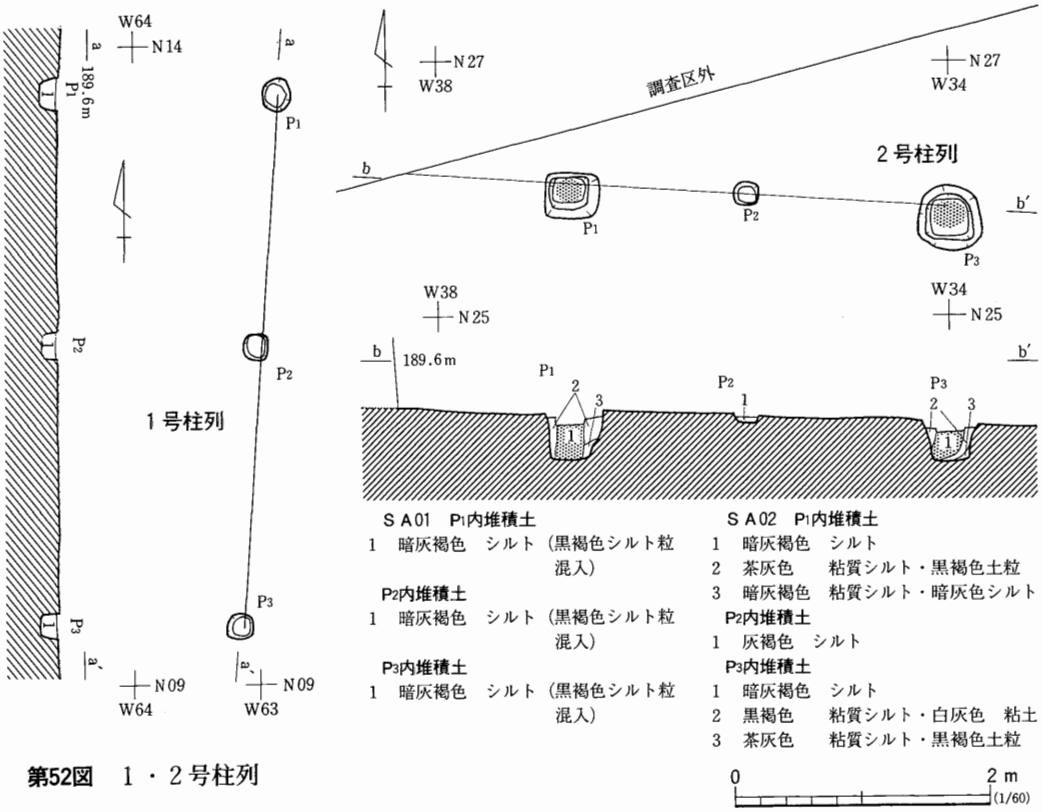
３号焼土遺構　ＳＧ03　（第51図，図版26）

Ｅ－３グリッドのＬⅡaで発見された焼土遺構である。ここは，２次調査区の西境にあたり，４号溝跡から南へ20㎝離れて位置している。プラン南西側は，ＬⅢまで削平されており，焼土全体の広がりは把握できなかった。遺存部分は，72㎝×68㎝の不整方形状を呈する。焼土の最厚部の厚さは４㎝で，あまり強く焼けていない。焼土検出面から炭化物粒が検出された。

検出層位から判断すると，比較的新しい時期の遺構と推定される。（小　熊）



第51図　１～３号焼土遺構



第52図　１・２号柱列

柱　　列

１号柱列　ＳＡ01（第52図，図版27）

Ｄ－３・４グリッドで発見した南北に延びる長さ２間の柱列である。ＬⅢ黒褐色シルト上面から検出した。５号建物跡の南西隅柱から西に約２ｍ，３号建物跡の北西隅柱からは北西に約３ｍ離れて位置している。全長4.15ｍで，掘形中心間で計測した柱間隔は，北から2.00ｍ＋2.15ｍである。軸線の真北に対する偏度は，Ｎ－４°－Ｅを示す。

柱穴掘形は円形を基調とし，径は20～26㎝，深さは15～18㎝である。柱痕はなく，暗灰褐色シルトの埋土が充満している。

P_1は５号建物跡北妻の柱筋に乗っており，隅柱からの距離も北妻柱間幅に近い。建物を意識した意図が感じ取られ，時期もほぼ同じ平安時代と推察される。（小　熊）

２号柱列　ＳＡ02（第52図）

調査区北側Ｇ－２グリッドのＬⅢから検出した。東西に延びる長さ２間の柱列である。柱痕を持ったしっかりした掘形・調査区際の検出位置を勘案すると，建物跡の一部である可能性は高い。

柱間隔は東から1.55cm＋1.43cmで，軸線の方向はＮ－87°Ｗを指す。掘形は方形を基調としており，P_2が両脇のピットに比べて規模・深さともに劣っている。P_1は52cm×45cmで，深さは33cmである。P_2の規模は20cm×18cm，深さは８cm，P_3は43cm×38cm，深さ40cmである。柱痕はP_1・P_3で確認された。平面形は円形で径は20cmを測る。

掘形埋土から遺物は出土していない。　（小　熊）

遺構外出土遺物　（第53図，図版38・39）

遺構外からは，土師器・筒形土器・須恵器・陶器・古銭・石器・石製品が出土している。出土層位は，ＬⅠ・ＬⅢ上面及び表採が主で，住居跡・建物跡付近に集中している。ここでは，第１・第２次調査で採取した遺構外出土遺物をまとめて取り上げ，若干の説明を加える。

土師器　土師器は杯・甕・鍋が出土している。１～４はロクロ整形の杯である。１・２は，身浅く体部が上外方に開くもので底径は狭い。３・４は，体部が内湾気味に立ち上がり口縁部で若干外反する深身のものである。１～３の体部下端及び底部に回転ヘラケズリ再調整を施す。１・３は，体部外面に幅１mm程の浅い沈線が数条平行に巡る。杯は，内面ヘラミガキし黒色処理を施す。５はタタキ整形された甕である。底部は底径は４cmを測る小さい平底で，胴部が砲弾状に膨らむ器形と推察される。内面は，底部周縁をオサエた上に縦位のハケメを粗く施す。６は内面ヘラミガキ・黒色処理をした，ロクロ成形の甕である。口縁部から胴部上半までが遺存する。精選された良質の胎土で，焼成は良好である。

須恵器　７～12は無高台の杯である。７は，肉厚で体部が内湾して立ち上がる。８～10は口径に比べて底径は狭く浅身である。内面及び外面上半までをロクロナデする。11は，底部が高台状を呈した小型の杯で，口縁部の一部が炎熱により赤変している。底部切り離しは回転糸切りである。胎土には細礫・赤褐色微粒が若干混入し，焼成は良くなく軟弱な仕上がりである。色調は灰白色を呈する。12は椀状を呈する深身の杯で，外面の体部上半～底部に火襷が×字状に残る。14は長頸瓶頸部～口縁部の破片で，遺存高は９cm，推定口径約9.8cmである。口縁部の上端部は上方に引き上げられおり，頸部基部には所謂リング状突帯が巡っている。胎土に白色・黒色微粒を含み，色調は青灰色である。内外面には暗緑灰色の自然降灰釉が掛かっている。15は短頸の壺である。口縁部から胴部中位までの約30％が遺存する。胴部上半部に最大径を持ち，緩やかに括れて頸部に至る。胴部径に比して頸部基部の径は11.2cmと太く，外方にやや開いて立ち上がる。口縁部外端は３mm程の幅で短く引き出されている。胎土に白色・赤褐色微粒が含まれ，焼成は良好，色調は暗灰色を呈する。16は焼台である。焼台は，全出土遺物の内これ以外に確認はされていない。全体の約70％が遺存する。底部切り離しは回転ヘラキリで，底端部に窯体が付着している。17は，

遺構外１
（LⅢ）

遺構外11
（LⅣ上）

遺構外７
（LⅢ）

遺構外２
（LⅢ）

遺構外８
（表採）

遺構外３
（LⅠ）

遺構外９
（LⅢ）

遺構外13
（LⅢ）

遺構外10
（LⅡb）

遺構外４
（表採）

遺構外12
（LⅢ）

遺構外５
（LⅡ）

遺構外14
（表採）

遺構外16
（LⅢ）

遺構外17
（LⅢ）

遺構外６
（LⅢ）

遺構外15
（LⅢ）

遺構外18
（LⅢ）

長：2.8cm
幅：1.2cm
厚：0.4cm
重：10ｇ
硬質頁岩

遺構外19（LⅢ）

長：4.7cm　厚：2.1cm
幅：2.3cm　重：28.2ｇ
細粒凝灰岩

遺構外20（LⅢ）

長：8.0cm　幅：3.1cm
厚：3.6cm　重：83.5ｇ
細粒凝灰岩

0　3 cm（2/3）

0　5 cm（1/3）

第53図　遺構外出土遺物

第15表　土師器一覧

遺物番号	挿図	器種	分類	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度(%)	胎土	土器の特徴 外面	内面	備考
1 住 1	第8図	杯	ⅠA2	ℓ1	13.6	5.4	4.1	45	密	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	横位ヘラミガキ 黒色処理	
1 住 2	第8図	杯	ⅠA1	ℓ1	—	5.2	2.5	40		ロクロナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	黒色処理	「萬」墨書有り 胎分No 4
1 住 3	第8図	杯	ⅠA1	ℓ1	12.3	5.3	4.6	30	密	体部下端～底部回転ヘラケズリ，再酸化	黒色処理の痕跡は若干とどめている。再酸化 ヘラミガキ	胎分No 2
1 住 4	第8図	杯		ℓ1	12.7	—	3.3	30	密	入念なロクロナデ	黒色処理，ヘラミガキ	
1 住 5	第8図	杯	ⅠB1	ℓ1	—	5.7	1.2	40	密	体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り，無調整	黒色処理	胎分No 3
1 住 6	第8図	杯	ⅠA1	堆積土	14.2	6.0	5.8	40	密	ロクロナデ，炭化物付着，一部受災，再酸化，体部～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
1 住 7	第8図	杯	ⅠA1	フク土	—	5.0	2.0	20	やや粗	ロクロナデ，体部下端～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
1 住 8	第8図	甕			16.0	—	5.2	15	やや粗		ロクロナデ 炭化物の付着による	
1 住 9	第8図	甕		ℓ1	—	7.8	3.5	15	密	入念なロクロナデ	無調整	
1 住 10	第8図	小甕		ℓ1	8.2	—	2.4	15	密	ロクロナデ	回転ハケメ	
1 住 11	第8図	甕		ℓ1	—	6.4	2.2	15	粗	回転ヘラケズリの後，軽くナデ，回転糸切り，無調整	軽いナデ	
1住関1	第10図	杯	ⅠA1	LⅢ	14.2	5.0	4.5	20	やや粗	ロクロナデ，体部下端～底部回転ヘラケズリ	黒色処理	
1住関2	第10図	杯	ⅠB2	LⅢ	13.6	6	4.5	95	密	ロクロナデ，底部外縁ケズリ，回転糸切り		体部外部に「萬」墨書
1住関3	第10図	杯	Ⅱ？	LⅢ	12.4	5.8	4.7	45	密	回転糸切り，無調整，ロクロナデ	黒色処理	
1住関4	第10図	杯	Ⅱ	LⅢ	—	4.4	3.3	25	やや粗	回転糸切り，体部下端～底部回転ヘラケズリ	ミガキ 黒色処理	
1住関5	第10図	杯	ⅠA1	LⅢ	13.7	—	3.6	35	密	ロクロナデ，器面荒れ	ヘラミガキ，黒色処理	
1住関8	第10図	筒形土器		LⅢ	11.8	—	6.8	10	粗	ナデ	ナデ	胎分No44
2 a住1	第13図	杯		カマド袖	16.0	—	5.4	35	やや粗	ロクロナデ 器面やや荒れ	ヘラミガキ 内面黒色処理	
2 b住1	第15図	杯	ⅠA1	旧カマド前P1	12.4	5.4	4.4	35	密	ロクロナデ，再酸化，体部～底部回転ヘラケズリ	黒色処理，ヘラミガキ 同囲横位	
2 b住2	第15図	甕		P内	—	5.0	2.0	20	粗	ロクロナデ粘土の返ったもの，回転切り	ロクロナデ	
5 建 1	第20図	杯	—	フク土	13.8	—	3.9	25	密	ロクロナデ	ヘラミガキ，黒色処理	
8 建 1	第25図	杯	ⅠA1	ℓ1	13.0	—	4.4	30	やや粗	体部～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
8 建 2	第25図	杯	ⅠA1	北側	—	5.4	1.7	20	やや粗	回転ヘラケズリ		
9 建 1	第27図	杯	ⅠA1	P14ℓ2	—	7.8	2.1	25	やや粗	体部～底部回転ヘラケズリ，回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	
2 溝 1	第48図	杯	ⅠA1	フク土	15.6	(7.3) (推定)	6.4	40	密	ロクロナデ，体部下半～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
2 坑 2	第32図	土垂		フク土	長さ4.3	幅 1.3		100	密			
4 坑 1	第33図	甕(小形)		フク土	10	—	4.4	10	やや粗	炭水物付着	炭化物付着，カキメ	
6 坑 1	第34図	甕		No 2	16.8	—	—	8.4	やや粗		軽いロクロナデ	
10 坑 1	第35図	杯	ⅠA1	堆積土	14.0	7.7	4.2	45	密	ロクロナデ，体部～底部回転ヘラケズリ	黒色処理 ヘラミガキ	
10 坑 2	第35図	杯	ⅠA2	堆積土	13.4	5.8	4.4	60	密	回転糸切り，ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
11 坑 1	第36図	杯	ⅠA1	ℓ3	14	6.9	4.0	65	やや粗	体部～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	
11 坑 2	第36図	杯	ⅠA1	フク土	13.3	5.6	4.0	50	密	軽いロクロナデ，体部～底部回転ヘラケズり，回転糸切り，後ナデ調整	ヘラミガキ 黒色処理	
11 坑 3	第36図	杯		No 1	11.1	—	3.4	20	密	ロクロナデ	ヘラミガキ，黒色処理	

遺物番号	挿図	器種	分類	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度(%)	胎土	土器の特徴 外面	内面	備考
11 坑 4	第36図	杯	ⅠA2	ℓ2	15.6	7.6	4.6	30	密	底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	
11 坑 5	第36図	杯	ⅠA1	フク土	—	—	4.6	30	密	受災，再酸化，体部～底部回転ヘラケズリ	黒色処理，ヘラミガキ	体部外面に「萬」墨書
16 坑 1	第37図	筒形土器		埋土	13.0	—	4.0	5	やや粗			製塩，胎分No 1
28 坑 1	第40図	甕		検出面	—	8.4	4.8	20	粗	回転糸切り	輪積み	
28 坑 2	第40図	鍋		ℓ1				30	やや粗	ロクロナデ，炭化物付着	ロクロナデ	
29 坑 5	第41図	手捏ね		ℓ1	長 3.2 短 2.7	3.0	3.0	90	密	ミガキナデ	ナデ	
30 坑 1	第42図	杯	ⅠA1	ℓ1	13.6	5.8	4.3	85	密	ロクロナデ，体部～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
遺構外1	第53図	杯		検出面	19.0	—	3.9	30	密	ロクロナデ，体部～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
遺構外2	第53図	杯	ⅠA1	攪乱	13.1	4.7	4.2	40	密	体部下端～底部回転ヘラケズリ，ロクロナデ 器面やや荒れ	ヘラミガキ 黒色処理	
遺構外3	第53図	杯	ⅠA3	ℓ1	12.2	—	5.5	30	密	ロクロナデ，体部下半回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
遺構外4	第53図	杯	ⅠA3	攪乱	13.2	—	4.9	30	密	ロクロナデ，体部下端回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	
遺構外5	第53図	甕		W40	—	3.7	4.9	—	やや粗	タタキ形成，ナデ	指オサエ カキメ後ナデ	
遺構外6	第53図	甕		表採	21.0	—	5.9	10	密		横位ヘラミガキ 黒色処理	

第16図　須恵器一覧

遺物番号	挿図	器種	分類	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度(%)	胎土	土器の特徴 外面	内面	備考
1 住 12	第8図	杯	ⅠA	ℓ1	14.4	6.5	3.7	20	やや粗	重ね焼痕，ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No 9
1 住 13	第8図	杯	ⅠA	LⅢ	13.3	7.1	3.5	45	密	ロクロナデ，底部ナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No 8
1 住 14	第8図	杯	ⅠB	ℓ1	12.6	6.2	3.3	35	密	ロクロナデ 重ね焼き痕	ロクロナデ	胎分No21
1 住 15	第8図	杯	ⅠC	ℓ1	13.8	—	3.2	30	密	軽いロクロナデ 回転ラヘ切り		胎分No19
1 住 16	第8図	杯	( )B	ℓ1	13.5	—	3.6	35	密	上半部入念なロクロナデ	入念なロクロナデ	胎分No 5
1 住 17	第8図	杯	( )B	ℓ1	13.0	—	3.1	25	密	軽いロクロナデ 重ね焼き痕	軽いロクロナデ	胎分No 6
1 住 18	第8図	杯	( )C	ℓ1	12.0	—	3.0	20	密	ロクロナデ	軽いロクロナデ	胎分No18
1 住 19	第8図	杯	( )A	ℓ1	13.2	—	3.6	30	密	ロクロナデ	ロクロナデ	胎分No20
1 住 20	第8図	杯	ⅠB	ℓ1	15.1	7.7	6.5	40	密	軽いロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No16
1 住 23	第8図	双耳杯		ℓ1	—	—	1.9	10	密			
1住関6	第10図	杯	ⅠA	LⅢ	13.6	6.2	3.8	65	密	ロクナナデ「・」墨書 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No43
1住関7	第10図	杯	ⅠA	LⅢ	14.3	6.6	4.0	45	密	重ね焼き 回転ヘラ切り	ロクロナデ	
2 a住2	第13図	杯		床面下	12.4	—	3.3	15	やや粗			胎分No10
2 a住3	第13図	瓶子		a区	5.0	—	3.0	5	密	ロクロナデ	ロクロナデ	胎分No11
3 建 1	第18図	杯		フク土	14.0	—	4.0	10	やや粗	軽いロクロナデ	軽いロクロナデ	胎分No12
2 坑 1	第32図	杯	ⅠA	フク土	—	7.0	3.4	35	密	回転ヘラ切り 入念なロクロナデ	ロクロナデ	胎分No13
6 坑 2	第34図	盤		フク土	12.1	6.5	2.6	80	密	入念なロクロナデ 回転ヘラ切り	入念なロクロナデ	胎分No15
6 坑 3	第34図	短頸壺		No 1	15.8	—	3.9	7	密	ロクナナデ	ロクロナデ	胎分No14
10 坑 3	第35図	杯	ⅠC	堆積土	13.2	—	3.3	35	密	ロクロナデ		
11 坑 6	第36図	杯	ⅠB	No 7	12.5	—	3.4	20	密	上半部ロクロナデ	ロクロナデ	胎分No17

遺物番号	挿図	器種	分類	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度(%)	胎土	土器の特徴 外面	内面	備考
19 坑 2	第38図	杯	ⅠA	ℓ1	15.4	7.8	3.8	45	やや粗	重ね焼き痕，ロクロナデ，回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No22
24 坑 1	第39図	杯	ⅠA	ℓ1	13.2	8.1	3.2	95	やや粗	重ね焼き痕，ロクロナデ，回転ヘラ切り・ナデ	ロクロナデ	胎分No23
24 坑 2	第39図	杯	ⅠA	ℓ1	13.5	—	3.5	30	密	ロクロナデ，器面荒れ	ロクロナデ	胎分No24
28 坑 3	第40図	杯	ⅠB	ℓ1	13.3	5.1	4.1	45	密	上半部ロクロナデ	ロクロナデ	胎分No25・26
28 坑 4	第40図	大甕		ℓ2	51.2	—	24.5	40	密	タタキメ	アテ具痕	胎分No49
29 坑 1	第41図	杯	ⅠA	ℓ1	15.2	7.2	4.3	50	密	ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No29
29 坑 2	第41図	杯	ⅠA	ℓ1	14.0	7.6	3.7	30	やや粗	ロクナナデ「ー」線刻 回転ヘラ切り	ロクロナデ	
29 坑 3	第41図	杯	ⅠA	検出面	13.0	—	3.5	10	密	ロクロナデ	ロクロナデ	
29 坑 4	第41図	杯		検出面	13.4	—	4.1	10	密		軽いロクロナデ	胎分No28
30 坑 2	第42図	杯	ⅠC	ℓ1	13.8	—	3.9	30	密	体部下端～底部手持ちヘラケズリ	軽いロクロナデ	胎分No31
30 坑 3	第42図	杯	ⅠB	ℓ1	14.8	6.8	4.3	50	密	上半部ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	胎分No30
30 坑 4	第42図	杯	ⅠC	ℓ2	14.6	—	3.5	15	やや粗	重ね焼き痕 ロクロナデ	軽いロクロナデ	
30 坑 5	第42図	高台付杯		ℓ1	—	6.0	—	30	やや粗	ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ 底部狐痕有	
30 坑 6	第42図	甕		ℓ1	—	—	10.4	15	密	ロクロナデ	ロクロナデ	胎分No32
34 坑 1	第43図	杯	ⅠB	ℓ2	12.6	6.2	3.3	30	密	上半部ロクロナデ 底部ナデ	ロクロナデ	胎分No33
5 溝 1	第49図	杯	ⅠC	ℓ1	13.2	—	3.5	20	密	ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部外部に「ー」線刻
遺構外7	第53図	杯	ⅠB	検出面	13.2	6.2	4.1	40	密	底部回転ヘラ切り 無調整	ロクロナデ	胎分No37
遺構外8	第53図	杯	ⅠB	表採	14.2	6.2	3.8	50	密	回転ヘラ切り 重ね焼き痕	軽いロクロナデ	
遺構外9	第53図	杯	ⅠA	LⅠ	15.0	7.2	3.4	40	密	ロクロナデ 体部に焼きぶくれ	ロクロナデ	胎分No42
遺構外10	第53図	杯	ⅠB	LⅡb 検出面	14.0	—	3.2	30	密	ロクロナデ，回転ヘラ切り，底部ナデ	ロクロナデ	
遺構外11	第53図	杯	ⅡB	LⅣ上 検出面	11.8	5.8	3.5	70	やや粗	底部回転糸切り，無調整，体部ロクロナデ	ロクロナデ	
遺構外12	第53図	杯	ⅠB	検出面	15.2	6.9	5.9	35	密	体部上半ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ	胎分No39
遺構外13	第53図	高台付杯		検出面	11.8	5.8	5.1	65	密	自然降灰，回転ヘラ切り	底面外周重ね焼き痕有	胎分No36
遺構外14	第53図	壺		表採	9.8	—	8.9	15	密			胎分No41
遺構外15	第53図	短頸壺		検出面	12.0	—	8.9	30	密			胎分No40
遺構外16	第53図	焼台		検出面	12.0	7.8	4.1	40	密			胎分No38
遺構外17	第53図	円面硯？		LⅢ	—	15.0	6.0	35	密			胎分No35

遺存高６cm，推定最大径15.1cmの須恵器の破片である。内面下端が鋭く屈曲し，端部が偏平であることから，食膳具等の口縁部にはなり得ないと判断し，端部倒立で掲載した。欠損部付近に幅２mmの沈線が巡る。円面硯もしくは高台の一部であろうか。

石器　18は有茎の石鏃である。二等辺三角形の形状を成し，側面に丁寧な調整剥離を施す。両側縁に両面から抉りを入れた，所謂アメリカ式石鏃である。

石製品　19・20は砥石である。共に石質は硬質細粒凝灰岩で，４面を研ぎ面として使用している。19には，「真」・「人真」と判読できる線刻文字が，２面に１文字ずつ刻まれている。19・20とも研ぎ面の磨滅が著しい。相当使い込まれていたものと推察される。　（小　熊）

第3章　考　　察

横沼西遺跡は，会津盆地中央の低位面に所在している。2年間の調査で，竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡12棟，土坑17基，溝跡6条，焼土遺構3基を検出した。整然と配された建物跡と住居跡を主体に構成された，平安時代の集落跡である。

本章では，先ず遺物・遺構について分類・分析した後，遺跡全体の性格付けを行いたい。

第1節　遺物について

遺跡から，土師器・須恵器・陶器・磁器・鉄製品・石製品・銭貨が出土している。土師器は破片も含めて930点，須恵器は472点で，出土量は総じて少ない。土師器・須恵器の出土割合は約2：1であり，盆地内に所在する当該期の集落としては，須恵器出土の割合はやや低い[註1]といえる。特異な出土遺物としては，住居跡内出土の鉄製鎌がある。県内でも鎌の出土例は，さほど多くなく，会津盆地及び同周辺においては，横穴墓・住居跡から数点出土しているに過ぎない[註2]。

ここでは，出土量の多い土師器・須恵器と鎌について，若干の検討を加える。

1．土師器・須恵器について

土師器　確認できた器種は，杯・甕・小型甕・鍋で，成形にはすべてロクロが使用されている。出土土師器の器種ごとの割合をみると，杯が全体の約70％を占め，甕類を大幅に上回っている。

杯は，ロクロ成形で，底部切り離しは回転糸切りのものである。内面の底部付近は，単位幅の広い放射状のヘラミガキ，体部には横位のヘラミガキを施し黒色処理する。器形は，底径がやや狭まり，深身のものが主体で，回転ヘラケズリ再調整を施すものが大半を占めている。

これらは，調整技法・調整箇所の観点から次のように分類される。

杯　Ⅰ：再調整を施すもの
　　A　回転ヘラケズリ再調整
　　B　手持ちヘラケズリ再調整
　　Ⅱ：再調整を行わないもの

1　調整箇所は，体部下半～底　部
2　調整箇所は，底部全面および底部外縁
3　調整箇所は，体部下半・同下端

甕は大半が破片であり，器形全体を把握できたものはない。タタキ成形を施すものとロクロ成形・ロクロナデによるものとに分かれる。タタキメを持つ甕は，底部が狭い平底を呈する。

須恵器　須恵器は，杯・高台付杯・蓋・盤・大甕・甕・長頸瓶・焼台その他器種不明なものも含まれる。この内，杯・甕が大半を占める。個体数では，杯が約50個体，甕は約20個体である。

杯は，回転ヘラ切り（Ⅰ類）と回転糸切り（Ⅱ類）があるが，その割合は前者が大多数を占める。口径に比して狭い底部と，体部がやや内湾ぎみに立ち上がる器形を主とし，成形後の調整はロクロナデ・ナデを施す。再調整を行ったものは確認されていない。これらは，調整箇所によって，更に，以下のように分類される。

A　器面全面に入念なロクロナデを施すもの

B　底部・体部外面上半～内面にロクロナデを施すもの

C　底部・体部外面にロクロナデを施すもの

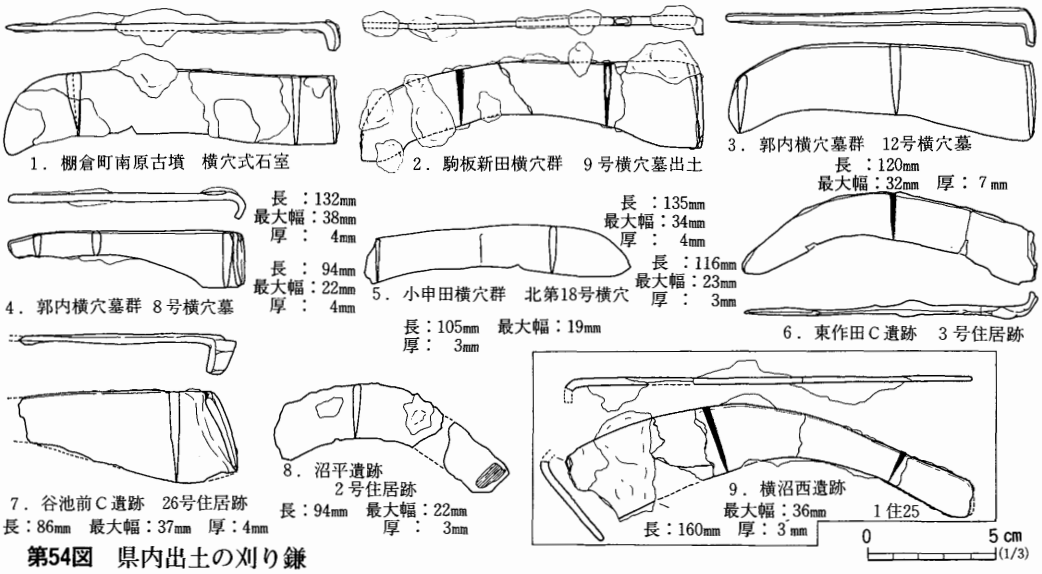
甕は，甕・大甕ともに，胴部外面にタタキメを残し，内面のアテ具痕をカキメ・ナデにより擦り消すもの・アテ具痕を明瞭に残すものとがある。量的には，後者が圧倒的に多い。タタキの大半は，平行タタキメで，アテ具痕は，同心円状・青海波状・平行刻目状のものがある。

以上，出土量の多い土師器・須恵器の杯の分類と，杯・甕についての出土の傾向について述べた。今回の調査で出土した土器群には，一括資料と言えるものが無く，器種組成まで十分触れることはできない。だが，出土土器全体を通して見ると，時期的な幅が限定されることが看取される。出土層位・出土地点に問題はあるものの，１号住居跡とその周辺出土の土器群は，その出土量・形態的特徴から判断して，これらの典型的資料と考えられる。そこで，次にこれらの土器群の編年的位置付けを試みることによって，本跡出土土器の所属時期を検討して行く。

１号住居跡出土土器　１号住居跡とその南側周辺から，土師器・須恵器が，比較的まとまって出土している。器種の組成は，土師器・須恵器の杯類が大半を占め，土師器甕・同小型甕・筒形土器が加わる。須恵器甕は，小片が僅かに出土しているに過ぎない。杯類における土師器と須恵器の割合はほぼ同数の値を示しており，個体数は，約15個体程度が確認された。土師器の甕類は約５個体である。土師器杯の大半はヘラケズリ再調整を施したもので，ＩＡ１・ＩＡ２が主体となり，ＩＢ３・Ⅱは極僅かである。ＩＡ１の占める割合は約45％，ＩＡ２は約20％である。器形は，狭い底部から体部が内湾気味に立ち上がるもので，底径指数0.35～0.47，器高指数0.26～0.47の範疇にある。これらは表杉ノ入式期の比較的古い段階の特徴を示している。多賀城出土の資料との対比でいえば，Ｃ群からＤ群土器に移行する段階に位置付けされるものであろう。[註3]

須恵器杯は大戸古窯跡群産のもので，底部・体部外面上半～内面にロクロナデを施すＩＢを主体としている。器形はほぼ類似し，底径指数0.45～0.49・器高指数0.26～0.28の間にまとまりを持つ。これは，M19とM25の底径・器高指数を比較させた場合，[註4]双方の分布密度が極めて薄いエリアと合致しており，上吉田遺跡の川床遺物集中部出土の杯類と近似した状態を示している。１号住居跡の土器群は，M19とM25の間に位置付けられる可能性が高いと思われる。[註5]

これらを相対的に判断すれば，１号住居跡の土器群は９世紀前半～中葉の所産と考えられる。また，本跡出土土器は，一部に８世紀後半頃のものを含むもの(24坑１)，大半は９世紀中頃ま



第54図　県内出土の刈り鎌

でのもので占められており，その時期的幅は，極めて限定された様相を示している。

2．1号住居跡出土の刈り鎌について

1号住居跡から，刀子と共に刈り鎌が出土している。ここでは，県内出土の鎌も交えながら，本跡出土の鎌について若干触れてみたい。

1住25は，身が中程まで山なりに弯曲した後，湾曲度を弱めながら先端に至る曲刃鎌[註6]で，遺存長は16cm，最大幅3.6cm，厚さは2～3mmを測る。先端部は僅かに欠けているが，角張った形状を成すものと推察される。図示した県内の刈り鎌(第54図)もすべて曲刃鎌に属し，柄の装着は1住25同様，挟圧装着である。今日に至る茎装着と比べると強度的に劣る技法で，古代の鎌の特徴を示している。古墳・横穴墓出土の1～5は，峰部が直線的に伸び，身が柄に対して直角に近い角度で装着されるタイプである。峰部基部が内側に折り返され，柄装着角度が鈍角に開く住居跡出土の6～8とは形態的・機能的な面において相違する[註7]。作業能率の向上を遂げた後者は，前者の弱点の克服を目指し，改良を加えた発展的形態と見て取れる[註8]。本跡出土鎌は後者に属するもので，折り返しが峰側で約2mm遺存している。しかし，これは通常折り返す方向の逆側に折り込まれており，鎌は左利き用として製作されたことがわかる。柄の装着部分には，木質部が錆となって付着・遺存しており，復元した柄装着状態から，鎌の刃渡りは約12cm，身の装着角度は約120°の鈍角を呈すると推察される。刃渡り12cmは，上記の鎌よりやや大型だが，稲株の根刈り用として使用するには適した長さと考えられる[註9]。逆をいえば，刃渡りの短い4・6では到底株刈りは無理で，自ずと使用目的も異なっていたと考えられる。著しい刃部の磨滅状態は，使い込みの現れと推察される。だが，出土量が全体的に少ない状況をも考えれば，刈り鎌普及率は依然低く，永年使用せざるを得ないという状況が背景にあったと思われる[註10]。　(小　熊)

第２節　遺構について

１．竪穴住居跡

住居跡は２軒検出した。内１軒は建て替えを行った住居である(2a・2b号住居跡)。

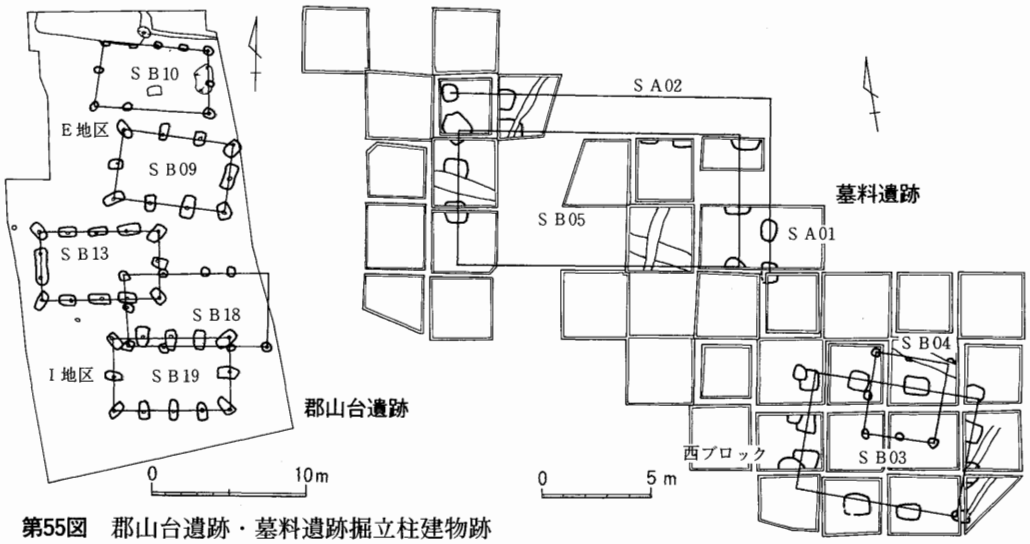
遺物を多量に出土した１号住居跡は遺存状態が非常に悪く，柱穴・貼床と，掘形の南・東側周壁際に，除湿効果を期待したと思われる溝を検出した以外，発見できたものはない。住居跡に伴うとされた柱穴は５個である。P_1・P_2・P_3は住居跡のコーナーを結ぶ対角線上にあり，柱間隔が約３ｍでほぼ一致する。南西側に位置すべき柱穴は，19号土坑によって欠失している。図上に現れてはいないが，土坑底面に円形の凹みが認められており，恐らくは住居跡に伴う柱穴の一部と考えられる。このピットを含めれば，主柱穴は方形に整然と配されていたことになる。P_4がP_1に切られ，P_3に柱抜き取りを思わせる痕跡も残っている。これだけを根拠にして，建て替えの有無は判断し兼ねるが，検出時に南側で見えていた不整のプラン・本跡東壁に重複する24号土坑の出土遺物などを勘案すれば，１号住居跡の建て替え，若しくは別遺構との切合いの可能性は一概に否定はできない。

2a号住居跡は，2a号住居跡のプランをほとんど変更せず建て替えた小型の住居跡である。長軸はほぼ真北方向に向き，３・４・６号建物跡の主軸方向と一致している。

本住居跡で特筆すべきはカマドである。東壁中央に作り付けられ，ほぼ完全な形で遺存している。カマド上面の天井部～煙出しピットが若干焼けているが，使い込まれた痕跡は止どめていない。カマド内堆積土は，住居跡内堆積土と近似した堆積土で，カマド本体を破壊することなく一気に埋められている。カマドの使用頻度が著しく低かったか，もしくは短期間に廃絶された可能性が指摘される。

カマドは，台形状を呈し天井部中央に隅丸方形状の釜口[註11](土器設置部分)が開口している。釜口の径は33cm×44cm，釜口上端から燃焼部底面までの高さは約35cmで，中型の長胴甕を設置できる程度のスペースを確保している。煙出しピットは釜口から約30cm奥に位置している。しかし，煙道は見られず，地山を掘削した様子も窺えない。恐らくは，浅い半地下式，もしくは地上設置式の煙道であったと考えられる。

2b号住居跡のカマドは，既に破壊され形状は不明だが，南東コーナー部に設置されていたことが分かっている。これも2a号住居跡のカマドと同じく，煙道がないものである。該期の住居跡でコーナー部にカマドを設置する傾向は，登戸遺跡８号住居跡[註12]・鹿島遺跡１・２号住居跡[註13]などに類例が求められる。しかし，これらは煙道を持つ点で，本住居跡と相違する。盆地周辺部と盆地低位面という立地場所の違いによって，煙道の設置方法が異なると解釈したい。



第55図　郡山台遺跡・墓料遺跡掘立柱建物跡

２．掘立柱建物跡

本跡建物跡の特徴としては，北に主軸を取り，建物跡同志の重複が無い点が挙げられる。このことは，建物跡を設ける際に何等かの制約・規格に基づいて建てたと同時に，建物の存続時期にとぎれがなかったか，もしくは同時期存在の可能性を示すものと考えられる。本跡出土遺物の時期が短期間に限定されるものであることは既に述べてきた。ここでは建物の規模・分布状況，さらに他の遺構との構成状況を検討することにより，建物の性格・本跡における時期的な位置付けを考えてみたい。

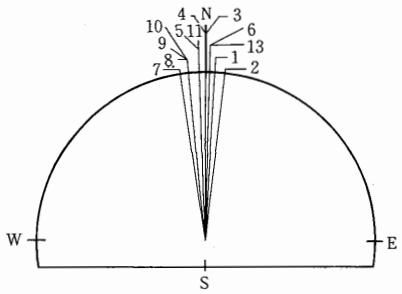
２年に渡る調査で，12棟の建物跡の調査を実施した。これらはすべて南北棟の建物で，内訳は側柱建物跡11棟，総柱建物跡が１棟である。規模別にみると，２間×２間が５棟（建て替えを含む），２間×３間が２棟，２間×４間が１棟，２間×６間が１棟，３間×３間が１棟，３間×４間が１棟，である。この内，２間×２間の建物跡２棟が建て替えを行っている（１号建物跡・３号建物跡）。総柱建物跡（９号建物跡）は，梁行２間，桁行４間規模の大型のもので，掘形の大半に，柱抜取りの痕跡を止どめている。

これらは，建物の主軸方向によって大きく２つのグループに分けられる。

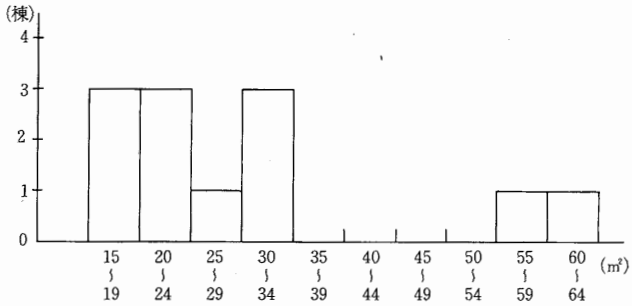
Ａ群（真北方向に主軸をとるもの）……１・３～６・11・12号建物跡

Ｂ群（真北に対しやや西側に主軸をとるもの）……７～10号建物跡

Ａ群は，６号建物跡を最大規模として，調査区北西端～中央にかけて階段状に分布する建物跡群である。主軸方向はNS－00°－EWから±２°の偏度角の範囲にある。Ｂ群は，２号住居跡を切って構築された10号建物跡を東西・南から囲むように分布する建物跡群で，主軸方向はＮ－６°Ｗを示す。２号建物跡は，Ａ群・Ｂ群のどちらにも属さないものである。１号住居跡の南側に近



第56図　建物跡主軸方位分布図



第57図　建物跡面積分布図

接し，主軸方向も他の建物より強く東偏し，住居跡の主軸方向に近い値を示している。ただし，新しい１号建物跡は，主軸を真北にとって建て替えられている。ここから判断すれば，２号建物跡は１号建物跡に関連する建物であって，建て替えによりＡ群と同じ主軸方向に変更されたと推察される。Ａ群の６号建物跡とＢ群の８号建物跡は，規模・主軸方向にちがいがあるものの，南妻２間・北妻３間取りという変則的な間数で建てられている点が共通する。これは珍しい構造の建物跡といえ，県内でもあまり例を見ない。数少ない類例としては，二本松市郡山台遺跡の13号建物跡[註14]・会津若松市墓料遺跡（２次調査）５号建物跡[註15]が挙げられよう。墓料遺跡５号建物跡の場合，調査は遺構の検出に止どまり，またプラン全体を把握するに至っていないため，遺構の詳細は不明である。しかしながら，２間（３間）×５間の規模と推察される点や掘形の形状・規模，間尺に

第17表　建物跡一覧

建物番号	挿図番号	重複関係（旧＜新）	梁行・桁行（間）	長軸・短軸（m）	面積（m²）	方位	柱間隔（m）南側柱列 北側柱列（東から）	柱間隔（m）東側柱列 西側柱列（北から）	備考
1	第16図	ＳＢ02＜ＳＢ01	２×２	5.04×4.34	21.87	Ｎ－６°－Ｅ	1.72 ＋ 2.68 (2.06)＋(2.28)	2.74 ＋ 2.30 2.34 ＋(2.60)	
2	第16図	ＳＢ02＜ＳＢ01	２×２	4.80×4.49	21.55	Ｎ－３°－Ｅ	(2.80)＋(2.00) ―　―	―― ＋ 1.88 ―― ＋ 2.64	
3	第17図	ＳＢ04＜ＳＢ03	２×３	5.00×4.08	20.40	Ｎ－０°－ＥＷ	4.08 (2.14)＋ 1.86	(1.50)＋ 1.50 ＋(1.60) 1.52 ＋ 1.80 ＋ 1.68	
4	第17図	ＳＢ04＜ＳＢ03	２×３	4.70×3.55	16.69	Ｎ－０°－ＥＷ	(2.00)＋(1.64) 1.68 ＋(1.87)	(1.70)＋(1.36)＋(1.48) (1.90)＋(1.26)＋(1.54)	
5	第19図	ＳＢ05＜Ｐ ＳＫ16不明	２×２	5.90×5.20	30.60	Ｎ－02°－Ｗ	2.65 ＋2.60	2.80 ＋ 3.12 2.80 ＋ 3.05	土師器 須恵器
6	第21図	ＳＧ01・02 ＳＫ37不明	３×６北列 ２×６南列	10.7×5.5	59.20	Ｎ－01°－Ｅ	2.68 ＋ 2.78 1.87 ＋ 1.89 ＋ 1.86	1.85 ＋ 1.75 ＋ 1.85 ＋ 1.58 ＋ 1.82 ＋ 1.82 2.18 ＋ 1.70 ＋ 1.70 ＋ 1.72 ＋ 1.88 ＋ 1.52	土師器 須恵器
7	第23図	――	２×２	――	15.02	Ｎ－09°－Ｗ	(1.76＋1.91) (1.56＋2.08)	(1.93)＋(2.49) (2.04)＋(1.87)	
8	第24図	ＳＢ08＜ＳＫ33 Ｐａ＜Ｐｉ ＳＫ31・32不明 Ｐii＜Ｐｂ	３×３北列 ２×３南列	6.71×5.15	34.50	Ｎ－06°－Ｗ	(2.70)＋ 2.36 1.81 ＋ 1.40 ＋ 1.94	2.36 ＋ 2.04 ＋(2.10) 2.31 ＋ 2.16 ＋ 2.24	土師器
9	第26図	――	２×４総柱	――	30.60	Ｎ－06°－Ｗ	(1.95)＋(1.92) (2.08)＋(1.84)	(2.00)＋(1.65)＋(1.98)＋ (1.71) (1.82)＋ 1.76 ＋(2.08)＋ (1.70)	土師器 須恵器
10	第28図	ＳＩ03＜ＳＢ10	３×３	5.8 ×4.8	28.00	Ｎ－06°－Ｗ	(1.66)＋(1.52)＋(1.66) 1.76 ＋ 1.50 ＋(1.65)	2.02 ＋ 1.64 ＋(2.08) 1.99 ＋ 1.98 ＋ 1.89	土師器 須恵器
11	第30図	――	３×４西列 ３×５東列	9.10×6.76	61.52	Ｎ－02°－Ｗ	2.40 ＋ 1.96 ＋ 1.88 2.40 ＋ 2.00 ＋ 2.36	2.00 ＋ 2.40 ＋(1.04 ＋ 1.50)＋ 2.16 1.88 ＋ 2.52 ＋ 2.60 ＋ 2.10	土師器
12	第31図	――	２×２南列 １×２北列	4.10×3.90	15.70	Ｎ－01°－Ｅ	2.16 ＋ 1.94 4.10	2.26 ＋ 1.74 2.12 ＋ 1.82	土師器

ついては本跡６号建物跡に近いものがある。更に，北面・東面には柱列が付属すると報文では述べており（ＳＡ01・ＳＡ02），それが建物に付属する目隠塀等の施設とすれば極めて似た構造・形態を持った建物といえる。郡山台遺跡13号建物跡の西側柱列の中柱では，柱筋に長辺を合わせた掘形に２本の柱材を埋設する方法をとっており，本跡・墓料遺跡の場合と工法が異なっている。これは郡山台遺跡内の他の建物跡にも見られるもので（24～26・36号建物跡），郡山台遺跡の一時期において一般化された工法の１つであったと考えられる[註16]。また同様に，隅柱掘形の長軸を四隅の対角線に合わせ，掘形短軸を内傾させる造り方は本跡では見られないもので，郡山台遺跡ではＢ－Ⅰ期以降普遍的に出現する傾向にある[註17]。これらを見た場合，本跡６号建物跡と墓料遺跡５号建物跡の類似性がより強く指摘される。

建物の時期的変遷ついては，断定できるまでの物証に欠けており，判断に迷うところも多々ある。しかしながら，建物の主軸に統一が取れ比較的整然と切り合いも無く分布する状況は，各建物の存続時期に大きな隔たりがなく，同時期にも存在していた証でもあると考えたい。これは，建物跡と住居跡の関係についても同じくいえることである。確かに，10号建物跡は2a号住居跡を切って構築しており，住居跡との並存は有り得ない。だが，住居跡廃棄の状態と建物跡が住居跡との重複をあたかも避けるように構築されている状況は，単なる偶然とは思えない。更に，住居跡の規模とほぼ同程度の規模であることは注目に値する。住居跡と建物跡は連続した時間幅でとらえられるものであろう。即ち，2b号住居跡→2a号住居跡→10号建物跡の変遷に空白の時期は存在しないと考えられる。また，住居跡との関係で見れば，２号建物跡と１号住居跡は両者の立地場所・主軸方向から強く関わっていたと推察される。建物の建て替えによってＡ群に近い主軸に変更されたことを考えれば，１号住居跡・２号建物跡→１号建物跡・６号建物跡（Ａ群）の変遷が考えられる。本跡の建物跡の主軸は，時期を経るごとに東偏から西偏するものへと変遷する。この仮説が正しいとすればＢ群はＡ群に後続することになる。本跡住居跡と建物跡の関係から見れば，住居跡＋建物跡の集落→建物跡による集落という構成の変化がこの段階，すなわち９世紀中葉頃で起こったと考えられるのである。　（小　熊）

３．土坑・溝跡

土坑は全部で31基検出された。検出された土坑は，遺跡内において一様な散らばりは見せず，主に３つの地区に集中する傾向が見られる。土坑の集中する３地区をa・b・cグループとした。

aグループ……６号建物跡と２号溝跡の間にある２～７・10号土坑

bグループ……１号住居跡内にある17～19・24号土坑

cグループ……８号建物跡と10号建物跡付近に存在する28～39号土坑

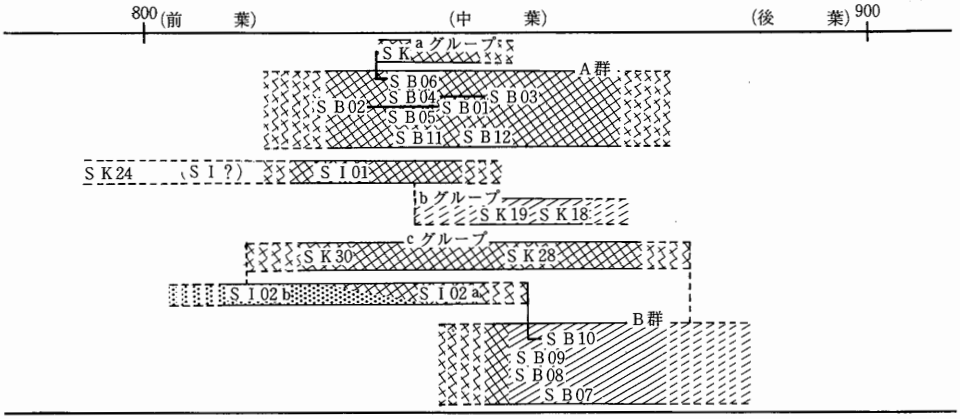
aグループは小型で不整形，深さ10～20cmと形態的に似通っている。出土遺物もほぼ同時期の

土師器・須恵器で9世紀中頃と考えられる。位置・形態・出土遺物の時期などから，6号建物跡に伴うごみ捨て穴と思われる。bグループは，出土遺物から24号土坑が8世紀後半，17～19号土坑が9世紀中頃と考えられる。17～19号土坑は，1号住居跡に伴うものと思われる。焼土・炭化物を多量に含むことから，1号住居跡内カマドとの関連が考えられる。cグループでは29・30号土坑が同時期と思われる溝に切られていること，出土遺物の須恵器に再調整のものが多いこと，形態的に似通っていることなどから，他の土坑よりやや古い時期と思われる。出土遺物も多種にわたり2a号住居跡廃絶に伴うものと推察される。また，28号土坑は10号建物跡に付随するピットを切っており，10号建物跡廃絶に伴うものと推察される。36号土坑も同様であろう。34・35号土坑は，小型で位置からいっても10号建物跡のごみ捨て穴の可能性が高いと思われる。

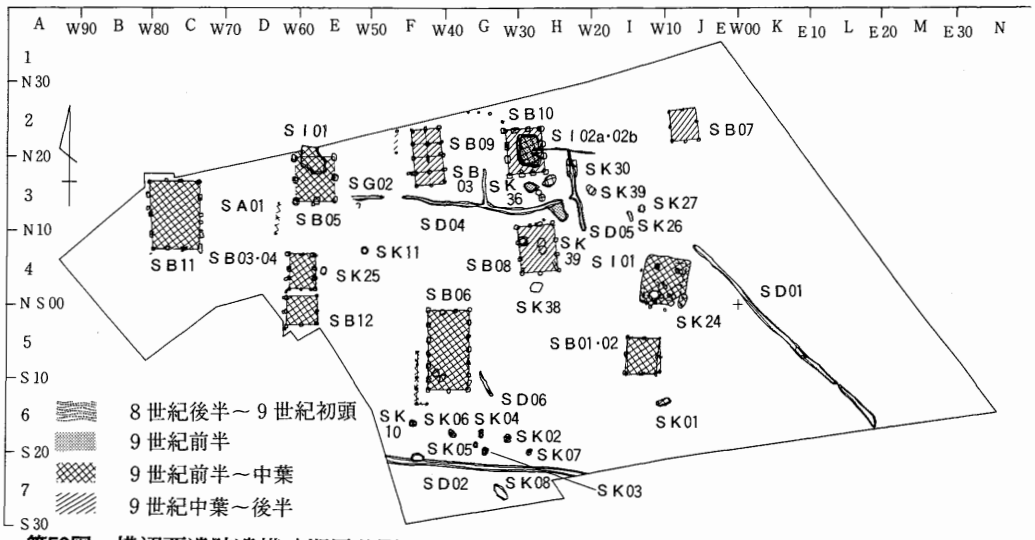
横沼西遺跡における土坑は，建物跡に伴うごみ捨て穴および住居跡・建物跡廃絶に伴う処理穴の性格が強いものと考えられる。その位置は，建物跡の南から西にかけて存在するものが多い。ごみ捨て穴的性格の強い土坑は，全体的に小型で1～7・10・34・35号土坑などが考えられる。住居跡・建物跡廃絶に伴う処理穴は，大型で形に統一性がなく16・28～30号土坑などが考えられる。土坑が周辺に存在しない9号建物跡などは，恐らく倉庫などに用いられたと推察することができる。会津盆地の東端に位置する船ヶ森西遺跡でも同じような傾向を示している。[註18]

溝は，遺跡内で6条を検出した。溝を検出した面での近世の遺構・遺物はない。溝内堆積土にも近世の遺物を認めることはできず，近世以前の溝であると推定される。3～5号溝跡は溝の状態から同時期に存在したと考えられる。3～5号溝跡は8～10号建物跡の間を規則的に分けるように配置されており，これらの建物跡を区画した可能性も考えられる。2号溝跡も4号溝跡と平行に位置しており，区画溝の可能性が考えられる。会津盆地でも，約3㎞西にある屋敷遺跡[註19]で9世紀の区画溝が発見されるなど，盆地内の集落跡における建物跡とそれに関わる区画溝との関係が増加してきた。

（伊　藤）



第58図　横沼西遺跡遺構時期変遷図



第59図　横沼西遺跡遺構時期区分図

第3節　まとめ

ここでは，調査の成果をもとに,本跡の性格と当時の社会的背景を考え一応のまとめとしたい。

横沼西遺跡は，平安時代前半に位置付けられる集落跡である。集落構成は，古くは竪穴住居中心から竪穴住居と掘立柱建物併用の形態に変化し，最後には整然と配置された掘立柱建物による集落と変遷していったと推定した。しかも，連続した比較的短い時間幅の中で推移し，且つ，多面的な要素を含まず終結してしまう。

会津盆地内の集落において，掘立柱建物跡が該期集落の中心を占めることはこれまでの調査で明らかになりつつある。しかし，盆地周辺・周縁と盆地低位面に所在するものとでは，集落形態に違いが認められて[註20]おり，律令制が既に崩壊した当時，集落(農村)経営がどの様な形態をとって次の時代の萌芽を育むかという問題には，まだまだ不明な点が数多く残っていると言わねばならない。原島礼二は，「古代の財産所有形態が，家父長独占→世帯単位の共有・私有へと移るのに呼応し，農業生産形態が単位集団単位→住居単位に変化するが，集落の形態は依然として単位集団を構成する」とし，「この最終段階では動産私有世帯が調庸物の売買等により私有財産を失って没落する危機も孕んでいた」と指摘している[註20]。会津盆地界隈の集落形態の違いを考えた場合，この指摘は興味深い。早くから建物跡で構成する集落に移行した盆地内部とその周辺地域では，農業生産形態の質とその変遷の速度は自ずと異なっていたと見るべきであろう。また，本遺跡のように9世紀末を1つの境にして消滅する集落の最終段階には，政治的背景だけでなく，その生産形態を困難にするような経済的状況をも同時に孕んでいたと推察されるのである。　(小　熊)

註　　記

1．会津若松市清水上遺跡では，出土土器の９割以上が須恵器で占められており，同上吉田遺跡のからは，数千点にも及ぶ須恵器が一括出土している。また，本跡と同じ出土比率を示す下堀際遺跡の場合では，杯類に限って見れば１：10と圧倒的に須恵器が土師器を上回っている。

2．河東町駒板新田９号横穴墓から１点出土している。住居跡に伴うものでは，会津坂下町樋渡台畑遺跡・会津高田町十五壇遺跡（２次調査）の発見例がある。樋渡台畑遺跡では複数の鎌が出土しており，ＴＫ43の須恵器と共伴する可能性が高いものである（吉田博行氏の御教示による）。十五壇遺跡では，栗囲式期の住居跡から１点出土している（小柴吉男氏の御教示による）。

3．白鳥　良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』　宮城県多賀城跡調査研究所

4．柳内　寿彦他　1984　『南原埋蔵文化財発掘調査概報』　会津若松市教育委員会

5．佐原・藤谷他1990「上吉田遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告９』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

6．大場　磐雄は，「主要土師遺物の考察」の中で（『平出』：1955）刈り鎌を直刃と曲刃の二つに形態に分類している。

7．都出比呂志　1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13－３

8．身の鈍角装着は，直角の装着角度に比べて作業をする際の手首の返し・腕の振りは少なくて済む点で優れており，労力の軽減も期待できる。

9．『百姓伝記』に「稲を刈る鎌は渡りは五寸の内外にかぎる」とあり，「今日稲を根刈りする鎌は六寸刃が多く，四寸刃でもことたりる」となっている。（上記　注７）

10．鎌について見ると，時代を経るごとに摘み鎌・刈り鎌の出土割合が増してくる傾向にはあるが，該期集落の住居跡出土鉄製品を見れば，刀子・紡錘車の出土比率が鉄製農具を上回り，鉄製農具はまだ普遍的に見られない状況にある。

11．これまで，住居作り付けのカマド（築カマド）の土器設置部分まで遺存する例が稀有であったために，その名称も曖昧であった。そこで，古代の竈形土器（置きカマド）に用いられている『釜口』の名称をここでは採用することにした。

12．寺島・本間他1988「登戸遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告３』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

13．本間・丹野　1991（予定）「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告ＸＩ』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

14．根本・辻　他　1983　『郡山台　Ⅶ』　二本松市教育委員会

15．須藤　　隆他　1983　『福島県会津若松市墓料遺跡　－第２次発掘調査報告書－』　会津若松市教育委員会

16．郡山台遺跡建物におけるこの工法は，安達郡衙成立以前の建物跡群（Ａ期），及びＢ－Ⅰ期では見られないものである。だが，長軸を柱筋に合わせた長辺の長い掘形を持つ建物は，Ｂ－Ⅰ期の段階から出現する（SB09）。

17．Ｂ－Ⅰ期～Ｃ期の時期に分類可能な建物18棟のうち，この形状を示す建物は12棟に及ぶ。（上記　注14）

18．大越・小熊他1990「船ヶ森西遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告９』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

19．木本・藤谷他1991（予定）「屋敷遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告14』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

20．会津盆地周辺に所在する「十五壇遺跡」「下堀際遺跡」「鹿島遺跡」では竪穴住居で集落が構成されており掘立柱建物の存在は確認されていない。ところが，盆地低位面に所在する「清水上遺跡」「門田ほ場Ｃ遺跡」「上吉田遺跡」「屋敷遺跡」は掘立柱建物により構成されるもので，集落構成に著しい違いが指摘される。本跡は，竪穴住居と掘立柱建物から掘立柱建物の集落へと変遷する。本跡と類似する遺跡としては「船ヶ森西遺跡」が挙げられる。これらは，遺跡の地理的環境によるものか，当時の社会的な影響によるものかの考察は今後の課題であるが，会津盆地を中心とした該期の集落構成には，少なくとも３タイプの構成形態が認められる。

21．原島　礼二　1968　『日本古代社会の基礎構造』　未来社

参　考　文　献

土居　義夫　1971「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18　物質文化研究会

宮原　武夫　1973　『日本古代の国家と農民』叢書歴史学研究　法政大学出版局

山口　直樹　1978「関東地方土師器時代後・晩Ⅰ・晩Ⅱ期における農具について」『駿台史学』第45号

石本　　弘　1983「下堀際遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅰ』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

柳内　寿彦他1986　『若松城三の丸跡発掘調査報告書』　会津若松市教育委員会

高橋　信一　1987「清水上遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅴ』　福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

楢崎・石田他1988　『会津　大戸古窯址群分布調査報告書』　会津若松市教育委員会

楢崎・石田他1988　『会津　大戸古窯址群発掘調査概報Ⅰ』　会津若松市教育委員会

石田　明夫　1989　『県営高度利用集積ほ場整備事業　発掘調査報告書１　（門田面川地区）』　会津若松市教育委員会

木本　元治　1989「南東北地方の古代集落における堀立柱建物について」『考古学論叢Ⅱ別冊』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

川村　浩司　1989「越後の古代集落の素描　－遺跡の類型とその展開－」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会

坂井　秀弥他1989　『新新バイパス関係発掘調査報告書　山三賀Ⅱ遺跡』　新潟県教育委員会

横沼西遺跡出土須恵器の産地推定

奈良教育大学　三辻　利一

会津若松市には東北地方最大とみられる須恵器窯跡群があるため，福島県下の平安時代の須恵器の伝播・流通の研究の中心は大戸群となる。既に，大戸群と県下のいくつかの小規模な窯の須恵器の相互識別は充分可能であることが確かめられており，今後，これらの窯の製品がどのように分布しているかが興味ある課題の一つとなる。

本報では，横沼西遺跡から出土した須恵器の産地を推定した結果について報告する。

土器試料はすべて，表面を研磨したのち粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にしてプレスし，内径２㎝，厚さ３～５㎜の錠剤試料にして蛍光Ｘ線分析を行った。分析値は同時に測定した岩石標準試料ＪＧ－１による標準化値で表示された。

はじめに，県内の窯間の相互識別の一例を示しておく。図１には，大戸群と大久保群の２群判別分析の結果を示す。両軸にとった$D^2_{(1)}$．$D^2_{(2)}$はそれぞれ，大戸群，大久保群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値である。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から，その母集団の標準偏差（σ）の何倍分，離れているかを示す統計学上の距離のことであり，二乗して使用するのが普通である。勿論，この距離が近いほど，その母集団の特性に類似してくることになる。従って，この距離の大小によって，その母集団に帰属するか否かが決まる。帰属条件は多数の窯跡出土須恵器の分析データから決定される。図１では，各群のほとんどのサンプルはそれぞれ，大戸領域〔$D^2_{(1)} \leqq 10$．$D^2_{(2)} > 10$〕，大久保領域〔$D^2_{(2)} \leqq 10$，$D^2_{(1)} > 10$〕に分布しており，両群の相互識別は充分可能であることを示している。このことは図２のRb－Sr分布図でも確かめられる。Rb－Sr分布図は定性的ではあるが，各地の須恵器の地域差を知る上に極めて便利な図である。

表１には横沼西遺跡出土土器の分析値を示してある。また，大戸群，大久保群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値も記してある。産地推定のための各母集団への帰属条件では$D^2 \leqq 10$である。大戸群に対して，多くのサンプルがこの帰属条件を満足していることが分かる。しかし，No206の杯とNo229の大カメのみが大戸群には帰属せず，大久保群に帰属することがわかる。この推定結果は図３のRb－Sr分布図でも確かめられる。ほとんどのサンプルは大戸領域に分布し，No206とNo229の２点は大戸領域を明らかにずれて，大久保領域に分布することがわかる。

かくして，横沼西遺跡ではほとんどの須恵器が地元の大生産地である大戸群産であることが明らかとなった。恐らく，福島県下の平安時代の遺跡の多くはこのような須恵器供給パターンを示しすものと思われる。それを一つ一つ実証していくのも「須恵器の考古学」を完成する上に必要である。

次に，土師器の分析結果について説明する。屋敷遺跡の土師器，弥生土器とともにクラスター分析した結果を図4に示す。クラスター分析は多数のサンプルから成る集団を特性の異なるものごとに分類していく上に役に立つ。図4の横列にはクラスター番号で試料を並べてある。普通，クラスター分析ではコンピュータにインプットする順に番号が付けられる。そのため，クラスター番号が試料番号と一致しなくなる場合が多い。そこで，クラスター番号も表1には記してある。図4の縦軸は，K,Ca,Rb,Srの4因子を使い，最短距離法で計算した類似度を示してある。通常，類似したもの同志が一本の枝に結び付けられており，類似度が異なるところで大きなギャップが生じる。このギャップに目を付けて区切り，分類する訳である。図4では4群に分類された。そうすると，横沼西遺跡の土師器はNo181,No182の2点がⅣ群に分類された。Ⅳ群は屋敷遺跡でも平安時代の土師器が分類されたうちの主成分である。また，No227はⅡ群に分類されたが，Ⅲ群に分類された土師器はなかった。No180,183,223の3点は分類されなかったが，このうち，No183とNo223はRb－Sr分布図上ではⅢ群に近い。土師器のRb－Sr分布図を図5に示しておく。

このようにして，土師器の胎土にはいくつかの種類があり，いくつかの異なる場所で作られた土師器が含まれていることを示している。目下のところ，その場所は特定できない。今後とも，多数の土師器を分析し，その生産地に関する情報ほ引き出せるよう努力する必要がある。

表1　横沼西遺跡出土土器の分析データ

遺物番号	挿図	クラスター番号	種類	器種		K	Ca	Fe	Rb	Sr	大戸群から	大久保群から	推定産地
16坑1		65	土師器	筒形土器	平安時代	0.549	0.409	1.72	0.477	0.821			
1住3	第8図	66	〃	杯	〃	0.378	0.295	1.87	0.322	0.476			Ⅳ
1住5	第8図	67	〃	〃	〃	0.321	0.298	1.81	0.310	0.548			〃
1住2	第8図	68	〃	〃	〃	0.311	0.402	1.68	0.298	0.785			
1住16	第8図		須恵器	〃	〃	0.512	0.080	1.19	0.517	0.204	6.1	36	大戸群
1住17	第8図		〃	〃	〃	0.520	0.074	1.13	0.551	0.199	6.7	38	〃
——			〃	〃	〃	0.616	0.158	1.50	0.614	0.282	0.46	48	〃
1住13	第8図		〃	〃	〃	0.519	0.114	1.18	0.587	0.269	4.5	27	〃
1住12	第8図		〃	〃	〃	0.510	0.087	1.20	0.583	0.214	6.7	33	〃
2a住2	第13図		〃	〃	〃	0.595	0.131	1.46	0.610	0.280	2.3	44	〃
2a住3	第13図		〃	壺	〃	0.589	0.107	1.35	0.692	0.249	6.3	47	〃
3建1	第18図		〃	杯	〃	0.488	0.117	1.53	0.449	0.248	5.6	26	〃
2坑1	第32図		〃	〃	〃	0.525	0.104	1.30	0.640	0.243	6.8	32	〃
6坑3	第34図		〃	壺	〃	0.599	0.141	1.30	0.684	0.247	3.3	48	〃
6坑2	第34図		〃	盤	〃	0.593	0.113	1.40	0.618	0.239	2.2	49	〃
1住20	第8図		〃	杯	〃	0.551	0.132	1.11	0.557	0.248	1.4	37	
11坑6	第36図		〃	〃	〃	0.547	0.097	1.27	0.597	0.197	5.1	44	
1住18	第8図		〃	〃	〃	0.592	0.119	1.11	0.591	0.232	1.4	50	
1住15	第8図		〃	〃	〃	0.538	0.114	1.10	0.496	0.207	3.7	42	
1住19	第8図		〃	〃	〃	0.518	0.084	1.11	0.530	0.193	5.9	38	
1住14	第8図		〃	〃	〃	0.618	0.109	1.55	0.614	0.232	2.2	58	

遺物番号	挿図	クラスター番号	種類	器種		K	Ca	Fe	Rb	Sr	大戸群から	大久保群から	推定産地
19坑2	第38図		須恵器	杯	平安時代	0.535	0.083	1.10	0.566	0.213	5.3	40	大戸群
24坑1	第39図		〃	〃	〃	0.519	0.080	1.51	0.488	0.197	6.3	40	〃
24坑2	第39図		〃	〃	〃	0.618	0.075	1.68	0.483	0.173	7.5	77	〃
28坑3	第40図		〃	〃	〃	0.594	0.140	1.34	0.615	0.257	0.76	46	〃
28坑2	第40図	69	土師器	鍋	〃	0.436	0.095	1.64	0.515	0.252			
29坑4	第41図		須恵器	杯	〃	0.359	0.285	2.68	0.325	0.339	32	4.9	大久保群
29坑1	第41図		〃	〃	〃	0.619	0.118	1.58	0.665	0.197	4.1	63	大戸群
30坑3	第42図		〃	〃	〃	0.597	0.112	1.17	0.692	0.206	6.5	55	〃
30坑2	第42図		〃	〃	〃	0.514	0.088	1.19	0.500	0.265	8.3	30	〃
36坑6	第44図		〃	〃	〃	0.540	0.111	1.13	0.571	0.244	3.0	35	〃
34坑1	第43図		〃	〃	〃	0.596	0.124	1.42	0.638	0.203	3.5	55	〃
——			〃	〃	〃	0.455	0.109	1.12	0.488	0.244	6.4	20	〃
5溝1	第49図		〃	〃	〃	0.493	0.097	1.10	0.538	0.228	5.6	28	〃
遺溝外17	第53図		〃	円面硯	〃	0.594	0.160	1.62	0.667	0.245	3.0	46	〃
遺溝外13	第53図		〃	高台付杯	〃	0.507	0.140	1.32	0.527	0.265	2.5	25	〃
遺溝外7	第53図		〃	杯	〃	0.512	0.081	1.38	0.581	0.212	7.1	34	〃
遺溝外16	第53図		〃	焼台	〃	0.622	0.109	1.58	0.604	0.237	2.4	60	〃
遺溝外12	第53図		〃	杯	〃	0.533	0.074	1.55	0.548	0.203	6.1	41	〃
遺溝外15	第53図		〃	短頸壺	〃	0.551	0.075	1.35	0.605	0.206	6.6	45	〃
遺溝外14	第53図		〃	長頸壺	〃	0.692	0.164	1.49	0.683	0.253	1.4	77	〃
遺溝外9	第53図		〃	杯	〃	0.540	0.102	1.21	0.583	0.250	4.2	35	〃
1住関6	第10図		〃	〃	〃	0.549	0.090	1.28	0.592	0.232	4.9	40	〃
1住関8	第10図	70	土師器	筒形土器	〃	0.219	0.460	2.80	0.211	0.682			
2a住8	第13図		須恵器	甕	〃	0.569	0.137	1.31	0.692	0.260	5.3	39	大戸群
2a住6	第13図		〃	〃	〃	0.591	0.181	1.71	0.701	0.267	5.1	42	〃
2b住4	第15図		〃	〃	〃	0.544	0.134	1.36	0.673	0.247	6.2	35	〃
28坑1	第40図	71	土師器	〃	〃	0.351	0.256	2.46	0.371	0.314			Ⅱ
28坑4	第40図		須恵器	〃	〃	0.584	0.102	1.42	0.642	0.216	4.1	50	大戸群
2a住4	第13図		〃	〃	〃	0.374	0.228	1.31	0.608	0.436	19	5.1	大久保群

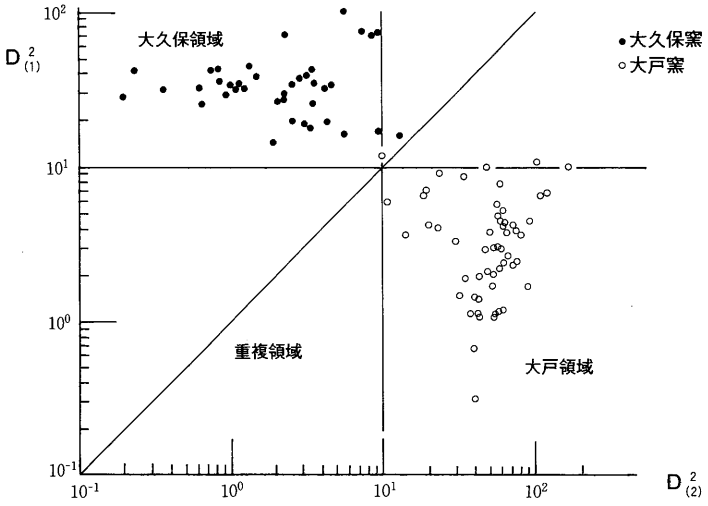


図1　大戸群と大久保群の相互識別（K, Ca, Rb, Sr因子使用）

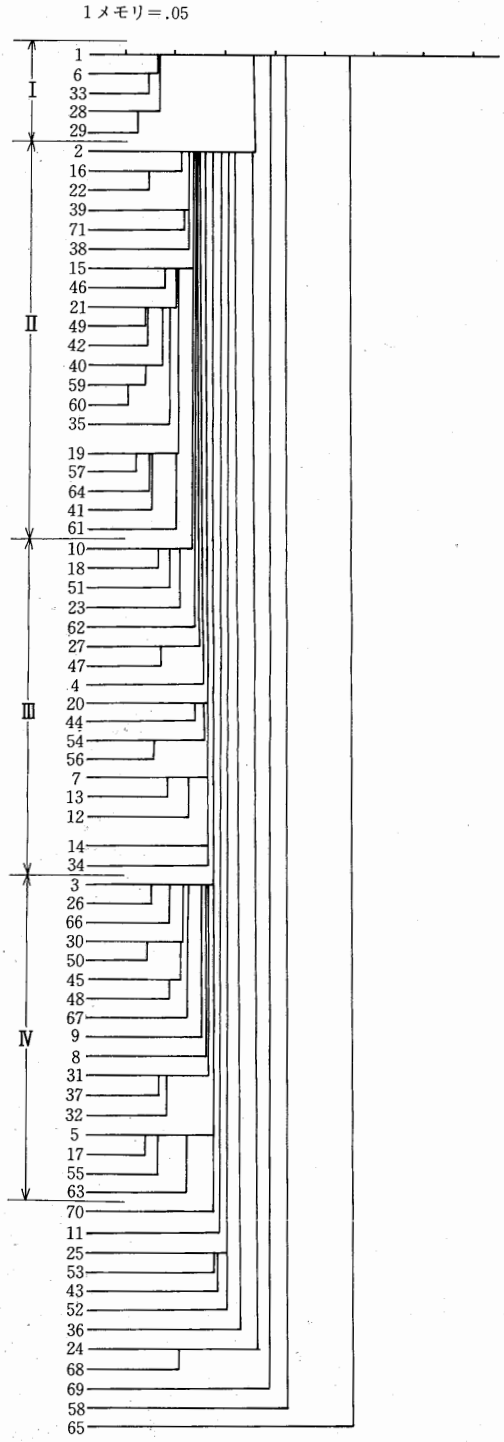


図 4　土師器，弥生土器，赤焼土器の
クラスター分析（K, Ca, Rb, Sr因子使用）

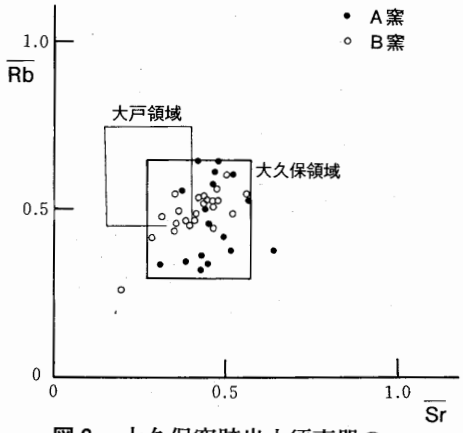


図 2　大久保窯跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図

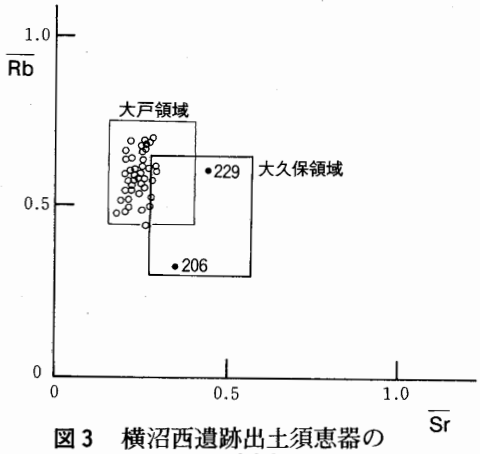


図 3　横沼西遺跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図

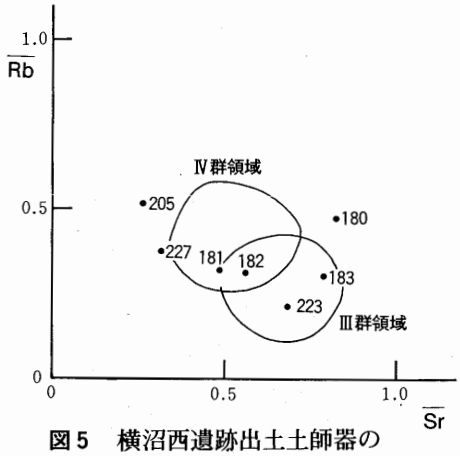


図 5　横沼西遺跡出土土師器の
Rb－Sr分布図

図　版

写 真 図 版 目 次

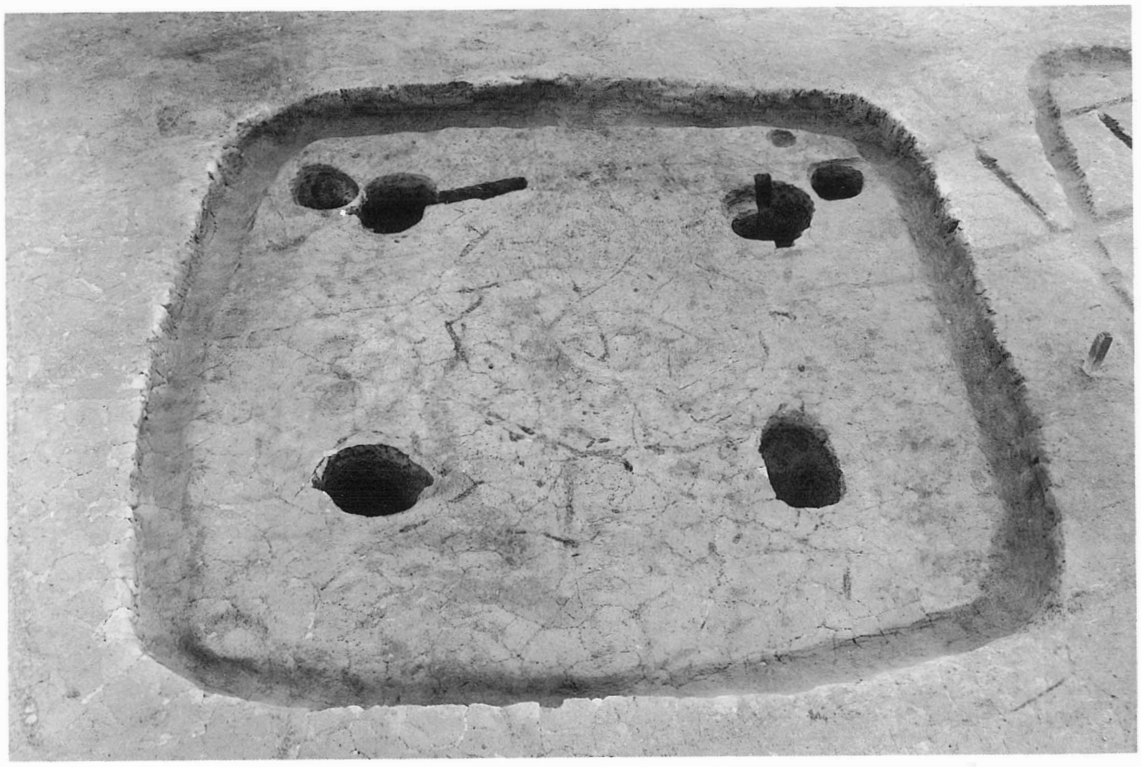
1　和泉遺跡周辺航空写真……203
2　1号住居跡全景……204
3　2号住居跡全景……204
4　3号住居跡全景……205
5　3号住居跡細部……205
6　4号住居跡全景……206
7　4号住居跡細部……206
8　5号住居跡全景……207
9　5号住居跡細部……207
10　6号住居跡全景……208
11　6号住居跡遺物出土状況……208
12　6号住居跡1・2・3号炉……209
13　6号住居跡細部……209
14　7号住居跡全景……210
15　7号住居跡細部……210
16　8号住居跡全景……211
17　8号住居跡遺物出土状況……211
18　8号住居跡細部……212
19　10号住居跡全景……212
20　11号住居跡全景……213
21　12号住居跡全景……213
22　13号住居跡全景……214
23　14号住居跡全景……214
24　土坑……215
25　土器埋設遺構……216
26　1号溝跡全景……217
27　1号溝跡細部……217
28　第1・3包含層細部……218
29　和泉遺跡出土土器(1)……219
30　和泉遺跡出土土器(2)……220
31　和泉遺跡出土土器(3)……221
32　和泉遺跡出土土器(4)……222
33　和泉遺跡出土土器(5)……223
34　和泉遺跡出土土器(6)……224

扉　第1次調査区全景(東上空から)

1　和泉遺跡周辺航空写真

2　1号住居跡全景(西より)

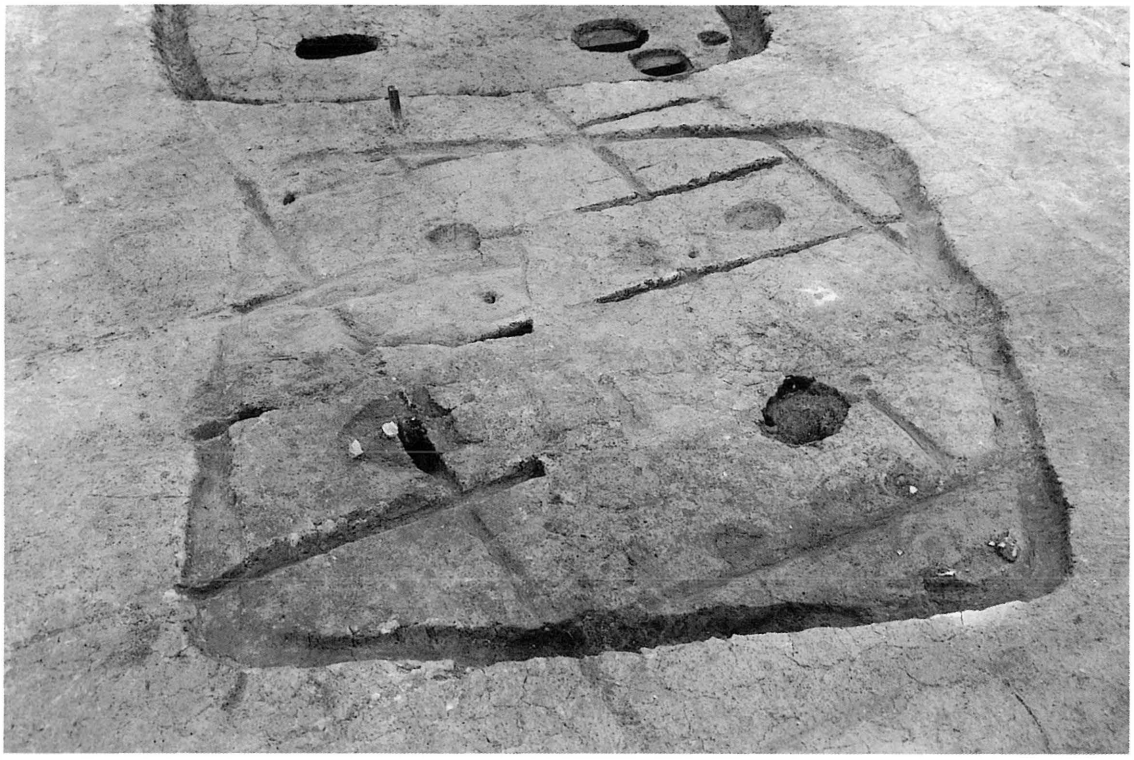
3　2号住居跡全景(南より)



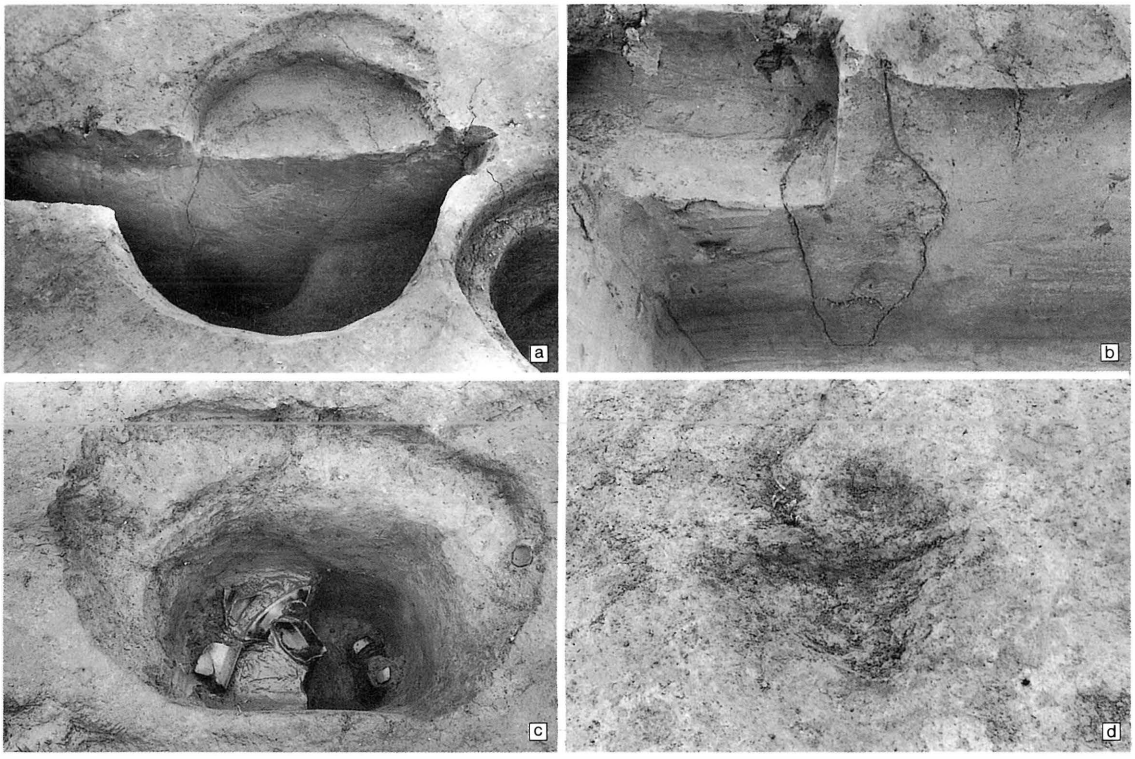
4　３号住居跡全景（西より）

5　３号住居跡細部

a．東西土層断面（南より）
b．遺物出土状況（南より）
c．南西端遺物出土状況（北より）



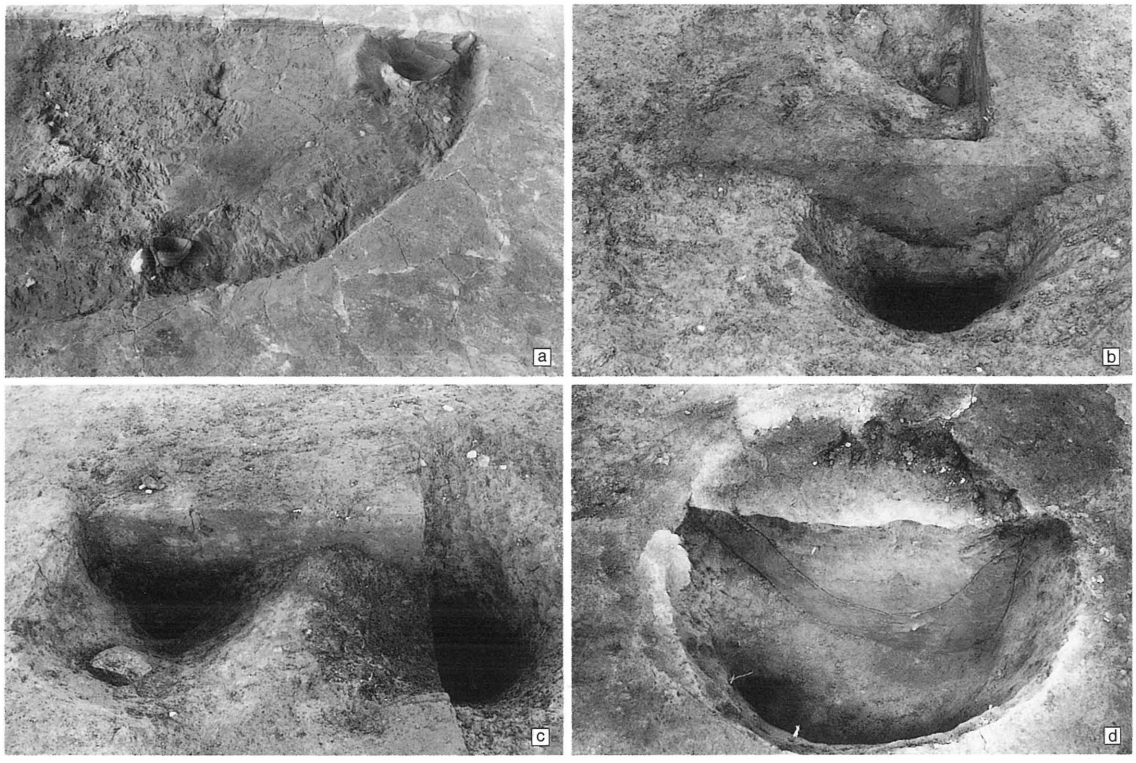
6　4号住居跡全景(南より)



7　4号住居跡細部

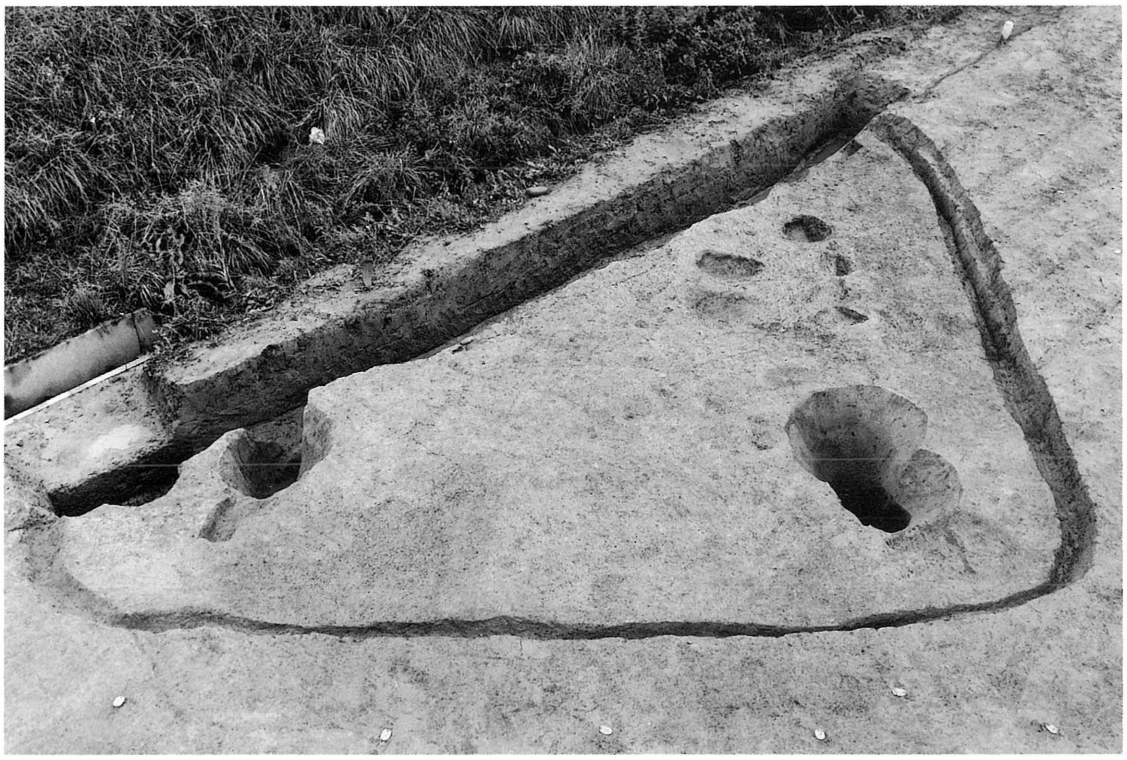
a．P_1土層断面(東より)　b．P_4土層断面(南より)
c．P_5遺物出土状況(南より)　d．炉全景(南より)

8　５号住居跡全景

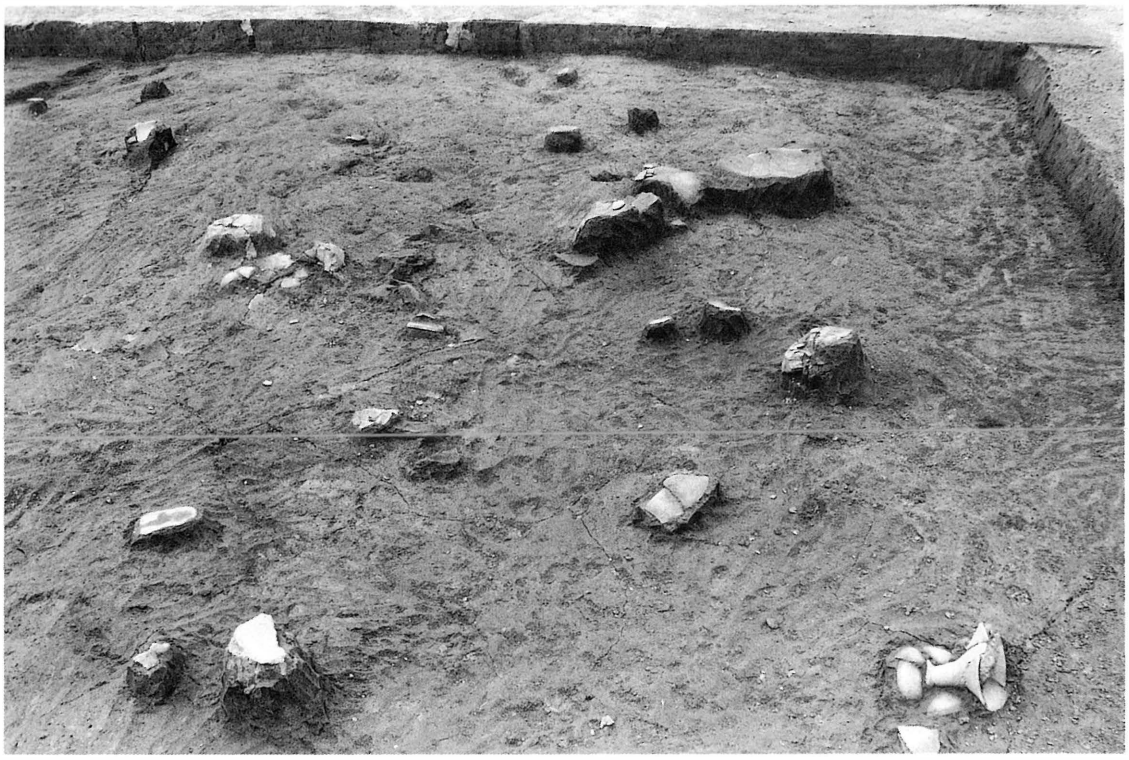


9　５号住居跡細部

a．南東端遺物出土状況（南より）　b．P_5断面（南より）
c．P_2・P_5断面（西より）　d．P_1断面（南東より）

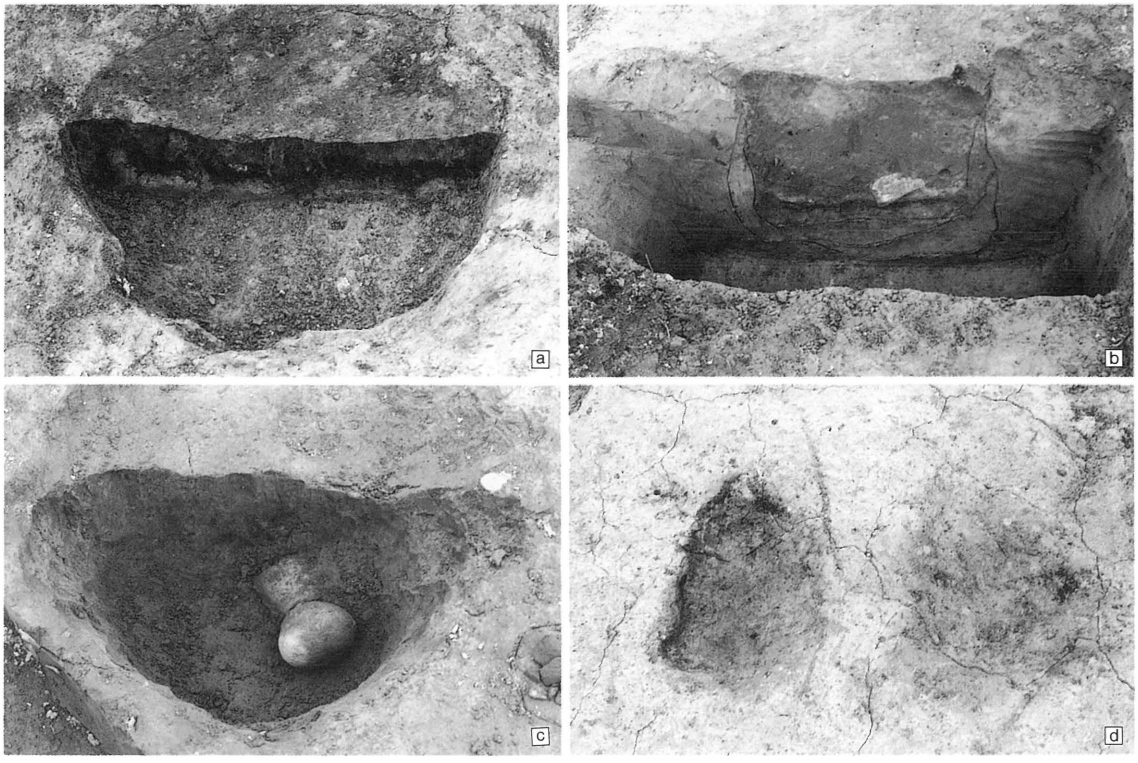


10　6号住居跡全景



11　6号住居跡遺物出土状況(南より)

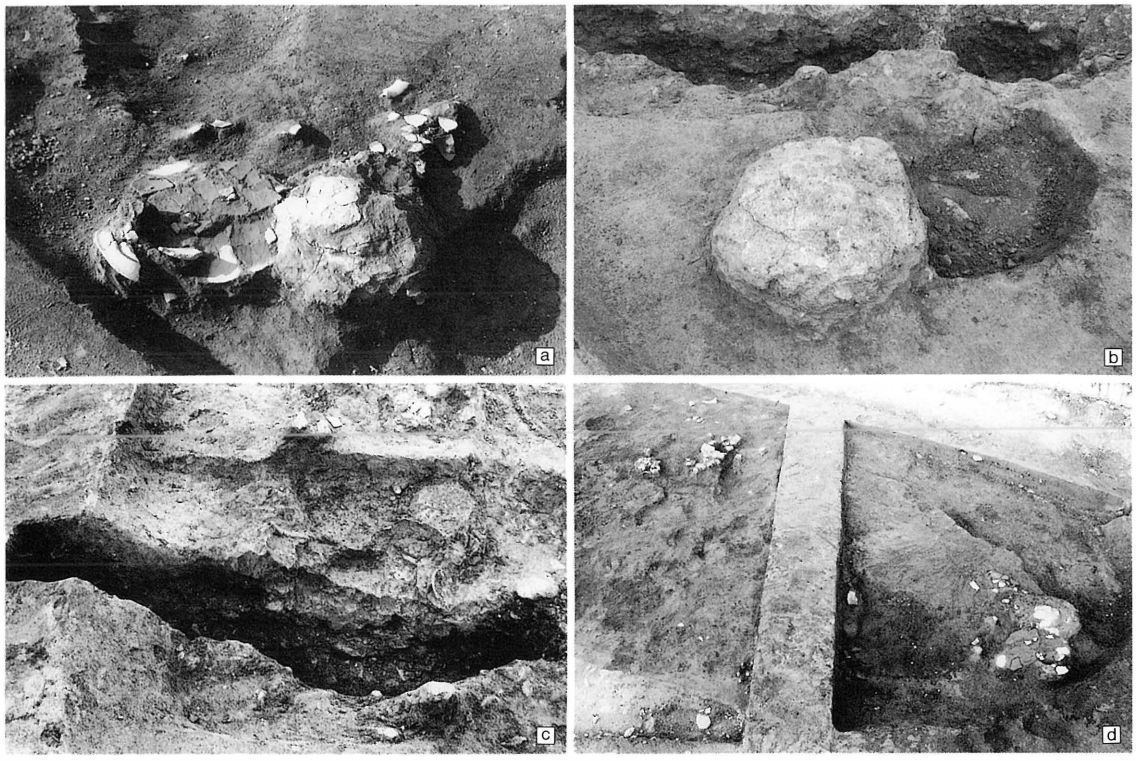
12　６号住居跡１・２・３号炉(南より)



13　６号住居跡細部

a．P_7断面(南より)　b．P_2断面(南西より)
c．P_5遺物出土状況(南より)　d．１号炉・２号炉(南より)

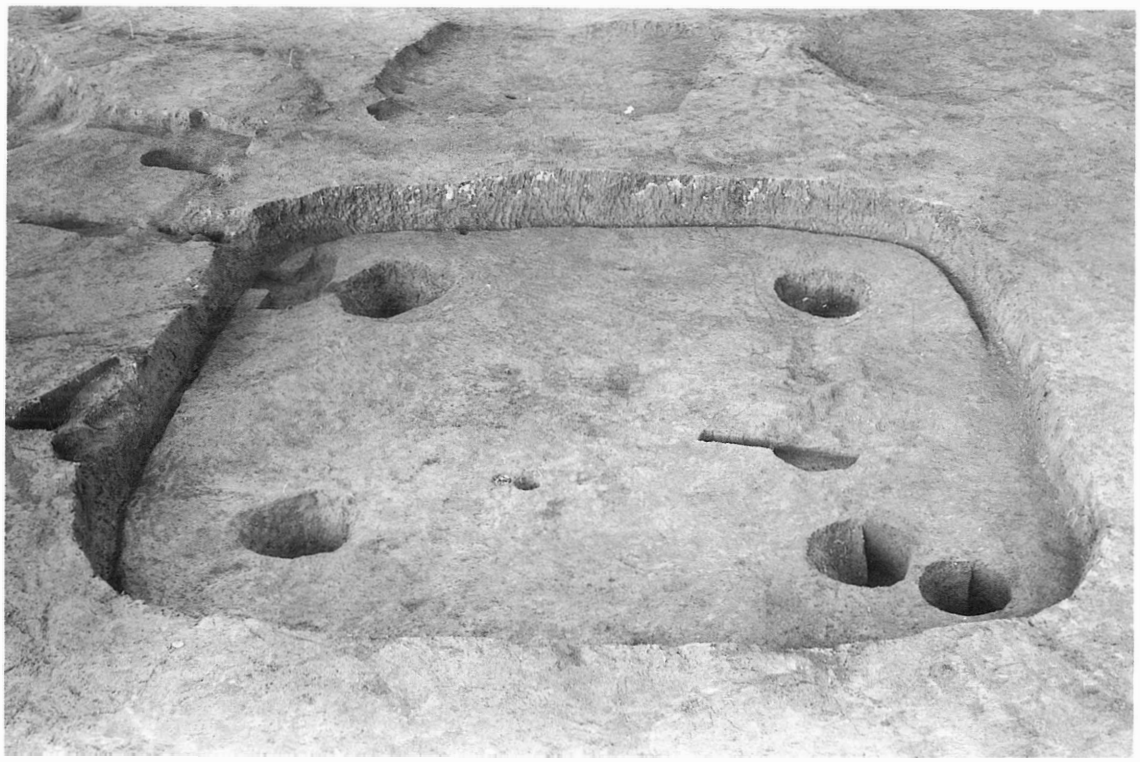
14　7号住居跡全景



15　7号住居跡細部

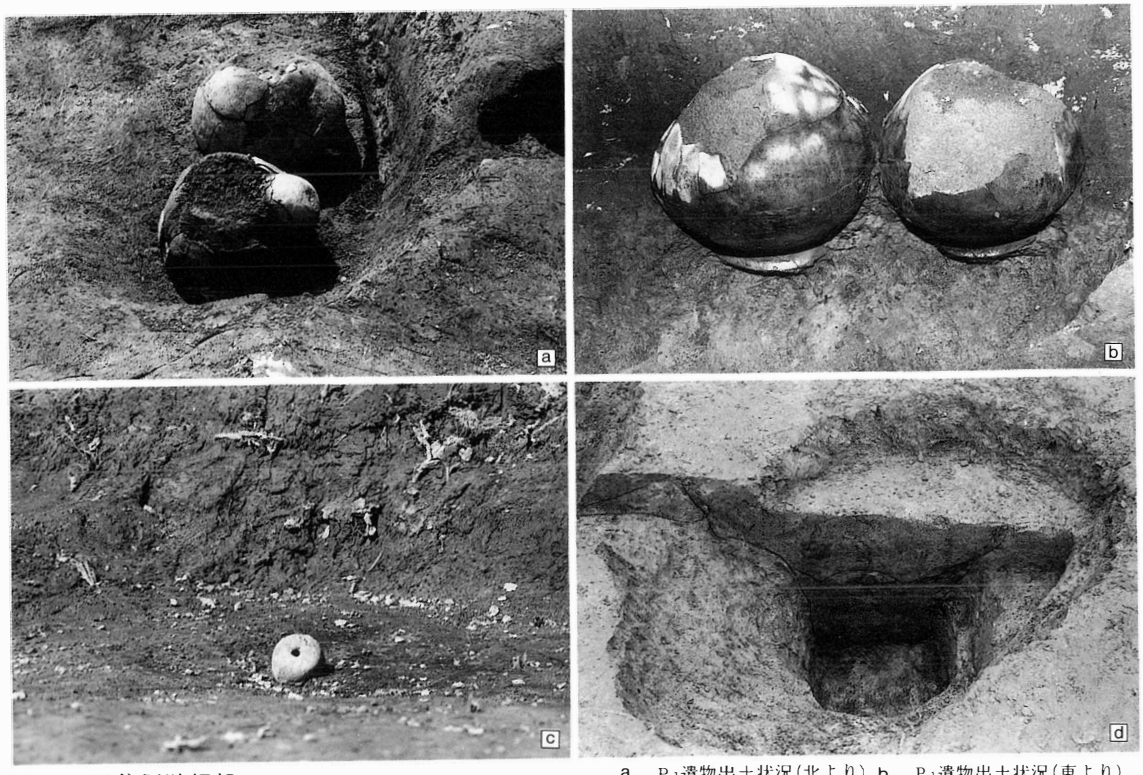
a．遺物出土状況（南より）　b．粘土塊出土状況（南東より）

c．P1土層断面（南東より）　d．遺物出土状況（南西より）



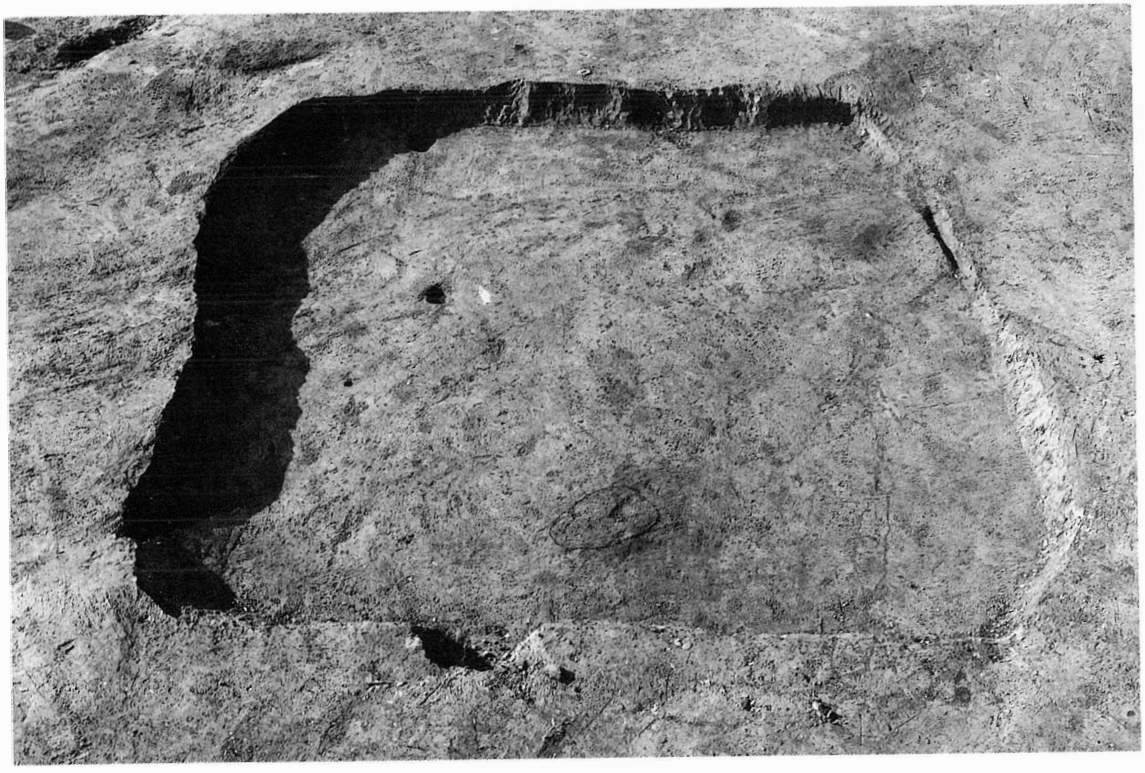
16　８号住居跡全景（南より）

17　８号住居跡遺物出土状況（南より）



18　8号住居跡細部

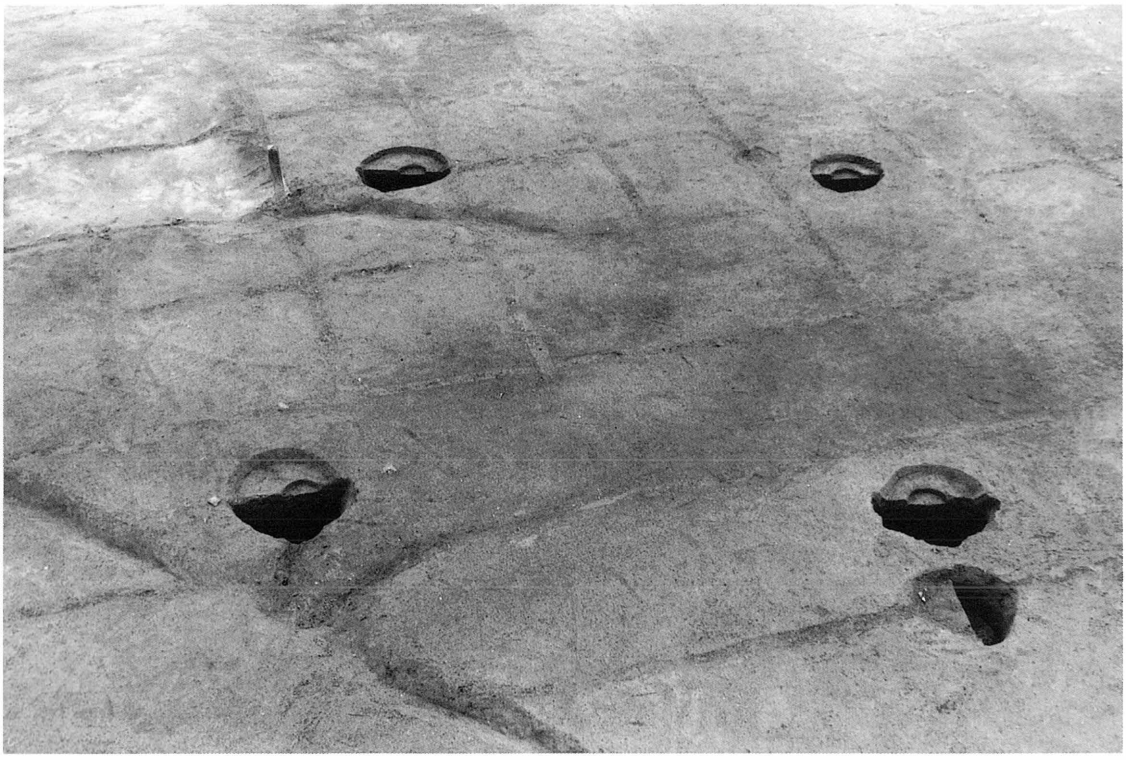
a．P_1遺物出土状況(北より)　b．P_1遺物出土状況(東より)
c．土玉出土状況(東より)　d．P_5土層断面(南より)



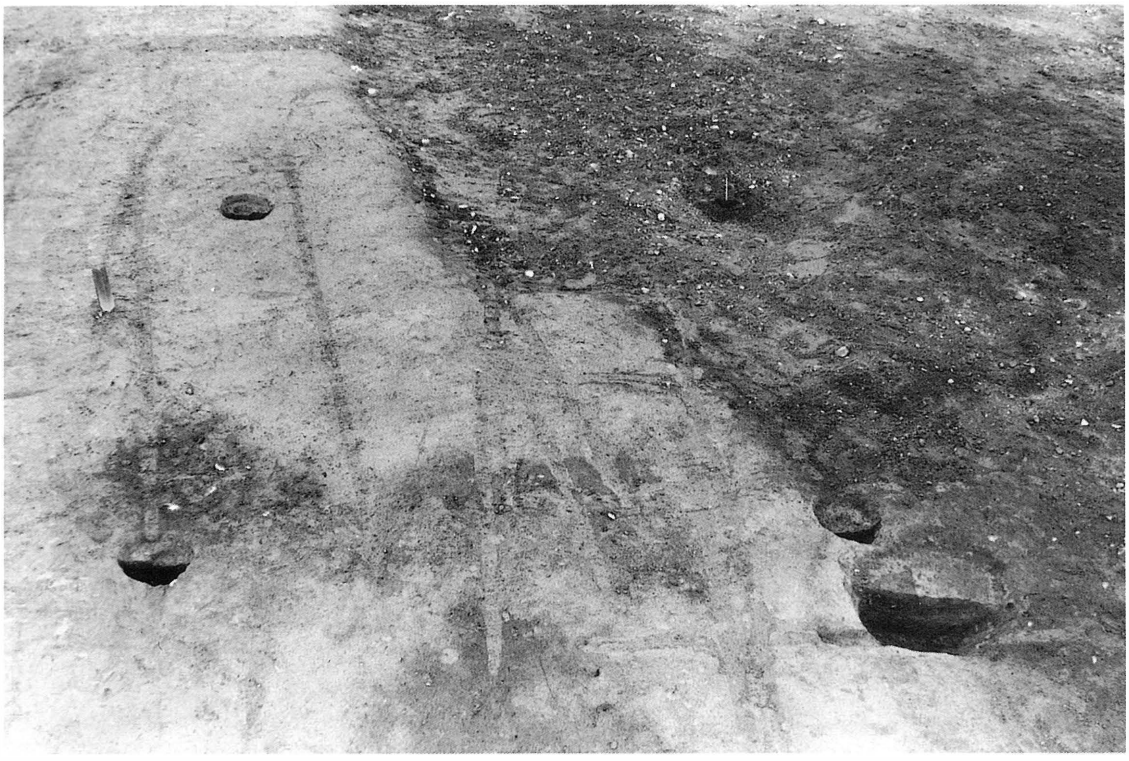
19　10号住居跡全景

20　11号住居跡全景(南より)

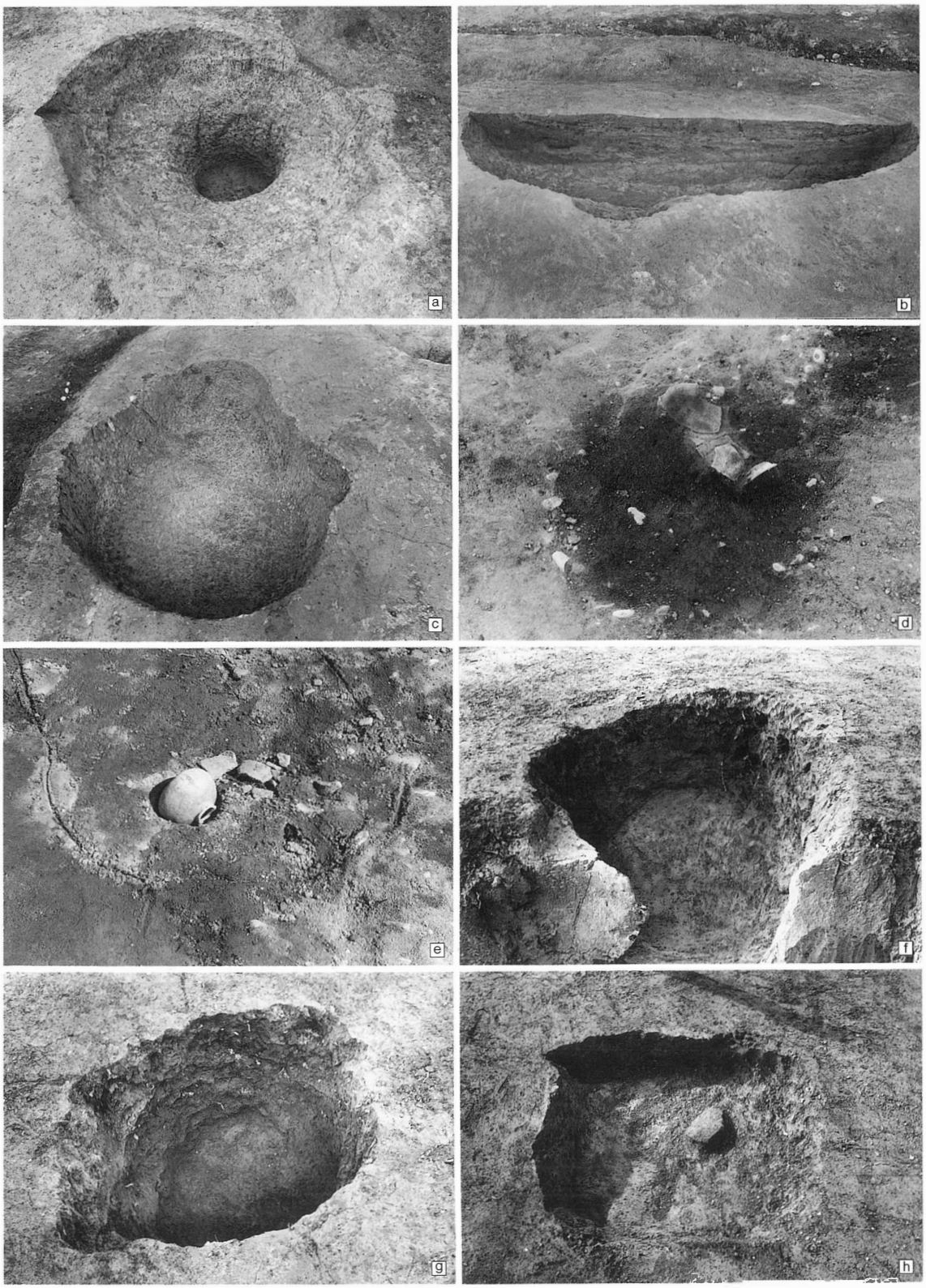
21　12号住居跡全景(北より)



22　13号住居跡全景(南より)

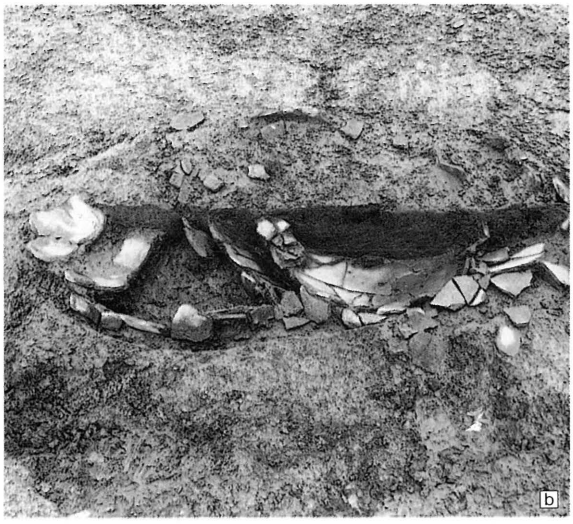


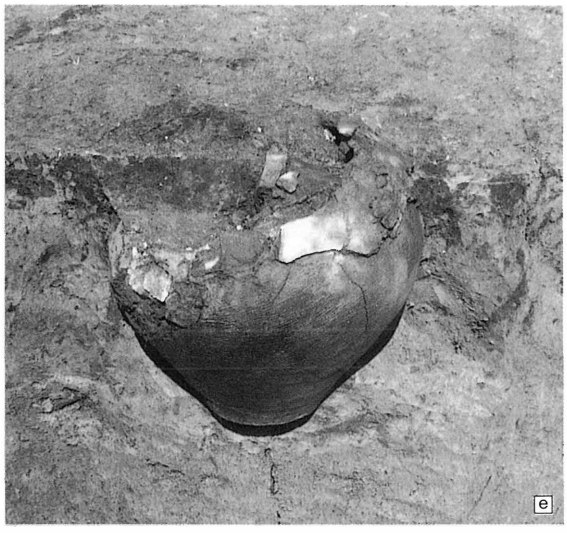
23　14号住居跡全景(南より)

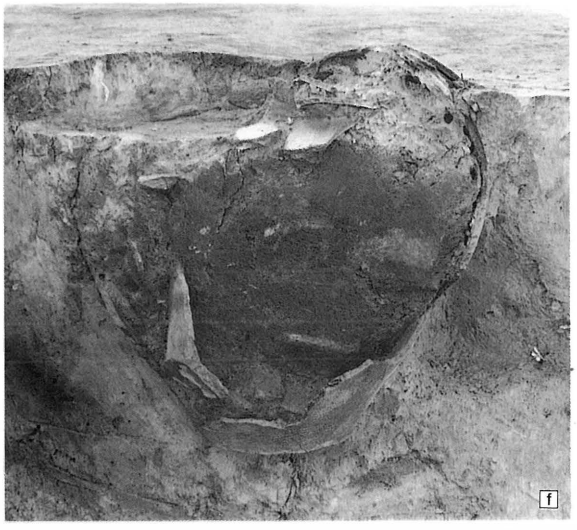


24　土坑

a．２号土坑(南より)
b．４号土坑土層断面(東より)
c．４号土坑(南より)
d．５号土坑遺物出土状況(南東から)
e．７号土坑遺物出土状況
f．12号土坑(東より)
g．16号土坑(北より)
h．17号土坑(東より)



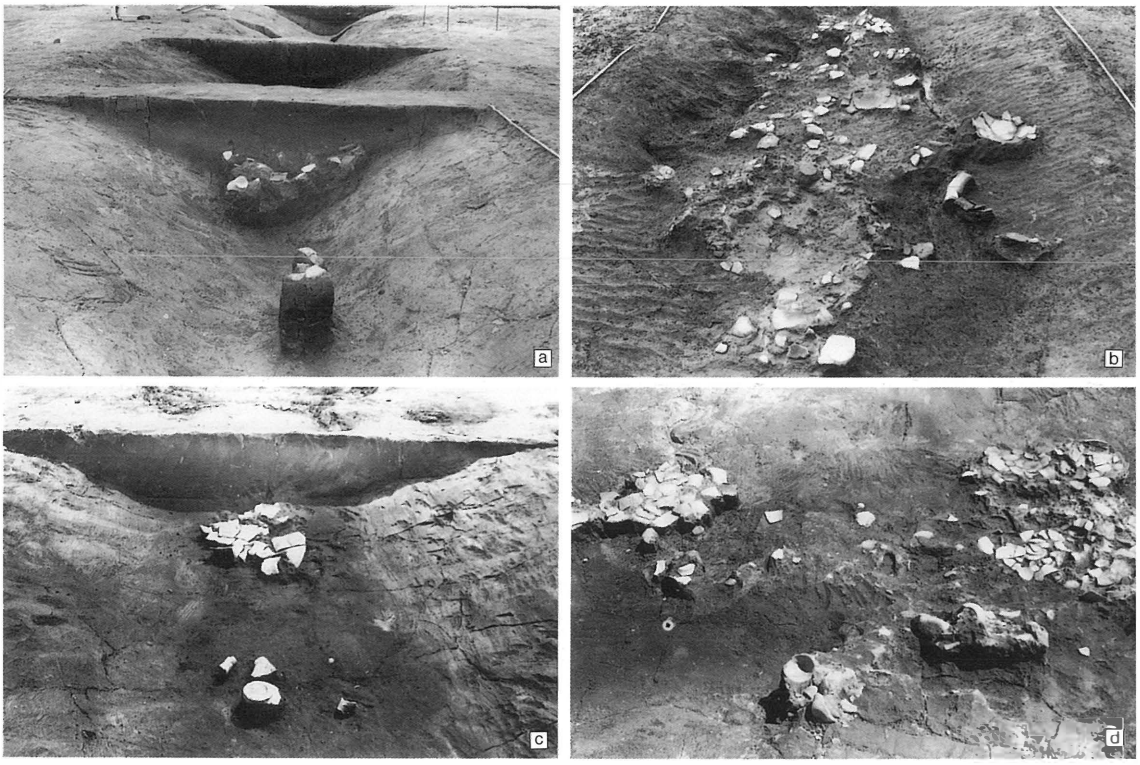




25　土器埋設遺構

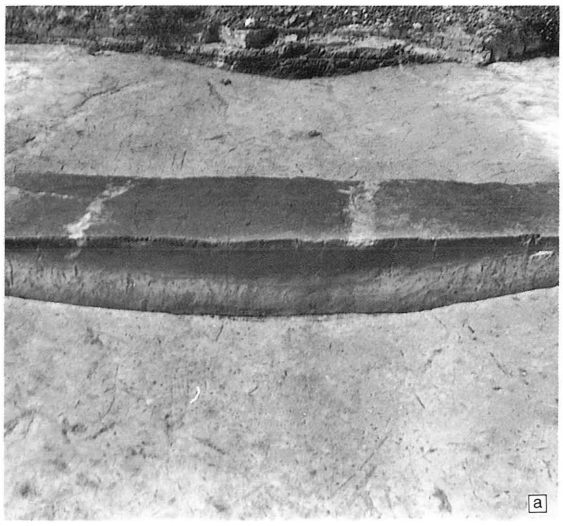
a．1号土器埋設遺構断面(南より)　b．1号土器埋設遺構断面(西より)
c．1号土器埋設遺構断面(西より)　d．2号土器埋設遺構全景(北より)
e．2号土器埋設遺構断面(南より)　f．2号土器埋設遺構断面(南より)

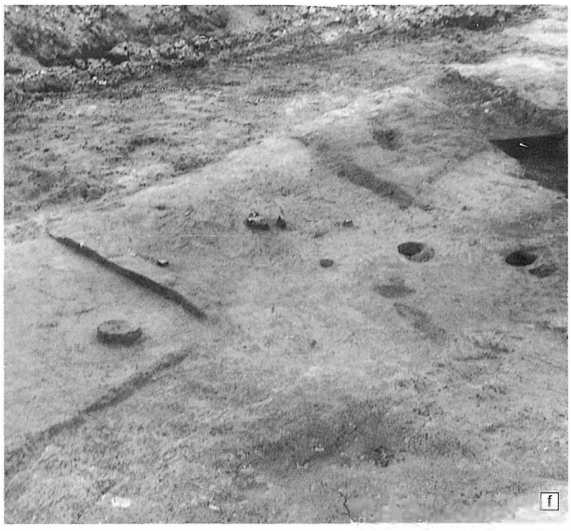
26　１号溝跡全景（南南東より）



27　１号溝跡細部

a．遺物出土状況（北西より）　b．遺物出土状況（南東より）
c．遺物出土状況（北西より）　d．遺物出土状況（西より）



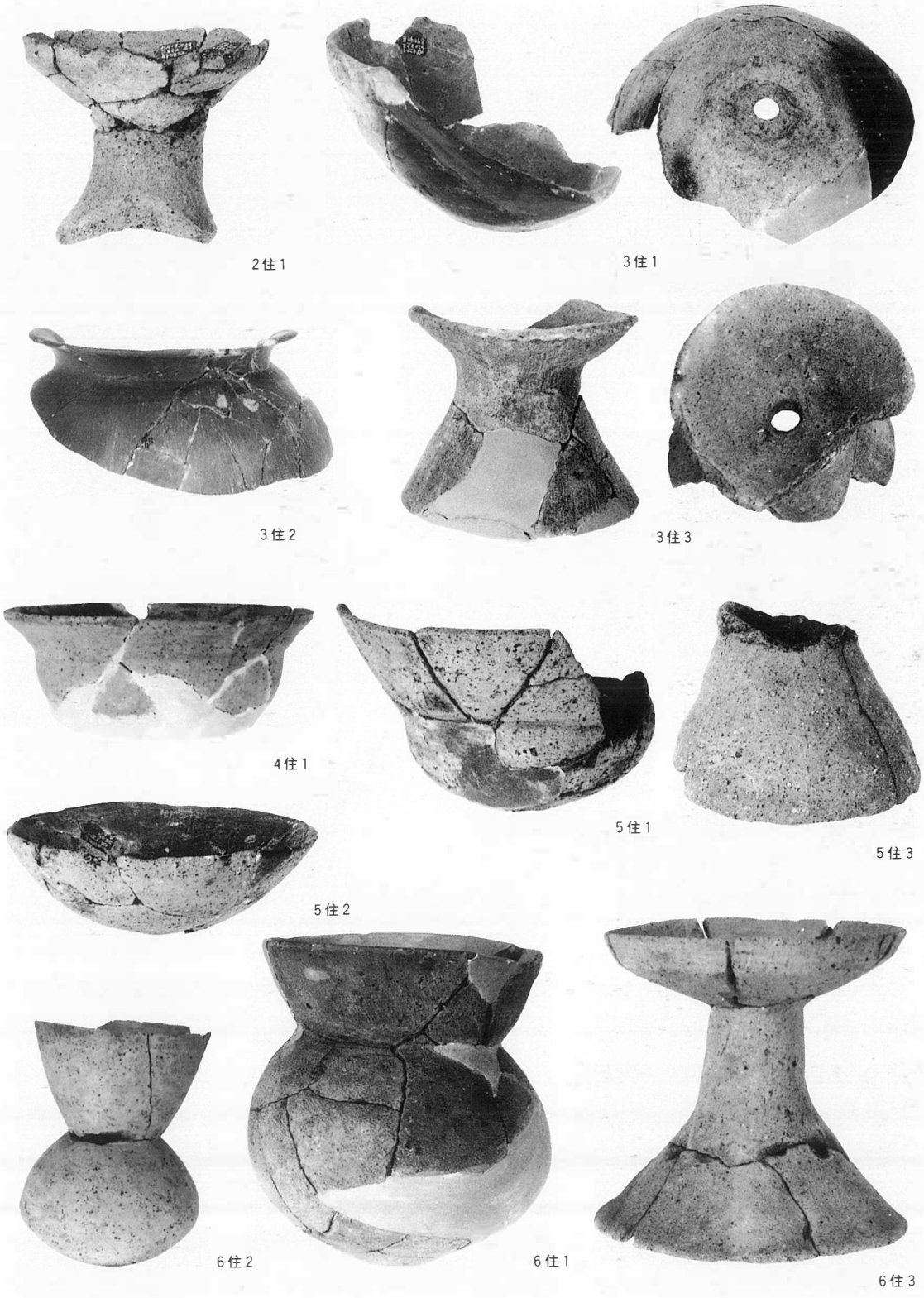


28　第1・3包含層細部

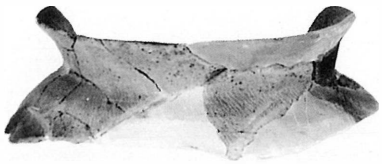
a．第3包含層北側トレンチ断面(南から)　b．第3包含層遺物出土状況(西から)

c．第3包含層遺物出土状況　d．第3包含層遺物出土状況

e．第1包含層遺物出土状況(南西より)　f．第1包含層全景



29　和泉遺跡出土土器（1）



6住6

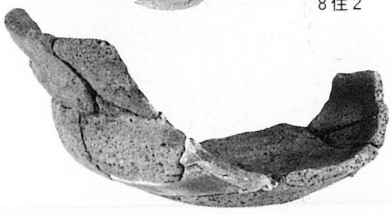
7住3

7住5

8住1

8住2

8住3



8住4

8住5

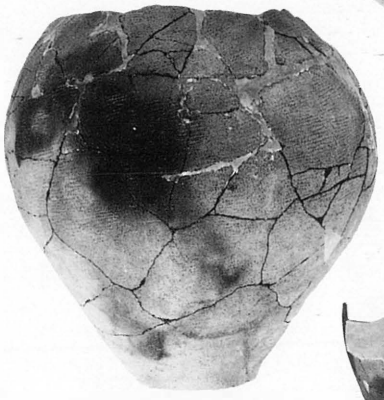
30 和泉遺跡出土土器(2)

13住１

５坑１

７坑３

１埋１



２埋１

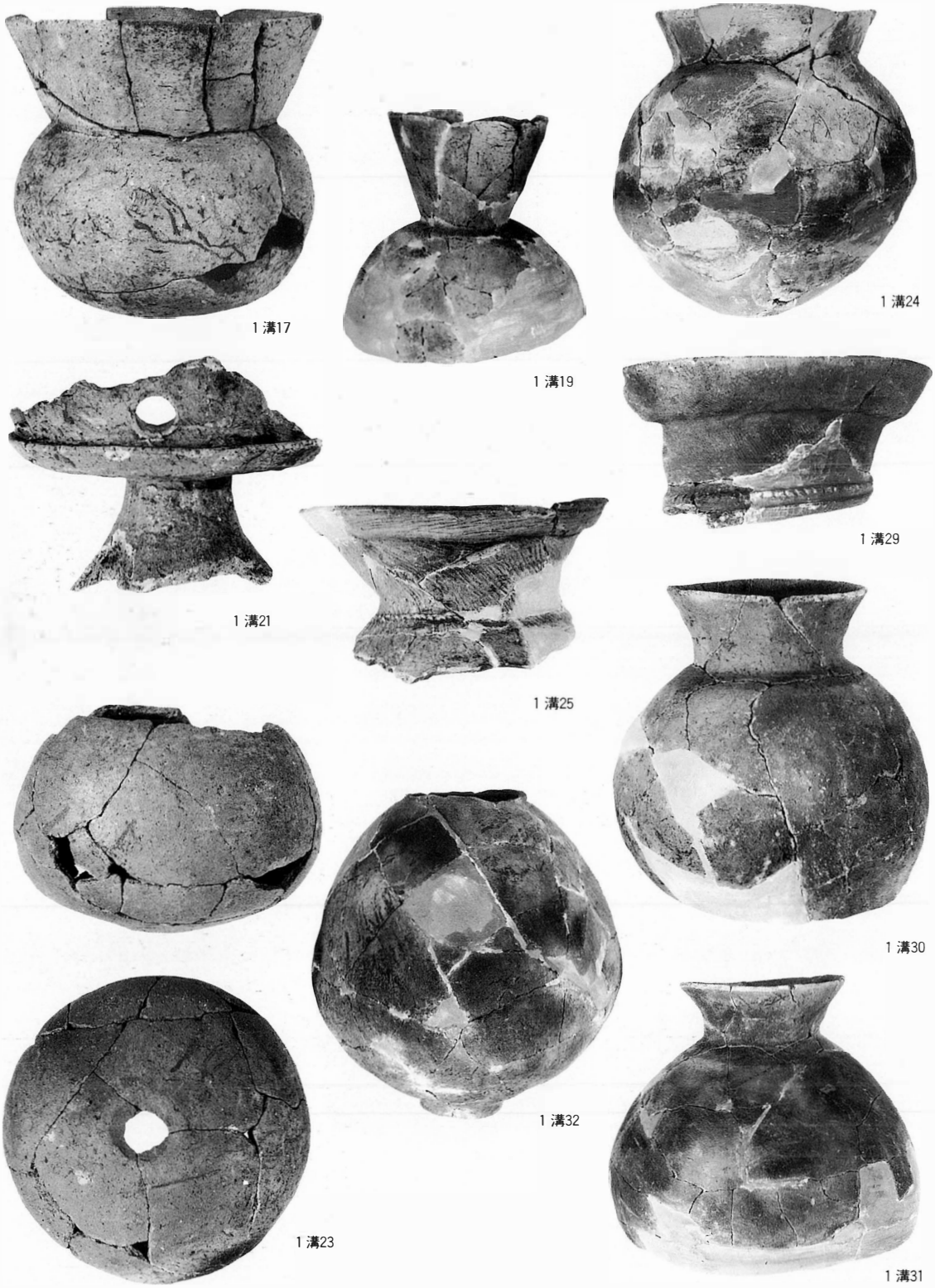
２埋２

１溝７

１溝10

１溝15

31　和泉遺跡出土土器（３）



32　和泉遺跡出土土器(4)

33　和泉遺跡出土土器（５）

3包4

3包5

3包6

3包8

3包9

3包10

3包16

3包11

34　和泉遺跡出土土器(6)

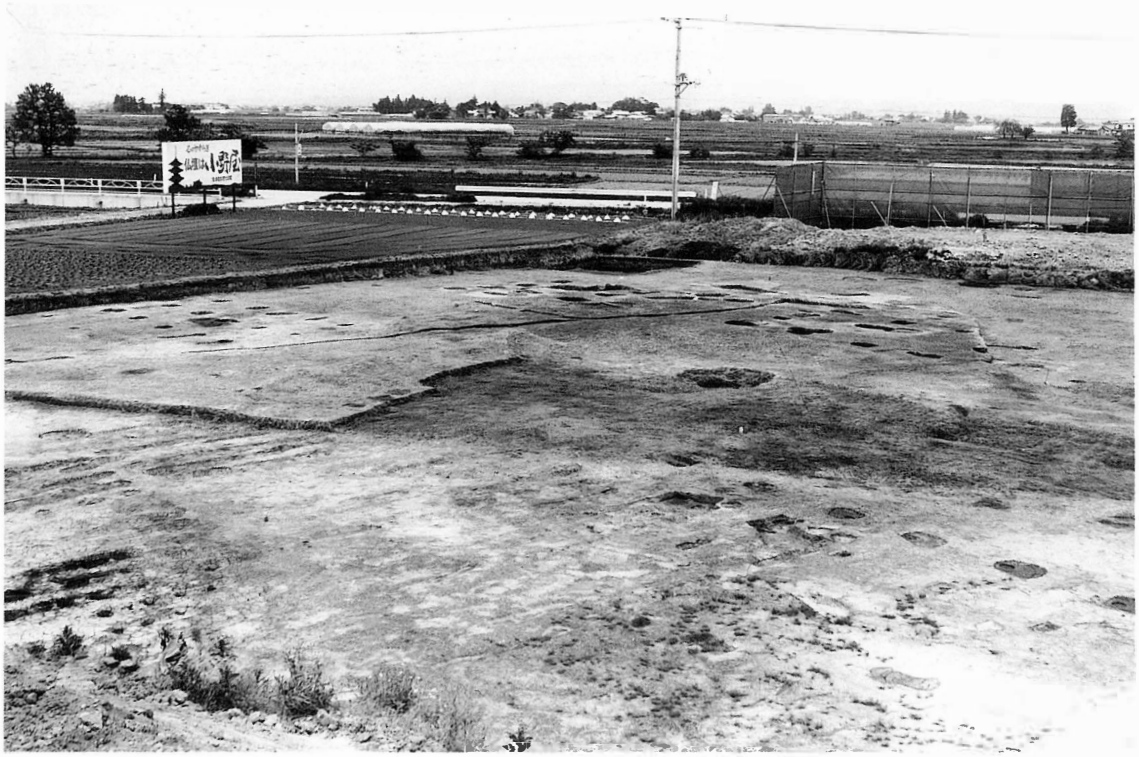
第2編　横沼西遺跡

写 真 図 版 目 次

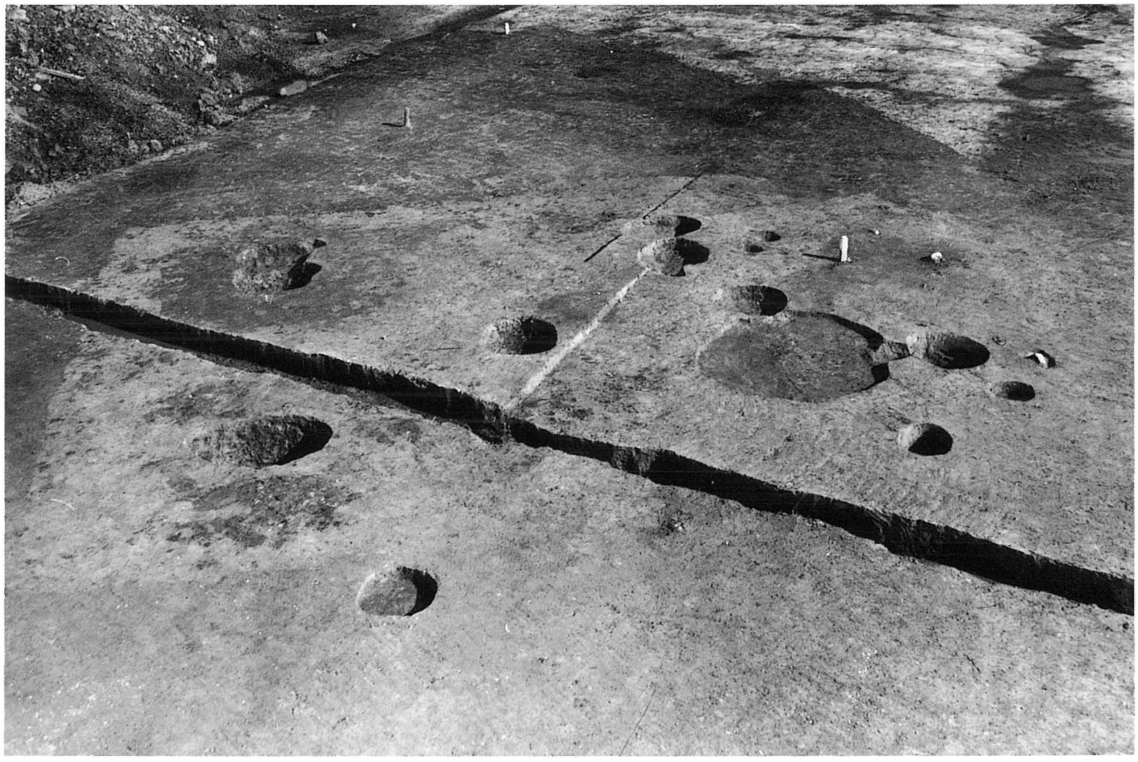
1　横沼西遺跡周辺航空写真……227
2　横沼西遺跡第１次調査区近景……228
3　横沼西遺跡第２次調査区近景……228
4　１号住居跡検出状況……229
5　１号住居跡堀形完堀状況……229
6　2a号住居跡……230
7　2a号住居跡カマド細部……230
8　2b号住居跡……231
9　2b号住居跡細部……231
10　１・２号建物跡……232
11　１・２号建物跡堀形完堀状況……232
12　３・４号建物跡……233
13　５号建物跡……233
14　６号建物跡……234
15　６号建物跡堀形完堀状況……234
16　７号建物跡……235
17　８号建物跡……235
18　９号建物跡……236
19　10号建物跡……236
20　11号建物跡……237
21　12号建物跡……237
22　土坑（１）……238
23　土坑（２）……239
24　土坑（３）……240
25　土坑（４）……241
26　焼土遺構……241
27　１号柱列……241
28　１号住居跡出土遺物……242
29　１号住居跡関連遺物……242
30　2a・2b号住居跡・建物跡・溝跡出土遺物……243
31　土坑出土遺物（１）……244
32　土坑出土遺物（２）……245
33　土坑出土遺物（３）……246
34　遺構外出土遺物（１）……246
35　遺構外出土遺物（２）……247
36　2a・2b号住居跡出土遺物……247
37　土坑出土遺物（４）……248
38　建物跡・土坑・遺構外出土石製品……248

1　横沼西遺跡周辺航空写真（南から）

2　横沼西遺跡第１次調査区近景（西から）



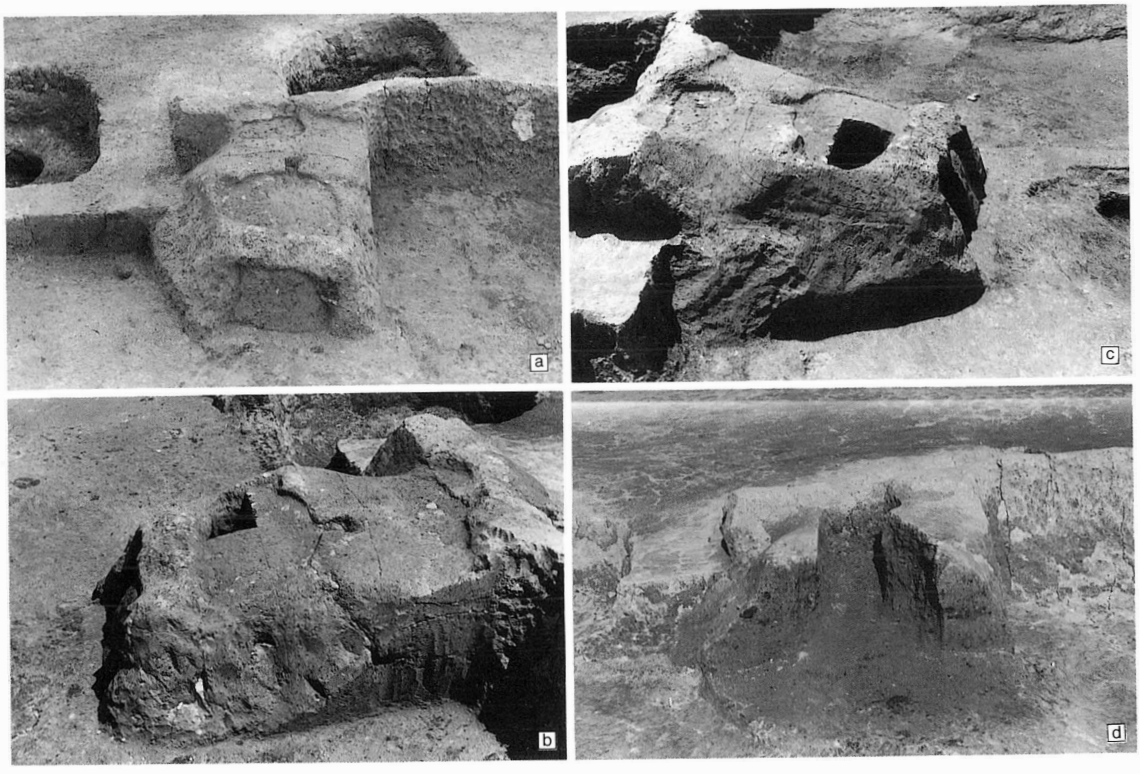
3　横沼西遺跡第２次調査区近景（南西から）



4　１号住居跡検出状況（北西から）

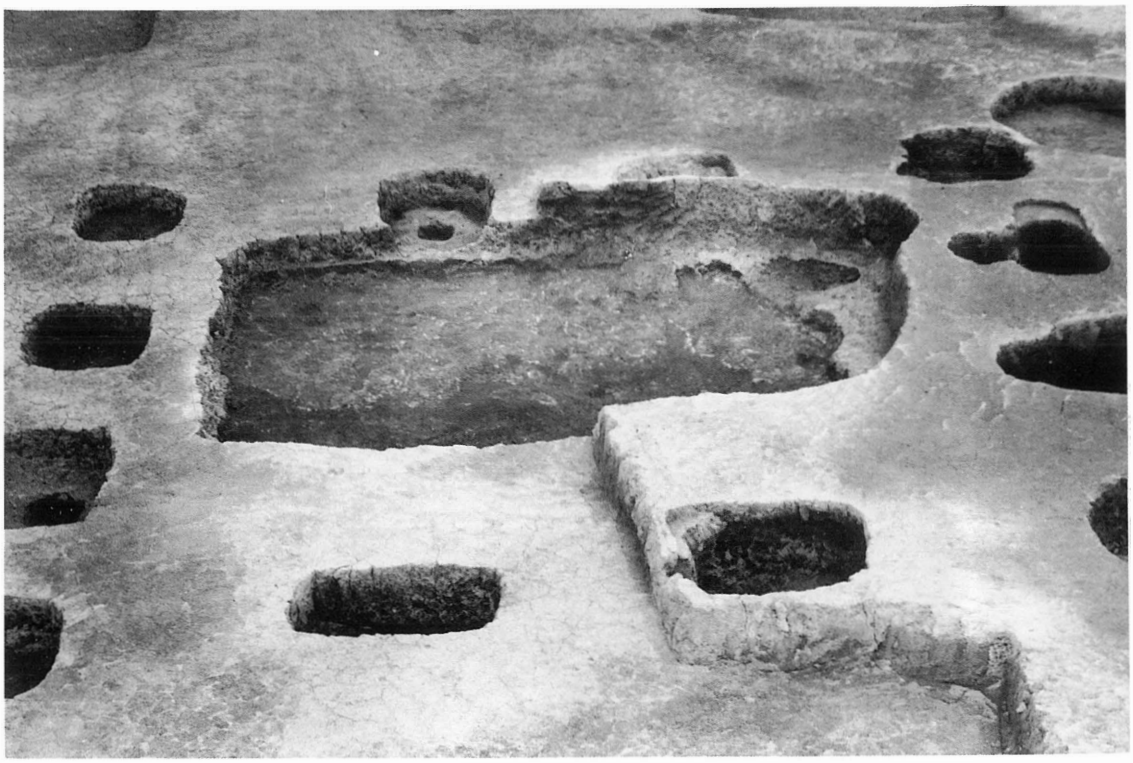
5　１号住居跡掘形完堀状況（南から）

6　2a号住居跡(西から)

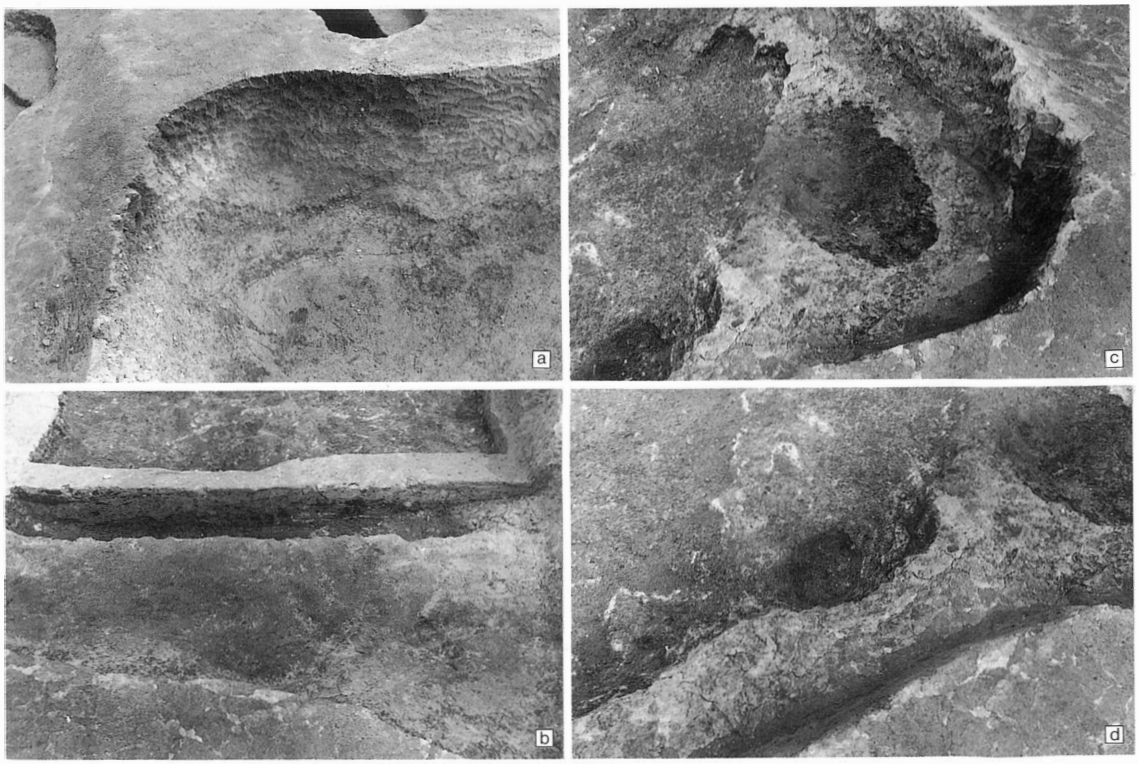


7　2a号住居跡カマド細部

a．カマド(西から)　c．カマド(北から)
b．カマド(南から)　d．カマド半裁(西から)



8　2b号住居跡(西から)

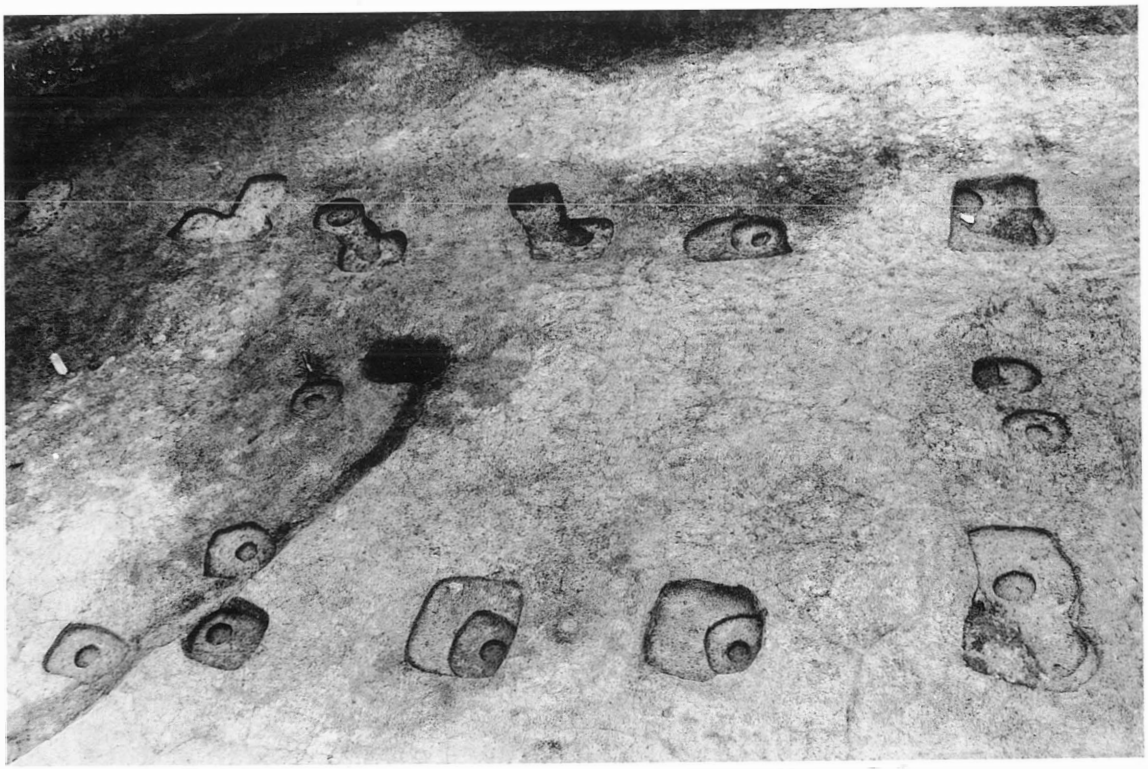


9　2b号住居跡細部

a．カマド跡(北から)　c．ピット１(南から)
b．土層堆積状況(南から)　d．ピット２(南から)

10　1・2号建物跡(西から)

11　1・2号建物跡掘形完堀状況(西から)

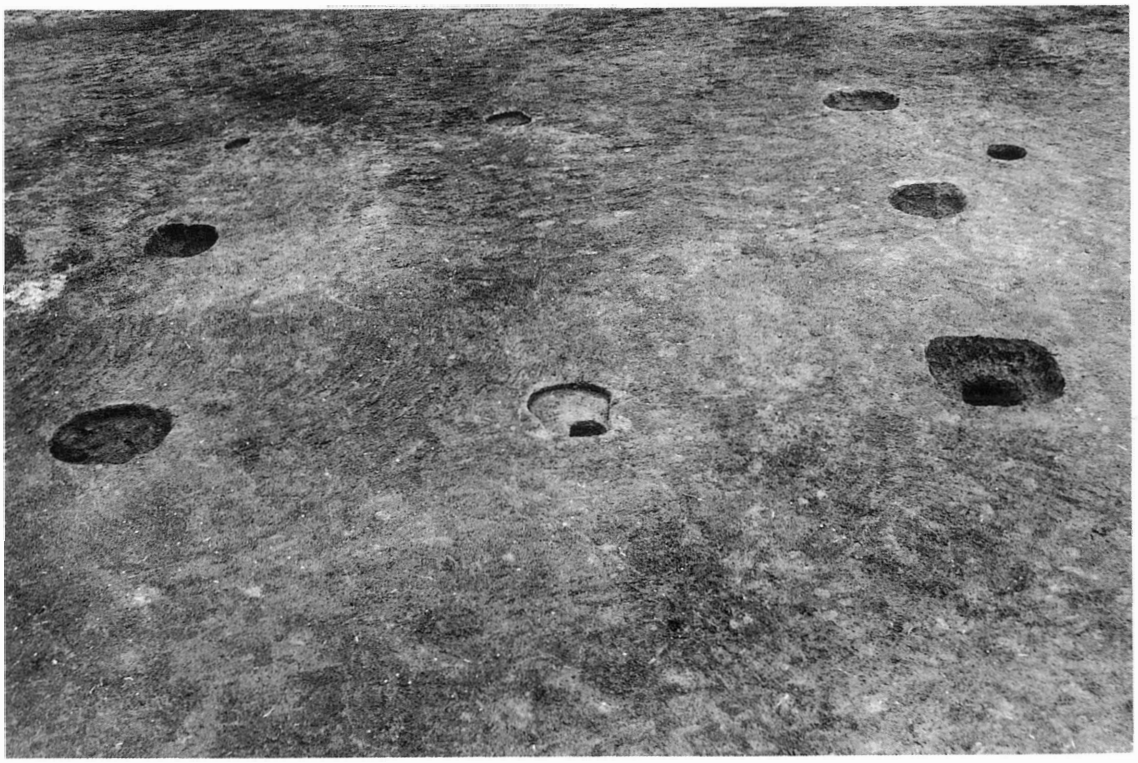


12　３・４号建物跡(南から)

13　５号建物跡(南から)

14　6号建物跡(南から)

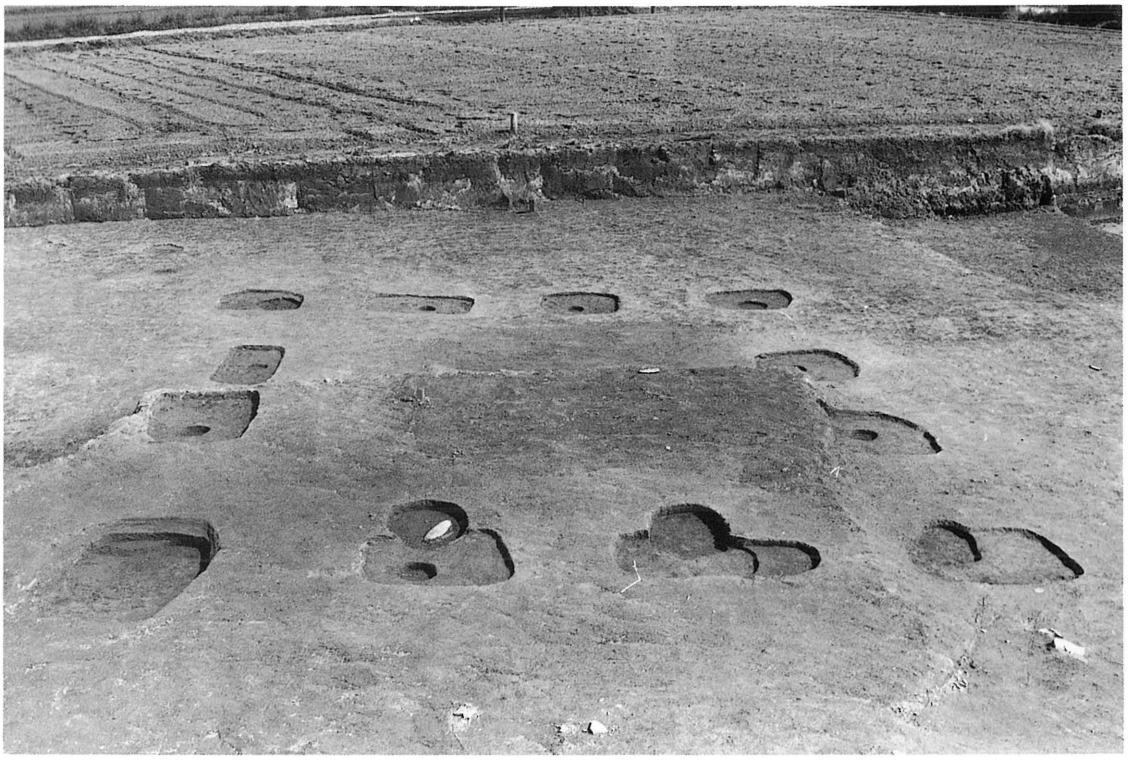
15　6号建物跡掘形完堀状況(西から)



16　７号建物跡（北西から）

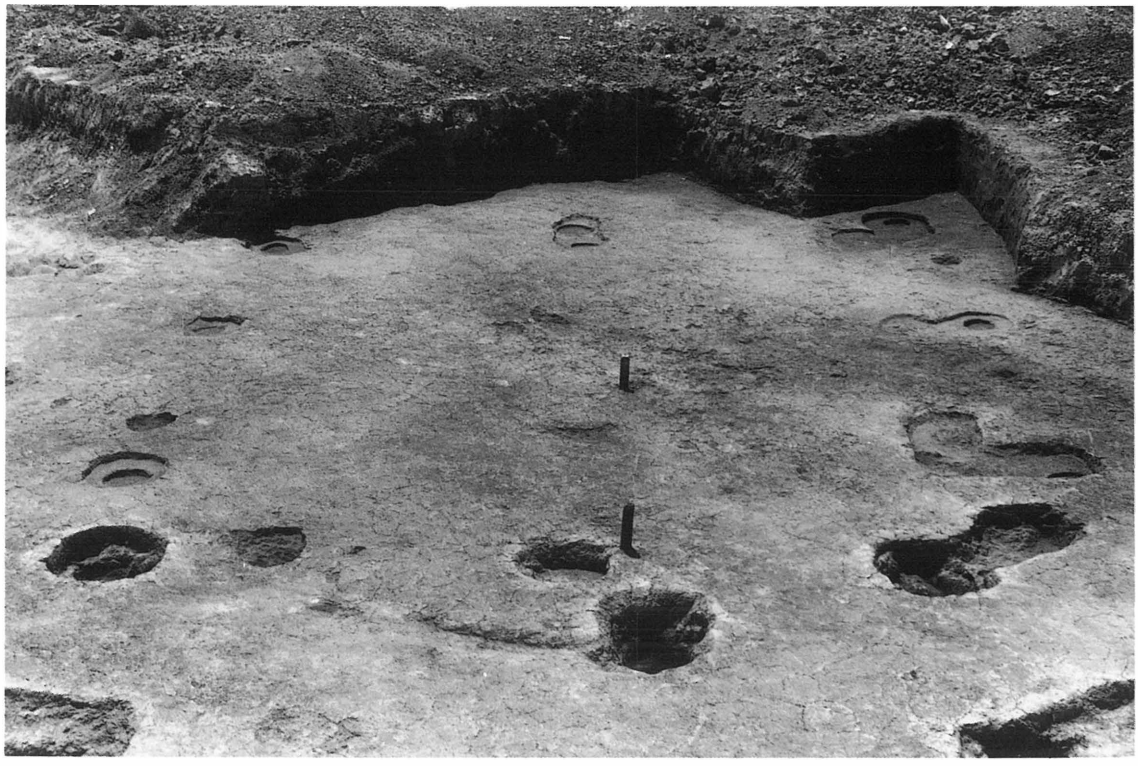
17　８号建物跡（南から）

18　9号建物跡(南から)

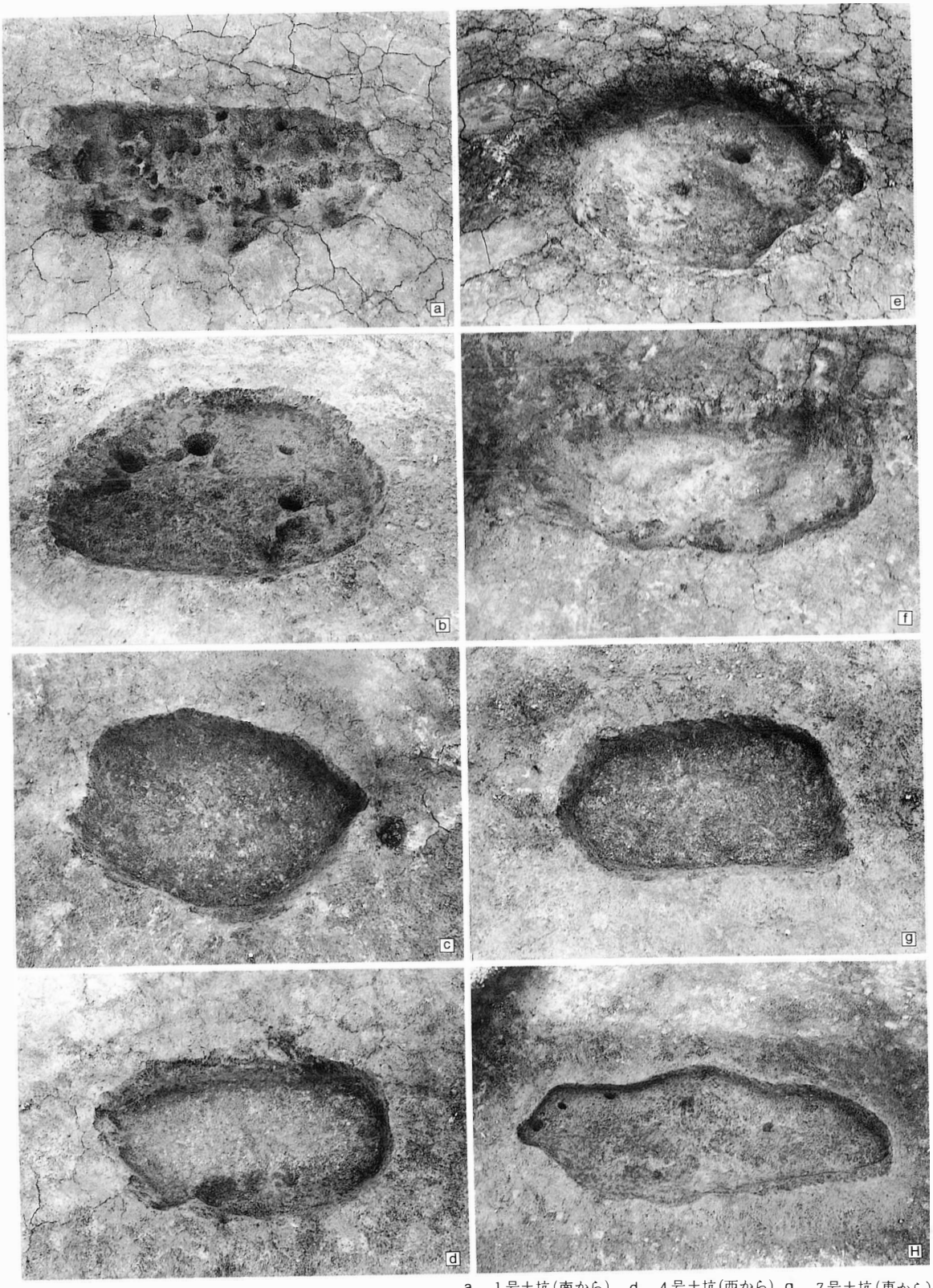


19　10号建物跡(南から)

20　11号建物跡（南から）

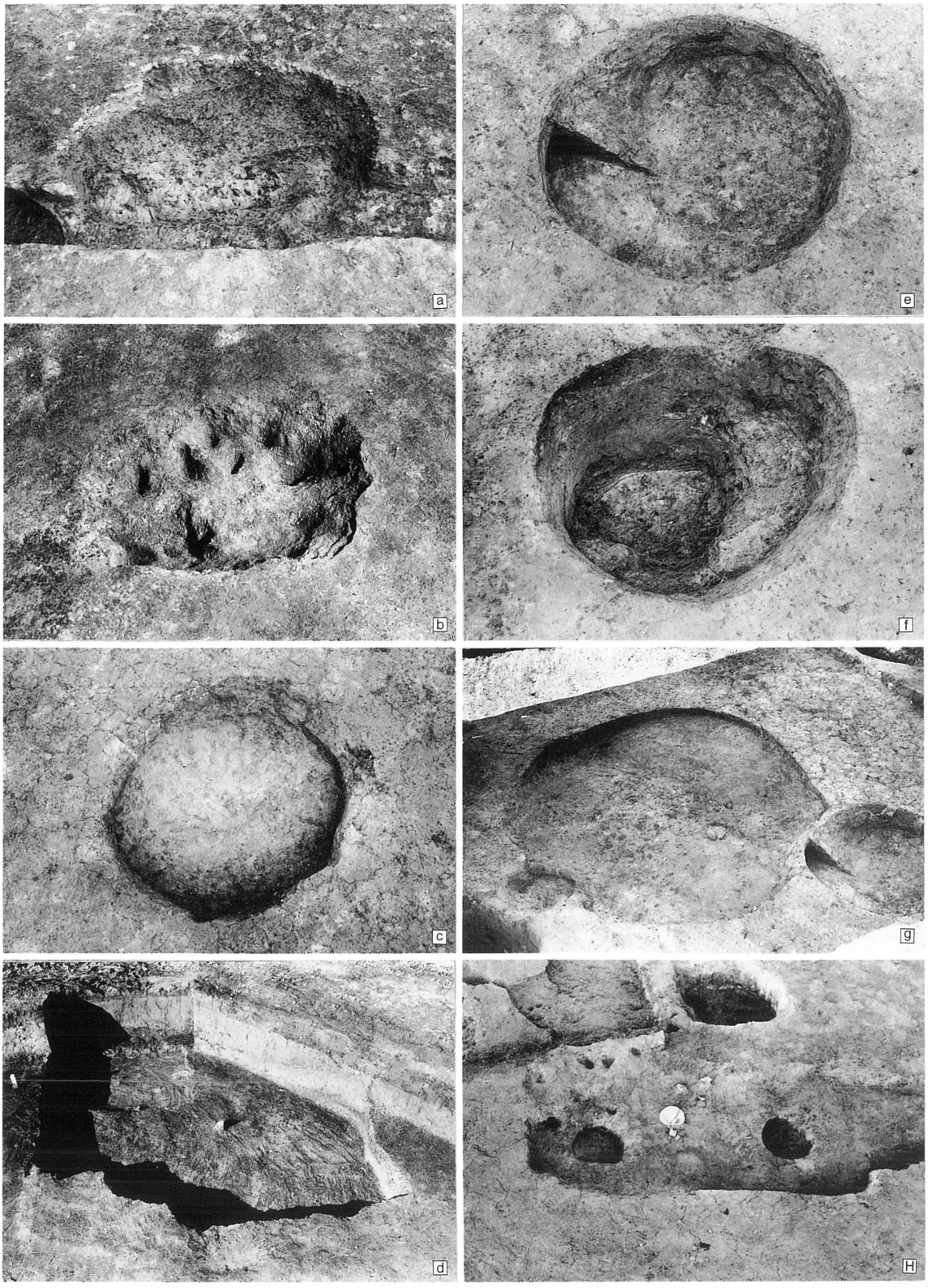


21　12号建物跡（北から）



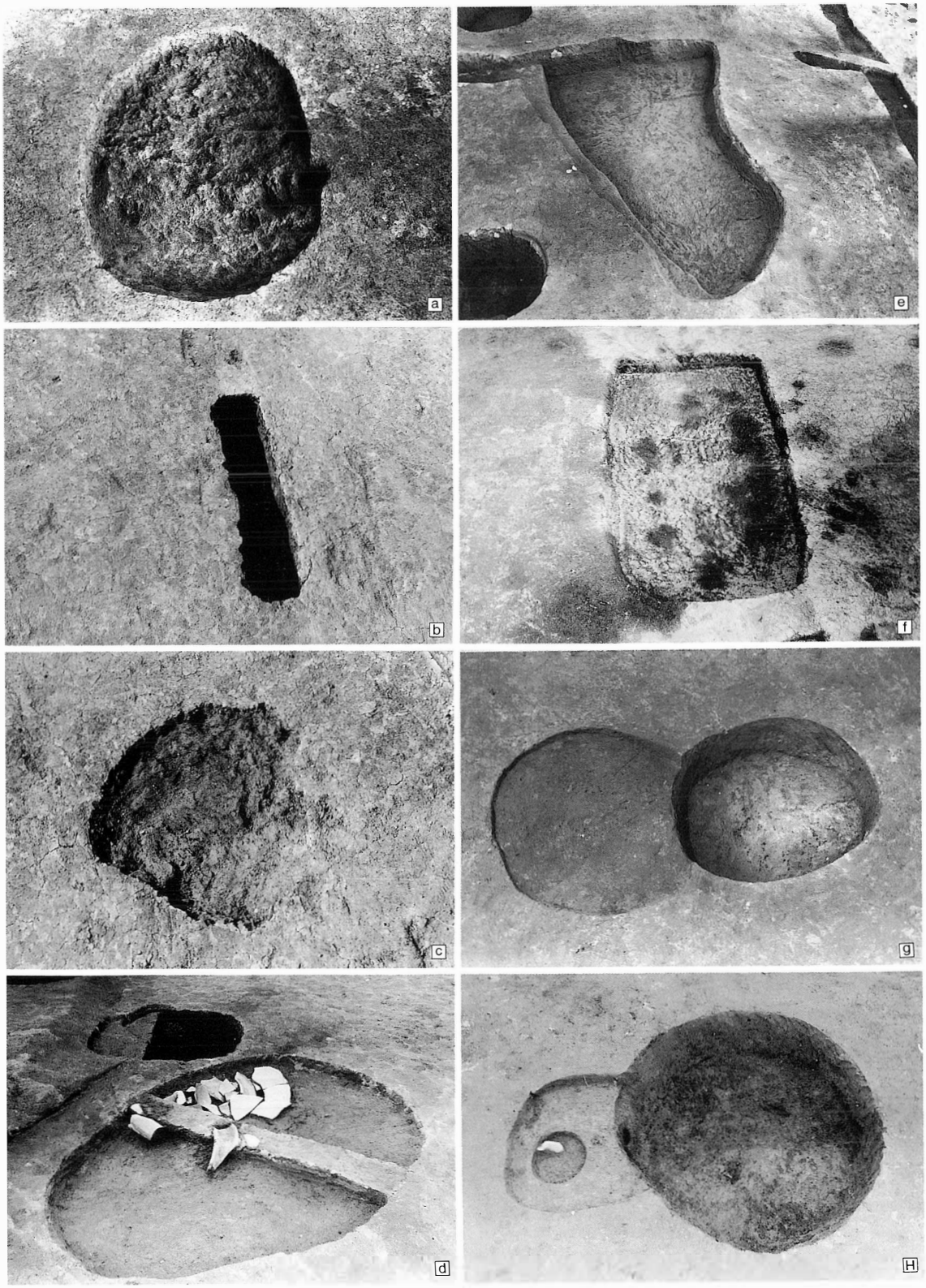
22 土坑(1)

a. 1号土坑(南から)　d. 4号土坑(西から)　g. 7号土坑(東から)
b. 2号土坑(東から)　e. 5号土坑(東から)　H. 8号土坑(東から)
c. 3号土坑(西から)　f. 6号土坑(西から)



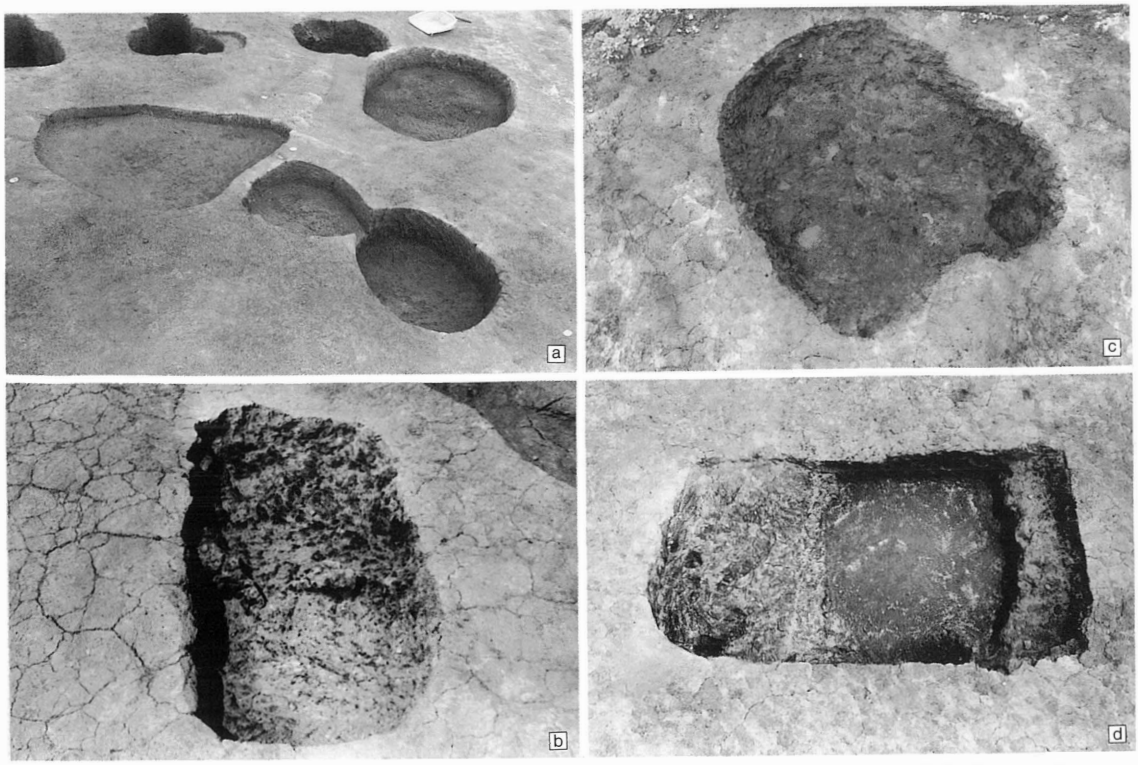
23　土坑(２)

a．９号土坑(南から)　d．16号土坑(南から) g．19号土坑(南から)
b．10号土坑(南西から) e．17号土坑(南から) H．24号土坑(東から)
c．11号土坑(東から)　f．18号土坑(南から)



24 土坑(3)

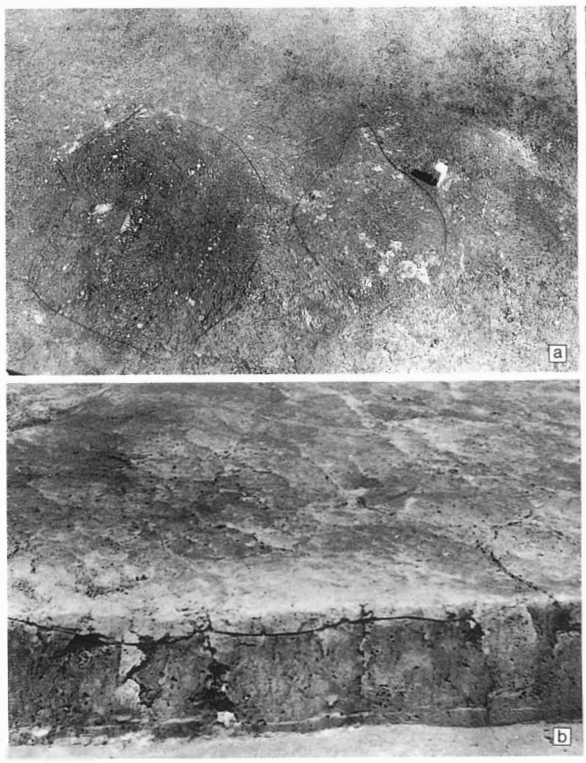
a. 25号土坑(南から) d. 28号土坑(南から) g. 31・32号土坑(東から)
b. 26号土坑(南から) e. 29号土坑(南から) H. 33号土坑(南から)
c. 27号土坑(南から) f. 30号土坑(南から)



25　土坑（４）

a．34・35・36号土坑（南西から）　c．38号土坑（南から）

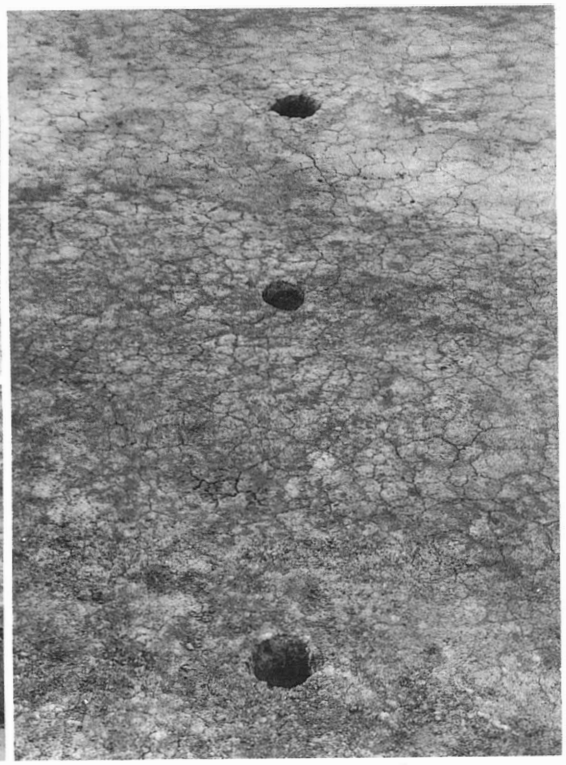
b．37号土坑（南から）　d．39号土坑（南西から）



26　焼土遺構

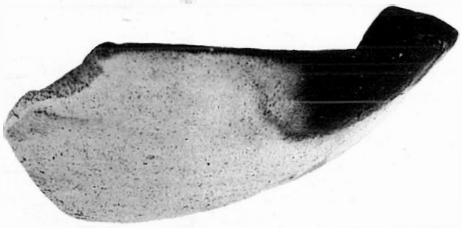
a．１・２号焼土遺構検出状況（西から）

b．３号焼土遺構検出状況（西から）



27　１号柱列（南から）

1住20



1住2

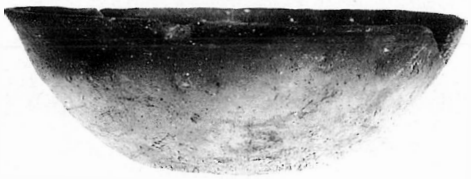
1住11

1住13

1住25

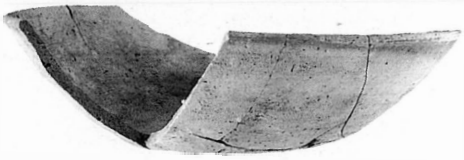
1住26

28　1号住居跡出土遺物



1住関2

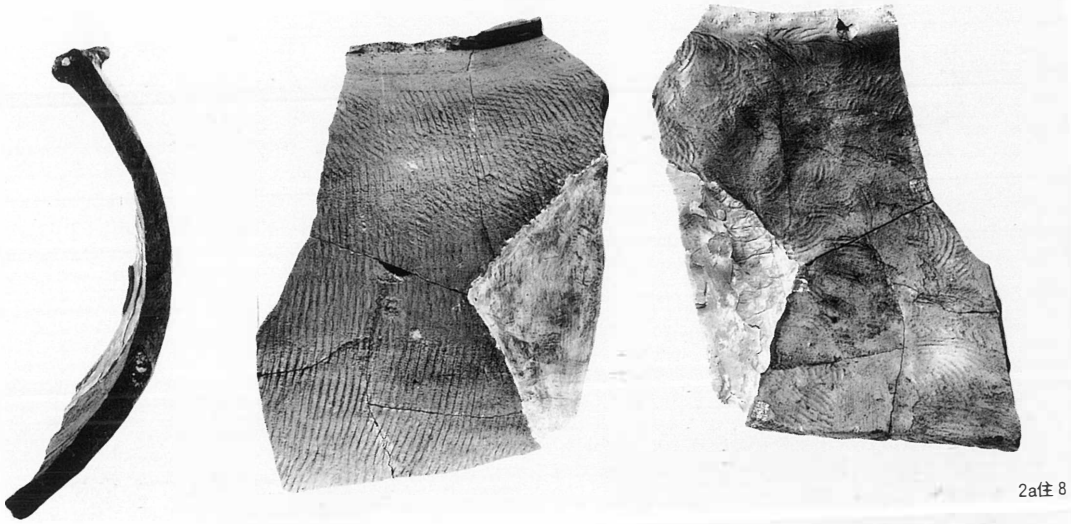
1住関3



1住関6

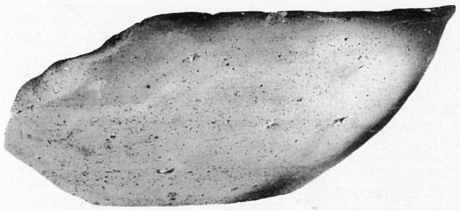
1住関7

29　1号住居跡関連遺物



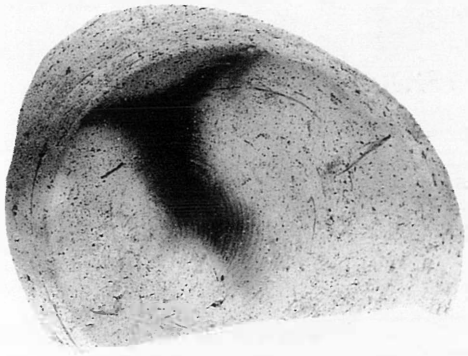
2a住８

2a住１



８建１

2b住１



９建１

2b住２

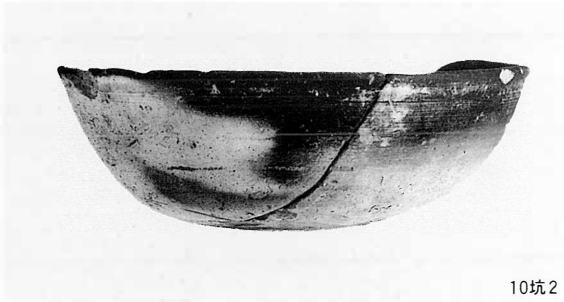
２溝１

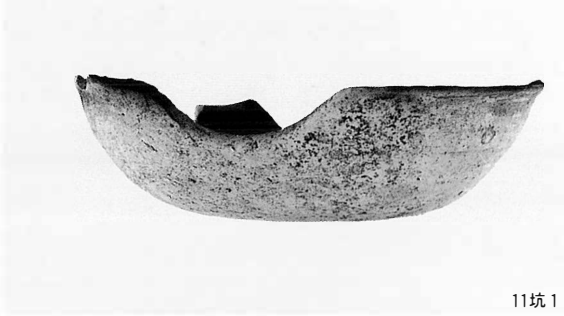
30　2a・2b号住居跡・建物跡・溝跡出土遺物

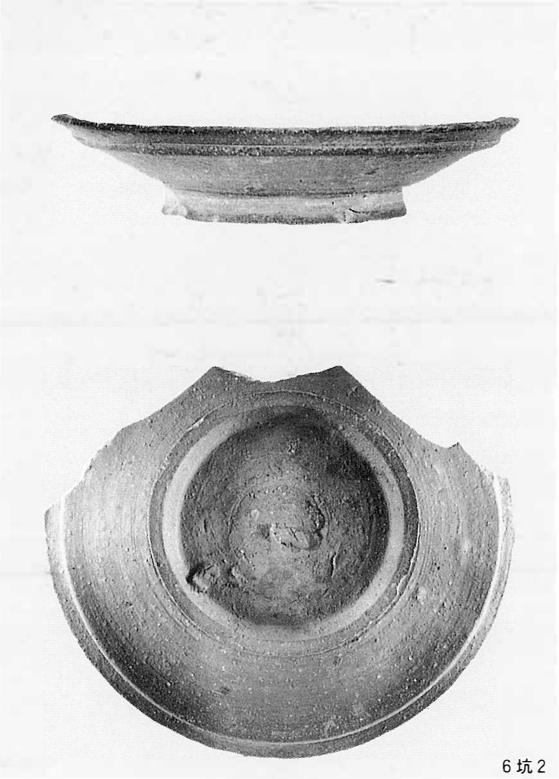
2 坑 2

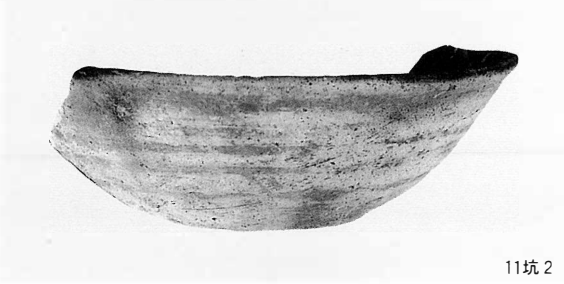
10坑 1

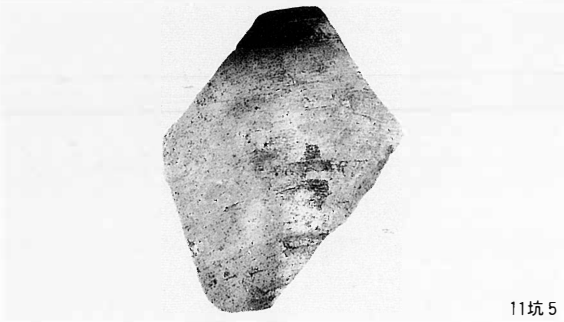
4 坑 1


10坑 2

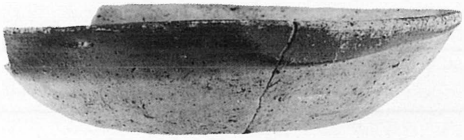

11坑 1


6 坑 2


11坑 2

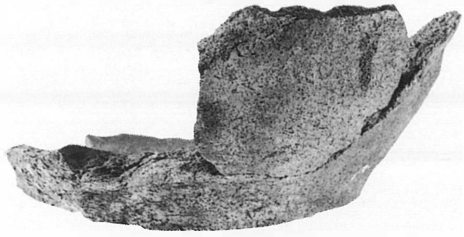

11坑 5

31 土坑出土遺物（1）



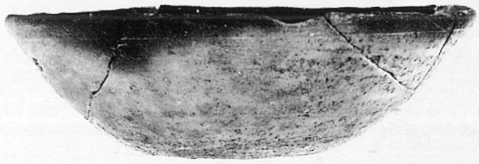
24坑１

28坑２

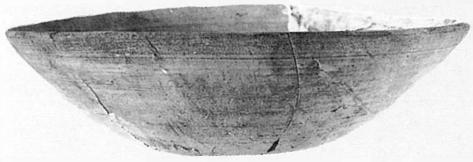


28坑１

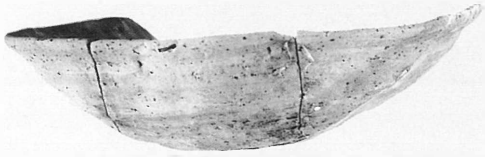
29坑５



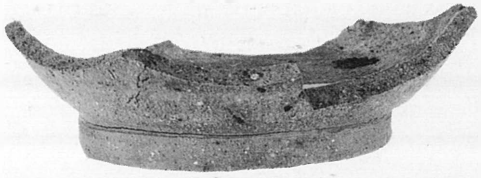
30坑１



30坑２

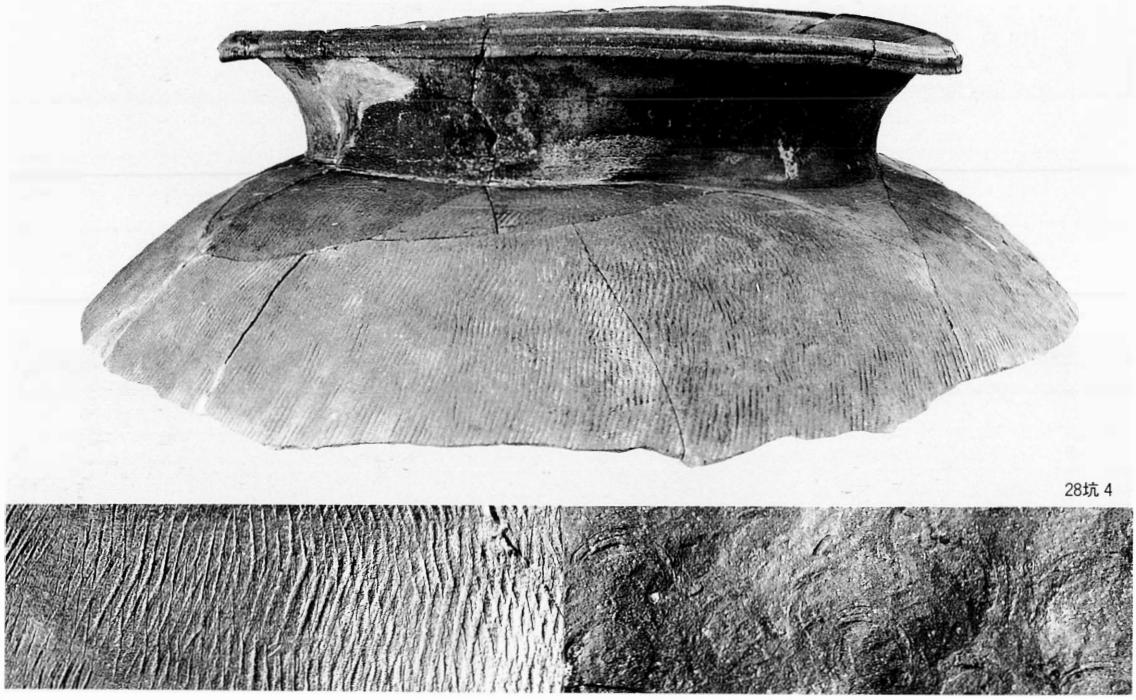


30坑３

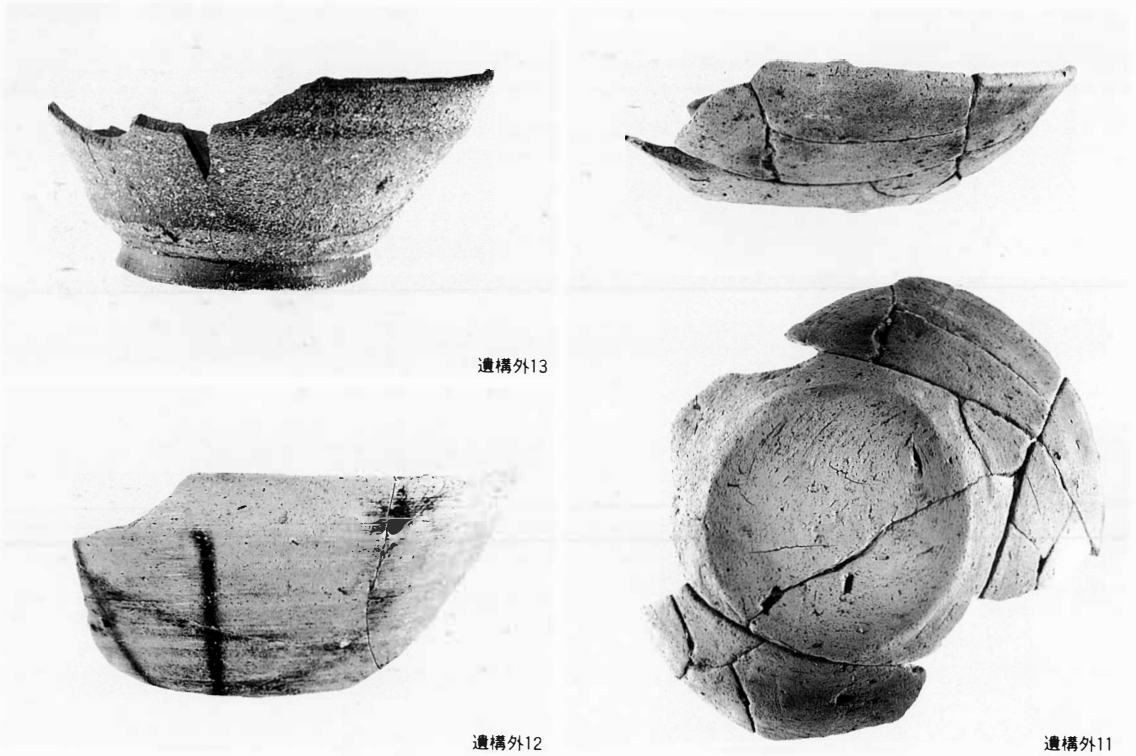


30坑５

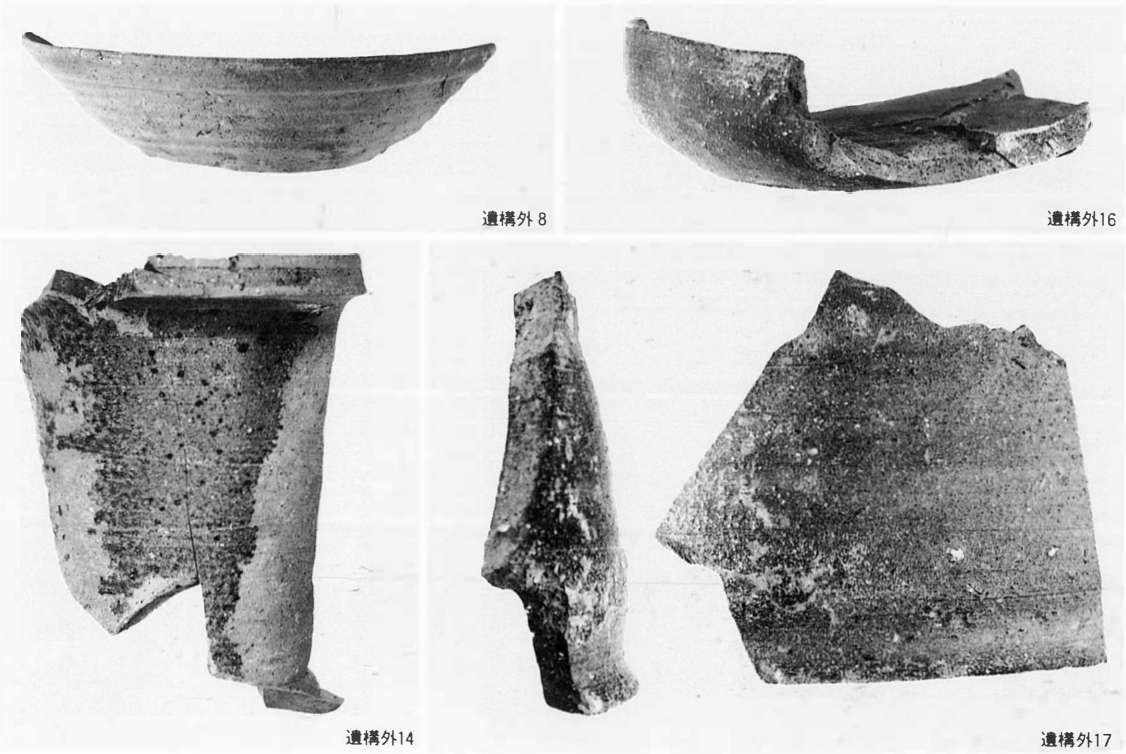
32　土坑出土遺物（２）



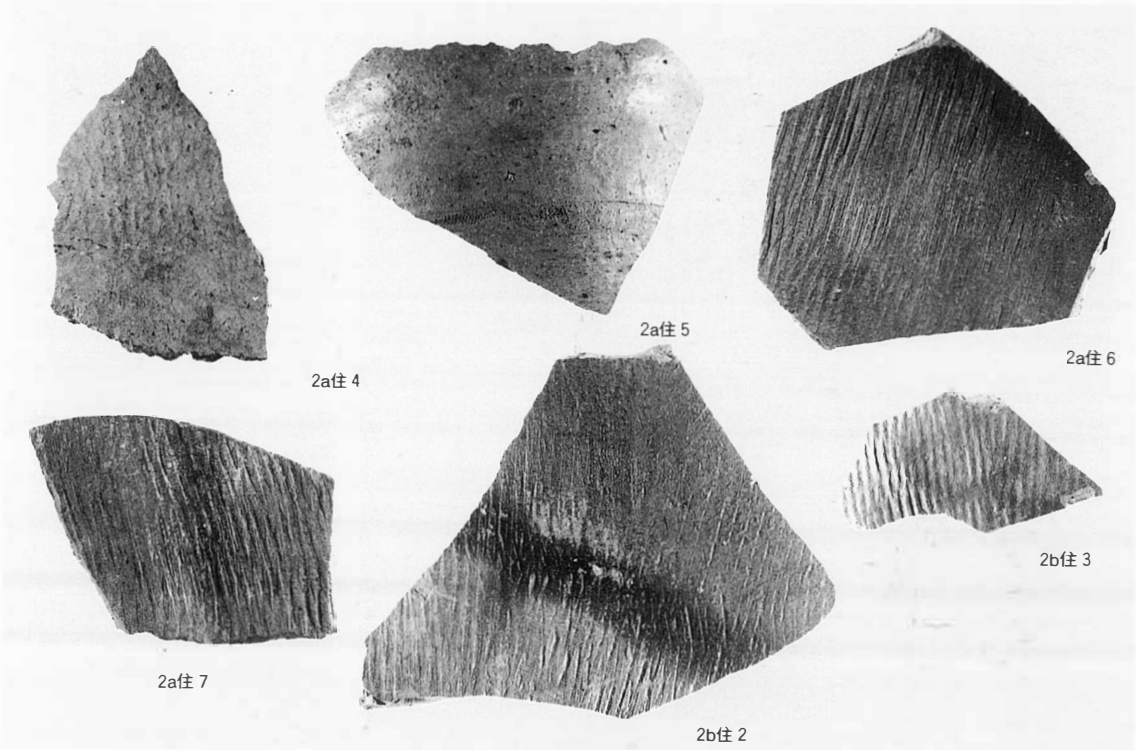
33　土坑出土遺物（3）



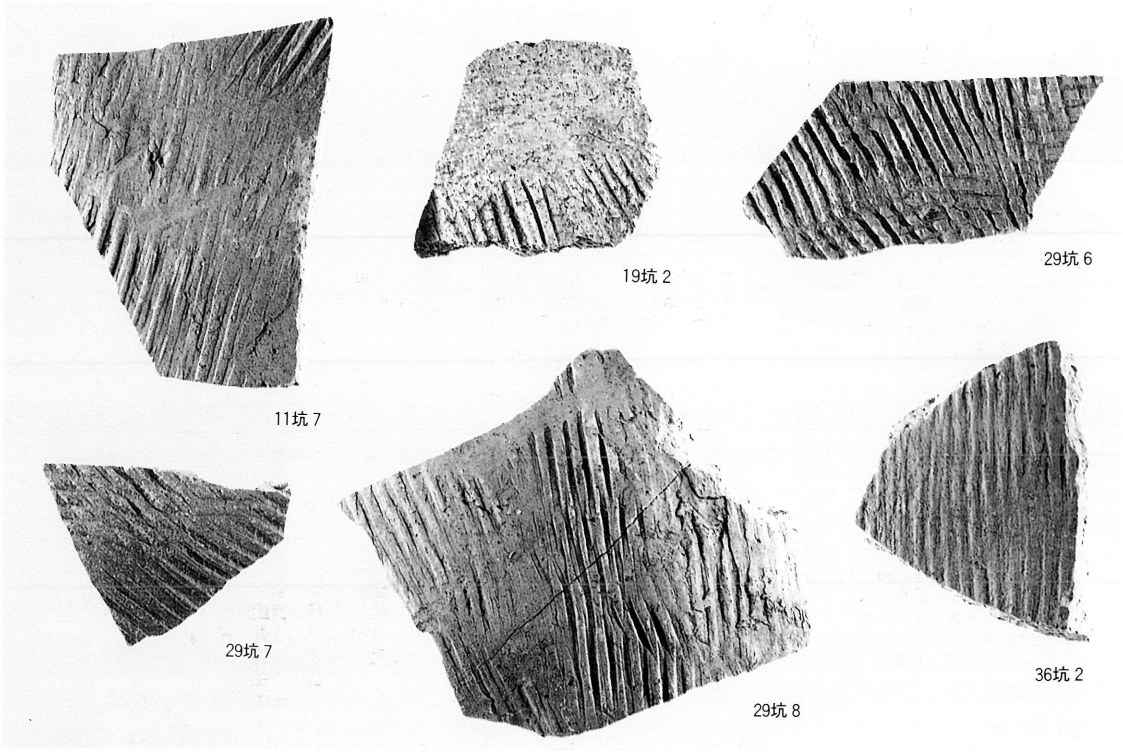
34　遺構外出土遺物（1）



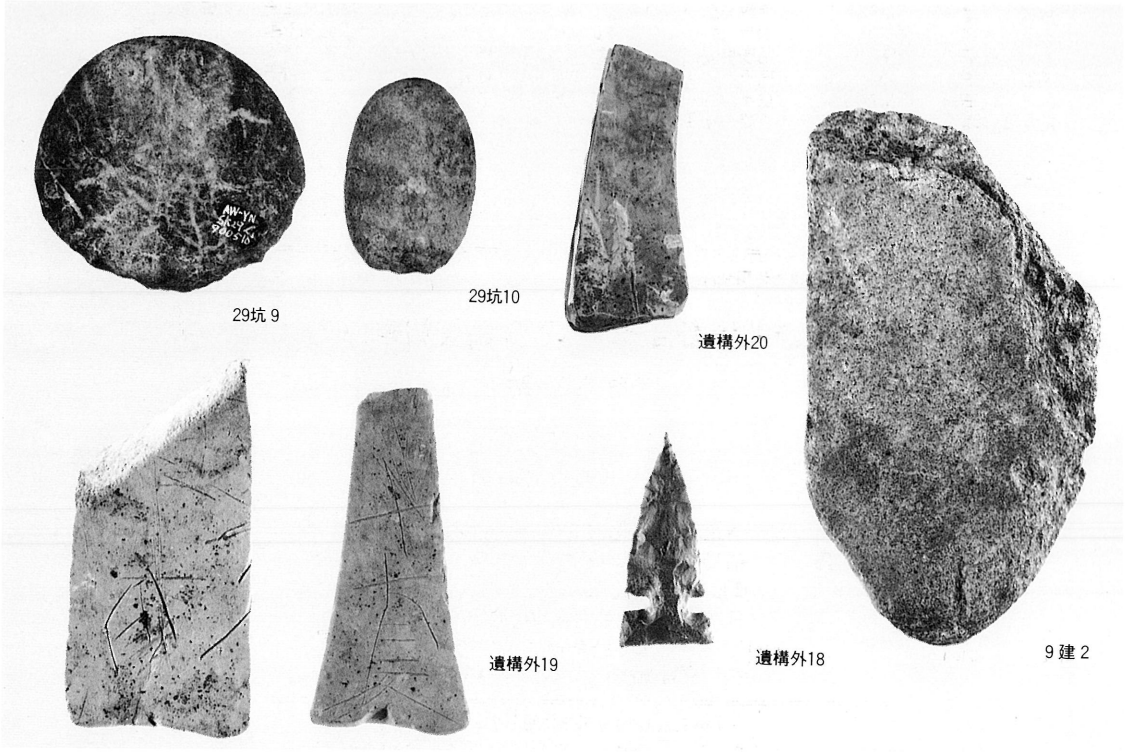
35　遺構外出土遺物（２）



36　2a・2b号住居跡出土遺物



37　土坑出土遺物（4）



38　建物跡・土坑・遺構外出土石製品

福島県教育庁文化課

課　　長　渡辺　大樹　　課長補佐　関根　義夫

遺跡班

専門文化財主査　渡部　正俊　文化財主査　佐藤　利夫　文化財副主査　長嶋　雄一　文化財主事　西戸　純一

㈶福島県文化センター職員組織表

館　　長　佐藤　昌志　　副　館　長　添田　義久　　事業第二部長　髙橋　清吉

遺跡調査課

課長心得　小平　良男(出)　　課長補佐　熊田　次喜(出)

第1係

専門文化財主査　松本　望(出)　　文化財主査　大平　好一(出)　　文化財主事　山岸　英夫
文化財主査　鈴鹿　良一　　文化財副主査　佐々木　修(出)　　文化財主事　佐々木慎一
文化財主査　山内　幹夫　　文化財副主査　福島　雅儀　　文化財主事　香川　慎一
文化財主査　石本　弘　　文化財主事　伊藤　勝彦(出)　　嘱託　菅原　祥夫

第2係

文化財主査　大越　道正　　文化財副主査　只野　幸廣(出)　　文化財主事　井　憲治
文化財主査　安藤　義則(出)　　文化財主事　本間　宏　　嘱託　国井　秀紀
文化財副主査　松本　茂　　文化財主事　小田川哲彦

第3係

専門文化財主査　遠藤彌三郎(出)　　文化財副主査　芳賀　英一　　文化財主事　菅井　敏美(出)
専門文化財主査　木本　元治(出)　　文化財副主査　高橋　信一　　文化財主事　宮田　安志
文化財主査　佐原　崇彦(出)　　文化財副主査　香内　修(出)　　文化財主事　飯村　均

第4係

文化財主査　佐久間一正(出)　　文化財副主査　長田　義雄(出)　　文化財主事　藤谷　誠
文化財主査　寺島　文隆　　文化財副主査　安田　稔　　文化財主事　能登谷宣康
文化財主査　福原太一郎(出)　　文化財主事　菊田　克紀(出)　　文化財主事　西山眞理子
文化財副主査　中村　行雄(出)　　文化財主事　金山　修治(出)　　文化財主事　吉野　滋夫
文化財副主査　馬場　勇(出)　　文化財主事　吉田　功　　文化財主事　小暮　伸之
文化財副主査　佐藤　常雄(出)　　文化財主事　吉田　秀亨　　嘱託　吉田　亨子

(出)：県教育委員会出向職員

臨時職員

目黒　吉明　阿部　美子　大内　幸子　佐藤　純恵　鈴木美奈子　二瓶　由佳　八巻　治子
薄上賢一郎　荒井　陽子　大内まゆみ　斎藤　清子　鈴木美智子　沼田恵美子　安田　真弓
宍戸　鉄雄　五十島時子　加藤美和子　斎藤久美子　清野　共子　畑田　玲子　山内多賀子
須田　常三　池田　洋子　菅野　隆子　斎藤奈美子　高橋恵理子　藤井　千賀　山岸千恵子
塚原　博　石川登美子　菅野美恵子　斎藤　麗子　高橋友里恵　本間文佐子　山崎三起子
深谷　實　市川佐知子　木戸真知子　三瓶　京子　只木久美子　三浦　千恵　渡辺　絹恵
青山　聡子　氏家　浩子　児玉貴美江　鴫原　由恵　丹治　敦子　宮崎　宗子　渡辺　裕子
明石　米子　遠藤　裕美　児玉真知子　須田　桂子　丹治　京子　村上　祐子　渡辺由美子
阿部　悦子　小川ひろみ　佐々木幹子　鈴木　恵子　東条　由美　茂木美津枝　渡辺　礼子
阿部まゆみ　大石　文絵　佐藤　佳子

福島県文化財調査報告書第263集

東北横断自動車道遺跡調査報告13

和泉遺跡
横沼西遺跡

平成3年12月15日発行

編　集　㈶福島県文化センター（遺跡調査課）
発　行　福島県教育委員会　(〒960)福島市杉妻町2－16
㈶福島県文化センター(〒960)福島市春日町5－54
日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所
(〒965)会津若松市一箕町大字八角字中村東196－1
印　刷　キング印刷㈱　(〒960)福島市吉倉字前田6－1

本報告書は中性紙を使用しています。
〔本　文　王子製紙　サンファンタジー90kg
写真版　十條製紙　ダイヤコート135kg〕